彩の国さいたま

将軍山古墳

《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》

ー史跡等活用特別事業ー

確認調査編・付編

1997

埼玉県教育委員会

将軍山古墳《史跡埼玉古墳群整備報告書》確認調査編・付編
正　誤　表

誠に恐れ入りますが、以下の部分を訂正・追加して下さい。

9ページ　図２　確認調査遺構全体図を別紙と入れ替える。

50ページ　図30　石室出土遺物［不明鉄器］→［馬具］

93ページ　表４

小円墳 5号墳のみ	−0.52	→	小円墳 5号墳のみ	−	0.52

103ページ　図55　1984年出土遺物の所在→1894年出土遺物の所在

104ページ　表　１８９４年出土遺物一覧→表５　１８９４年出土遺物一覧

さらにその表の下に、次の項目を追加する。

所蔵者略号：Ａ　東京国立博物館・Ｂ　東京大学総合研究博物館

Ｃ　埼玉県立博物館・Ｄ　埼玉県立さきたま資料館

Ｅ　本庄市立歴史民俗資料館・Ｆ　田島邦夫氏

110ページ　図60　衝角付冑→図60　衝角付冑（アミかけ部分は東京国立博物館蔵）

123ページ　14行目　９は東京大学総合研究博物館蔵、７・10はさきたま資料館蔵→

７は東京大学総合研究博物館蔵、９・10はさきたま資料館蔵

124ページ　図73の図中の、２と３を入れ替える。

126ページ　図74　馬冑→図74　馬冑（一部［文献８］による）

137ページ　１行目　Ｉ　埼玉古墳群整備の沿革→Ｉ　埼玉古墳群整備の概要

例言　26行目　　犬木　務→犬木　努

将 軍 山 古 墳

《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》

ー史跡等活用特別事業ー

確認調査編・付編

1997

埼玉県教育委員会

将軍山古墳の確認調査

将軍山古墳は、埼玉（さきたま）古墳群では４番目に大きい前方後円墳ですが、古墳群のいちばん北東隅にあって、木がうっそうと茂り、訪れる人も少なく、ひっそりとしていました。

この古墳は、今から約100年前の1894年（明治27年）に、すでに地元の人々によって発掘が行われています。その時に出土した資料には、金色に輝く大刀の飾りや、多くの武器類、きらびやかな馬の飾りなど、古墳時代の技術の高さを示す、数多くのものが含まれていました。この中でも馬に付ける冑や、馬に旗竿を立てるための「蛇行状鉄器」とよばれるものは、朝鮮半島との深い関係を証拠づける貴重な資料として、考古学界では注目を浴びています。これらの発掘資料は現在はさきたま資料館だけでなく、東京国立博物館や東京大学総合研究博物館、埼玉県立博物館、本庄市教育委員会等に収蔵されています。

このように貴重な古墳なのですが、後円部の上段や前方部の東側が土取りによって失われ、これ以上放っておくと、墳丘の土が崩れてしまうおそれが出てきました。そこで埼玉県では、文化庁の補助金を受けて保存工事を実施し、これ以上古墳が崩れるのを防ぐとともに、みなさんにも将軍山古墳の重要性を実感してもらえるような、整備を行うことになりました。

この保存整備工事に先立って、古墳の規模や範囲・形態などのデータを集めるために、平成３年度から７年度まで確認調査を行ったところ、予想以上に多くの重要な成果を得ることができました。

写真１　空から見た埼玉古墳群（南方上空から　矢印が将軍山古墳）　平成７年４月撮影

墳丘の調査

この古墳は墳丘がかなり崩れていたので、調査前までは正確な大きさがわかりませんでした。今回、墳丘の表面に積もっていた土をすべて除いたところ、古墳の全長は90m・後円部直径39m・前方部幅68mであることが判明しました。これまで確認した埼玉古墳群内の古墳は、後円部の直径が全長の約1/2であるのに比べて、将軍山は後円部が小さく前方部が長いという特徴があります。

墳丘は２段から成っていますが、中段部や墳頂部には円筒埴輪が並べられていたようで、前方部正面の中段部から埴輪が約1.7m間隔でかたまって出土しました。また、後円部の西側には造出しが検出されましたが、この周囲からは形象埴輪や土器がたくさん出土し、埋葬に関わる祭りが行われていたようすをうかがうことができます。

写真２　墳丘の表土を除いた姿（西から）［平成５年度調査］

写真３　前方部中段部の埴輪出土状況［平成５年度調査］

写真４　墳丘造出しのようす［平成４年度調査］

周堀の調査

周堀は埼玉古墳群の他のほとんどの前方後円墳と同じように、二重にめぐることが改めて確認されました。周堀の北側が調査できなかったため、全体の形態はわかりません。おそらくは方形になるのではないかと推測されますが、古い地籍図によると盾形になる可能性もあります。

内堀は墳丘のまわりが一段深く掘り込まれ、放射状のブリッジが付くなど、これまでの他の古墳の調査では検出できなかった複雑な姿が現われました。また中堤には、稲荷山古墳や二子山古墳と同様に、外堀に向かって造出しが付くことがわかりました。

周堀の中からは、墳丘から落ちた埴輪が破片となって数多く出土しました。ほとんどは円筒埴輪ですが、中には盾や靫（矢を入れる道具）などの武具を象った埴輪や、盾を持つ人物の埴輪なども出土しました。円筒埴輪は大きく３種類に分けられ、出土地点の分布に偏りがみられました。これは埴輪の種類によって、古墳の上に立てられた場所が違うことを示しています。

写真５　中堤造出しと外堀（西から）［平成７年度調査］

写真６　内堀のくびれ部付近から出土した埴輪［平成５年度調査］

写真７　外堀の埴輪出土状況（右方向が墳丘）［平成７年度調査］

主体部の調査

後円部には横穴式石室、前方部には木棺直葬施設がありました。

横穴式石室は石材がほとんど抜き取られた状態で、玄室の床面と壁石最下段の一部がわずかに残っていただけでした。玄室の幅2.0m・長さ3.2m、羨道の幅1.0mで（玄室から見て）右片袖式であると推定されます。石材には千葉県富津市付近で採取される「房州石」を使用していました。はるか120kmも離れたところから、わざわざ運んできたのです。石室の床面からは、1894年に発掘した際には見つからなかった、耳環やガラス玉・馬具や武器などの破片が数多く出土しました。

前方部の木棺直葬施設からは、木棺を支えたと思われる緑泥片岩の板石と、ガラス玉が出土しましたが、質・量ともに横穴式石室との副葬品の差は歴然としています。

写真８　横穴式石室（奥壁部分から）［平成３年度調査］

写真９　木棺直葬施設（西から）［平成５年度調査］

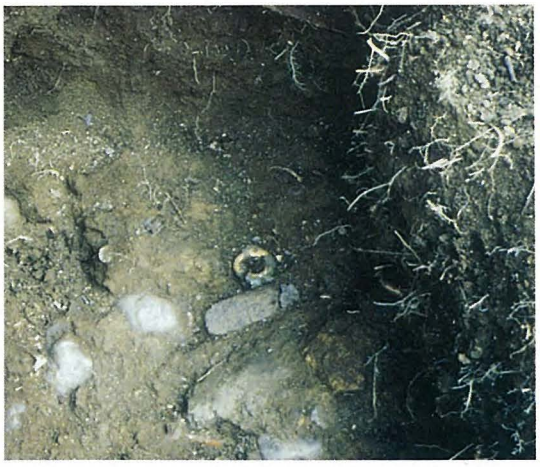


写真10　耳環が出土したようす
［平成３年度調査］

例　言

1　本書は、埼玉県行田市埼玉159番地他に所在する、埼玉古墳群将軍山古墳の整備事業報告書のうち、確認調査編及び付編である。

2　本事業は文化庁の国庫補助金のうち、平成３・４年度は史跡等保存整備費（一般）、平成５年度から８年度は史跡等活用特別事業費（ふるさと歴史の広場事業）の交付を受けて実施した。

3　本事業は文化庁文化財保護部記念物課の指導助言を受け、史跡埼玉古墳群保存整備協議会の検討結果に基づき、埼玉県教育委員会が実施した。

4　本事業に伴う遺構確認調査は、平成３年度から７年度まで、埼玉県教育委員会が主体となり、県立さきたま資料館が実施した。

5　本書の作成は県立さきたま資料館学芸員岡本健一が主に担当し、飯塚光生の協力を得た。なお付編第２部Ⅲ－１は主査渡辺勤が執筆した。

6　確認調査時における遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、遺物写真撮影は岡本が当った。なお付編第１部の写真は、各所蔵機関の提供・協力による。

7　本書に掲載した資料は、県立さきたま資料館で管理・保管する。

8　本書の作成においては、下記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜った。（敬称略・五十音順）

赤沢　威　　犬木　務　　太田　博之　　大谷　徹　　高橋　昌子　　瀧瀬　芳之
田島　邦夫　　田中　広明　　田辺　征夫　　塚田　良道　　野中　仁　　長谷川　勇
古谷　毅　　松浦　宥一郎
東京国立博物館　　東京大学総合研究博物館　　埼玉県立博物館　　本庄市立歴史民俗資料館
行田市教育委員会

目　　次

巻頭カラー
例言

《確認調査編》
【確認調査の概要】……3
Ⅰ　調査の経過……5
Ⅱ　墳丘及び周堀の調査……11
1　墳丘……11
2　周堀……20
3　遺物出土状況……25
Ⅲ　主体部の調査……38
1　第１主体部（横穴式石室）……38
2　第２主体部（木棺直葬）……43
Ⅳ　出土遺物……45
1　主体部出土の遺物……45
2　墳丘及び周堀出土の遺物……52
Ⅴ　確認調査のまとめ……81
1　墳丘……81
2　周堀……86
3　主体部……88
4　埴輪……91
5　土器……94

《付　編》
【第１部　1894年の出土遺物】……101
Ⅰ　出土遺物の所在……103
Ⅱ　出土遺物の概要……104
1　装身具……104
2　武器・武具……105
3　馬具……115
4　工具……125
5　用途不明飾金具・鉄器……126
6　容器（銅鋺・土器）……127

【第２部　埼玉古墳群整備の沿革】……135
Ⅰ　埼玉古墳群整備の概要……137
Ⅱ　各古墳の整備状況……143
1　稲荷山古墳……143
2　丸墓山古墳……153
3　瓦塚古墳……162
4　二子山古墳……175
5　愛宕山古墳……178
6　鉄砲山古墳……179
7　奥の山古墳……181
8　中の山古墳……182
9　その他の小古墳……184
Ⅲ　よりよい古墳整備をめざして……186
1　古墳群の教育的活用方法……186

挿　図　目　次

図１　年次別発掘調査範囲
図２　確認調査遺構全体図
図３　遺構の概要
図４～６　土層断面図
図７　後円部東南部崖面土層断面図
図８　中堤造出し拡大図
図９　前方部正面中段部埴輪出土状況
図10　後円部北側内堀埴輪出土状況
図11　くびれ部付近埴輪出土状況
図12　墳丘造出し北側靫形埴輪出土状況
図13　中堤造出し南側盾持ち人物埴輪出土状況
図14　円筒埴輪破片数の分布
図15　円筒埴輪の種類別出土数の割合
図16　形象埴輪の出土分布
図17　須恵器瓶出土状況
図18　土器の出土分布
図19　第１主体部［横穴式石室］
図20　横穴式石室遺物出土状況
図21　横穴式石室遺物別出土状況
図22　第２主体部［木棺直葬］
図23　石室出土遺物［装身具］
図24　ガラス玉（小）法量分布図
図25　石室出土遺物［鉄鏃］
図26　鉄鏃の残存部位別破片数
図27　石室出土遺物［大刀類］
図28　石室出土遺物［挂甲小札］
図29　挂甲小札法量分布図
図30　石室出土遺物［馬具］
図31　石室出土遺物［不明鉄器］
図32～41　円筒埴輪
図42～46　形象埴輪
図47・48　土器
図49　埼玉古墳群前方後円墳の比較

図50　埼玉古墳群と内裏塚古墳群の前方後円墳の比較
図51　地籍図に表された将軍山古墳
図52　中堤造出しの形態
図53　関東における主な片袖式横穴式石室
図54　埼玉古墳群から出土した土器
図55　1894年出土遺物の所在
図56　『史蹟埼玉』に掲載された金製耳環、金製勾玉、金製平玉
図57　大刀類、三輪玉
図58　鉄矛
図59　鉄鏃
図60　衝角付冑
図61～63　挂甲小札
図64　小札の種類
図65　挂甲小札の構成の推定
図66　轡
図67　金銅製棘葉形杏葉
図68　銅製八角稜鈴、銅製鈴、金銅製鈴
図69　金銅製雲珠、金銅製辻金具(1)
図70　金銅製辻金具(2)、金銅製帯金具
図71　鉄製輪鐙
図72　鉄地銀張飾金具・鞍金具、鉸具
図73　蛇行状鉄器
図74　馬冑
図75　鉄斧、用途不明飾金具・鉄器
図76　高台付蓋付銅鋺、銅鋺、石製盤
図77　須恵器高坏
図78　埼玉古墳群の整備状況
図79　稲荷山古墳　昭和57年度工事の平面及び造成法面横断図
図80　稲荷山古墳　昭和58年度工事における主体部防護柵及び礫槨レプリカの設置
図81　稲荷山古墳　昭和59年度工事
図82　丸墓山古墳の保存整備工事
図83　瓦塚古墳年度別確認調査範囲
図84　瓦塚古墳　昭和63年度工事
図85　瓦塚古墳　平成元年度工事
図86　瓦塚古墳　平成２年度工事
図87　瓦塚古墳　平成３年度工事
図88　「古墳博士」の賞状
図89　解答シート
図90　問題看板設置場所
図91　平成８年５月24日付埼玉新聞
図92　ボランティアに参加した生徒の感想
図93　平成８年６月５日付埼玉新聞

表　目　次

表１　円筒埴輪観察表
表２　須恵器・土師器観察表
表３　後円部に横穴式石室をもち、その他に竪穴系埋葬施設をもつ古墳
表４　埼玉古墳群出土埴輪の突帯扁平率
表５　1894年出土遺物一覧
表６　埼玉古墳群整備の沿革
表７　埼玉古墳群の各古墳の大きさ
表８　稲荷山古墳保存修理工事経過表
表９　丸墓山古墳保存修理工事経過表
表10　瓦塚古墳保存修理工事経過表

写　真　目　次

写真１　平成５年度調査終了時の航空写真
写真２・３　後円部墳丘
写真４・５　墳丘造出し
写真６～８　墳丘前方部
写真９　墳丘西側面全景
写真10　後円部土取り崖面断面
写真11　後円部北側内堀
写真12　東側くびれ部内堀
写真13　前方部南東側内堀
写真14　内堀前方部西側隅角
写真15　外堀前方部西側隅角
写真16～18　中堤造出し
写真19　後円部中段部遺物出土状況
写真20　前方部正面中段部遺物出土状況
写真21　後円部北側内堀遺物出土状況
写真22・23　くびれ部付近内堀遺物出土状況
写真24　靫形埴輪出土状況
写真25　墳丘造出し北側遺物出土状況
写真26　外堀遺物出土状況
写真27　盾持ち人物埴輪出土状況
写真28　横穴式石室全景
写真29～34　石室調査風景・遺物出土状況
写真35　木棺直葬施設
写真36　木棺直葬完掘状況
写真37　耳環
写真38　玉類
写真39　鉄地銀張飾金具
写真40　金銅製辻金具・帯金具・鈴
写真41　鉄鏃
写真42　挂甲小札
写真43　大刀片・不明鉄器
写真44・45　円筒埴輪
写真46　盾持ち人物埴輪
写真47　靫形埴輪
写真48　盾持ち人物埴輪顔面
写真49　盾持ち人物埴輪胸部
写真50　靫形埴輪細部
写真51　靫形埴輪片
写真52　人物埴輪片
写真53　馬形埴輪片
写真54　盾形埴輪片
写真55　須恵器
写真56　乳文鏡
写真57　水晶製三輪玉
写真58　三輪玉
写真59　環頭大刀
写真60　環頭大刀環頭部
写真61　環頭大刀鞘口金具
写真62　銀装大刀柄部
写真63　銀装大刀・象嵌刀柄装飾金具
写真64・65　鉄矛
写真66　鉄鏃
写真67・68　衝角付冑片
写真69・70　挂甲小札
写真71　金銅製鏡板
写真72　素環鏡板付轡
写真73　金銅製棘葉形杏葉
写真74　銅製八角稜鈴
写真75　銅製鈴
写真76　金銅製鈴
写真77　金銅製雲珠
写真78・79　金銅製辻金具
写真80・81　鉄製輪鐙
写真82　鉄地銀張鞍金具鋲具
写真83　金銅製鋲具
写真84　鉄製鋲具

写真85　蛇行状鉄器
写真86　金銅製袋状飾金具
写真87　復原した馬冑
写真88　須恵器高坏
写真89　高台付蓋付銅鋺
写真90・91　銅鋺
写真92　石製盤
写真93～97　埼玉古墳群航空写真
写真98～102　稲荷山古墳の整備工事前
写真103・104　稲荷山古墳　昭和57年度の工事
写真105～108　稲荷山古墳　昭和58年度の工事
写真109～114　稲荷山古墳　昭和59年度の工事
写真115・116　整備完了直後の稲荷山古墳
写真117～121　稲荷山古墳の現状
写真121　整備前の丸墓山古墳
写真122～125　丸墓山古墳　昭和60年度の工事
写真126～129　丸墓山古墳　昭和61年度の工事
写真130～133　丸墓山古墳　昭和62年度の工事
写真134～139　丸墓山古墳の現状
写真140　整備前の瓦塚古墳
写真141～144　瓦塚古墳　昭和63年度の工事
写真145～148　瓦塚古墳　平成元年度の工事
写真149～152　瓦塚古墳　平成２年度の工事
写真153～160　瓦塚古墳　平成３年度の工事
写真161～164　瓦塚古墳の整備状況
写真165・166　瓦塚古墳の現状
写真167　二子山古墳整備工事直後のようす
写真168　二子山古墳航空写真
写真169・170　前方部周堀整備工事
写真171～176　二子山古墳の現状
写真177　愛宕山古墳現状
写真178　鉄砲山古墳整備前
写真179　鉄砲山・奥の山・中の山
写真180　鉄砲山古墳の調査
写真181　雪の鉄砲山古墳
写真182・183　鉄砲山古墳の現状
写真184　奥の山古墳整備前
写真185　奥の山古墳整備工事直後のようす
写真186　奥の山古墳の現状
写真187　中の山古墳整備前
写真188　中の山古墳の調査
写真189　須恵質埴輪壺
写真190～192　中の山古墳の現状
写真193　小古墳群の調査状況
写真194～198　小古墳群の現状
写真199・200　オリエンテーリング
写真201～205　古代劇公演風景

《確認調査編》

確認調査の概要

Ⅰ　調査の経過

将軍山古墳は、すでに1894（明治27）年に地元の人々によって発掘調査が行われ、豊富な遺物が出土したが、現在は東京国立博物館や東京大学等に分散して保管されている（付編第１部参照）。その後、昭和50年度には水路の改修工事に伴う前方部南東隅部の調査を、昭和59年度に畑地の土砂掘削に伴う、外堀西側の調査をそれぞれ県が行っている。また平成６年度には行田市教育委員会が前方部南側で水路改修工事に伴う発掘調査を行った。

今回の将軍山古墳の保存整備事業に伴い、平成３年度から７年度にかけて遺構範囲確認のための発掘調査を実施し、８年度に本報告書を作成した。

《平成３年度》平成３年７月26日～平成４年３月13日

平成４年度からの整備事業に先立ち、予備調査としての確認調査を行った。将軍山古墳の後円部東側は土取りによって、すでに墳丘が失われており、崖面には主体部である横穴式石室の石材が一部露出していた。また後円部の墳丘も上半分が失われている状況であり、横穴式石室の保護上、何らかの処置を行う必要があった。なお、この年は瓦塚古墳の整備事業を主体として行っている。

７月26日～８月10日：横穴式石室のグリッド設定、及び後円部崖面の観察。

９月10日～11月７日：横穴式石室の掘り下げと精査。鉄地銀張飾金具や鞍橋金具、挂甲小札、鉄鏃、ガラス玉等、多くの遺物が床面より出土した。

12月５日～３月13日：今後の整備の見通しを得るため、墳丘から堀にかけてトレンチを４本設定し試掘調査を行った。その結果、従来墳丘造出しと思われていた部分が、実は後世の改変に伴うものであること、墳丘が２段築成であることなどが明らかとなった。

《平成４年度》平成４年７月20日～12月３日

主に後円部墳丘の形態を明らかにするための調査を行った。

７月20日～11月21日：後円部の墳丘及び墳丘裾部の調査。３年度に一部現われていた造出しの形態が判明した。また造出しに隣接した堀からは、多くの埴輪とともに須恵器の瓮が出土した。

10月６日～11月20日：前方部の墳裾の試掘調査。

10月12日～11月13日：後円部東側のくびれ部を調査。墳丘はすでに失われていたが、基底部は残っており、くびれ部の形態が明らかになった。

以上の調査で後円部の径が39mで、須恵器瓮の年代から６世紀後半に古墳が築かれたこと等が確認された。

《平成５年度》平成５年４月20日～11月５日

前方部の墳丘形態を明らかにするための調査を行った。なお時期によって調査区内の水位が上下することから、状況によって調査区を移動しながら進めていった。

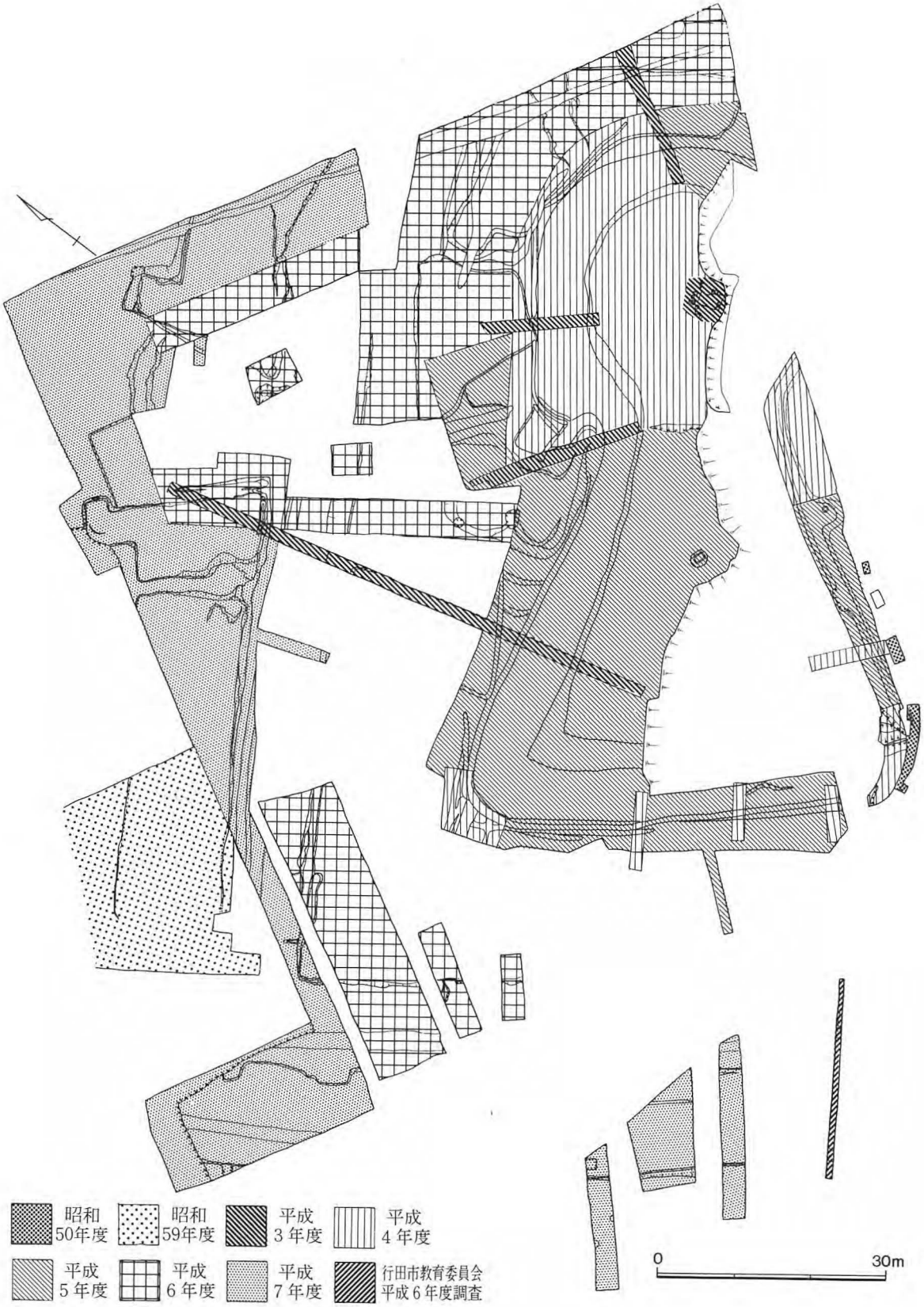


図1　年次別　発掘調査範囲

4月20日～9月30日：まず墳丘西側及び正面に、等高線と直角方向にトレンチを4本設定して調査し、さらに中段部に相当する部分を等高線に沿ってトレンチを設定して調査を行った。前方部正面中段部からは円筒埴輪及び朝顔形埴輪の基部が検出された。また墳頂部など次第にトレンチを拡張していった。

4月28日～6月28日：後円部北側墳裾の調査。調査区東端にブリッジを検出した。円筒埴輪がまとまって堀の中に落ち込んでいる状態で出土した。

5月11日～8月4日：前方部東側墳裾の調査。1箇所ブリッジを検出。

5月20日～10月19日：前方部正面墳裾の調査。埴輪の出土量が他の調査区に比べ少ない。

6月14日～11月4日：前方部西側墳裾の調査。くびれ部に隣接する部分は一段深くなっていて、円筒埴輪がまとまって落ち込んでいる状態で出土した。

7月16日～9月17日：墳丘中軸線上の第2主体部の調査。副葬品はガラス玉のみであった。

10月1日～10月14日：墳丘表土をすべて除去したが、中段部以外では埴輪の出土が少なかった。

10月20日～11月4日：造出し周辺の堀を調査。靫形埴輪の良好な資料が出土した。

10月29日：航空測量を行う。

以上の調査で、古墳全長90m、前方部幅68mであることが判明した。また墳丘中段部に埴輪が並べられていた痕跡が確認され、第2主体部があることも初めて確認されるなど、大きな成果をもたらした。

《平成6年度》平成6年7月4日～平成7年2月3日

内堀の形態及び範囲確認のための調査を行った。

7月11日～8月2日：後円部北・西側の堀が一段低くなっているところを検出。円筒埴輪が良好に残っているところがあった。また放射状に取り付くブリッジを検出した。ただし浸水が激しいため、一時中断した。

7月27日～8月18日：後円部西側の中堤から外堀に至るトレンチを調査。中堤に造出しが付くことが推定された。

8月3日～9月16日：くびれ部西側の中堤から外堀にかけてトレンチ調査。中堤の造出しの輪郭を明確にした。この造出しと中堤の接合部付近から多くの埴輪が出土した。

9月16日～10月26日：内堀の南西隅部分の確認のため3箇所のトレンチを設定し調査。

10月27日～11月8日：くびれ部西側の内堀から中堤にかけてトレンチ調査。内堀と中堤の境界ラインがこれによってほぼ推定できるようになった。

11月9日～12月2日：後円部北・西側の内堀調査を再開。

12月1日～2月3日：中堤造出しの南側の輪郭を明らかにするため、トレンチを拡張して調査。

以上の調査で、内堀輪郭が明らかとなり、中堤に造出しが付くことを確認した。

《平成7年度》平成7年9月25日～12月19日

外堀の形態及び範囲確認のための調査を行った。発掘調査の最終年度となる。

10月３日～10月６日：始めに墳丘西側の農道よりも西を重機掘削したところ、削平により全く遺構が残っていなかったので、遺構が良好に残存する農道下を中心に調査を行うこととなった。遺構精査の結果、中堤の造出しと考えられていた部分の外側には堀は巡らず、ブリッジ状になっていたことが判明した。

10月９日～11月24日：後円部の外堀部分の人力による掘削。堀底は深く水が湧いてくるほどである。中堤との境界部分は攪乱のため輪郭を明確にすることができなかった。

10月11日～10月26日：前方部の外堀部分の人力による掘削。堀は比較的浅く、遺物は少なかった。また内堀の西南隅角を検出し、昨年調査の内堀ラインと一致した。

10月18日～11月７日：中堤造出し部南側の調査。盾持ち人物埴輪が良好な状態で出土した。

11月８日～12月６日：前方部外堀部分の調査範囲を拡張した。中堤際から多くの円筒埴輪片が出土した。

11月27日～12月19日：外堀の前方部正面の輪郭を明らかにするため、水路をはさんで南側の部分を調査。水路際は攪乱が激しかったが、外堀の外側のラインは確認できた。

《平成８年度》平成８年４月１日～平成９年３月31日

発掘調査出土遺物の整理作業を行い、保存整備事業の報告書を作成した。

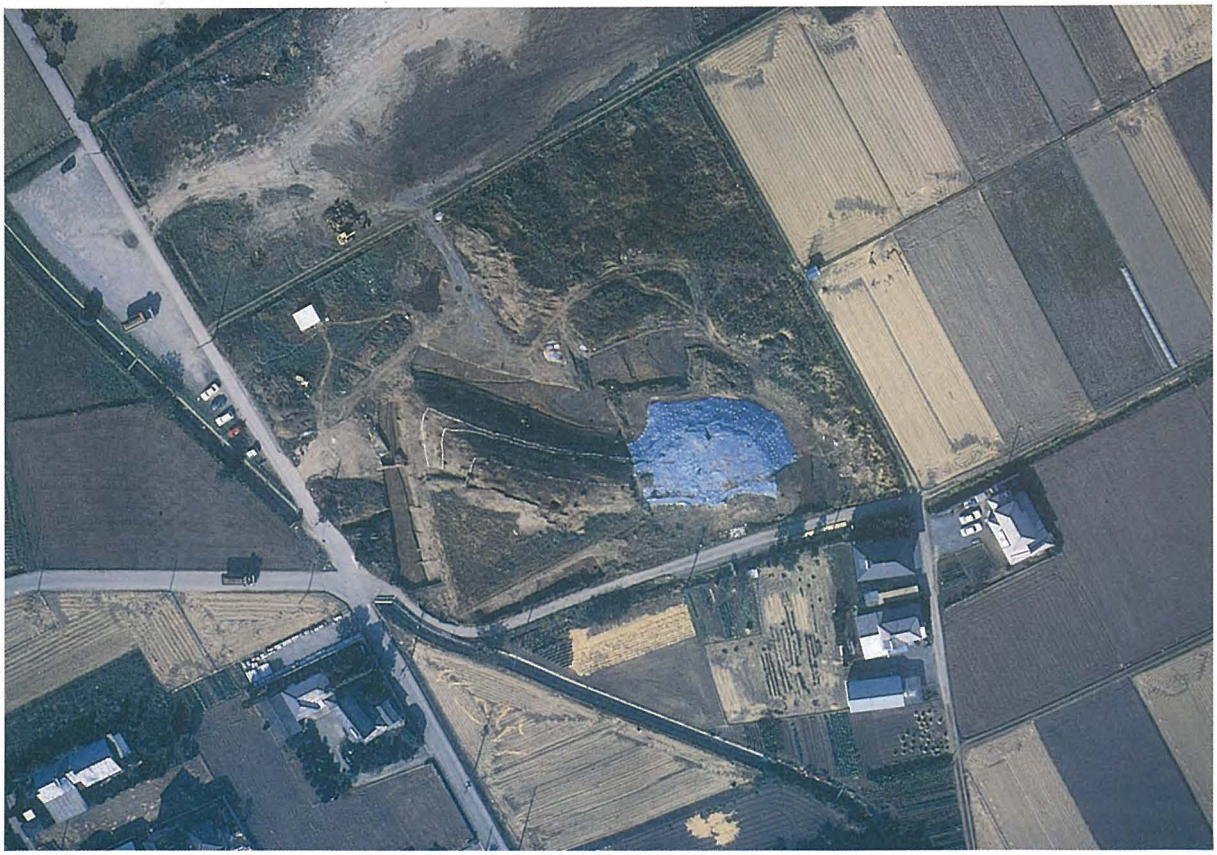


写真１　平成５年度　調査終了時の航空写真

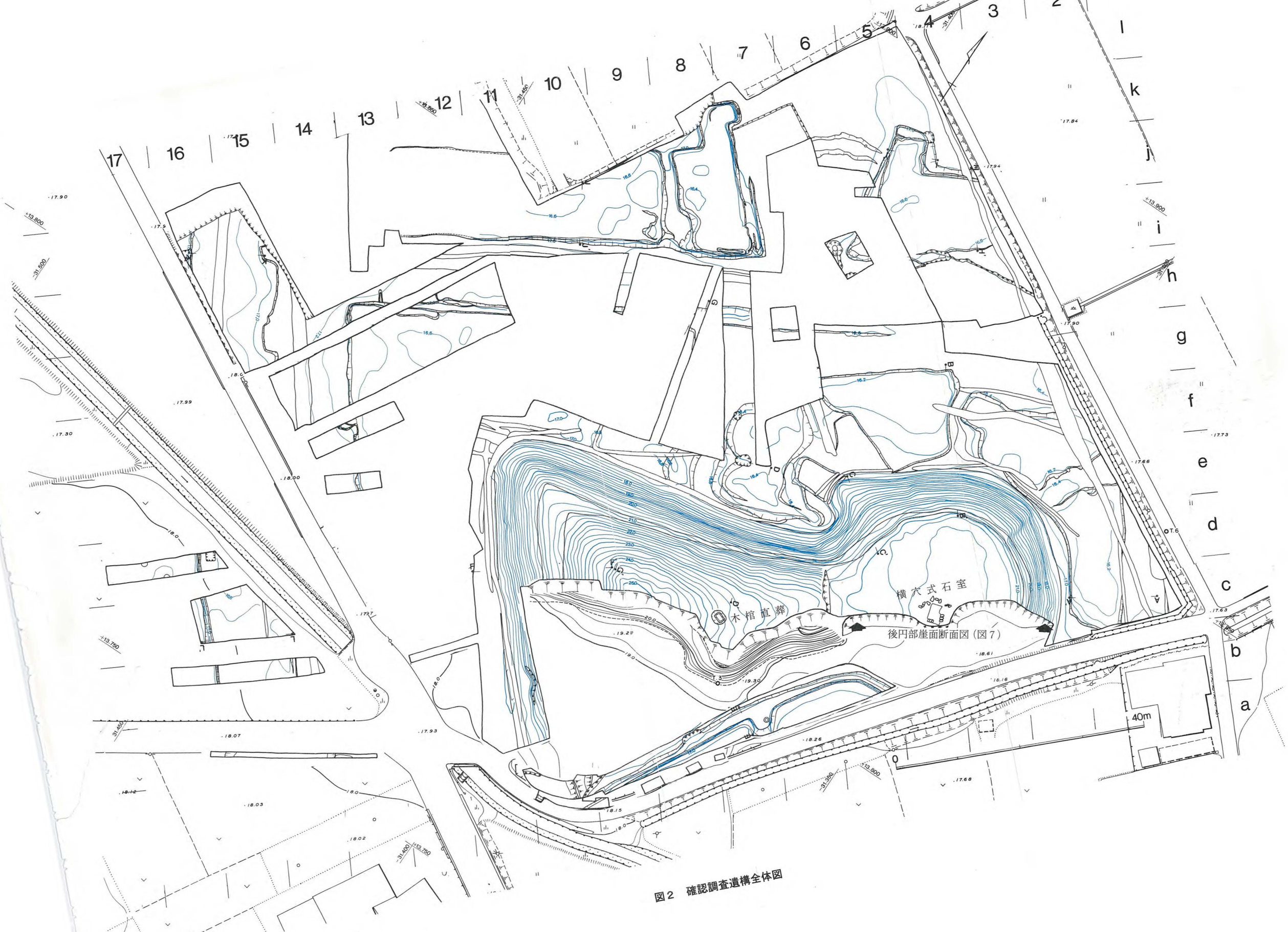


図２　確認調査遺構全体図

Ⅱ　墳丘及び周堀の調査

墳丘と周堀の発掘調査は、図３のように古墳の主軸ラインを基準にして、10m四方の大グリッドを設定しさらに２m四方の小グリッドを設定して、遺構の実測や遺物の取り上げなどを行った。以下の記述はこの大グリッド名（例えばｃ－６やｆ－９‥‥等）を使用している。墳丘の表土は基本的にすべて除去し、周堀は形態を確認するために適宜トレンチを設定した。

１　墳丘

墳丘は後円部の上段、及び後円部・前方部の東側半分が土取りによって失われており、墳丘の西側も生活道路等の造成で変形していた。平成４年度に後円部、５年度に前方部の調査を行い、いずれの年度も墳裾部分周辺の調査を併せて行っている。

整備事業前は、全長102m・後円部直径57m・前方部幅50m（推定）とされていたが、今回の調査によって、全長90m・後円部直径39m・前方部幅68mになることが明らかとなった。墳丘の削平によって墳形ラインが明確ではないが、主軸方向はほぼN－50°－Eと推定される。

外装施設としては埴輪が樹立されていたが、葺石は全く認められなかった。

(1)後円部（写真２～５）

墳丘は２段築成であるが、後円部は上段がほとんど削平されていた。横穴式石室は、中段部に床面を設定しているので、Ⅲで記すように床面と根石部分が辛うじて確認できた。墳丘上にはかつて家屋があったということから、削平面はほとんど平坦で、標高21.0～21.4mであった。また南東半分は古墳基底部付近まですべて土取りをされていたが、幸いなことに石室の玄室部分だけは避けるようにして削られていた。墳丘中段部は標高20.4m前後で確認され、幅は0.4m～1.3mほどその痕跡を残しているが、封土は相当流失していると予想される。

写真２　後円部墳丘西側
平成４年度調査。ｆ－２付近から造出し方向を望む。墳裾周囲に溝が巡っているが、これは後世のもの。

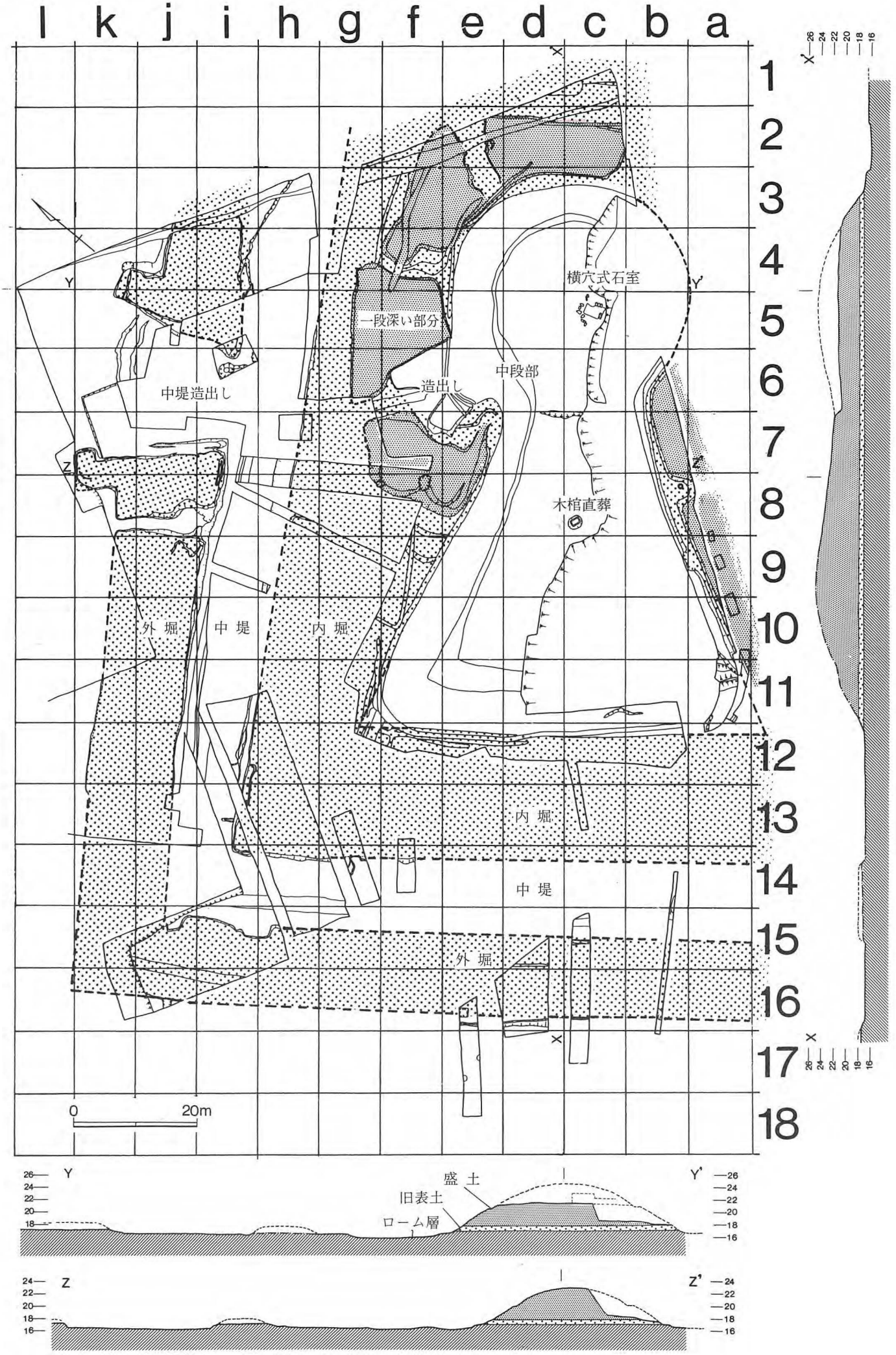
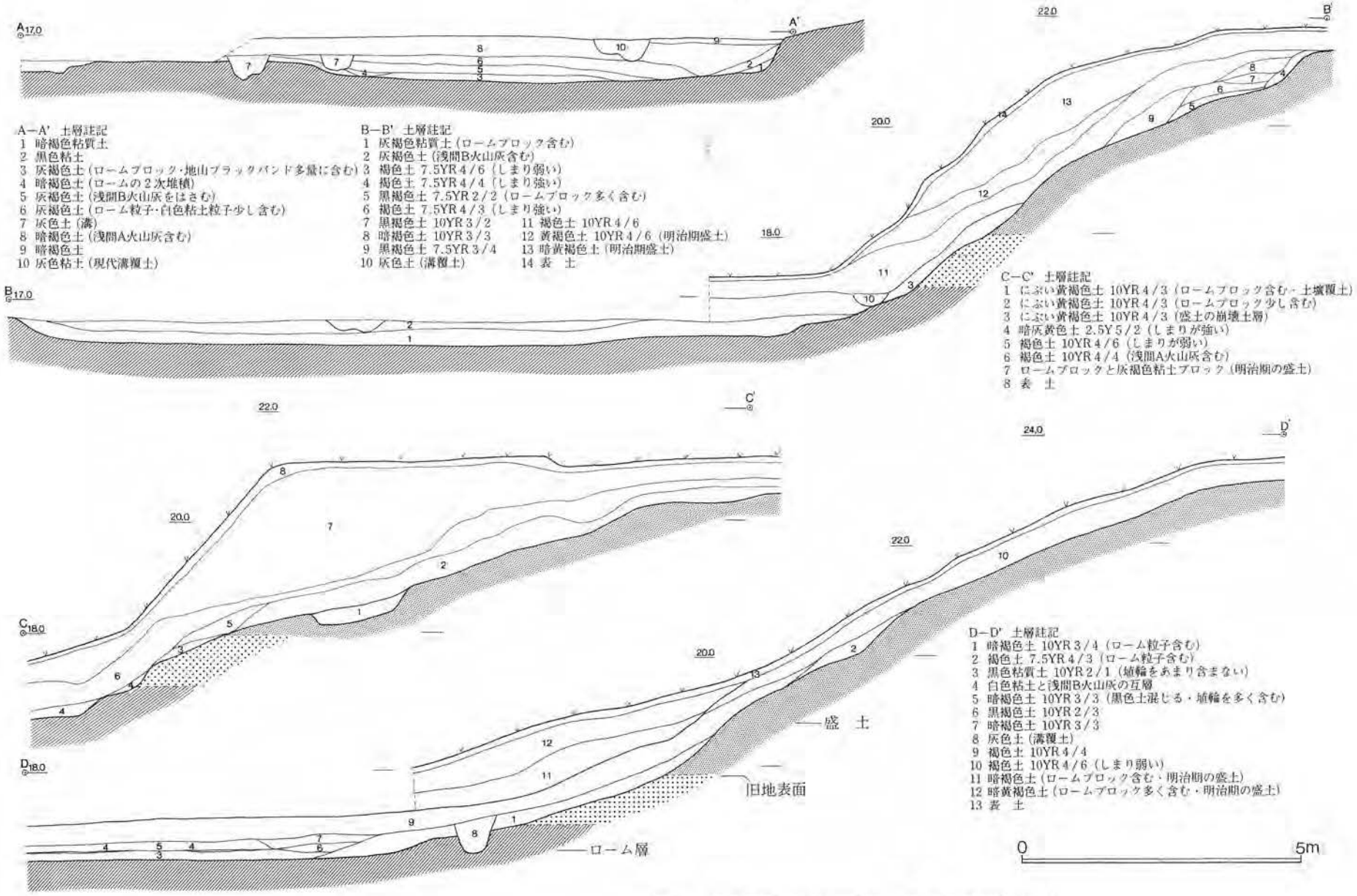

l k j i h g f e d c b a
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
横穴式石室
一段深い部分
中段部
造出し
中堤造出し
木棺直葬
外 堀
中 堤
内 堀
内 堀
中 堤
外 堀
0 20m
盛 土
旧表土
ローム層
Y
Y'
Z
Z'
X
X'
26 24 22 20 18 16

図3　遺構の概要



A−A' 土層註記
1 暗褐色粘質土
2 黒色粘土
3 灰褐色土（ロームブロック・地山ブラックバンド多量に含む）
4 暗褐色土（ロームの２次堆積）
5 灰褐色土（浅間B火山灰をはさむ）
6 灰褐色土（ローム粒子・白色粘土粒子少し含む）
7 灰色土（溝）
8 暗褐色土（浅間A火山灰含む）
9 暗褐色土
10 灰色粘土（現代溝覆土）

B−B' 土層註記
1 灰褐色粘質土（ロームブロック含む）
2 灰褐色土（浅間B火山灰含む）
3 褐色土 7.5YR 4/6（しまり弱い）
4 褐色土 7.5YR 4/4（しまり強い）
5 黒褐色土 7.5YR 2/2（ロームブロック多く含む）
6 褐色土 7.5YR 4/3（しまり強い）
7 黒褐色土 10YR 3/2
8 暗褐色土 10YR 3/3
9 黒褐色土 7.5YR 3/4
10 灰色土（溝覆土）
11 褐色土 10YR 4/6
12 黄褐色土 10YR 4/6（明治期盛土）
13 暗黄褐色土（明治期盛土）
14 表　土

C−C' 土層註記
1 にぶい黄褐色土 10YR 4/3（ロームブロック含む・土壌覆土）
2 にぶい黄褐色土 10YR 4/3（ロームブロック少し含む）
3 にぶい黄褐色土 10YR 4/3（盛土の崩壊土層）
4 暗灰黄色土 2.5Y 5/2（しまりが強い）
5 褐色土 10YR 4/6（しまりが弱い）
6 褐色土 10YR 4/4（浅間A火山灰含む）
7 ロームブロックと灰褐色粘土ブロック（明治期の盛土）
8 表　土

D−D' 土層註記
1 暗褐色土 10YR 3/4（ローム粒子含む）
2 褐色土 7.5YR 4/3（ローム粒子含む）
3 黒色粘質土 10YR 2/1（埴輪をあまり含まない）
4 白色粘土と浅間B火山灰の互層
5 暗褐色土 10YR 3/3（黒色土混じる・埴輪を多く含む）
6 黒褐色土 10YR 2/3
7 暗褐色土 10YR 3/3
8 灰色土（溝覆土）
9 褐色土 10YR 4/4
10 褐色土 10YR 4/6（しまり弱い）
11 暗褐色土（ロームブロック含む・明治期の盛土）
12 暗黄褐色土（ロームブロック多く含む・明治期の盛土）
13 表　土

図４　土層断面図（断面位置は図２参照）〈１〉

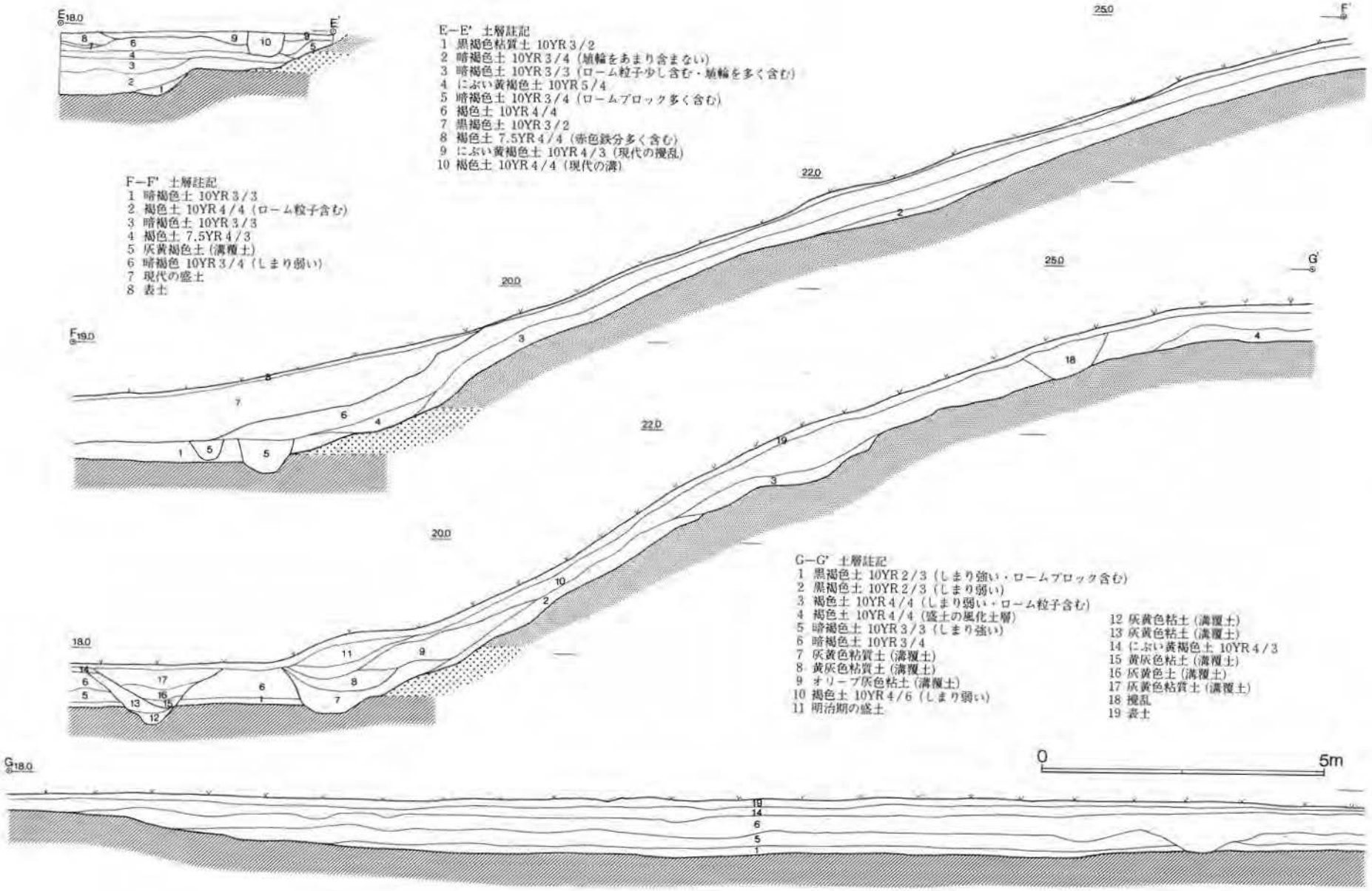

E—E' 土層註記
1 黒褐色粘質土 10YR 3/2
2 暗褐色土 10YR 3/4（植輪をあまり含まない）
3 暗褐色土 10YR 3/3（ローム粒子少し含む・植輪を多く含む）
4 にぶい黄褐色土 10YR 5/4
5 暗褐色土 10YR 3/4（ロームブロック多く含む）
6 褐色土 10YR 4/4
7 黒褐色土 10YR 3/2
8 褐色土 7.5YR 4/4（赤色鉄分多く含む）
9 にぶい黄褐色土 10YR 4/3（現代の攪乱）
10 褐色土 10YR 4/4（現代の溝）
F—F' 土層註記
1 暗褐色土 10YR 3/3
2 褐色土 10YR 4/4（ローム粒子含む）
3 暗褐色土 10YR 3/3
4 褐色土 7.5YR 4/3
5 灰黄褐色土（溝覆土）
6 暗褐色 10YR 3/4（しまり弱い）
7 現代の盛土
8 表土
G—G' 土層註記
1 黒褐色土 10YR 2/3（しまり強い・ロームブロック含む）
2 黒褐色土 10YR 2/3（しまり弱い）
3 褐色土 10YR 4/4（しまり弱い・ローム粒子含む）
4 褐色土 10YR 4/4（盛土の風化土層）
5 暗褐色土 10YR 3/3（しまり強い）
6 暗褐色土 10YR 3/4
7 灰黄色粘質土（溝覆土）
8 黄灰色粘質土（溝覆土）
9 オリーブ灰色粘土（溝覆土）
10 褐色土 10YR 4/6（しまり弱い）
11 明治期の盛土
12 灰黄色粘土（溝覆土）
13 灰黄色粘土（溝覆土）
14 にぶい黄褐色土 10YR 4/3
15 黄灰色粘土（溝覆土）
16 灰黄色土（溝覆土）
17 灰黄色粘質土（溝覆土）
18 攪乱
19 表土
0
5m

図5　土層断面図〈2〉

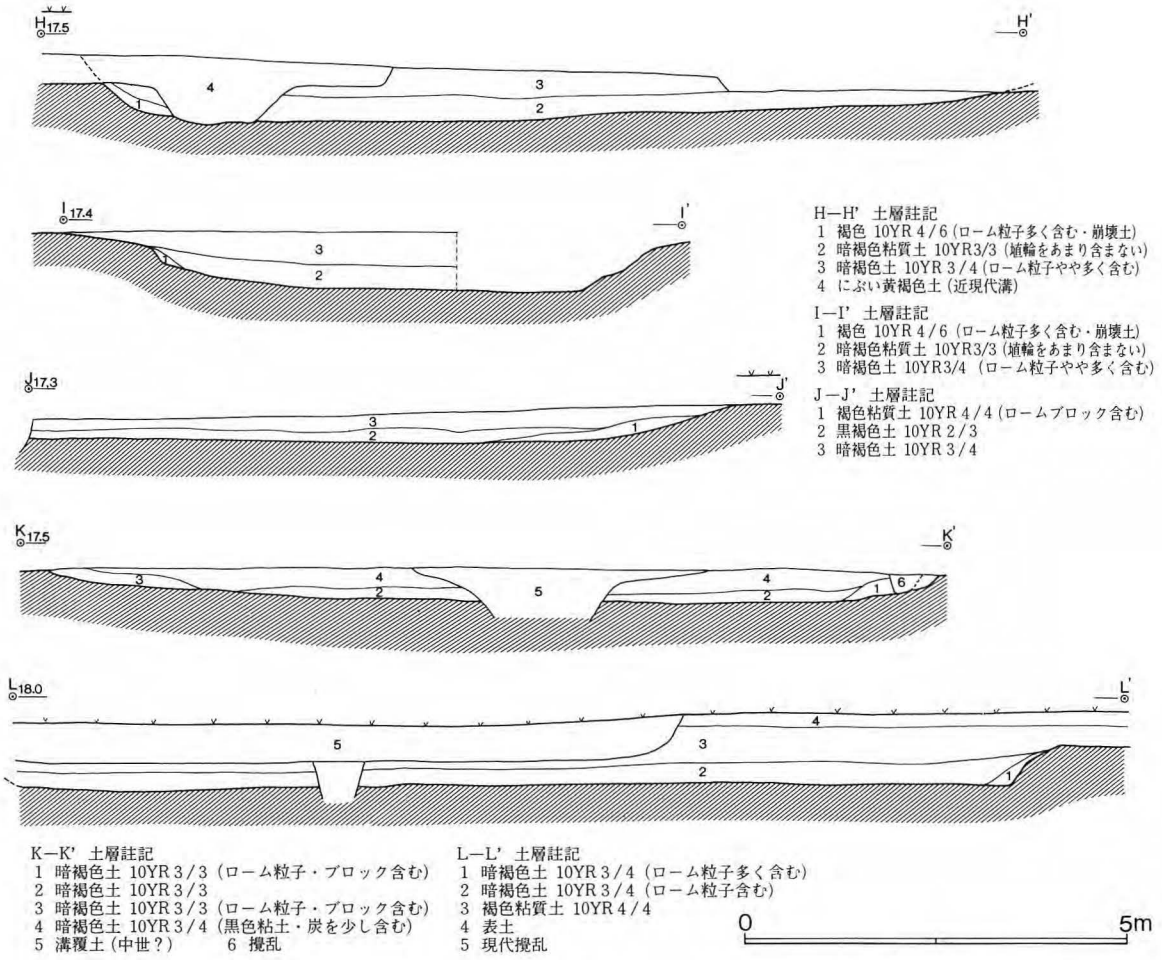


図6　土層断面図　〈3〉

墳丘上の表土はｃ・ｄ－３付近でかなり厚く堆積していた。このため、従来推定されていた古墳全長よりもかなり短いことがわかったが、この部分は墳丘上半部を削平した際の土が、そのまま流しだされて堆積したもので、近現代陶器の破片が多く含まれていた。また墳丘の土層観察（図４～６）から、古墳時代の旧地表面は標高約18mであり、ローム上面が約17mである。旧表土からローム面の間は墳丘の傾斜は盛土部分よりも緩やかで、墳裾はほぼローム上面に相当する。

後円部周囲の内堀は、後で記すように一段深く掘り下げている。墳裾と一段深い堀との間には平坦な面を有しているが、この部分は内堀の床面と解釈している。

これらのことから、後円部の墳丘は、中心点が石室奥壁より約２m北側にあり、直径は39mであることが確認された。

墳丘造出しはｅ－６から西側へ台形状に張り出しており、造出し部分に至る墳丘の傾斜は緩やかで、等高線も円形のバランスを崩している。先端部付近では平坦であり、内堀の底部レベルとほとんど差がない程度であるが、堀との境にわずかな段が見られることから、造出し部分の輪郭を確認することができた。くびれ部付近は後世の溝や掘削によって変形しているが、造出しの付け根部分の幅は約11.5mで、付け根部分から先端部までは約12m、先端部は幅約14mである。

写真３　後円部墳丘北側
平成４年度調査。ｅ－２付近から東方向を望む。後円部を削平した際の廃土が、厚く堆積しているのが見える。

写真４　墳丘造出し
平成４年度調査。ｆ－７付近から墳丘造出しを望む。写真の右端がくびれ部にあたる。墳丘からなだらかな斜面が造出しに続き、後世の溝によって切られている場所より手前は平坦となる。

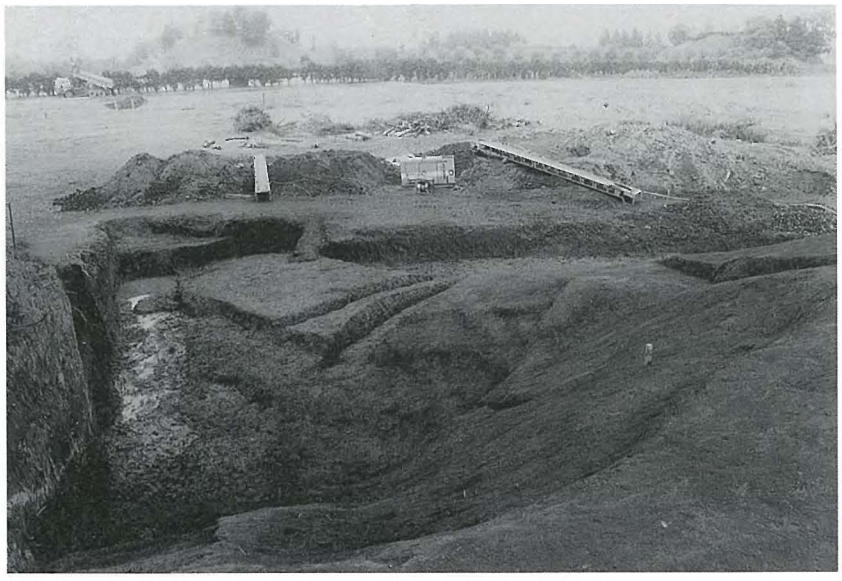


写真５　墳丘造出し
平成４年度調査。墳丘くびれ部中段部から望む。墳丘造出しに至る斜面からは、多くの埴輪や土器が出土した。はるか向うに丸墓山古墳や稲荷山古墳が見える。

⑵前方部（写真６～９）

前方部の墳丘は、後円部と同様ほぼ南東半分が土取りによってなくなっていたが、北西半分は比較的良好に残存していた。墳丘のない部分も現地表下に墳裾が残存しており、南東隅角が調査範囲外であった他は、墳丘の平面形態を確認することができた。

前方部の北西側には、かつて後円部墳丘上に向う生活道路があったが、この道路を造成するために、図４の断面Ｄ－Ｄ’のように約1.8mも盛土を施していた部分もある。

前方部正面や北西側の墳裾には中世以降とみられる溝が巡らされ、古墳の墳裾の状態は不明瞭であったが、とくに南西隅角部分には多くの溝が入り組んでいて、墳丘のコーナーを検出することはできなかった。南東側墳裾のまわりは、すぐ道路に接しているために調査範囲が限定されたが、後円部周囲と同様に内堀が一段低くなるようすが確認された。前方部の平面形態は、くびれ部で緩やかに曲線を描いて後円部とつながり、前方部正面に向って直線的に大きく広がる。前方部正面のラインも直線を呈している。前方部の幅は推定で68mである。

墳丘の断面は、後円部と同様に旧地表面以下は盛土部分より傾斜が緩やかで、墳裾はローム上面に相当し、ここから内堀の床面に向かってなだらかに傾斜が続いていく。旧地表面から中段部まではかなり急激な傾斜となっている。中段部は後円部から続いているが、平坦面のレベルは前方部正面に向かってやや高くなっている。後円部でのレベルは20.4m前後であったのが、前方部正面では20.8～21.6mとなっている。中段部は土の流失によって、断面が斜めになっており、残存する幅は北西側で約１m、正面で約３m確認された。

中段部から墳頂へ再び傾斜を増して上がっていくが、次第に緩やかになって墳頂に至る。現在最

写真６　墳丘前方部全景（平成５年度　ｈ－11付近から望む）

も高いところは標高25.1mで、旧地表面からは約８m高い。墳頂の平坦面は土の流失によってはっきりしないが、傾斜の変化を考慮すると前方部正面では墳頂平坦部の幅は約20mであったと推定される。

前方部墳頂の最も高い地点より、やや後円部に寄ったところのほぼ主軸線上で、木棺直葬の埋葬施設（第２主体部）が検出された。

写真７　墳丘前方部正面
平成５年度調査。ｈ－12から望む。傾斜が緩やかな中段部で、円筒埴輪がまとまって出土した（写真20参照）。墳裾の溝は後世に掘削されたもの。

写真８　墳丘前方部側面
平成５年度調査。後円部ｅ－６付近から前方部を望む。墳裾付近は墳丘の傾斜が緩やかになっている。その傾斜変換点はほぼ旧表土面に相当する。彼方に見えるのは二子山古墳の後円部。

写真９　墳丘西側面全景
平成５年度調査。ｋ－８付近から望む。後円部上には遺構保護用にシートが被せてある。中段部は前方部正面に向かって、高さが斜めに上がっている。

(3)盛土（図７、写真10）

後円部の南東側は土取りによって崖面となっており、墳丘盛土の層位観察が可能であった。中段部以上はほとんどが削平されていることから、実際に観察できたのは、後円部の下段部及び上段部の一部だけであるが、ある程度築造技法を想定復原することができた。

まず旧地表面を均した後、後円部の形に合わせてドーナツ状に約２m盛り上げる。その際の土層はロームや褐色土を主体としたもので、層は緻密ではないが、しっかりと叩きしめて盛っている。とくに古墳の外側にあたる部分は丁寧に仕上げている。次にそのドーナツ状の島の中を埋めるように土を盛っている。ローム、褐色土、灰褐色の粘質土を交互に緻密に盛り、しっかりと叩きしめている。古墳の芯に当たるような部分といえる。その後一度全体を平らに均してから、灰褐色の粘質

写真10　後円部土取り崖面断面（右の土嚢が置いてある部分が石室床面）

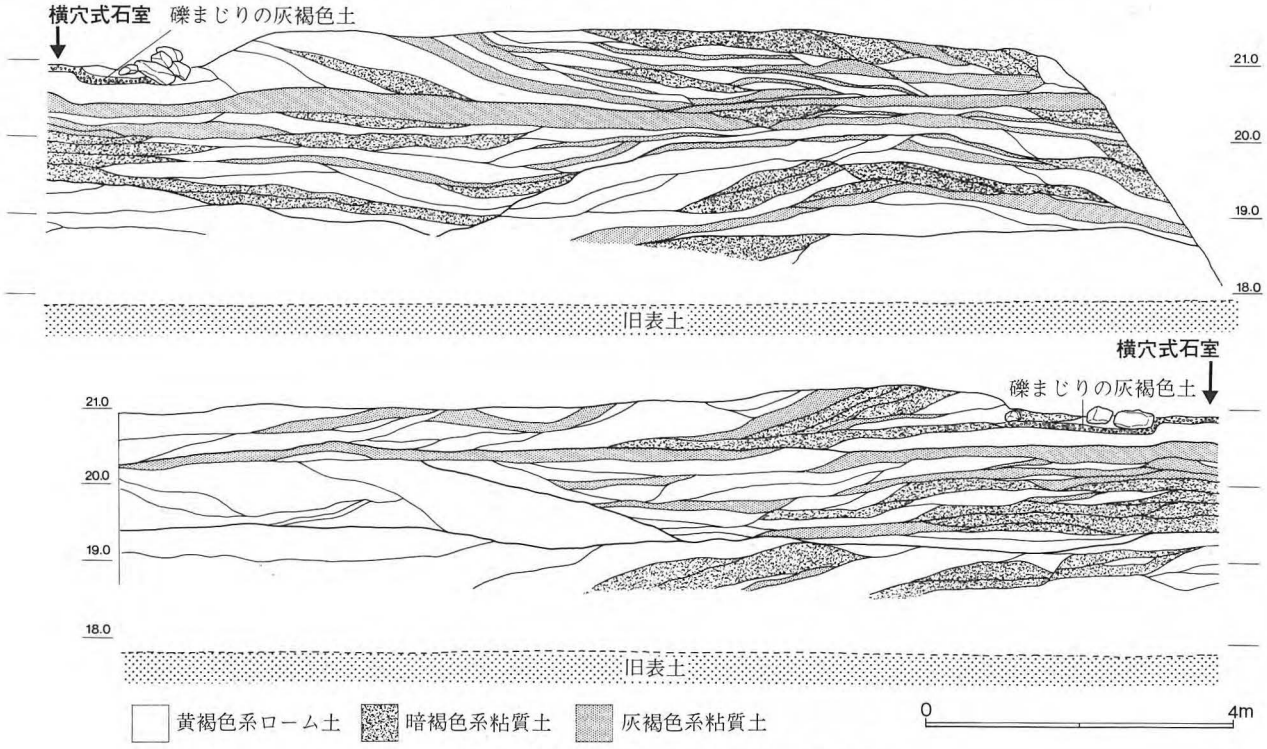


図７　後円部東南部崖面土層断面図

土を20cm前後に厚く敷き詰めるが、この上面が中段部に相当する。

中段部より上に土を盛る前に、まず横穴式石室を築くが、あらかじめ砂利を混ぜた灰褐色土を、石室の形に合わせて、断面が凸になるように敷いてから築いている。石室を築いた後に、石室を覆うようにしてローム、褐色土、灰褐色粘質土を叩きしめながら交互に緻密に盛り上げている。ここでも墳丘の外側にあたる方は、封土の流失を防止するため、より緻密に丁寧に築いている。

これら盛土に使われているロームや褐色土は、堀を掘削したときに出た土だが、灰褐色の粘質土は封土にするためにわざわざ作ったのであろう。

また後円部と前方部の接続部の土層を観察したところ、後円部を築いた後に前方部を造ったようだという所見があり、一度に前方後円墳形に成形したのではなく、円と方を別々に築いたということがわかった。

2　周堀

昭和59年度の調査によって、将軍山古墳には二重の堀が巡ることが確認されていたが、形態については不明であった。平成６年度に内堀、７年度に外堀の調査を行い、内堀・外堀ともにかなり複雑な形態を示すことが明らかとなった。

(1)内堀（写真11～14）

内堀については、後円部の周囲のみ公有地部分の全面調査を行い、その他はくびれ部付近から中堤にかけてと、南西側隅角付近にトレンチを設けて、形態や範囲の確認を行った。

墳丘の項で記したように、後円部周囲の内堀は２段構造になっている。墳丘との境には一見すると墳丘基壇のような平坦面を設けてから、急激に一段深い堀の中へ向って傾斜する。この一段深い堀の外側の立ち上がりも傾斜が強い。一段深い堀の底は、周囲の内堀よりも約40～50cmほど深くなっており、平面形態は後円部の墳形に沿って曲線を描いている。

この一段深い堀には、意図的に掘り残したように放射状のブリッジがあり、調査では４ヵ所検出された。これらは、墳丘から見て約15～20m間隔で取付けている。ブリッジ側面の立ち上がりは比較的緩やかである。墳丘の造出し部にもブリッジが付いており、造出しの先端部とはわずかな段を有するのみで、ほぼ平坦に継続している。後円部南東側は未調査であるが、左右対称形とするならばあと２ヵ所にブリッジがあったと推定される。

前方部については、南東側は調査範囲が狭いが、ｂ－８～ａ－10の範囲にあたる内堀が、後円部同様一段低くなっていることが想定され、ｂ－８ではブリッジが検出されている。前方部北西側及び正面側の周囲の堀底は、ｆ－９付近のように周辺よりも約30cmほど低い凹みとなっている部分もあるがほぼ平坦である。このように前方部の南東側と北西側では、堀の深さが墳丘を挟んで左右対称となっていないようである。

次に内堀の外側ラインの形態について記す。ｇ－２～ｈ－５にかけては後世の水田等による攪乱のため削平されていて、輪郭を確認することはできなかった。ｈ－７から南西方向にかけては立ち上がりが良好に認められた。南西隅角は明確に認められ、内堀の輪郭が屈曲して前方部正面の方向

写真11　後円部北側内堀

平成５年度調査。ｃ－２から望む。手前は内堀が一段深くなるところで、壁面の立ち上がりは急傾斜である。墳裾の周囲には平坦面があるが、ここは内堀の底面とみなす。

写真12　東側くびれ部内堀

平成４年度調査。ｂ－５から望む。墳丘はほとんど削平され、墳裾部が辛うじて残っている。

写真13　前方部南東側内堀

平成５年度調査。ｂ－７から南方を望む。内堀は、墳裾からさらに一段深くなっている。手前には左方向にブリッジが延びている。ブリッジ内にある丸い遺構は現代のもの。

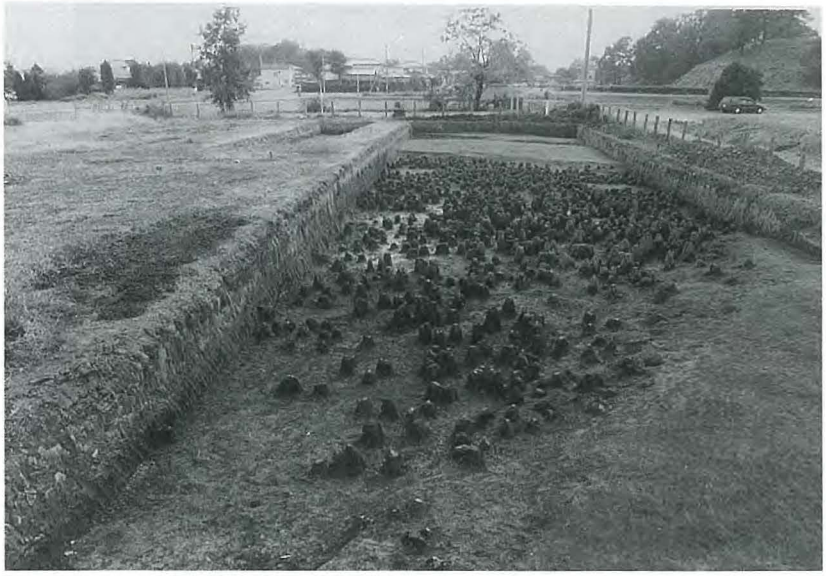


写真14　内堀前方部西側隅角
平成６年度調査。ｉ－11から望む。内堀から中堤に至る立ち上がりは緩やかである。左方向に墳丘があり、正面右には二子山古墳が見える。

と平行して築かれていることが確認された。南東隅角は調査範囲外なので詳細は不明であるが、墳丘中軸線で反転すると、内堀の前方部正面での幅は約100ｍとなる。墳丘北側の水田部分は未調査のため、全体の形態を確認することはできなかった。

堀底のレベルは、後円部周囲の一段深いところで標高約16.1ｍ、上段では16.5ｍ前後、前方部墳丘周囲で17.0ｍ前後であるが、南西隅角付近では16.5ｍほどの深さとなる。旧地表面の高さは約18.0ｍなので、１～２ｍほどは掘り込んでいたことになる。

⑵外堀（図８、写真15～18）

墳丘西側の農道を中心にして、そこから調査区を拡張するようにして外堀の形態を確認した。また前方部正面に東西に走る水路の南側にも、３ヵ所トレンチを設けた。農道部分は耕作による攪乱を受けていなかったので、遺構の残存状態は極めて良好であった。

外堀の平面形態の大きな特徴は、墳丘の造出し部と対応するところに、中堤の造出しがあって、この部分の外堤が途切れていることである。この中堤造出しは、これまで稲荷山古墳や二子山古墳でも検出されているものであるが、やや形態を異にしている。

中堤造出しは古墳の外に向かってほぼ直線的に開く形態を示す（図８）。外堀は中堤造出しの両側でやや外側に突出する。南西隅角は造出しを囲むように、２ｍ程屈曲しているが、この屈曲部分の端部の壁面は急激に立ち上がっていて、意図的にそこで断絶させていることがわかる。またこの壁面には直径30㎝前後のピットが６ヵ所検出され、古墳に伴うものとすれば、何か構造物があった可能性もある。逆に北東隅角は外堀が屈曲せずに終わっており、壁面の立ち上がりも緩やかである。このため中堤造出しは幅の広いブリッジのような形状となり、稲荷山や二子山のように外堀が造出しを囲んでいたのとは異なる。中堤造出しの側壁面の観察により、南西側壁面は中堤との接合部に近いｊ・ｉ－７では、幅約３ｍのｊ→ｉ－７に向うスロープが付いていることが確認された。それ以外の側壁面はしっかりした立ち上がりを有している。なおｋ－５・６には造出しと直交するように幅約３ｍ、深さ約20㎝の浅い溝が走っているが、覆土の状態や遺物からみて、古墳築造時の遺構

ではないようである。

さらに中堤造出しの南西側約10m隔てて、ブリッジ状の掘り残し部分がある。ブリッジは幅約２mで、中堤との接合部付近の輪郭は曖昧であるが、古墳外側に向かうに従い、壁面の傾斜が強くなっていく。

次に外堀の状態を北から順に記す。中堤造出しより北東側のｉ－３～４付近は、後世の水田耕作によって削平され、中堤との境の立ち上がりの痕跡はほとんどなかった。しかし堀の外側のｊ－４では急な立ち上がりが認められ、さらに北東に向って直線的に伸びているようすが確認された。中堤造出しより南西側では、中堤との境の壁面は良好に認められた。ｊ・ｋ－12～13付近は昭和59年度に調査された部分で、今回の調査による外堀の輪郭と一致した。なお、この昭和59年度の調査範囲は、現在では耕作のため遺構が失われており、外堀の南西隅角を検出することができなかった。

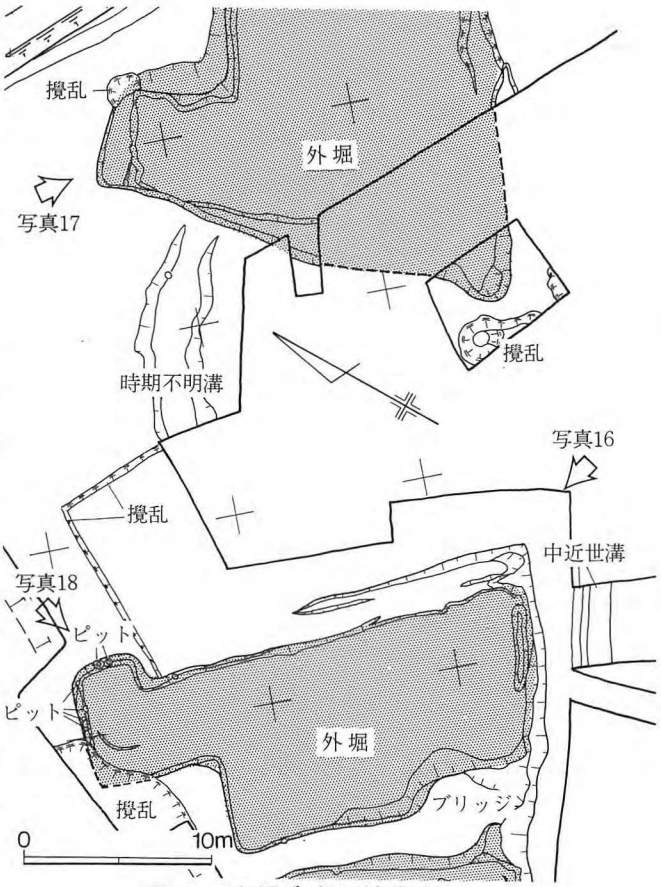


図８　中堤造出し拡大図

前方部墳丘正面と平行する部分は、ｊ～ｈ－15の調査では中堤との境に明確な立ち上がりがなく、堀底に向って緩やかな傾斜面になっていた。外堀の外側の立ち上がりはｃ～ｅ－16のトレンチで良好に確認された。

外堀の幅は12～14mで、前方部正面部における堀の隅から隅の幅は、中軸線で反転復元すると約160mに達し、稲荷山古墳の堀にほぼ匹敵する大きさである。堀床面レベルは16.4m～16.7mとなり、後円部寄りの方がやや低い傾向がある。

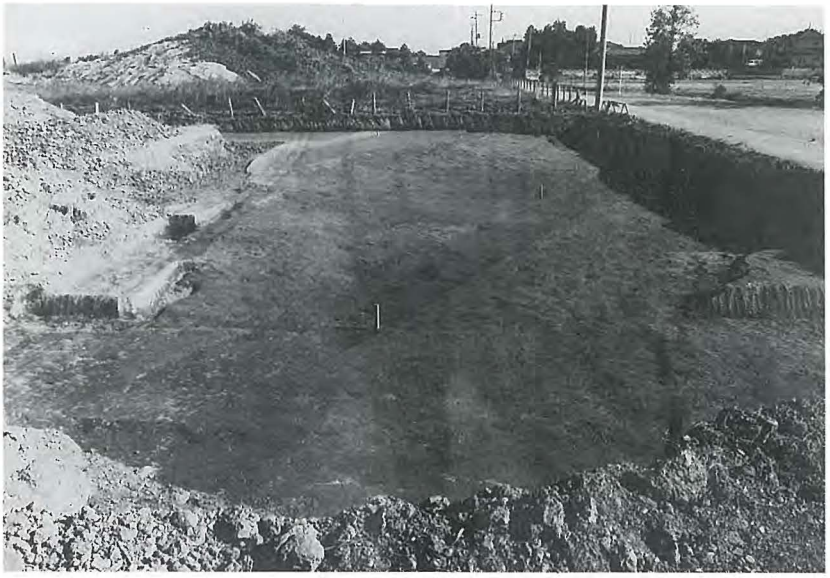


写真15　外堀前方部西側隅角

平成７年度調査。ｋ－16から墳丘方向を望む。外堀の隅角は削平によって検出することはできなかった。外堀と中堤の境は非常に緩やかである。堀の中央に痕跡が見える溝は、中世頃のものであろう。

写真16　中堤造出し基部
平成６年度調査。図８参照。右方向が中堤造出し。ここの外堀内からは形象埴輪が比較的多く出土している。

写真17　中堤造出し北東側
平成７年度調査。図８参照。右奥に整備途中の後円部が見える。外堀が手前に向かって四角く張り出している。

写真18　中堤造出し南西側
平成７年度調査。図８参照。左が中堤造出し。外堀が造出しに沿って屈曲し、さらに手前方向にわずかに入り込んでいる。写真中央にはブリッジが、左奥には墳丘前方部が見える。

3　遺物出土状況

墳丘及び周堀の調査では、多くの埴輪や土器が出土している。言うまでもなく埴輪は本来、墳丘や中堤に並べられていたもので、周堀から出土する埴輪はいずれも崩落したものである。この項では墳丘や周堀からどのように遺物が出土したのかを概観し、円筒埴輪・形象埴輪・土器のそれぞれについて、その出土分布をまとめておきたい。

(1)墳丘（図９、写真19・20）

将軍山古墳では葺石がないため、墳丘盛土が流失しやすい。そのため、墳丘上に並べられていた埴輪もほとんどが堀の中へ崩れ落ちており、墳丘上から出土した埴輪の総数は少なかった。傾斜の緩やかな中段部からは、墳丘斜面や墳頂部に比べると多くの埴輪が出土したが、それらには本来中段部に並べられていた埴輪と、墳頂から落ちてきて中段部で留まった埴輪が混在していると考えられる。

後円部は上段部がほとんど削平されていたが、中段部は辛うじて検出することができた。この中段部からは埴輪片の他に、石室を構築する際に出たと考えられる、房州石の剝片も出土した。この

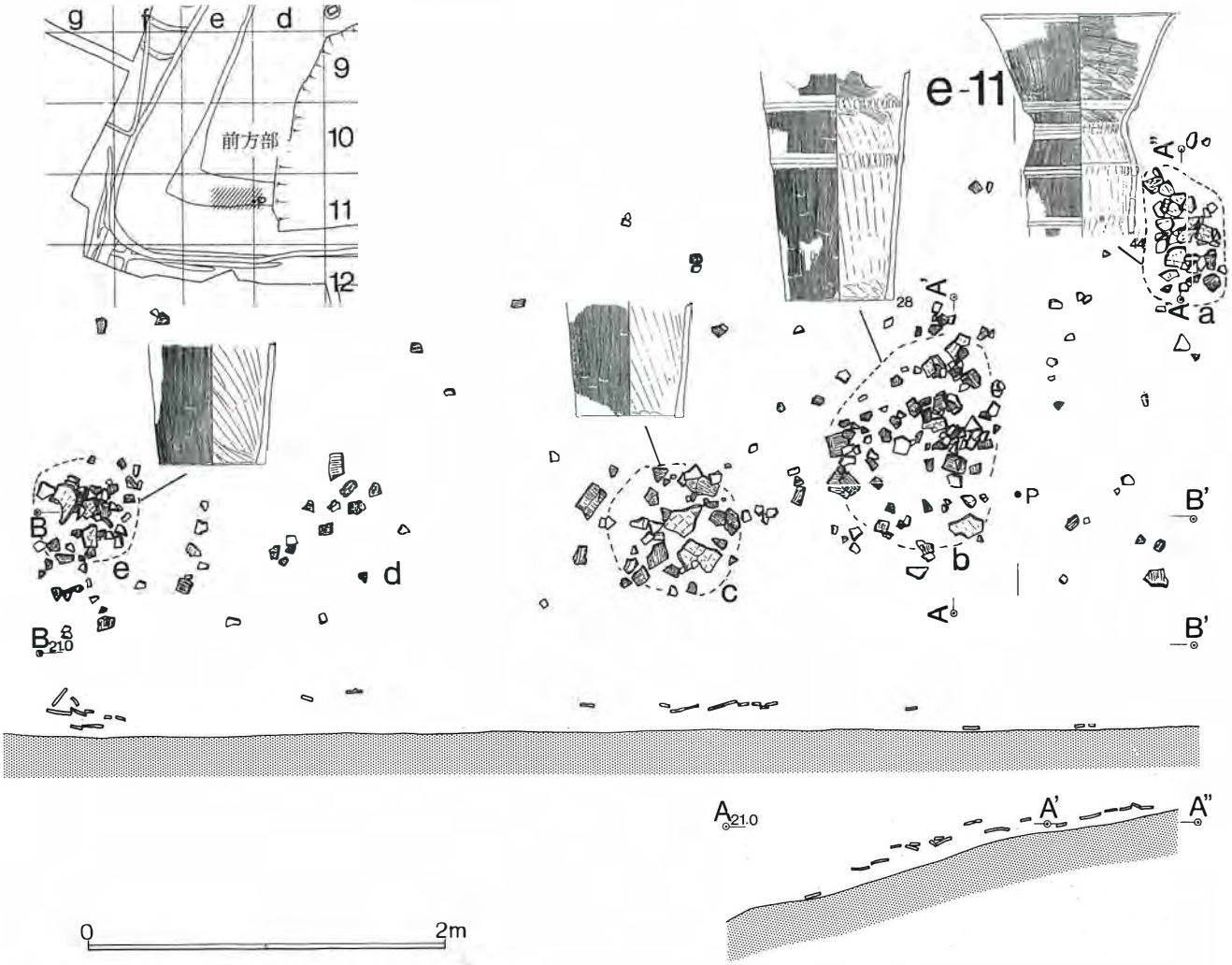


図９　前方部正面中段部埴輪出土状況

ことから中段部まで墳丘を盛った後に、石材を加工して石室を築いていることが明らかである。

墳丘造出しに至る斜面からは、形象埴輪も含めた多くの埴輪が出土している。とくに靫形埴輪が多く、内堀の墳丘造出し際からほぼ完形のものが出土していることから、造出し上に靫形埴輪が並べられていた可能性が高い。また須恵器や土師器も、この造出し上やその周囲の堀から出土しており、造出しで行った古墳祭祀に伴って使用された土器が、そのまま放置されたものであろう。

前方部正面の中段部ｄ・ｅ－11では、規則的に５箇所に円筒埴輪の破片がまとまっている状況が見られた（図９）。その間隔は平均1.7ｍであり、瓦塚古墳の調査で検出した埴輪列の間隔38cmに比較するとかなり広い。墳裾からみて一番右には朝顔形埴輪があり、その左はいずれもＢ類の円筒埴輪が並ぶ（円筒埴輪の種類についてはⅣを参照）。これらの中で比較的良好に残っていたのは、ａの朝顔形埴輪とｂ・ｃ・ｅの円筒埴輪であり、ｅは基底部が立ったまま出土した。これらが埴輪樹立の痕跡を示すのかどうかはわからないが、整備工事における埴輪模造品の設置は、この出土状況をもとに行った。

写真19　後円部中段部遺物出土状況

平成４年度調査。ｄ－４付近の状況。右奥方向に横穴式石室がある。後円部の中段部からは埴輪の他に、石室の石材を加工する際に出た石片が出土している。

写真20　前方部正面中段部遺物出土状況

平成５年度調査。ｅ－11の状況を西から望む。中段部には円筒埴輪が５箇所でまとまって出土した。その間隔は約1.7ｍであるが、整備工事における埴輪複製品の設置には、このデータが使用された。

前方部北西側の中段部からも円筒埴輪の破片が比較的多く出土している。ただしほとんど接合するものがなく、埴輪の樹立を示すものもなかった。形象埴輪では盾形埴輪が比較的多く出土した。前方部墳頂からも円筒埴輪の破片が出土しているが、いずれも散発的である。ただ、ここから埴輪が出土する事実は、墳頂に埴輪が並べられていたことを物語る。

墳裾には埴輪を並べることができるような平坦面は検出されず、堀内に落ちていた埴輪も、墳裾際から少し離れた部分から多くが出土することから、墳裾に埴輪は並べられなかったものと考えられる。

(2)内堀（図10～12、写真21～25）

上述したように、墳丘に並べられていた埴輪は、ほとんどが流出して内堀に転落したと考えられる。内堀の調査においてとくに集中して遺物が出土したのは、後円部の周囲、墳丘造出しの北側、墳丘西側くびれ部であった。

後円部の周辺は堀が一段深くなっており、この中から埴輪が多く出土したが、墳丘際よりも墳丘から約５ｍほど離れた場所に集中する傾向にあった。とくにｃ・ｄ－２やｅ・ｆ－３から多く出土しているが、図11に示した部分では、ほぼ完形に復原できる円筒埴輪が４個体がまとまっていた。いずれも円筒埴輪Ｃ類としたもので、39と40は表面をハケメではなく、ヘラで調整しているところに特色がある。形象埴輪は少ないが、鞆と思われる埴輪がｃ－２から、大刀形埴輪がｄ－２から出土している。

墳丘造出しの北側では、後円部墳丘に沿って円筒埴輪が多く出土しているが、造出しから約２ｍ離れたところで、図12のように靫形埴輪が２個体まとまって出土した。この区域では円筒埴輪に混じって靫形埴輪の破片が多く出土しているのが特徴である。また甕を中心とした須恵器の破片も多く出土している。

墳丘西側くびれ部に隣接する堀からは、図14のように復原可能な埴輪がまとまって出土した。この出土状況によると円筒埴輪Ａ類とＢ類、朝顔形埴輪が混在しており、破片の総数からみるとＡ類

写真21　後円部北側内堀
遺物出土状況

平成５年度調査。図10とは上下逆の方向から見ている。奥には墳丘後円部が見える。

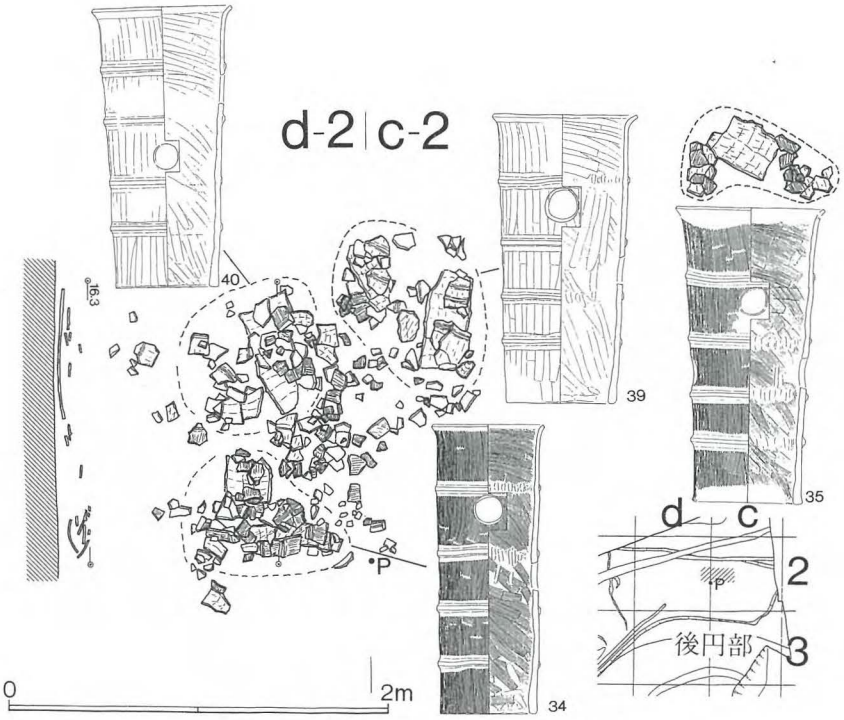


図10　後円部北側内堀埴輪出土状況

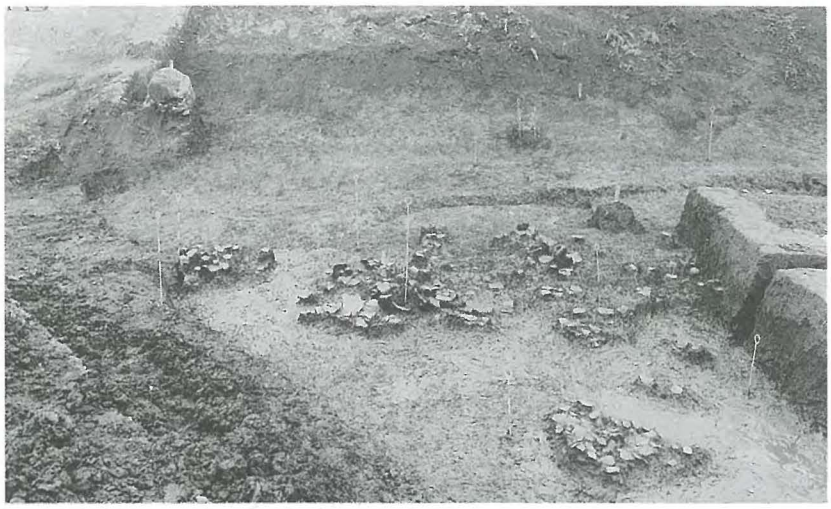


写真22　くびれ部付近内堀
遺物出土状況(1)
平成５年度調査。図11の左半分に相当する。奥が墳丘。

写真23　くびれ部付近内堀
遺物出土状況(2)
平成５年度調査。図11の右半分に相当する。写真22の続き。

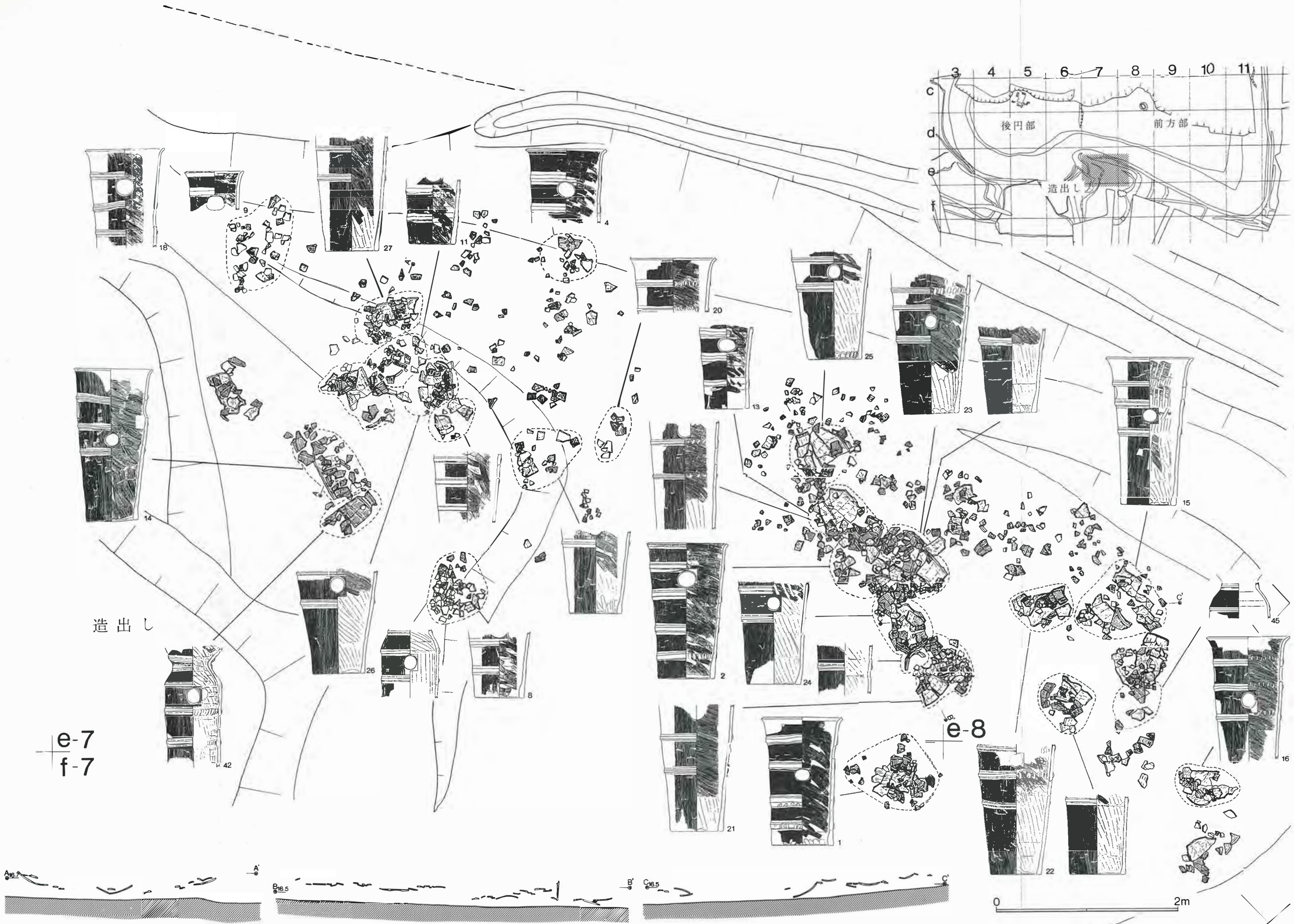


図11　くびれ部付近　埴輪出土状況

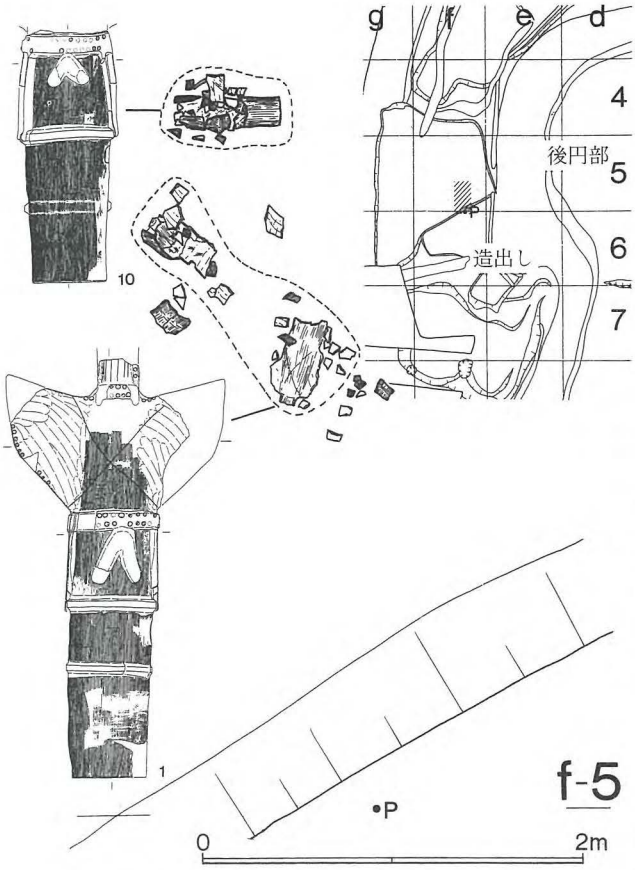


図12　造出し北側靫形埴輪出土状況

写真24　靫形埴輪出土状況（図12参照）

写真25　墳丘造出し北側遺物出土状況

写真26　外堀遺物出土状況（右方向が墳丘）

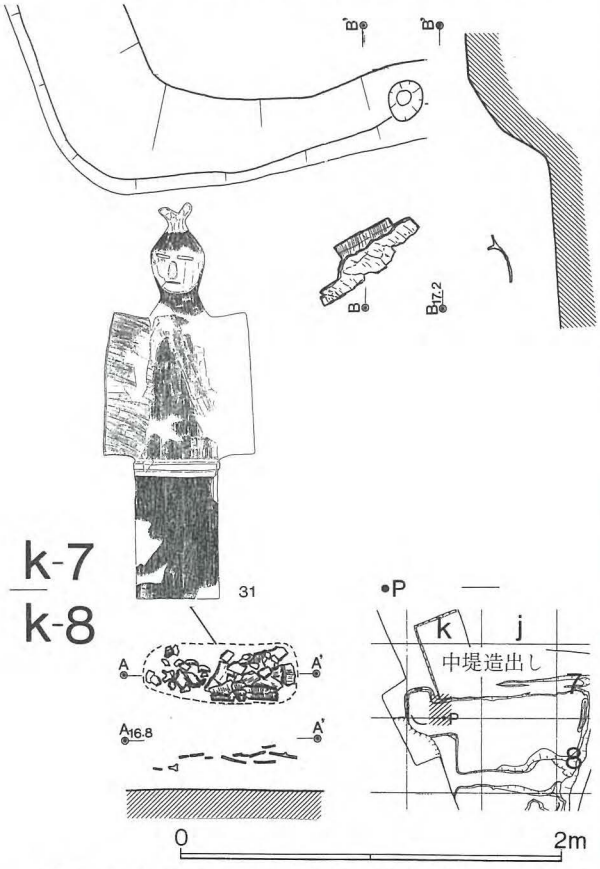


図13　中堤造出し南側盾持ち人物埴輪出土状況

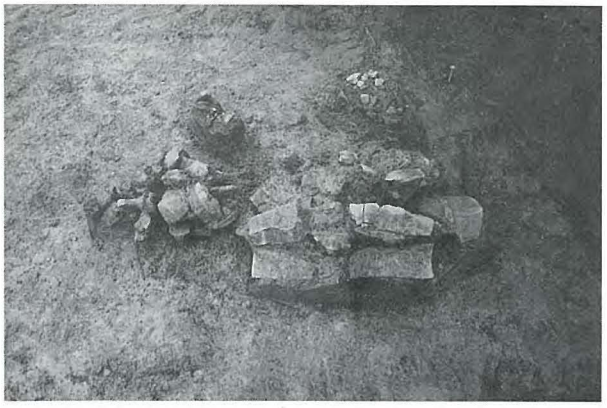


写真27　盾持ち人物埴輪出土状況（図13参照）

が多いが、復原できたものはＢ類が優勢である。これらの異なる種類の埴輪は、同時に墳丘上から崩れ落ちたものである。また造出し際からは多くの須恵器が出土しており、中でも瓮は４個体まとまって出土した（図17）。

前方部墳丘の周辺は、遺物の出土量は後円部周辺に比べるとかなり少なかった。

ｇ－３～６の中堤との境付近では、耕作による攪乱を受けているため、埴輪の出土量は非常に少ない。ｈ－11～13の内堀の南西隅角部は、復原できるほどの埴輪はないものの、出土した破片の数は多かった。

⑶外堀（図13、写真26・27）

外堀ではｉ－７～ｊ－11にかけての中堤沿いから多くの埴輪片が出土しているが、とくに中堤造出しの際から集中的に出土している。逆にそれ以外の場所、すなわち中堤造出しの北東側や、外堀の外側に近いところ、前方部正面の外堀では埴輪の出土量は極めて少ない。また、中堤造出しの周囲からは形象埴輪が比較的多く見られる。とくに図13のようにｋ－７・８からは盾を持つ人物埴輪が良好な状態で出土している。

⑷遺物別の出土状況

・円筒埴輪（図14・15）

図14は、２ｍ小グリッド毎の円筒埴輪の出土破片総数を示している。ここでは古墳全体の遺物の残存条件が均等であったという仮定に基づいて、小さな破片も大きな破片も１点としてカウントしている。円筒埴輪の出土分布が均一ではなく、場所によって出土量に疎密があることがわかる。

将軍山古墳の円筒埴輪は大きく３種類に分類できる（Ⅳ－３参照）。図15は、10ｍ四方のグリッドごとに、円筒埴輪の破片の総数に対してどの程度の割合でそれぞれの種類の埴輪片が含まれているのかを、単純にカウントして表したものである。図14の場合と同様に、埴輪はいずれも同じ状態で破損し、同じ状態で遺存していたことを前提としている。なお朝顔形埴輪については胴部の破片からは認識が不可能であり、Ｂ類あるいはＣ類に分類してしまったものも含まれているかもしれない。またグリッド内の埴輪総数が極端に少ない場合は誤差が大きい。

Ａ類の円筒埴輪はその出土数が最も多いが、とくに後円部西側からくびれ部にかけての内堀や、外堀全体に占める割合が高い。Ｂ類円筒埴輪はくびれ部から前方部正面にかけて多く出土していて、とくに前方部正面では、墳丘上も含めてＢ類以外の円筒埴輪はほとんど含まれていない。Ｃ類円筒埴輪は他の円筒埴輪に比べて出土数が少ないが、後円部の北側で出土する割合が高く、図14のように残存状態の良い埴輪にはＣ類が多い。しかしその他の場所ではほとんど出土しない。このように古墳の場所によって、円筒埴輪の種類構成が異なっていたようである。

・形象埴輪（図16）

円筒埴輪に比べると形象埴輪の出土量は極めて少ない。図16は形象埴輪の種類ごとに出土地点をまとめたものである。ただし種類が不明のものも多く、その認定は今後の課題である。

人物埴輪の中で全体が復原できたのは、図45の盾持ち人物埴輪であるが、その出土位置から見て

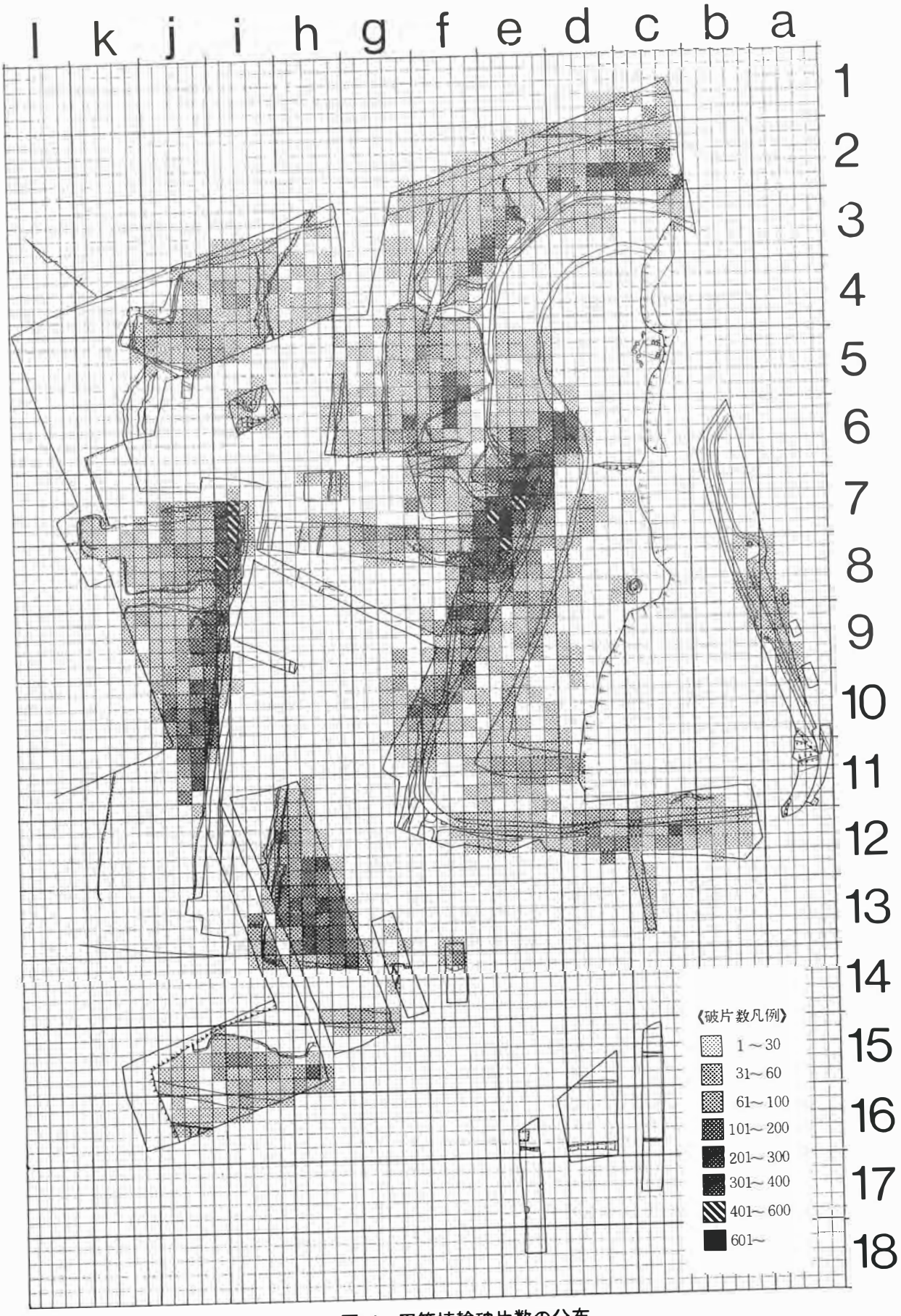


図14　円筒埴輪破片数の分布

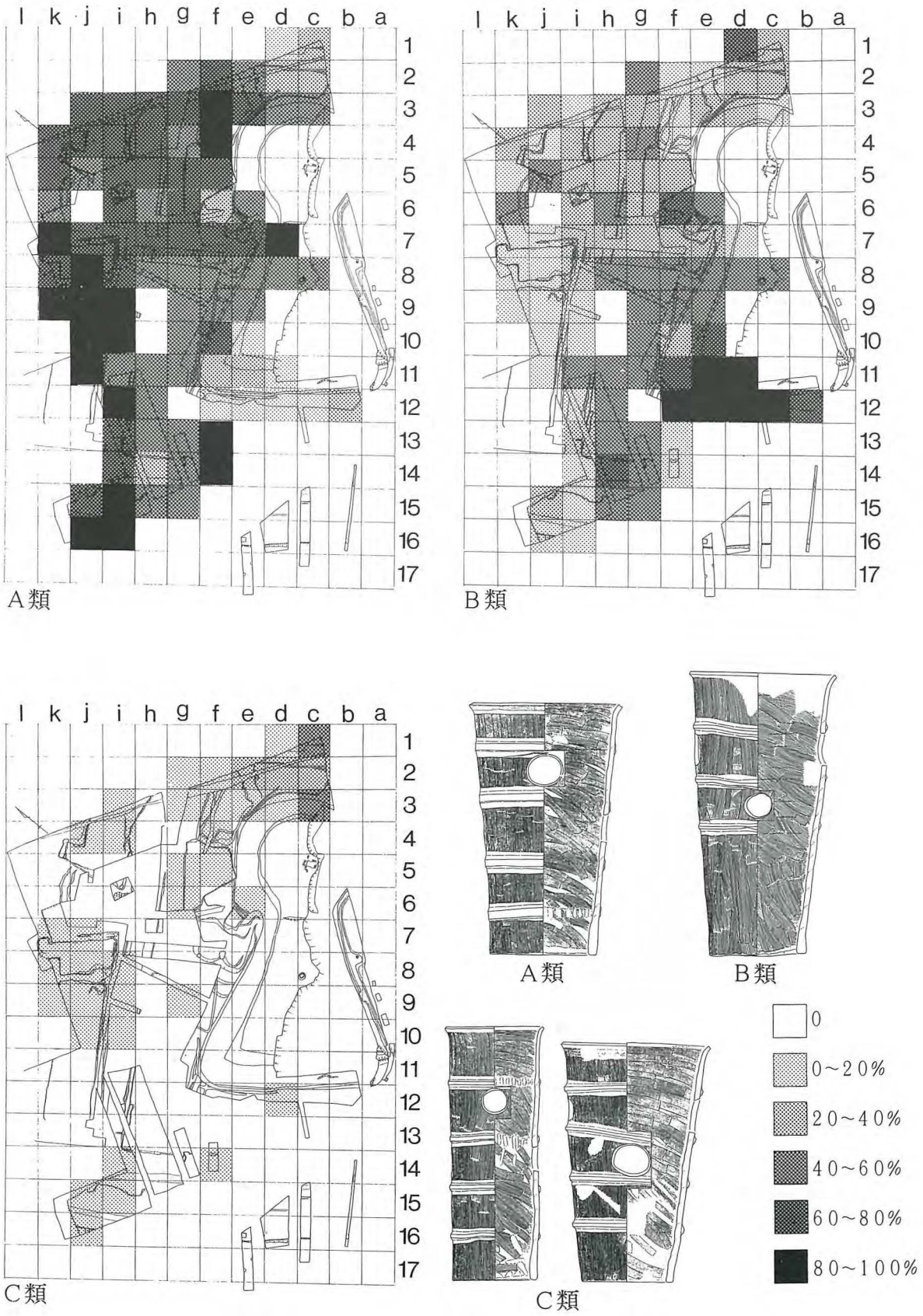


図15　円筒埴輪　種類別出土数の割合

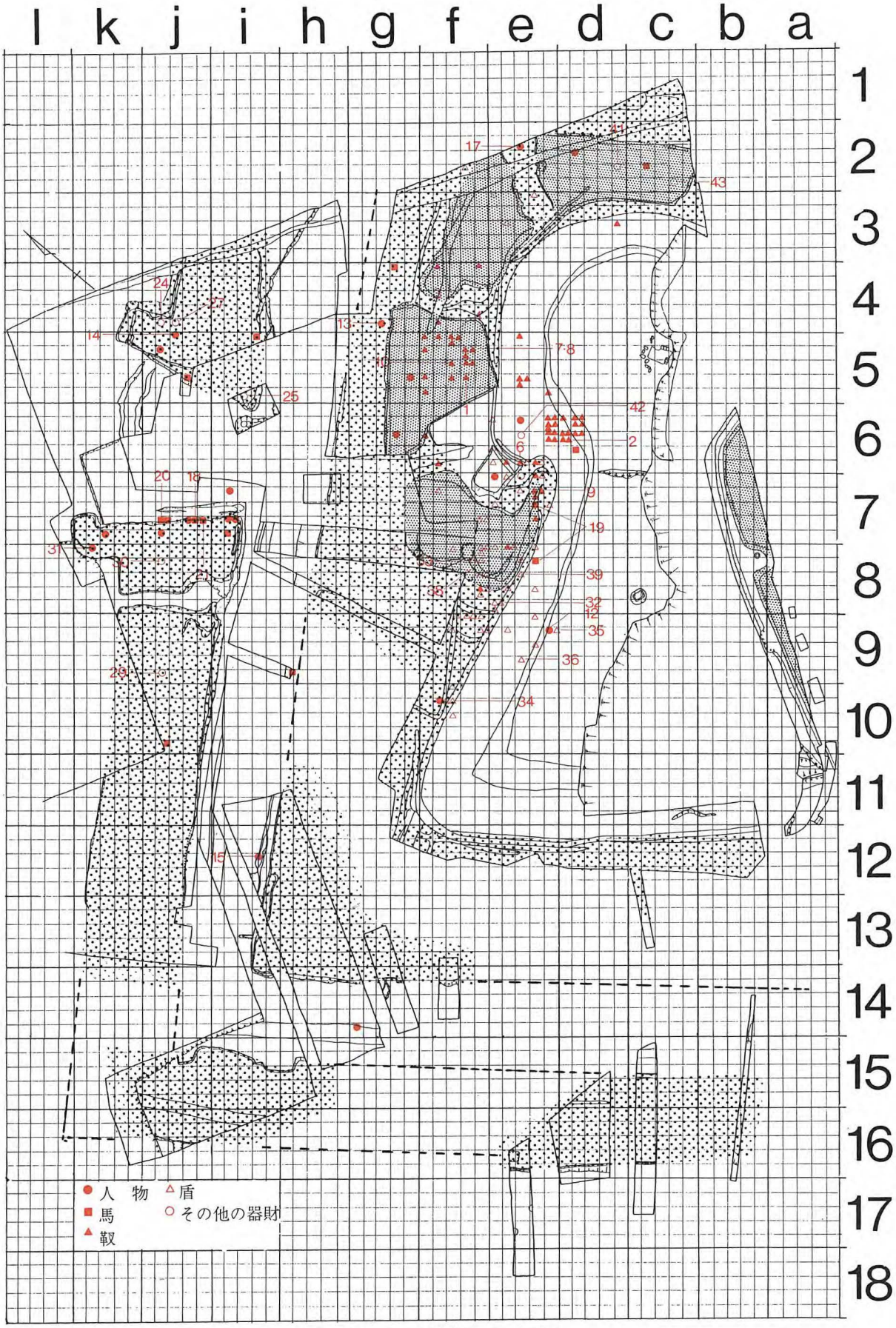


図16　形象埴輪の出土分布

(図13) 中堤造出し上に立てられたと思われる。その他の人物埴輪は破片数が少なく、調査した区域のほぼ全体から散発的に出土しているため、出土分布の傾向は見られない。人物の種類によって並べられていた場所が異なっていたのであろう。

靫形埴輪は残存状態が良好であったもの（図42－１）を中心に、墳丘造出しの北側（図14）及び後円部から造出しに至る斜面上から集中して出土しているので、造出し上や後円部墳丘に並べられていたと推定される。盾形埴輪はくびれ部の南西側、および前方部墳丘上から多く出土している。その他には後円部の北側で数点確認しているのみである。墳丘造出しの南側あるいは前方部墳丘上に並べられていた可能性が高い。器財埴輪としては他に、大刀形埴輪や鞆形埴輪がある。前者は墳丘造出し上と後円部北側から、後者は後円部北側から出土している。いずれも後円部墳丘上に並べられたと考えられる。また家形埴輪の堅魚木の部分が中堤造出し北側から出土しているが、それ以外に家形埴輪の破片は確認できなかった。馬形埴輪は中堤造出しの周辺から多く出土している。

このように、形象埴輪は墳丘造出しと中堤造出しを中心にして出土する傾向にあり、前者では靫や盾などの武器を象った器財埴輪、後者では人物埴輪や馬形埴輪などが多く出土している。

・土器（図17・18）

土器は墳丘造出し周辺から集中的に出土しており、とくに須恵器瑞は４個体がまとまって出土した（図17）。他の須恵器は同一個体でも破片が散っていたが、瑞や提瓶、高坏、台付長頸壺などの小型の須恵器や土師器の坏は造出しの南側から、大型の甕などは造出しの北側から西側にかけて、比較的多く出土する傾向があった。図18では甕胴部の破片や実測不可能な小破片は省略しているが、甕胴部もほとんどが墳丘造出し周辺から出土した。いずれも古墳の墓前祭祀における供献土器であったと考えられ、造出しがその祭祀の舞台となっていたことを物語る。

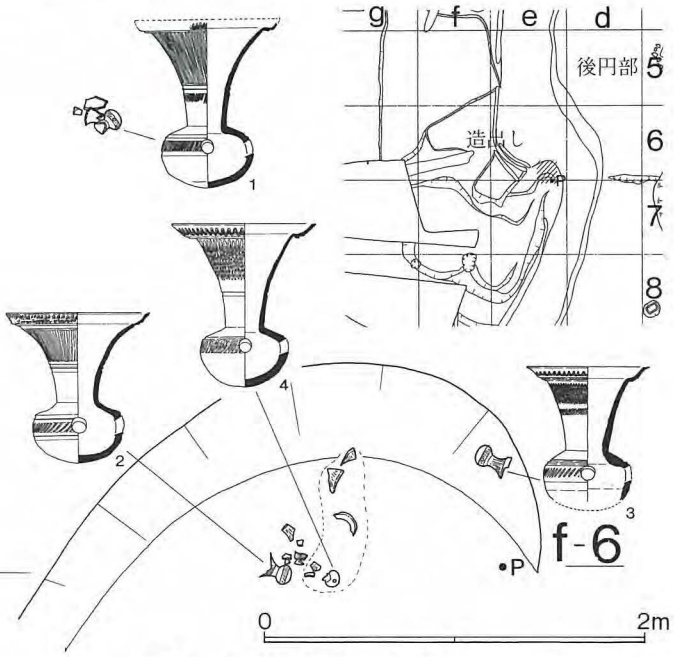


図17　須恵器瑞出土状況

その他の場所では須恵器広口壺１点が前方部正面の外堀から、土師器坏が中堤造出し南西側及び北東側から３点出土しているが、いずれも古墳築造時期よりも新しいものである。

以上のような遺物出土状況から、古墳造営時の遺物の位置関係について次のように復原してみた。後円部中段部や墳頂部には円筒埴輪が並べられており、円筒埴輪Ｃ類が他の場所に比べて多く使用された。また器財埴輪も含まれていた可能性がある。墳丘造出し上には靫や盾・大刀等の武具の埴輪が並べられ、その中で墓前祭祀が行われたようである。その際に使用された土器は放置されたままであった。前方部は正面に行くほど円筒埴輪Ｂ類が多く並べられており、中段部や墳頂には盾形埴輪もあったようである。中堤造出しには人物や馬などの埴輪が多く並べられ、その南側の中堤上は円筒埴輪Ａ類が主体となっていた。なお、外堀の外側には埴輪は並べられなかったとみられる。

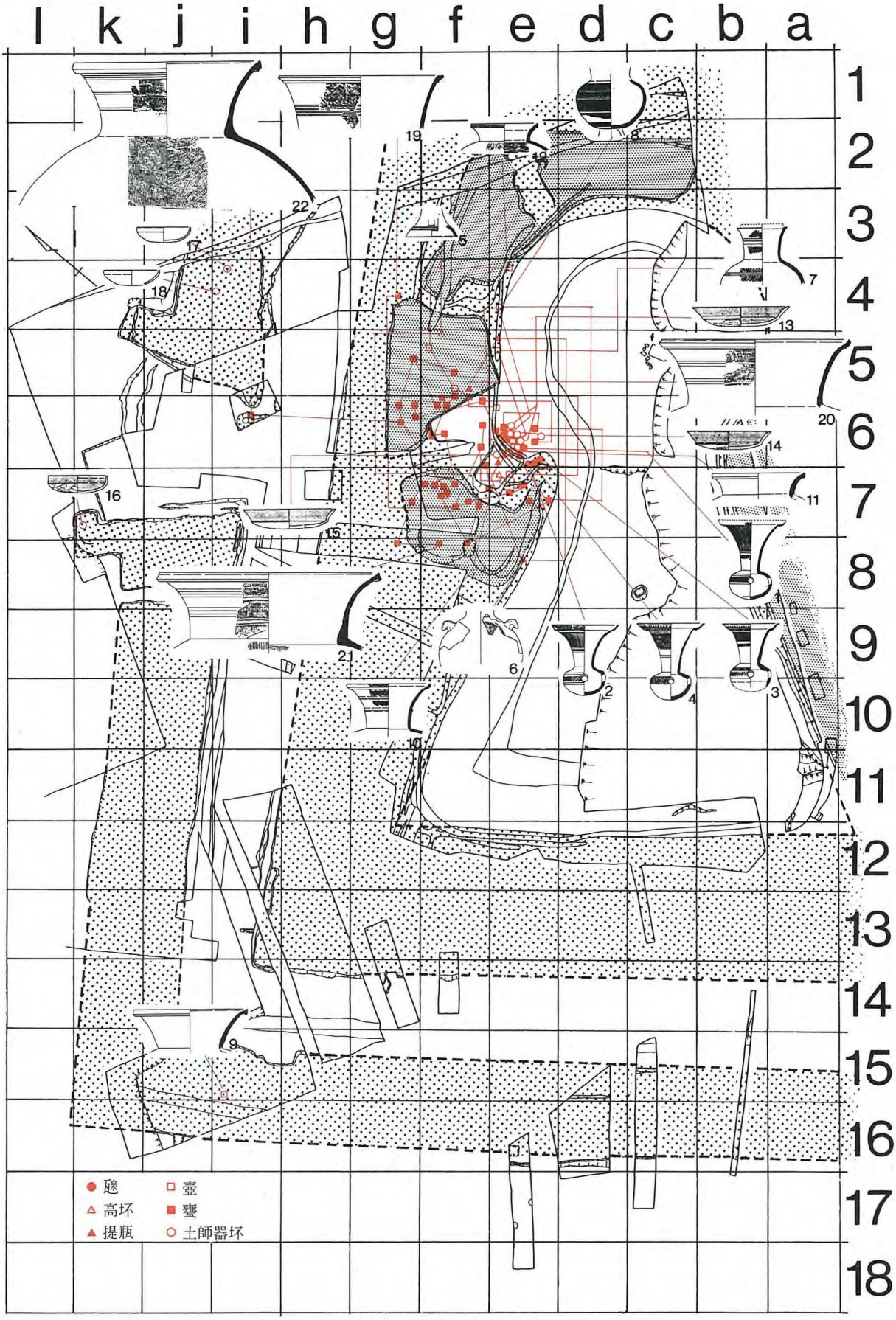

l k j i h g f e d c b a
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
● 甕
□ 壺
△ 高坏
■ 甕
▲ 提瓶
○ 土師器坏

図18　土器の出土分布

Ⅲ　主体部の調査

将軍山古墳では、1894年の発掘によって、後円部の横穴式石室から多くの副葬品が出土していることがすでに知られていた。その後、石材が抜き取られたり、墳丘が削平・土取りされて、石室は大きく損壊してしまった。平成３年度の調査では、古墳整備の基礎データーを得るための予備調査として、石室の形態や残存状態の確認を行うとともに、多くの遺物を石室の覆土や床面上で検出した（第１主体部）。

また、平成５年度に前方部墳丘の調査を行ったところ、頂上付近で木棺直葬の施設を１基検出した（第２主体部）。

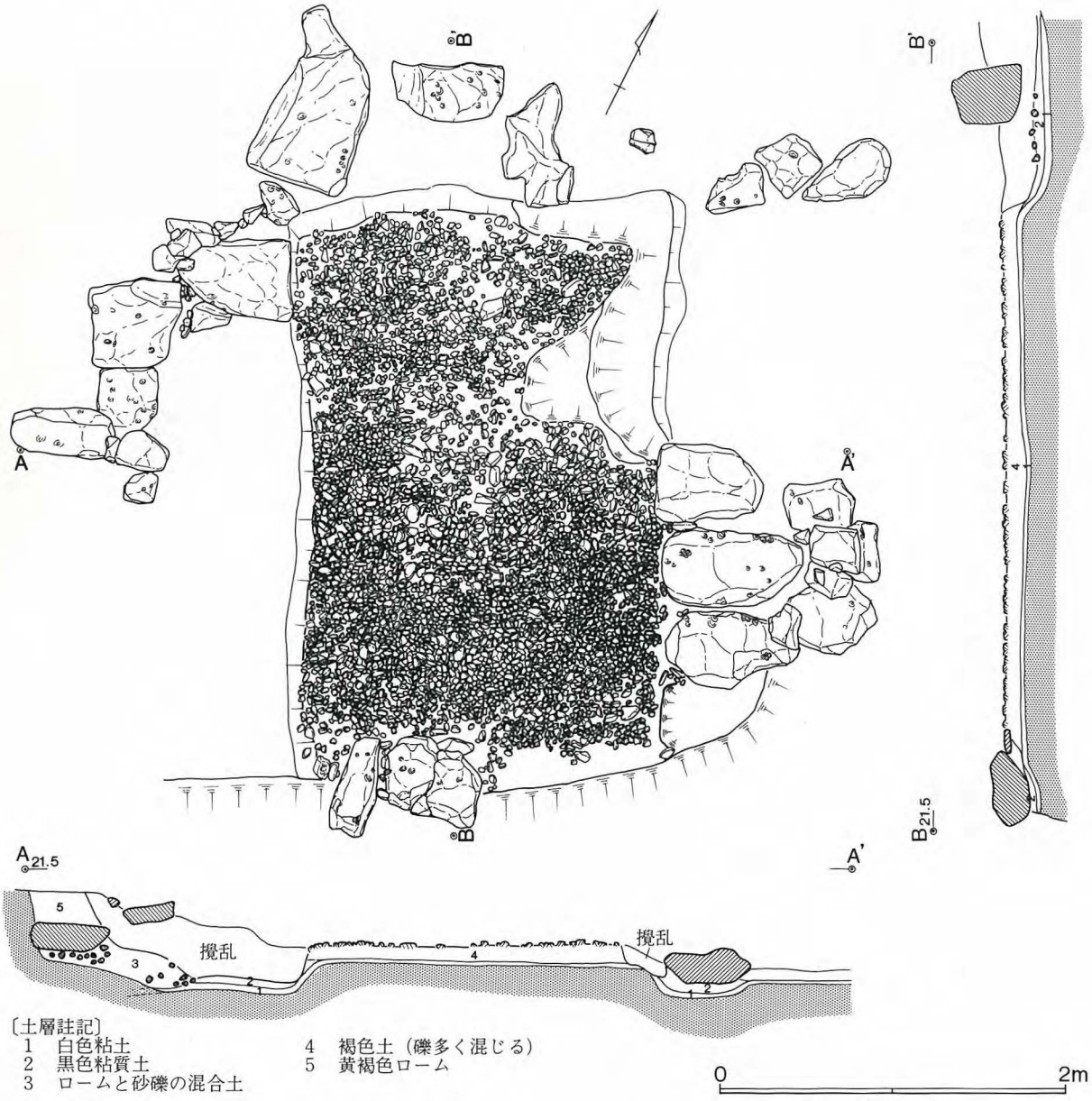


図19　第１主体部［横穴式石室］

写真28　横穴式石室全景（奥壁から）

1　第１主体部（横穴式石室）（図19）

(1)石室の構造

将軍山古墳の横穴式石室は、玄室幅2.0m・長さ3.2m、羨道幅1.0mで、（玄室から見て）右片袖の形態をもつものである。玄室の主軸方向はN－28°－Wである。また石室奥壁部分は後円部の推定中心部よりも、約２mほど南に偏っている。天井高や羨道長は不明である。

1905年に発表された柴田常恵「武蔵北埼玉郡埼玉村将軍塚」（『東京人類学会雑誌』第231号）には、将軍山古墳の石室について、古墳発掘者の談話として次のように記されている。

「石槨は比較的堅緻ならずして小孔を有する伊豆石を用ゐて築造し、口は東南に向ひ、敷は石を以て畳み、其空隙の所は粘土を積め[ママ]、此上に砂を敷きたり。」

また1931年に刊行された高木豊三郎『史蹟埼玉』には、「羨道東に向ひ槨は房州石を以て築かれ底は石を以て畳み粘土を用ひて間隙を埋め、砂を布き、天井は秩父石緑泥片岩にて蓋をなしてあった」と記されている。

墳丘の項でも記したとおり、後円部は墳丘の上段が削平され、南東側は土取りによってすでに墳丘が失われていた。調査前から後円部南東側の崖面には、横穴式石室の石材が露出しており、石室の位置はほぼ推定されていた。墳丘の削平面から約30cmほど掘り下げると、砂利石を敷いた横穴式石室の床面が検出され、床面には天井に使用された緑泥片岩が散在していた。石室床面の標高は21.1mで、古墳時代の旧地表面からは約３m高いところに相当する。

石室下の土層を観察した結果、墳丘築造の際に墳丘１段目の上部に黒色粘土質の土を積んだ後、

写真29　石材が出はじめたころ

写真30　西側からみる

写真31　羨道方向からみる

写真32　調査風景

石室を設置する部分に白色粘土を敷き、砂利を含んだ褐色土を積んで地盤を固めている。石材を置く部分は、あらかじめ凹状に窪めていることがわかった。

石室は破損が激しかった。玄室は床面と壁面の根石部のごく一部しか残存せず、羨道部にいたっては墳丘の土取りによってほとんど失われていた。当初の壁面を構成していた石材は、奥壁の２石（西北隅の１石は若干動かされている）と左側壁の３石、右側壁の１石、袖部の３石のみである。側壁部の控積みに利用された石も一部残っている。側壁や奥壁は石材を小口積みにし、これらの壁面の後には、壁面の石よりも小さい石材を使用して控積みを行っている。また袖部の石材は側壁や奥壁の石材よりも小型のものを使用している。その他の石材はほとんど抜き取られている。床面には川原の砂利石が敷き詰められているが、石室北東隅付近は大きく攪乱を受けている。敷石はわずかに残っている羨道部には見られないことから、玄室のみに施されていた可能性がある。

壁面の石材は千葉県富津市の金谷付近で採取される、いわゆる房州石というもので、海食孔のある特徴的な凝灰質砂岩である。また床面検出中に多くの緑泥片岩が出土しているが、これらは天井石を形成したものと考えられ、一部は石棺材として使用されていた可能性もある。なおさきたま周辺の民家の庭で、この石室から運びだされた緑泥片岩や房州石が庭石や灯籠として利用されている。現在確認できる緑泥片岩の最大のものは幅0.82m、長さ1.58mである。このように石室の石材として緑泥片岩を利用する例は県内でも各所にみられるが、房州石を利用する例は千葉や東京以外では知られていない（高橋一夫・本間岳史「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』29号、1994年）。利根川を遙か120kmも遡ってもたらされたもので、房総とのつながりを如実に物語っている。

⑵遺物の出土状況（図20・21）

前述したように、横穴式石室は破損や攪乱が激しく、根石すらほとんど残っていない状況であった。床面も石室北半分は破損が激しく、敷石も多くが失われていた。さらに石室北東部は床面の土ごと抉られている状態であったが、石室南半分は比較的良く残っていた。

図20のように石室をⅠ～Ⅷの地区に分けると、Ⅱ区はほとんど床面が攪乱されていた部分に相当する。Ⅰ区も攪乱が激しいところである。遺物はⅠ・Ⅱ区以外では全体的に散らばっているが、石室の東半分は比較的遺物の出土量が少ない。また、羨道部にはほとんど遺物はみられない。

次に各遺物の種類毎に出土状況を概観しておきたい。

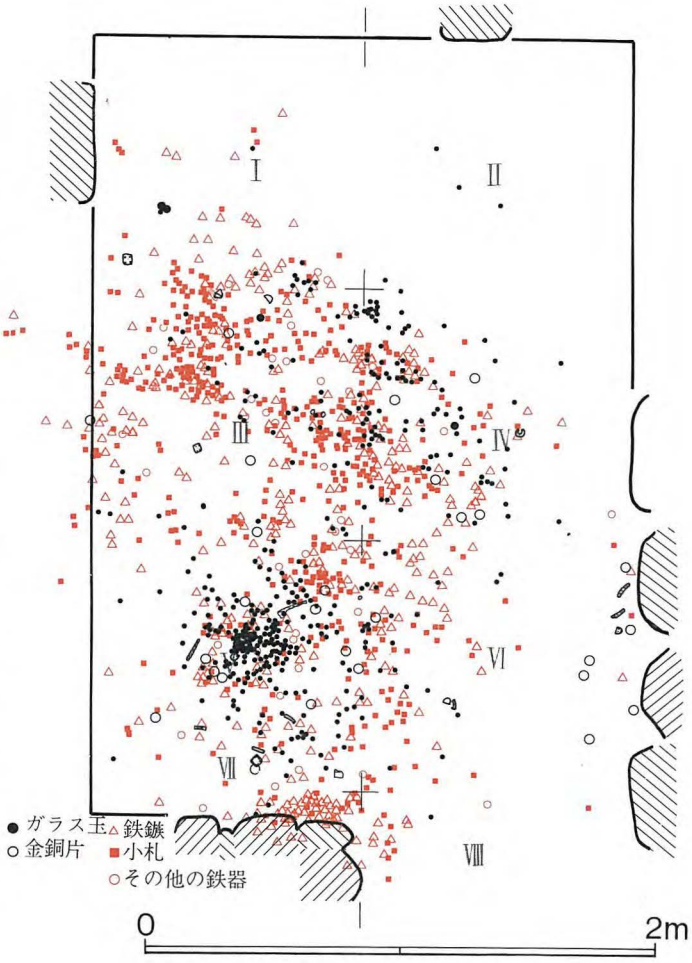


図20　横穴式石室遺物出土状況

①装身具の出土状況

耳環は１個体のみがⅣ区の覆土中から出土しているが、攪乱により移動していると考えられ、被葬者の頭部位置は示していない。

玉類にはガラス玉（大小２種類）・銀製空玉がある。ガラス小玉は石室のほぼ全体から出土しているが、とくにⅤ区に集中している。大きい方のガラス玉で出土位置のわかるものは、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ

写真33　石室遺物出土状況
中央付近に鞍金具、左端に鉄地銀張飾金具、周囲には挂甲小札等の鉄器が散乱する。図20のⅤ区にあたる。

写真34　石室遺物出土状況
写真33とほぼ同じ部分を西側から撮ったもの。中央に鉄地銀張飾金具があり、その右には多くの鉄鏃がある。

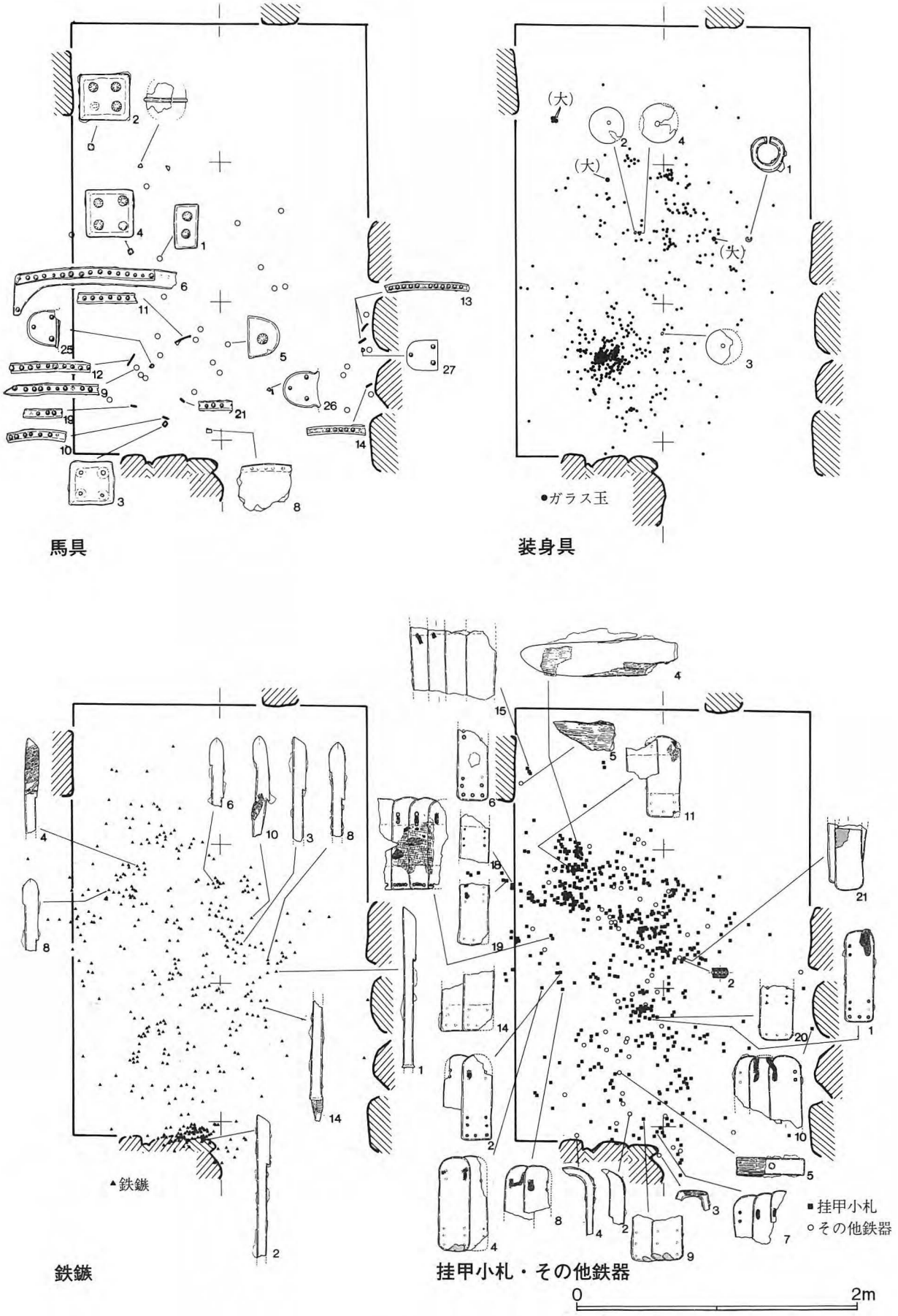


図21　横穴式石室遺物別出土状況

区と、石室の北側に寄っていて、小玉の集中地点とは異なっている。

②馬具の出土状況

馬具は、鉄地銀張飾金具や鞍金具・鈴などの金銅製品の破片が出土している。鉄地銀張飾金具は本来一連であったものだが、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区に分散している。鞍金具はⅤ・Ⅵ区から多く出土している。また馬具は、他の種類の出土遺物が少ないⅥ区からも、比較的多く出土していることから、石室の南側に副葬されていた可能性も考えられる。

③鉄鏃の出土状況

鉄鏃は破損が激しく破片数が多いが、図25のように実測可能なものは少ない。鉄鏃はほとんどが小さい破片だが、Ⅶ区の袖石沿いから集中して出土しているのが特徴である。

④挂甲・その他の鉄器の出土状況

挂甲の小札も破損が激しいが、出土位置はとくにⅢ区に集中している。大刀の破片２点はともにⅠ区から出土し、不明の鉄器類はⅢ・Ⅴ区から主に出土している。

以上のことから、馬具は石室の南側、ガラス小玉はⅤ区、鉄鏃は袖石部、挂甲はⅢ区というある程度の出土位置の傾向がみられたが、いずれも攪乱を受けているため、どれほど原位置を留めているのかは不明である。

２　第２主体部（木棺直葬）（図22、写真35・36）

前方部の墳頂の、くびれ部から約20m南側のほぼ主軸線上に近いところで、木棺を直接埋葬した施設を検出した。

主体部の掘り方は、検出面で東西2.2m・南北約1.5mの長方形に近い不整形を呈し、主軸の方位はほぼ東西に向いている。覆土中には、緑泥片岩の細かい破片が多く含まれているが、攪乱を受けたような痕跡は認められなかった。土層の観察から、最初に土壙を（検出面から）約１m掘り窪めた後に、20cmほど土を平らに敷いて整形してから、木棺を安置していたようである。

写真35　木棺直葬施設

西方向より撮影。床面から緑泥片岩の板石が出土した。木棺を固定させていたのではないか。床面左側に串が立ててあるのは、ガラス玉出土地点。

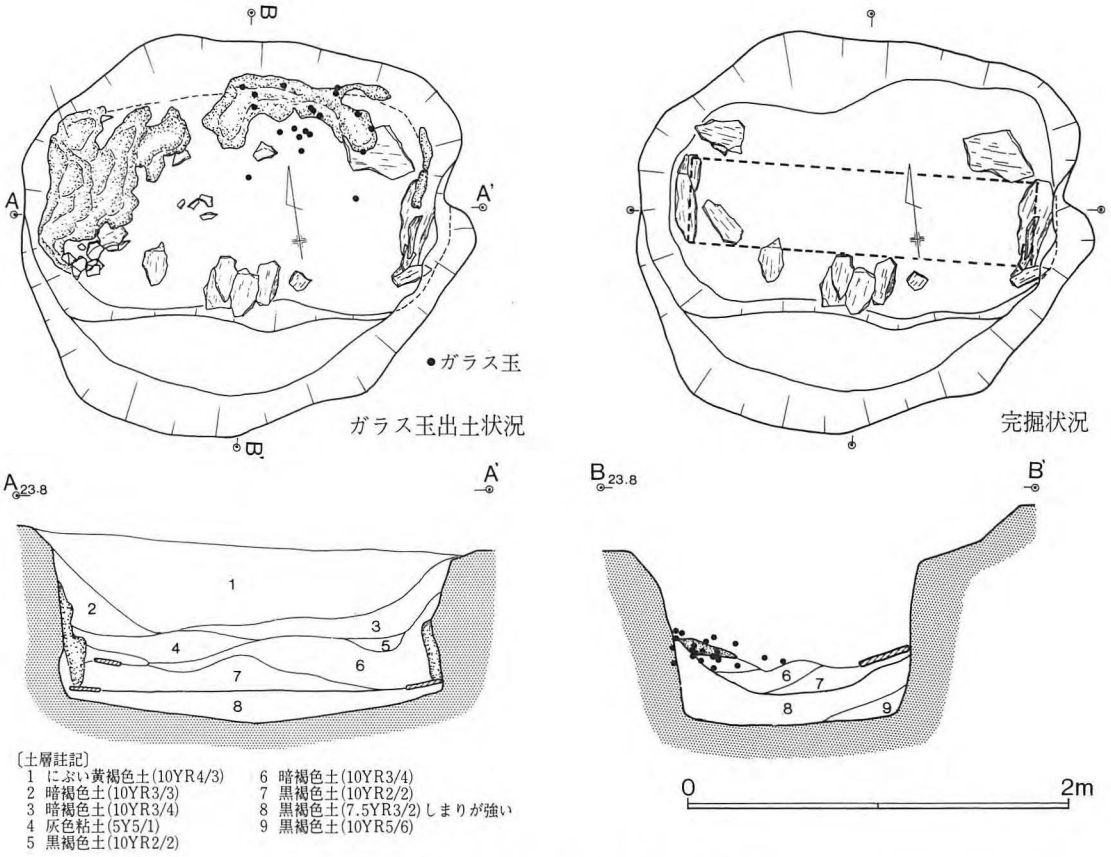


図22　第２主体部［木棺直葬］

遺構の床面からは緑泥片岩の板石が検出されている。板石が集中しているのは、東西小口部と南長壁沿いのほぼ中央部で、とくに東小口部では板石の上に別の板石が立てかけてある状態であった。そして緑泥片岩を覆うように白色の粘土が検出されている。粘土は両小口部の板石の上で、木棺を押さえていたかのように、直立して良好に残存していたが、その他の部分では密度が薄く、覆土中に広がっている。両小口の直立する粘土の間隔は約180cmであり、これはそのまま木棺の大きさに相当すると見られる。

以上のことから、この木棺直葬施設は土壙掘り下げの後床面を整形して、両小口に緑泥片岩の板石を置いた上に長さ約180cm・幅約50cmの木棺を安置し、さらに粘土と緑泥片岩で木棺を安定させていたと考えられる。

この主体部の副葬品としては、ガラス玉168個が出土したのみである。原位置を確認できたものは、いずれも土壙の東北部分から出土していることから、東枕であった可能性が高い。

写真36　木棺直葬完掘状況（北から）

Ⅳ　出土遺物

1　遺物の種類と数量

今回の調査で出土した遺物は次のとおりである。

［第１主体部　横穴式石室］

装身具　耳環－１点　ガラス玉(大)－５点　ガラス玉(小)－842点以上　銀製空玉－３点

馬具　鉄地銀張飾金具－５点　鉄地銀張鞍金具－残片20片以上

金銅製辻金具－残片２点以上　金銅製帯金具－１点　金銅製鈴－残片１点以上

武器　鉄鏃－残片517点以上　挂甲小札－残片800点以上　大刀－残片２点以上

捩り環頭金具－１点　金銅製刀装具－残片１点　銀装大刀柄－残片１点

不明鉄器　10点以上

土器　須恵器高坏－破片１点

［第２主体部　木棺直葬］

装身具　ガラス小玉－168点

［墳丘及び周堀］

円筒埴輪　**形象埴輪**　**須恵器**　**土師器**

2　主体部出土遺物

(1)装身具

①耳環（図23－１、写真37）

銅地に金板を張った耳環が１点のみ出土した。断面はほぼ正円を呈する。一部金板が剝がれて浮いてしまっている箇所がある。長径2.6cm、短径2.4cm、断面径0.6cm。

②銀製空玉（図23－２～４）

３点が確認されている。半球状に打ち出した銀板を接着して製作するもので、出土した空玉はいずれも半球のみ残っていた。径は約2.5cm。半球の頂部には、紐を通すために径２mm前後の孔が穿たれている。

③ガラス玉（図23－５～10、写真38）

ガラス玉には大きく分けて、大型・小型の２種類がある。

大型のものは５個出土しており、直径は9.8～12.2mm、厚さは6.2～8.5mmを測る。色は透明感のあるコバルトブルーで、気泡が縦方向に走るのが見られる。上・下面は直線的になっている。

小型のものは横穴式石室からは842個、木棺直葬からは168個が出土し、他に破片も50片以上ある。図23には無作為に抽出した10点の実測図を掲載した。また直径と厚さを0.1mm単位で表わしたグラフが図24である。直径は2.3～5.7mm、厚さが0.9～4.7mmとばらつきがあるが、最も集中しているのは、直径3.0～4.5mm、厚さ1.5～3.0mmの間である。色はほとんどが透明のスカイブルーであるが、

透明度や濃淡に若干の違いがある。不透明の黄緑色のガラス玉が２点含まれていたが、大きさはスカイブルーのものと変わらない。気泡が縦方向に走る様子が見られる。なお、第１主体部と第２主体部から出土した玉を比較するとほとんど相違はなく、それぞれ同じ時点で作られたものと推定される。

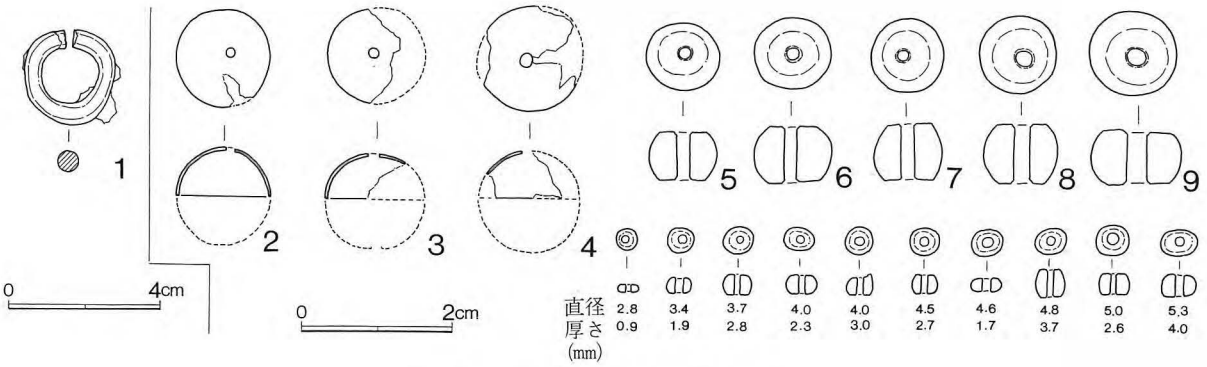


図23　石室出土遺物［装身具］

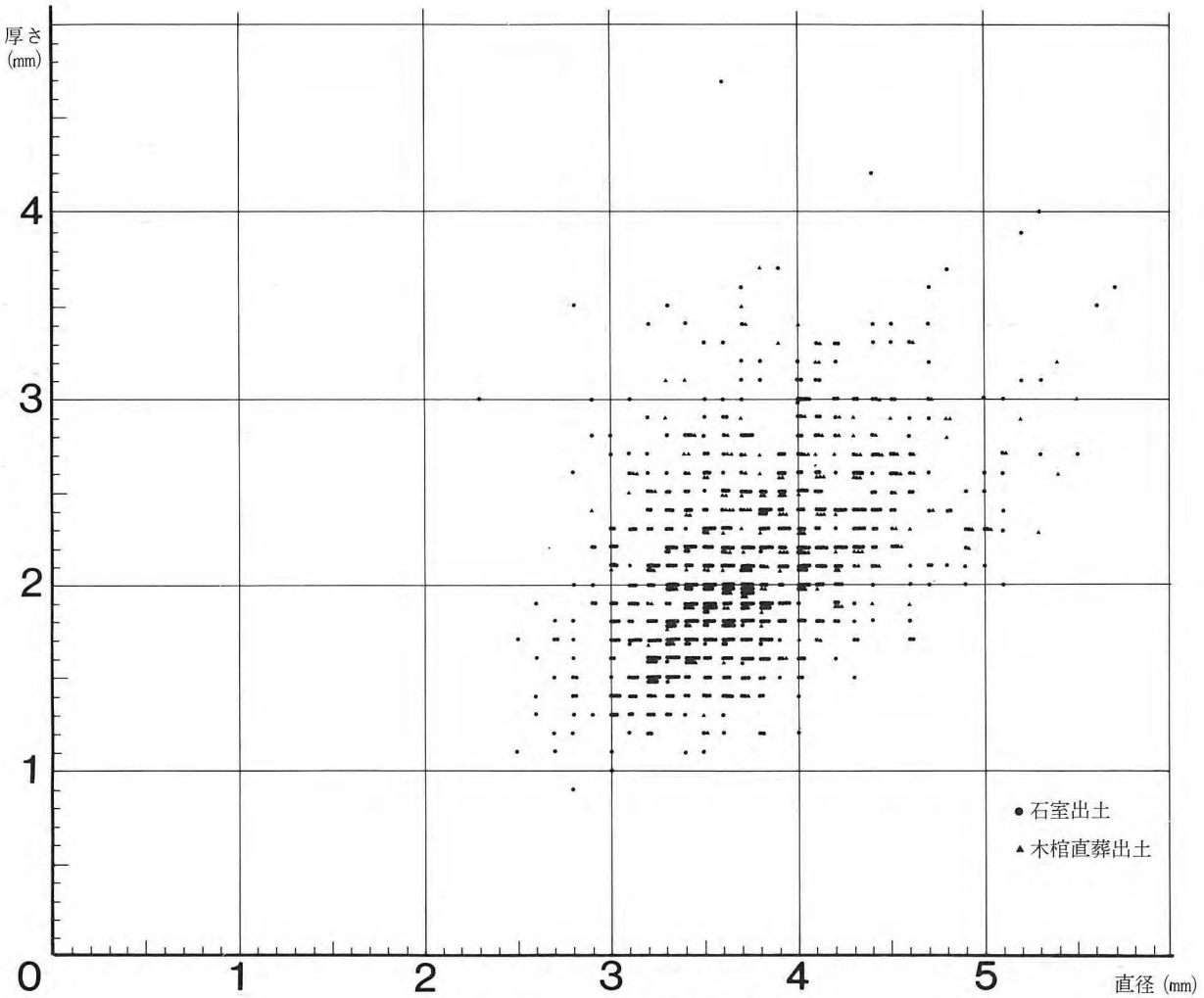


図24　ガラス玉（小）法量分布図

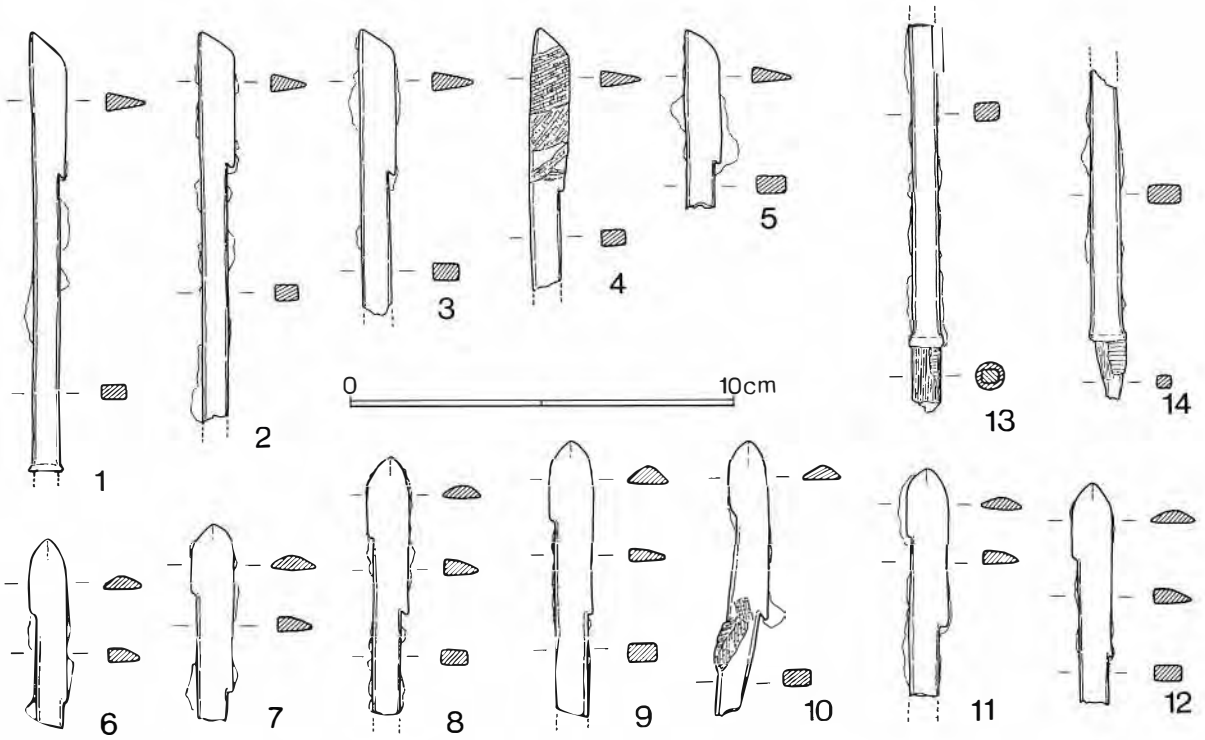


図25　石室出土遺物［鉄鏃］

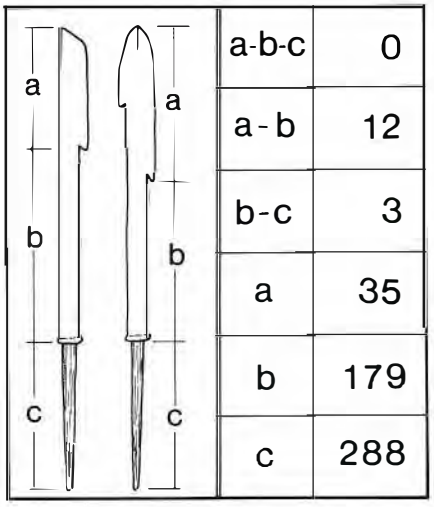
⑵武器・武具

①鉄鏃（図25・26、写真41）

破片数は517点を越え、部位別の出土破片数は図26のとおりである。これらのうち形態のわかるものは２種類に分けられる。

A類は片刃で刀身形を呈し逆刺をもつものである。鏃身部の長さは3.6～4.2cmで断面は二等辺三角形である。１は最も残存状態が良く、鏃先端部から箆被までの長さが11.6cmである。

B類は左右の関が段違いになっているものである。鏃身部上半部は両刃、下半部は片刃となっていて、いずれの関にも逆刺がつく。鏃身部の長さは4.2～4.5cmで、断面は上半部はゆるやかな山形、下半部は台形を呈する。



a-b-c	0
a-b	12
b-c	3
a	35
b	179
c	288

図26　鉄鏃の残存部位別破片数

②大刀類（図27、写真43）

１は振り環頭の金具である。断面の丸い鉄棒を振り、その上に銀板を張っている。約1/3は欠失しているが、復原すると端部の間隔は約6.2cmほどであった。文様を刻み朱を塗った鹿角の小破片が２点出土している（文様の形などは不明）が、この環頭に伴う可能性がある。

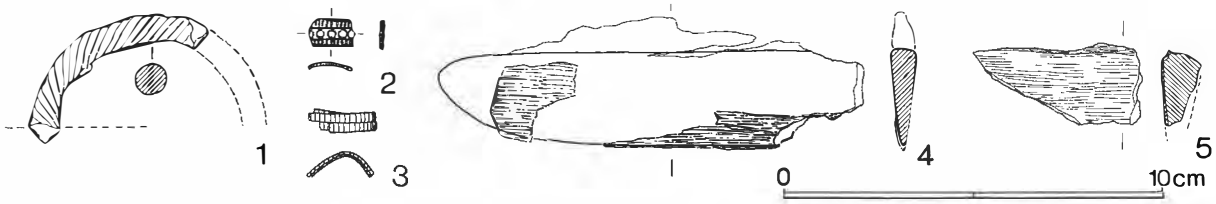


図27　石室出土遺物［大刀類］

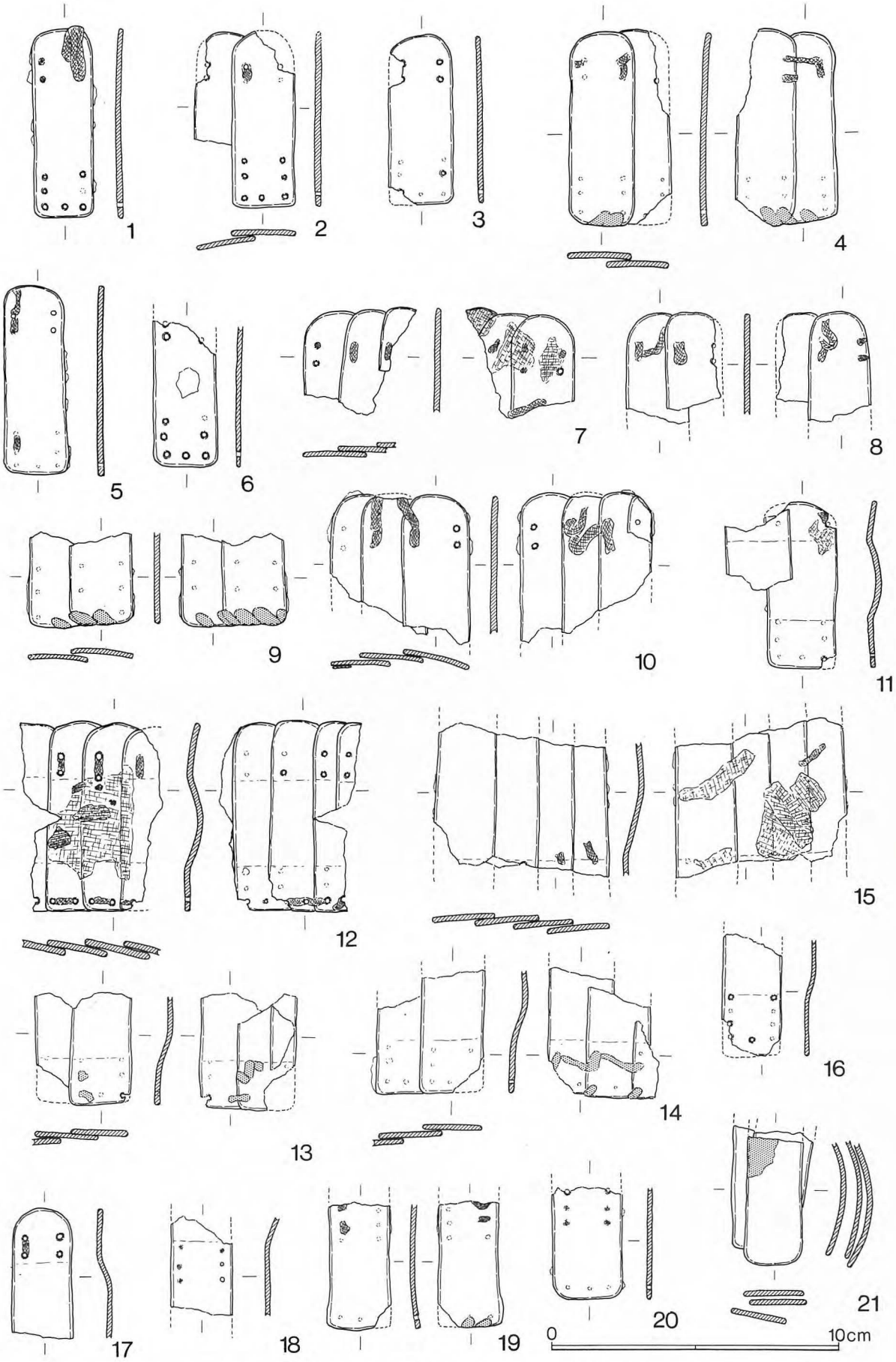


図28　石室出土遺物［挂甲小札］（アミかけは革を示す）

２は金銅製刀装具の責金具の一部である。

３は銀装大刀の銀線の一部である。表面には櫛歯状の刻みを入れる。

４は直刀の先端部にあたる。幅は2.4cm、厚さは0.6cmで、鞘の木質がわずかに残っている。５は刀身の一部で厚さが1.0cmである。木質が多く付着している。

③挂甲小札（図28・29、写真42）

破片数は800点を越えるが、残存状態が良く形態がわかるものを図示した。

１～10の小札にはいずれも縅孔左右２個づつ、綴孔左右２個づつ、下搦孔が３個ある。11～14は草摺裾札で小札中央部が湾曲しているものである。前述の小札と同様な孔の配置をもつ。15～20は湾曲が大きいことや、孔の配置から腰札と考えられる。21は３枚の大きく湾曲した小札が錆着したもので、肩甲や襟甲の部分と考えられる。

図29は、幅のわかる小札の破片数を表したグラフである。小さいものは1.8cm、大きいものは3.1cmと差が大きいが、ほとんどの小札は、2.2cm前後に集約されており、幅によってこれらを、類別することはできなかった。

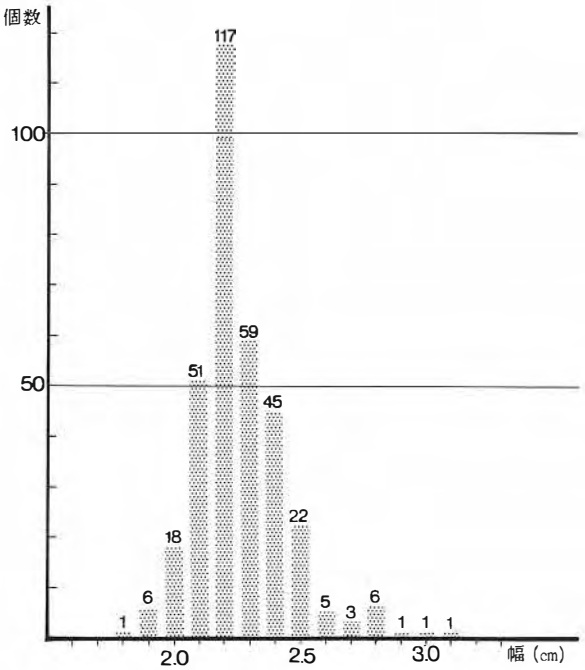


図29　挂甲小札法量分布図

今回出土したもののうち、紐の状態が確認できたものは、縅紐には組紐を、綴紐には革紐を、下搦紐には革紐を、覆輪の綴紐には組紐を使用していた。しかし、付編第１部で述べるように1894年に出土した挂甲には、縅紐に革紐を使用するものがあり、元来２領分の挂甲があったと考えられる。

⑶馬具

①鉄地銀張飾金具（図30－１～５、写真39）

縦長方形１点、半円形１点、方形３点が出土し、1894年に出土したものを含めると全部で７点になった（図72参照）。いずれも断面が台形の鉄板に銀板を被せたもので、長方形には２個、半円形には１個、方形には４個の鋲が差し込まれている。鋲は頭部に菊花状の刻みを入れて銀板を被せている。皮革が残存するものはなかった。

②鉄地銀張鞍金具（図30－６～24）

鞍金具は1894年の発掘でも破片が出土しているが（図72参照）、いずれも今回出土したものと同一個体である。鞍金具は両脇の磯金具と中央の洲浜金具からなり、後輪の磯金具には図72－３・４のような金銅装の鉸具が付設されていた。それぞれ台板と縁金具は別々に銀板を被せた後、同じく銀板を頭部に被せた鋲で留めている。縁金具の鋲は、本来は図72－７のように鞍の地板に取り付けられていたが、ほとんどの鋲は先端が欠損している。鋲の間隔には粗密があり、13・14・23・24は特に間隔が密になっている。磯金具と洲浜金具とは別作りで、洲浜金具(6)の下縁には縁金具は付かない。縁金具には９・15・16のように先端が三角形または四角形に切断されているものがある。

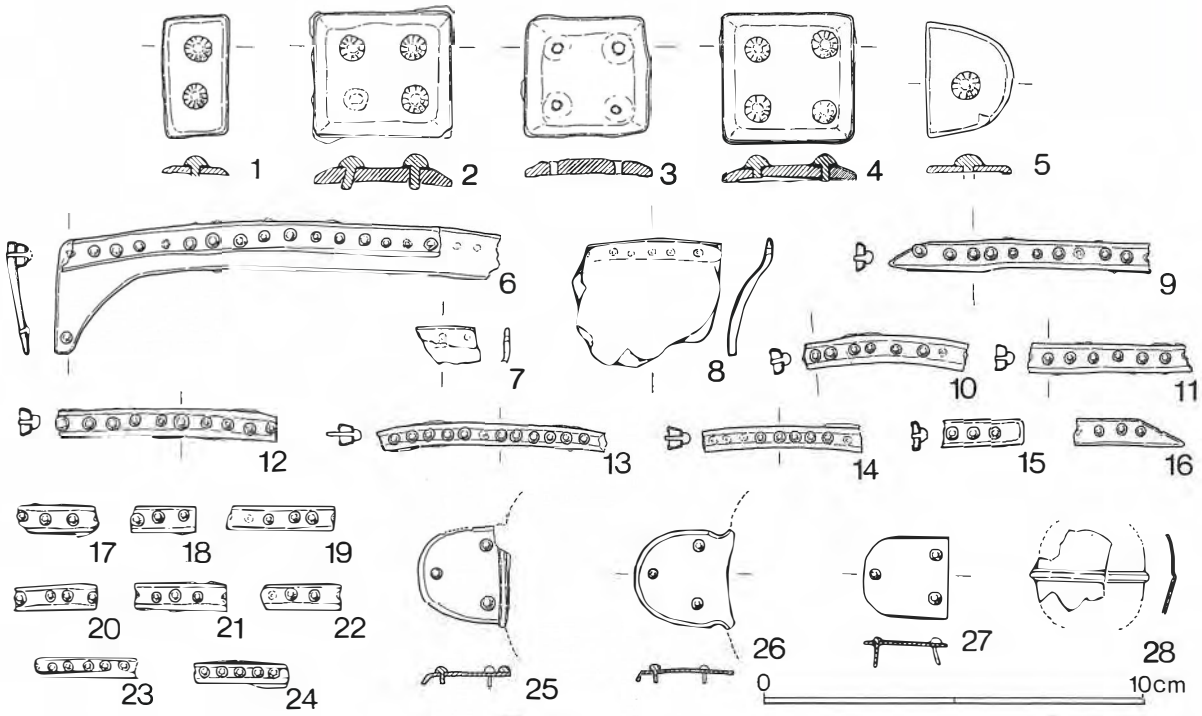


図30　石室出土遺物［不明鉄器］

③金銅製辻金具（図30－25・26、写真40）

脚部の破片が２点と、金銅の小破片がある。脚部の裏面には毛彫り状の削痕がある。25には責金具が残存していた。1894年に出土した辻金具（図69・70参照）と同一形態のものである。

④金銅製帯金具（図30－27、写真40）

爪形を呈し、長さ約0.8cmの鋲が３本残っている。金メッキはほとんど剝がれている。

⑤金銅製鈴（図30－28、写真40）

図68と同一形態の金銅製鈴の破片である。復原径は約３cmである。

⑷不明鉄器（図31、写真43）

１は平らな鉄板を切りだしたもので、左下端のラインが残っている。とくに一ヶ所曲線状に抉りが入っているのが特徴である。２は鉄鏃状の鉄器の先端が大きく屈曲するもので、両端は鈍い刃になっている。これと同様のものが東京大学に所蔵されている（図59－12参照）。３・４は断面方形の鉄棒を屈曲させたもので、３には木質が残存している。鎹のようなものとも考えられる。５は断面長方形の鉄棒に鉄のピンを差し込んだもので、ピンよりも左側に木質が残っている。

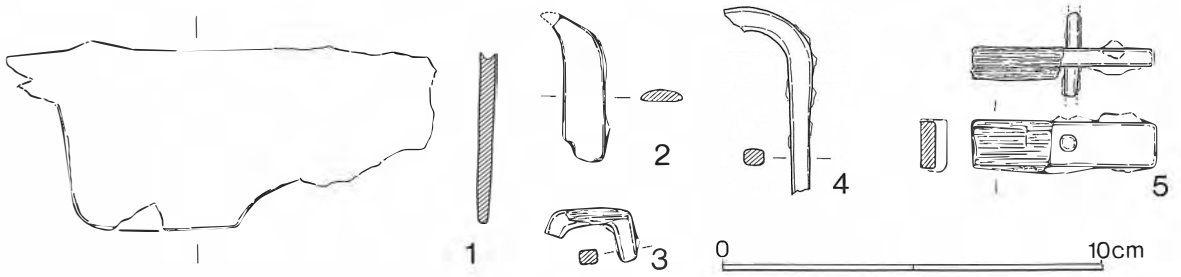


図31　石室出土遺物［不明鉄器］

その他、円形や五角形の鉄板等があり、その用途は現在のところ確認できていない。

⑸土器

須恵器高杯の杯部口縁の破片が１点のみ出土している。これは東京国立博物館に所蔵されている高杯（図77参照）と同一個体で、その欠失部分に接合した。

写真37　耳環

写真39　鉄地銀張飾金具

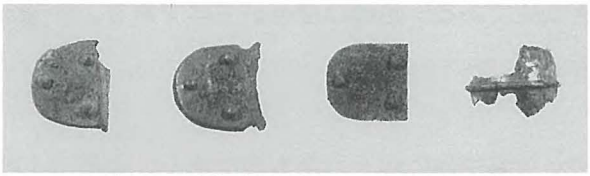


写真40　金銅製辻金具・帯金具・鈴

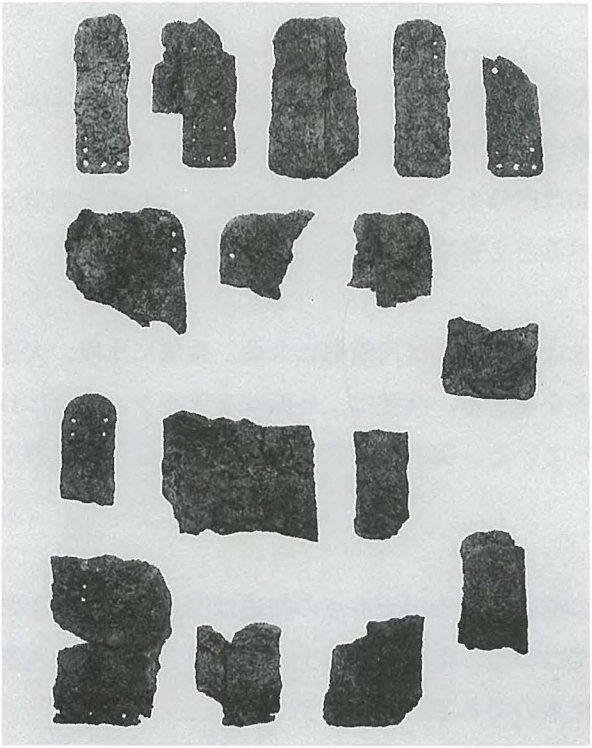


写真42　挂甲小札

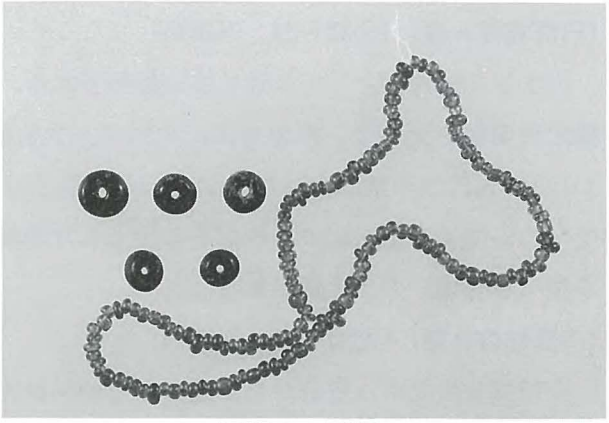


写真38　玉類

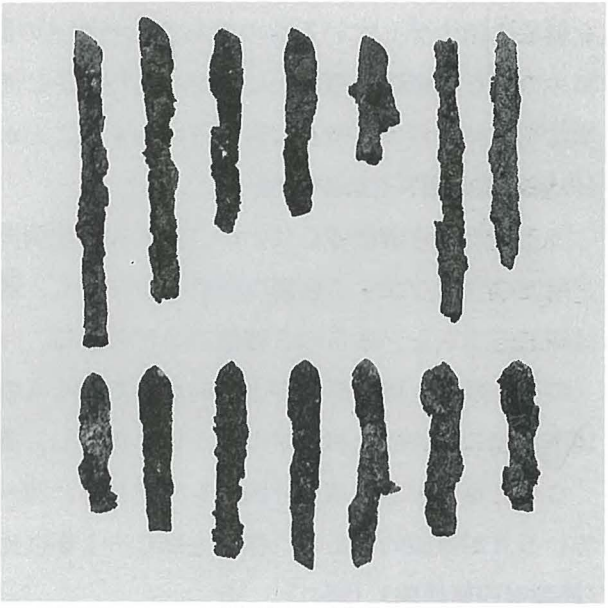


写真41　鉄鏃

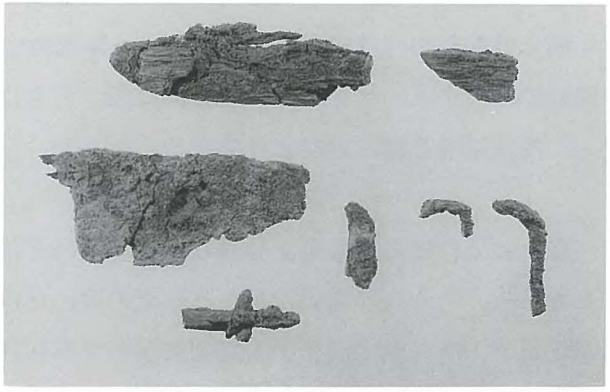


写真43　大刀片・不明鉄器

3　墳丘及び周堀出土遺物

墳丘及び周堀からは、本来墳丘上や中堤に並べられていた埴輪が多く出土した。また墳丘造出し周辺からは、祭祀に使用されたと考えられる須恵器や土師器がまとまって出土した。

(1)円筒埴輪（図32～41、表１、写真44・45）

円筒埴輪には大きく分けて、次の３種類の普通円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。

〈円筒埴輪Ａ類〉（図32～34、写真44）

出土した破片数としては最も多い種類である。突帯が４段で断面がつぶれたM字形を呈する。調整は外面にタテハケ、内面全体にナナメハケを施し、ハケメの間隔は約1.6cm／10本前後とやや細かい 。胴部の形態は全体に寸胴である。器高はＢ類よりもやや小さい。色調は赤色～赤褐色系統をなし、鴻巣市生出塚の埴輪窯から出土した埴輪と類似している。このＡ類には大型（１～８）・小型（９～13）の２種類がある。

〈円筒埴輪Ｂ類〉（図34～37、写真44）

突帯は３段だが、底部から１段目までの間が約２段分あり、器高はＡ類やＣ類よりも高い。突帯の断面は台形である。調整は外面はタテハケ、内面は全体にナナメハケを施すものと、胴部の下半を斜めに指ナデしているものがある。ハケメの間隔は約2.5cm／10本前後で、Ａ類に比べてかなり粗めである。胴部形態は上に向かってわずかに開き気味である。色調は橙色が主体である。突帯の形状や色調から、Ａ類とは容易に区別することができる。

〈円筒埴輪Ｃ類〉（図38～40）

出土した破片数は多くないが、後円部の北側周辺から集中的に出土したものである。突帯は４段で断面は台形をなす。色調は橙色を主体とし、器壁が比較的薄く焼成が硬いものが多い。このＣ類は胴部形態から、さらに２種類に分けられる。

Ｃ－１類：全体の形態が上に向かって開くものである。31・32ではハケメの間隔が1.1～1.2cm／10本と他の埴輪に比べ非常に細かい。ただし、突帯の付け方や器体の作り方は粗雑である。

Ｃ－２類：胴部が細く寸胴なものである。38～40は内外面ともにハケメではなく、ヘラで調整している点が特徴的である。作り方はＣ－１類に比べると丁寧である。

〈朝顔形円筒埴輪〉（図41）

全体が完全に復原できたものはなく、出土量も少ない。突帯は円筒部に３段、頸部に１段、大きく開く口縁部の付け根近くに１段あり、断面は台形を呈する。調整は、外面はタテハケ、内面は口縁部のみナナメハケを施し、円筒部は指ナデを行っている。突帯の形状や色調、調整などの観察から、円筒埴輪Ｂ類に近いようである。

以上のように円筒埴輪を分類したが、それぞれの種類による出土地点の相違は図15で表したとおりである。これらの埴輪は単なる形態の違いだけではなく、作り方や胎土の特徴なども大きく差異があって、明らかに別の工人集団によって作られたものである。

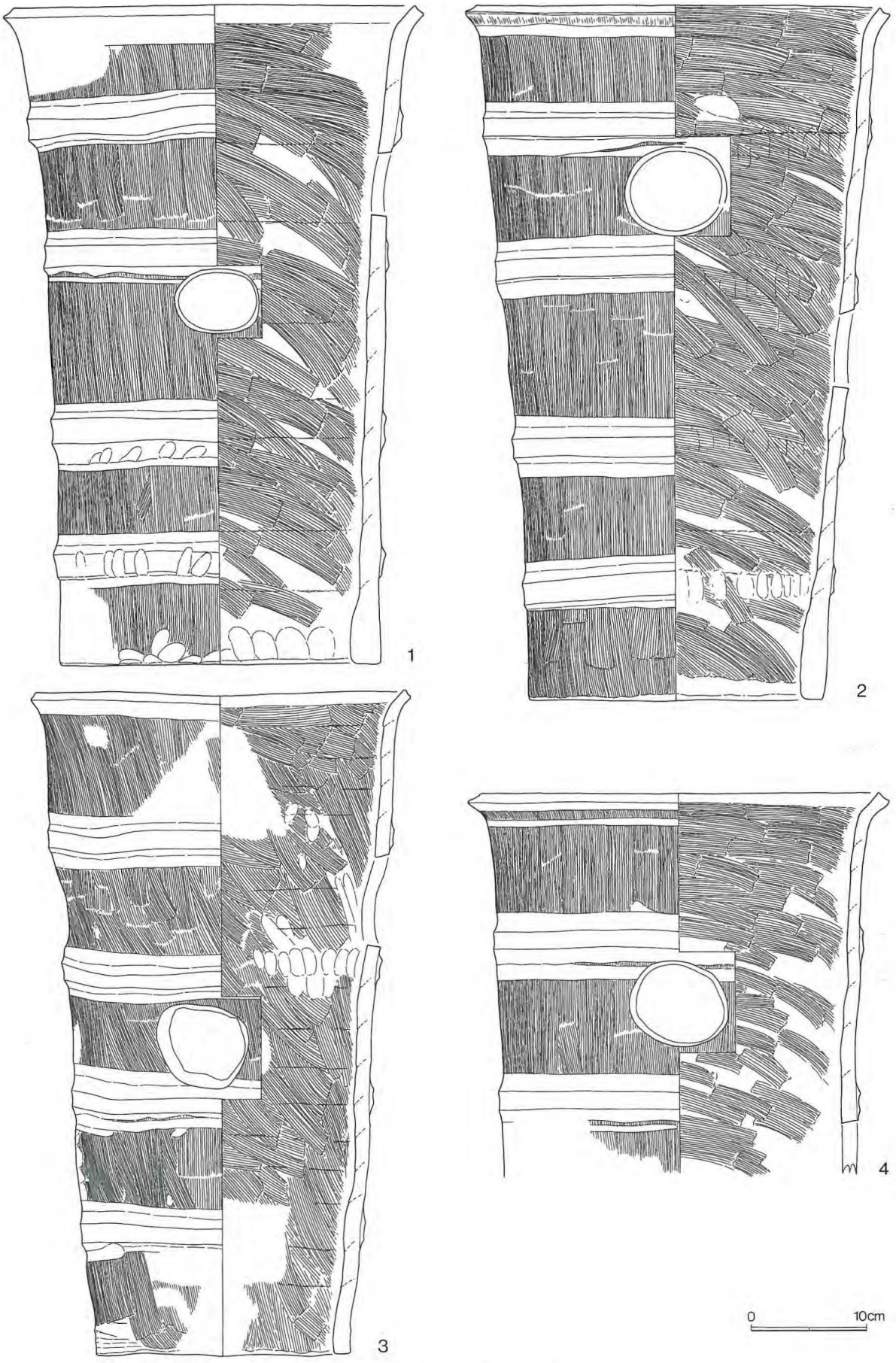


図32　円筒埴輪〈1〉（A類）

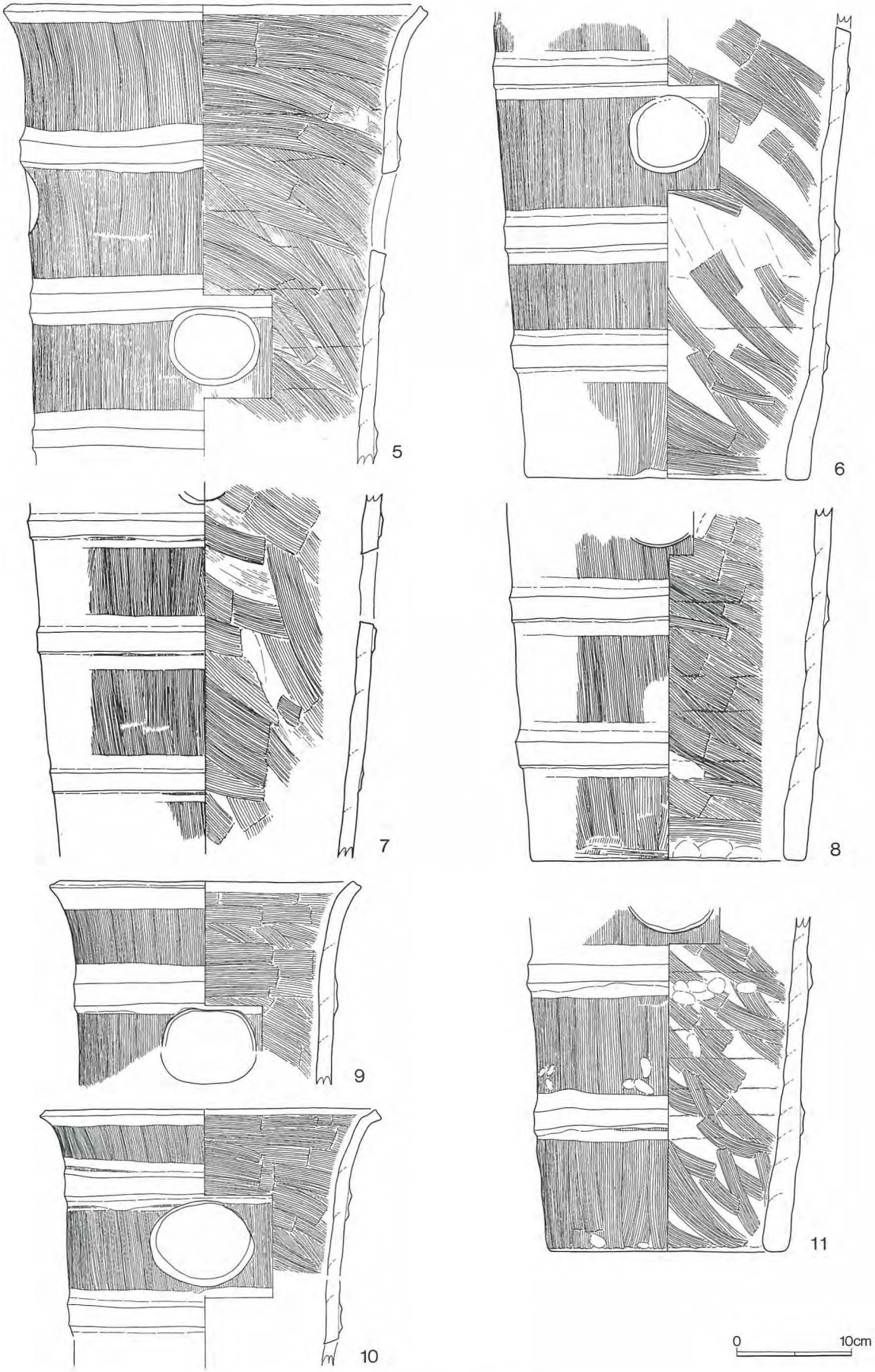


図33　円筒埴輪〈２〉（Ａ類）

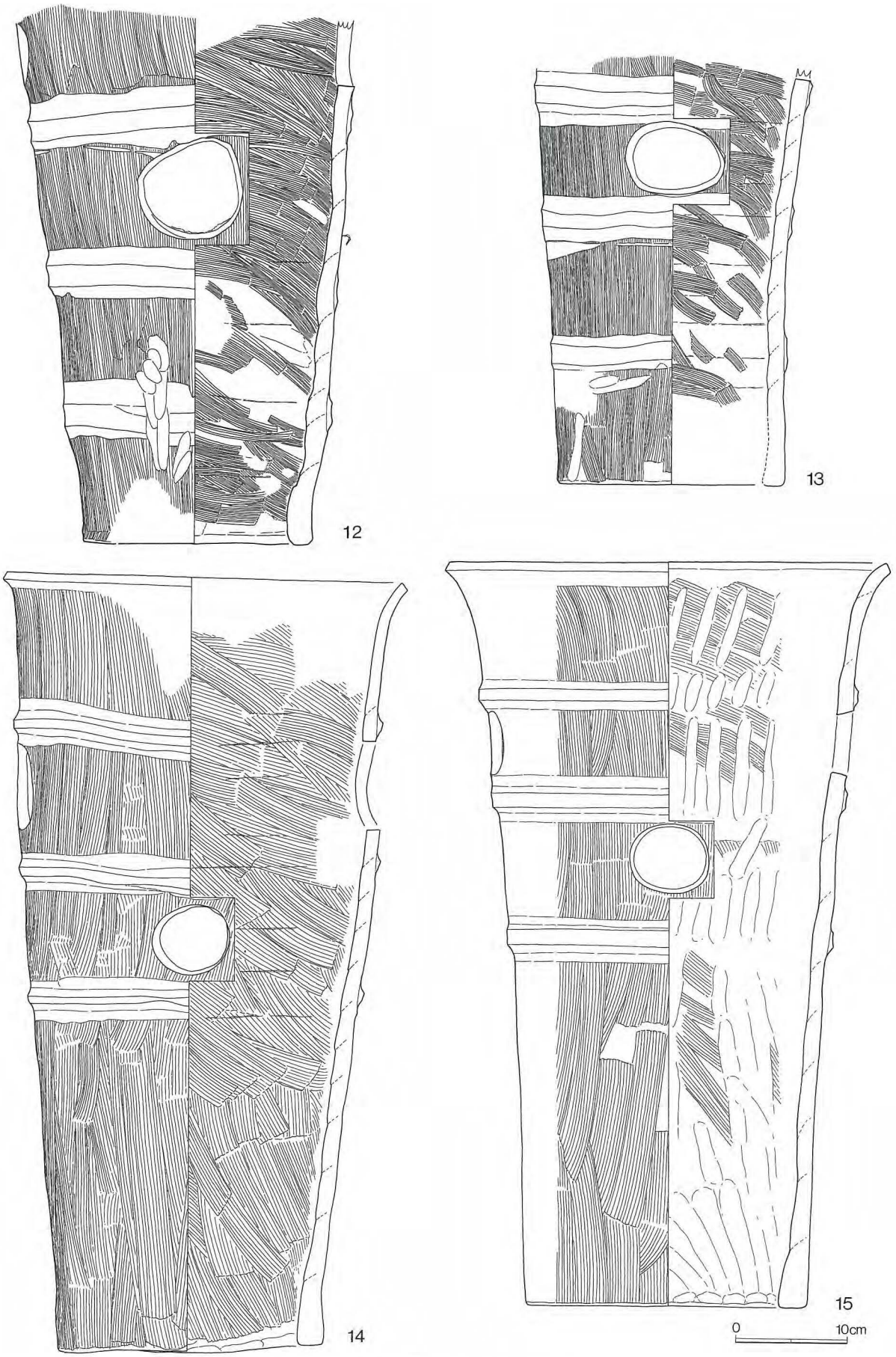


図34　円筒埴輪〈3〉（A・B類）

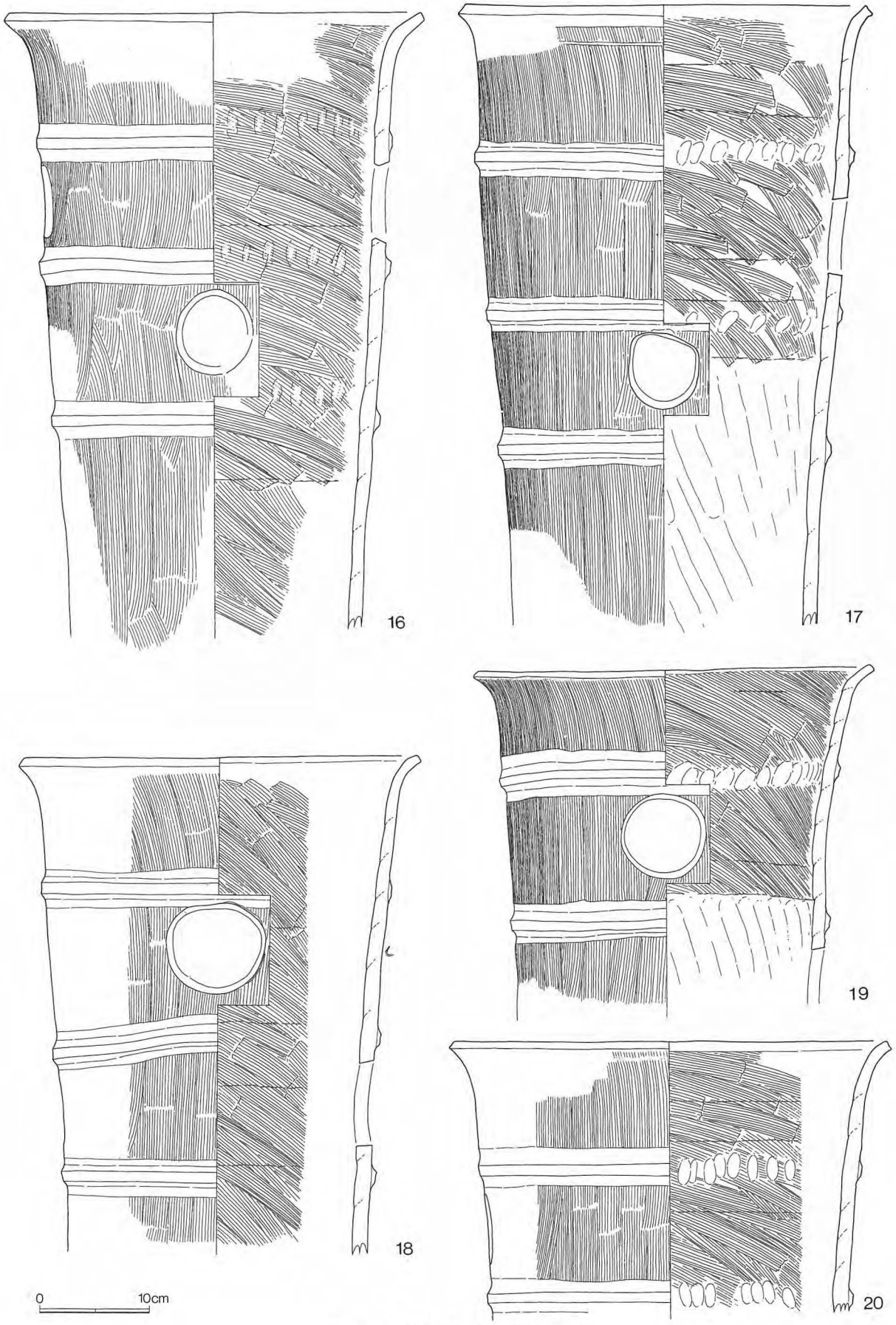


図35　円筒埴輪〈4〉（B類）

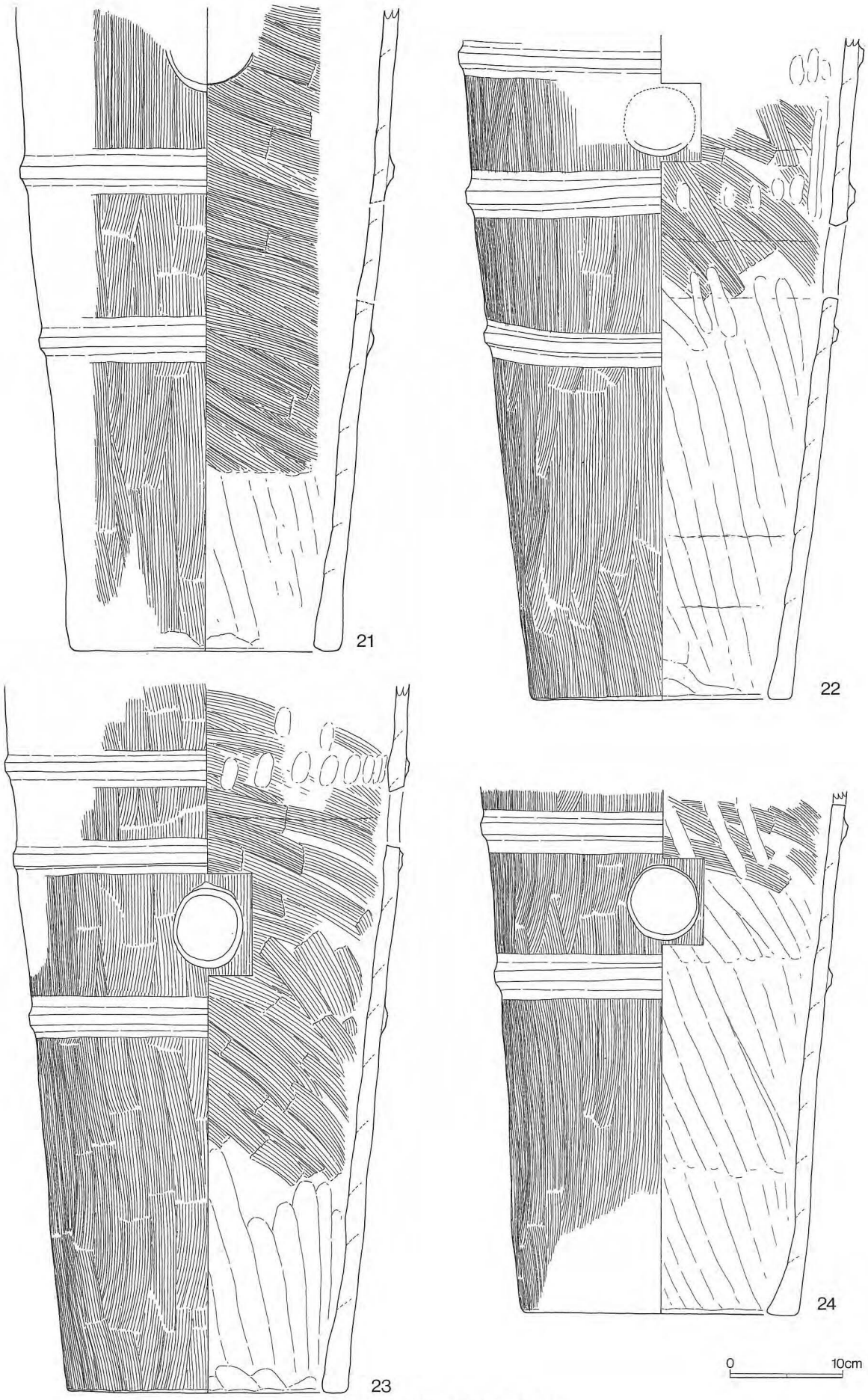


図36　円筒埴輪〈５〉（Ｂ類）

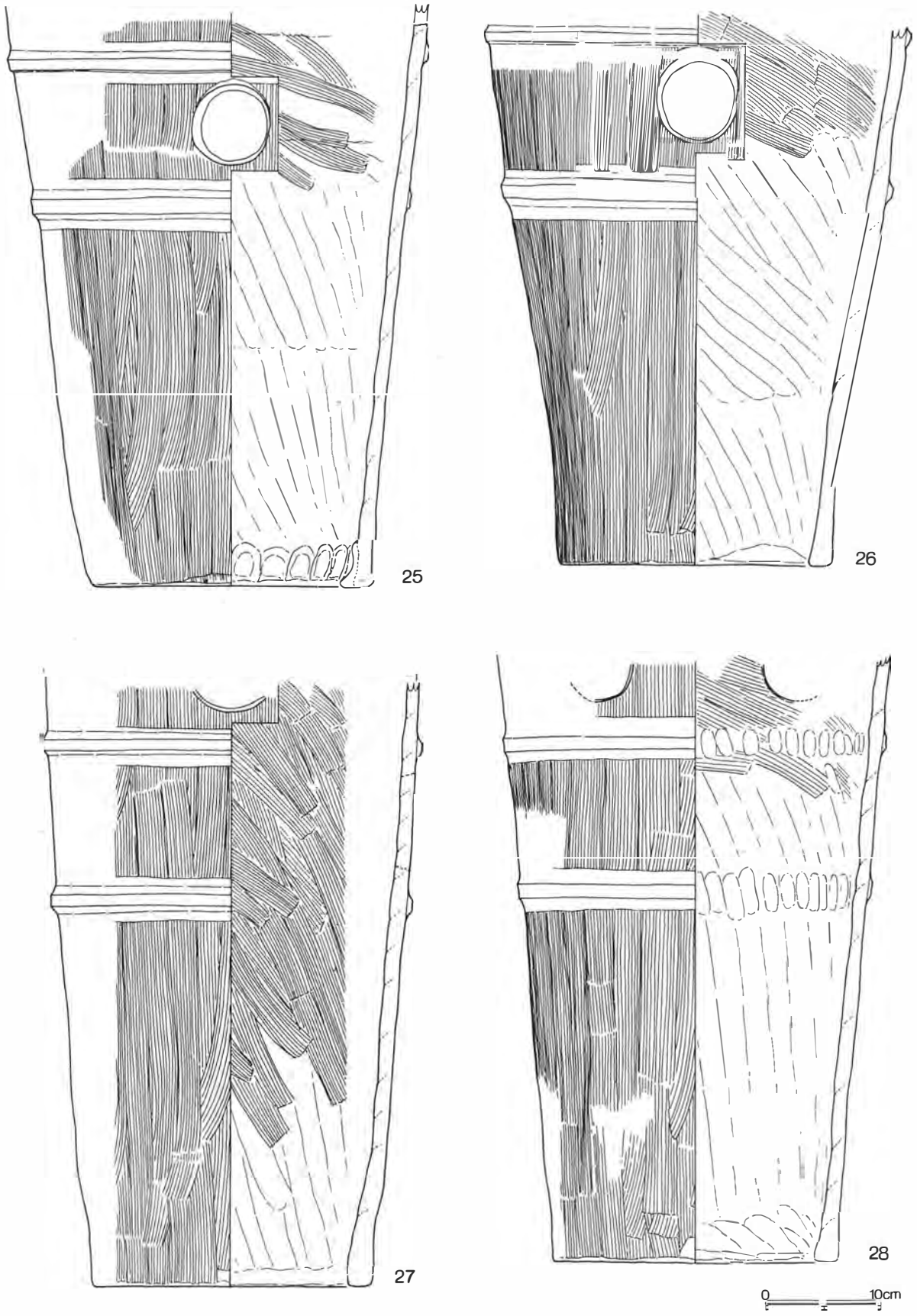


図37　円筒埴輪〈６〉（Ｂ類）

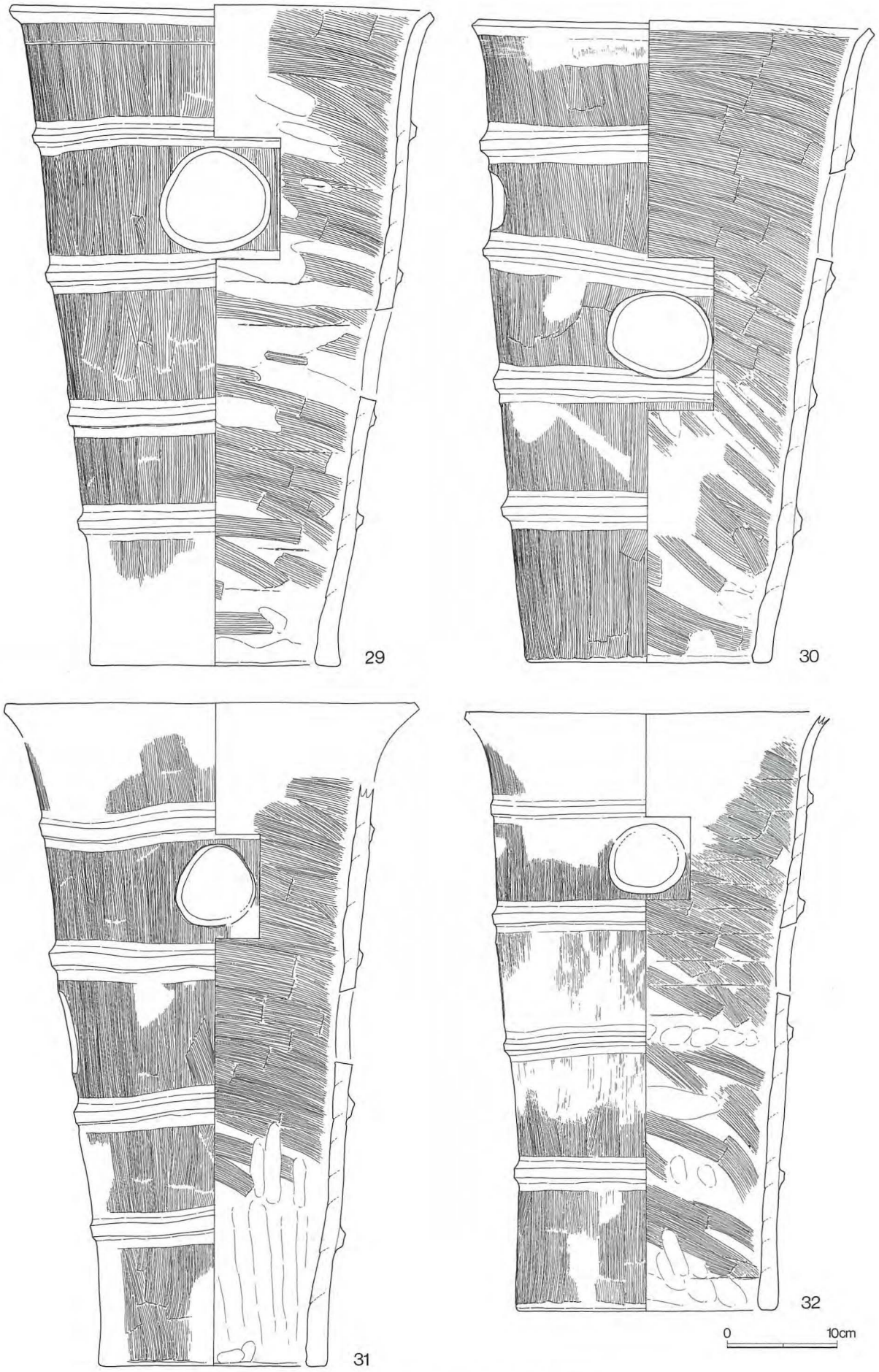


図38　円筒埴輪〈7〉（C－1類）

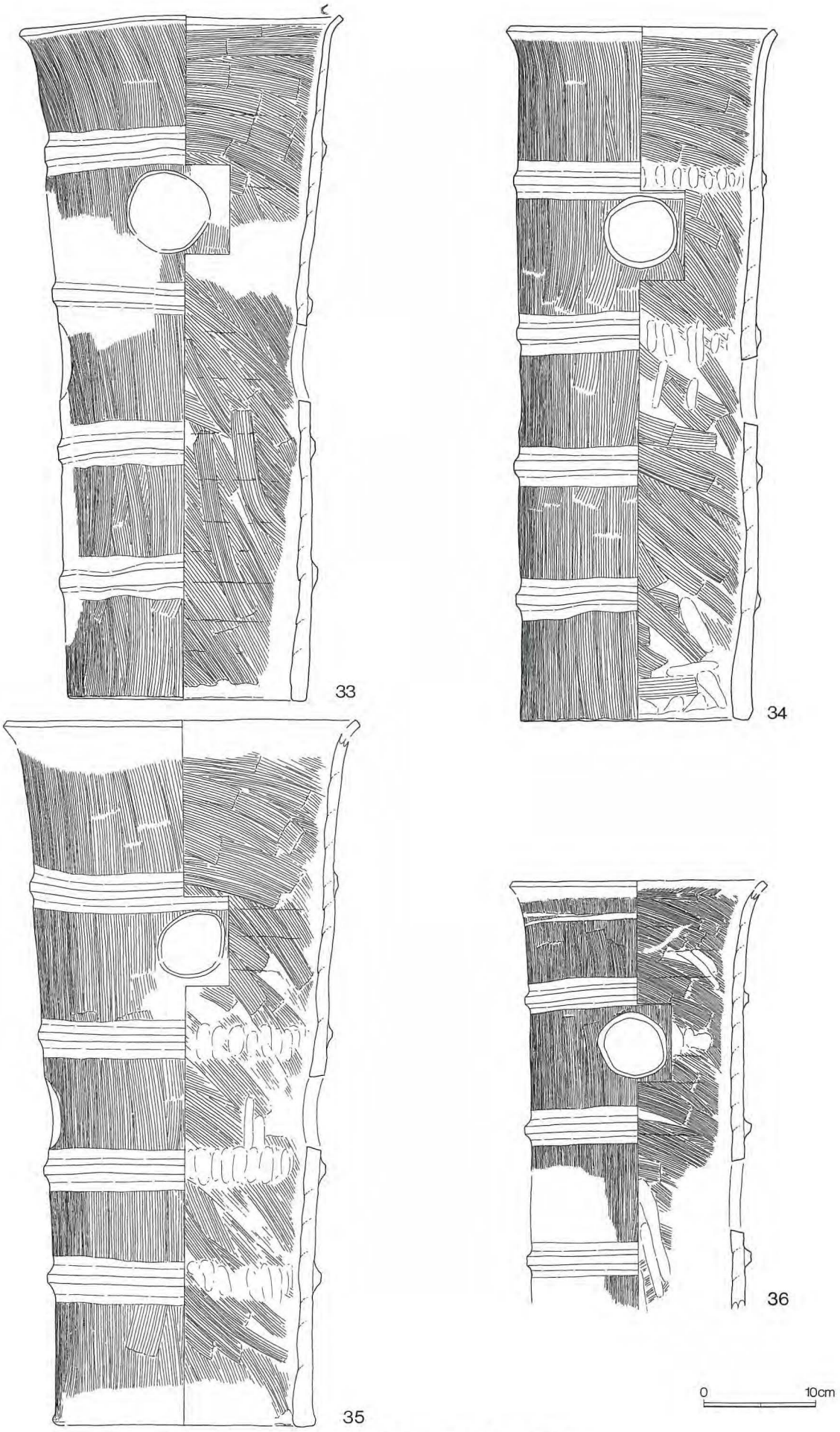


図39　円筒埴輪〈８〉（Ｃ－２類）

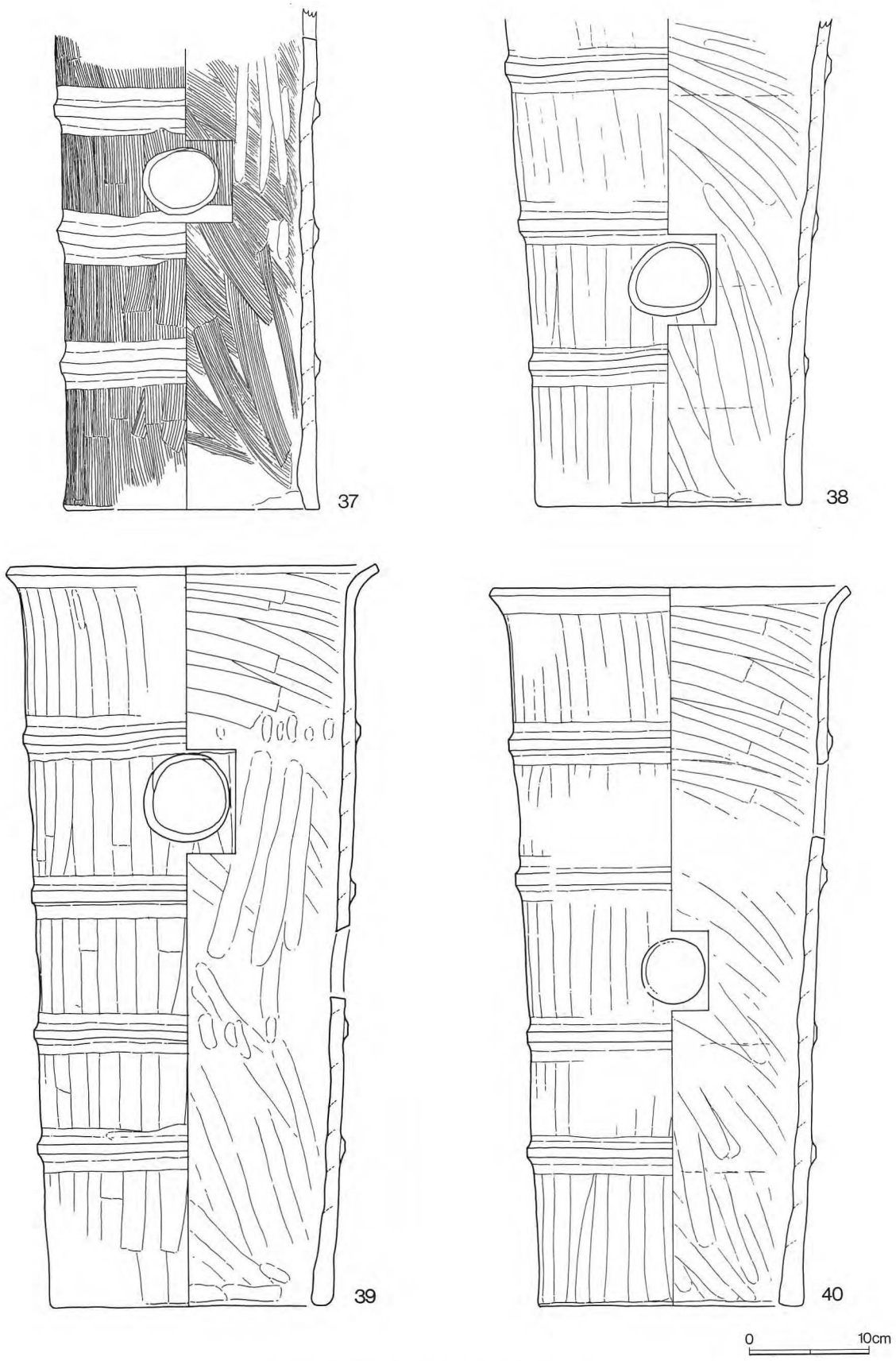


図40　円筒埴輪〈９〉（Ｃ－２類）

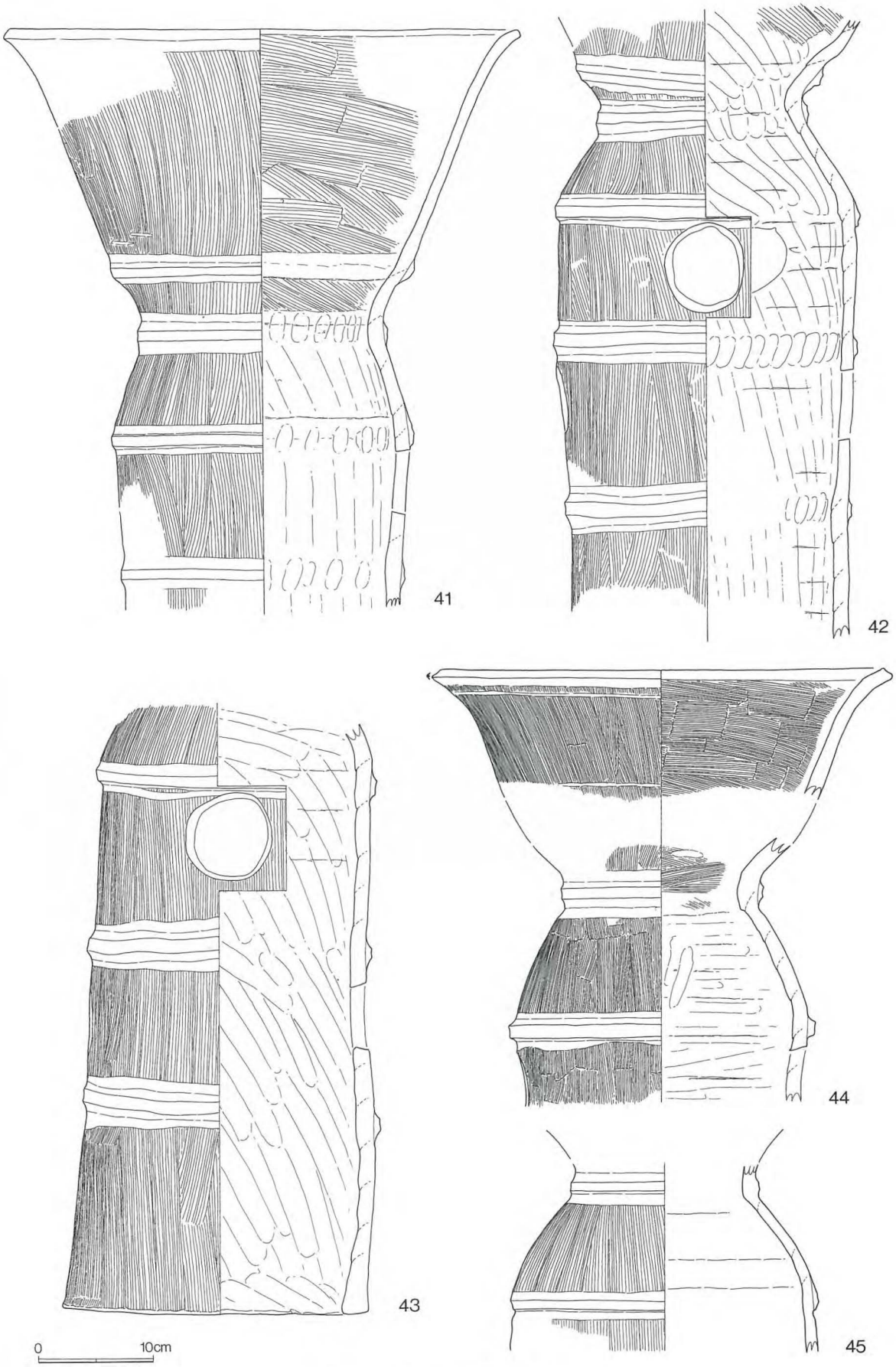


図41　円筒埴輪〈10〉（朝顔形）

表１　将軍山古墳出土　円筒埴輪観察表

・ハケメは10本あたりの幅（cm）で表した。

・色調は『新版標準土色帖』1970年、によった。

図番号	写真番号	器　種	出土地点	法量(cm)	特　　徴	ハケメ	焼成	胎土	色　調	備　　考
図32－１	写真44	円筒埴輪 A　類	f－７	器高　58.4 口径　37.4 底径　28.6	突帯－つぶれたM字形。４条。 透孔－３・４段目。楕円。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.7	良好	緻密	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約80％残存 出土状況図あり (図11)
図32－２	写真44	円筒埴輪 A　類	e－７	器高　61.4 口径　37.4 底径　26.0	突帯－つぶれたM字形。４条。 透孔－３・４段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.6	良好	緻密	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約60％残存 出土状況図あり (図11)
図32－３	写真44	円筒埴輪 A　類	e－７	器高　59.0 口径　33.3 底径　22.8	突帯－つぶれたM字形。４条。 透孔－３・４段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.4	良好	緻密	赤色 (10R5/8)	約60％残存
図32－４		円筒埴輪 A　類	e－７	残高　34.2 口径　35.8	突帯－つぶれたM字形。２条残存。 透孔－３・４段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.6	良好	緻密	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約30％残存 出土状況図あり (図11)
図33－５		円筒埴輪 A　類	j－５	残高　39.0 口径　35.8	突帯－つぶれたM字形。３条残存。 透孔－３・４段目。楕円。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.0	やや軟質	緻密	赤褐色 (2.5YR5/8)	約40％残存
図33－６		円筒埴輪 A　類	e－７	残高　40.2 底径　25.1	突帯－つぶれたM字形。３条残存。 透孔－３・４段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面粗いナナメハケ。	1.7	良好	緻密	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約50％残存
図33－７		円筒埴輪 A　類	e－７	残高　30.5	突帯－つぶれたM字形。３条残存。 透孔－３・４段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.5	良好	緻密	赤褐色 (2.5R4/8)	約20％残存 出土状況図あり (図11)
図33－８		円筒埴輪 A　類	e－３	残高　30.7 底径	突帯－つぶれたM字形。２条残存。 透孔－３段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.8	良好	緻密	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約30％残存
図33－９		円筒埴輪 A　類	e－７	残高　17.8 口径　27.4	突帯－つぶれたM字形。１条残存。 透孔－４段目残存。楕円。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.5	良好	緻密	赤色 (10R4/8)	約30％残存 出土状況図あり (図11)
図33－10		円筒埴輪 A　類	e－７	残高　22.7 口径　29.8	突帯－つぶれたM字形。２条残存。 透孔－３・４段目。楕円。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.5	良好	緻密	明赤褐色 (2.5R4/8)	約30％残存
図33－11		円筒埴輪 A　類	e－７	残高　40.7 底径　21.3	突帯－つぶれたM字形。２条残存。 透孔－３段目残存。円形？ 調整－外面タテハケ、内面粗いナナメハケ。	1.6	良好	緻密	赤色 (10R4/8)	約20％残存 出土状況図あり (図11)
図34－12		円筒埴輪 A　類	e－６	残高　47.7 底径　20.9	突帯－つぶれたM字形。３条残存。 透孔－３・４段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.5	良好	緻密	赤褐色 (2.5YR4/8)	約70％残存

図番号	写真番号	器　種	出土地点	法量(cm)	特　　徴	ハケメ	焼成	胎土	色　調	備　　考
図34－13	写真44	円筒埴輪 A　類	e－7	残高　38.2 底径　20.9	突帯－つぶれたM字形。３条残存。 透孔－３・４段目。楕円。 調整－外面タテハケ、内面粗いナナメハケ。	1.6	良好	緻密	赤色 (10R5/6)	約50%残存 出土状況図あり (図11)
図34－14	写真44	円筒埴輪 B　類	e－7	器高　70.0 口径　36.2 底径　23.3	突帯－台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.8	良好	小礫多い	橙色 (5YR6/8)	約80%残存 出土状況図あり (図11)
図34－15	写真44	円筒埴輪 B　類	e－8	器高　70.0 口径　38.7 底径　25.1	突帯－つぶれた台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面粗いナナメハケの後指ナデ。	2.3	やや軟質	小礫多い	橙色 (5YR7/8)	約50%残存 出土状況図あり (図11)
図35－16		円筒埴輪 B　類	f－8	残高　50.4 口径　37.2	突帯－台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (5YR7/8)	約40%残存 出土状況図あり (図11)
図35－17		円筒埴輪 B　類	f－4	残高　56.1 口径　37.3	突帯－台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面上半ナナメハケ。	2.4	やや軟質	小礫多い	橙色 (2.5YR6/8)	約20%残存
図35－18		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　44.8 口径　36.5	突帯－台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.3	良好	小礫多い	橙色 (2.5YR6/8)	約40%残存 出土状況図あり (図11)
図35－19		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　34.6 口径　34.2	帯－台形。２条残存。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面上半ナナメハケ。	2.1	良好	緻密	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約30%残存
図35－20		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　25.4 口径　39.0	突帯－台形。２条残存。 透孔－３段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (5YR7/8)	約10%残存 出土状況図あり (図11)
図36－21		円筒埴輪 B　類	e－7 e－8	残高　58.2 底径　23.5	突帯－台形。２条残存。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ、下段部のみ指ナデ残す。	2.4	やや軟質	小礫多い	橙色 (5YR6/8)	約40%残存 出土状況図あり (図11)
図36－22		円筒埴輪 B　類	e－8	残高　58.9 底径　23.2	突帯－台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面上半ナナメハケ。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (2.5YR6/8)	約60%残存 出土状況図あり (図11)
図36－23		円筒埴輪 B　類	e－7 e－8	残高　63.4 底径　25.0	突帯－台形。３条。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ、下段部 のみ指ナデ残す。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (5YR7/8)	約40%残存 出土状況図あり (図11)
図36－24		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　47.4 底径　24.7	突帯－台形。２条残存。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面 上半ナナメハケ。	2.4	良好	小礫多い	明赤褐色 (2.5YR5/6)	約50%残存 出土状況図あり (図11)
図37－25		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　50.3 底径　24.4	突帯－台形。２条残存。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面上半ナナメハケ。底に強い指頭圧痕。	2.3	良好	小礫多い	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約50%残存 出土状況図あり (図11)
図37－26		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　46.4 底径　23.7	突帯－台形。２条残存。 透孔－２段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面上半ナナメハケ。	2.4	良好	小礫多い	橙色 (5YR7/6)	約30%残存 出土状況図あり (図11)
図37－27		円筒埴輪 B　類	e－7	残高　52.5 底径　24.0	突帯－台形。２条残存。 透孔－３段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ、下段部指ナデ残す。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (2.5YR6/8)	約20%残存 出土状況図あり (図11)

図番号	写真番号	器種	出土地点	法量(cm)	特徴	ハケメ	焼成	胎土	色調	備考
図37－28		円筒埴輪 B類	e－11 前方部正面中段部	残高 50.6 底径 24.7	突帯－台形。2条残存。 透孔－3段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面上半ナナメハケ。	2.4	軟質	小礫多い	明赤褐色 (2.5YR5/8)	約20%残存 出土状況図あり (図11)
図38－29	写真45	円筒埴輪 C－1類	d－2	器高 60.1 口径 39.1 底径 23.0	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面粗いナナメハケ。	2.0	良好	緻密	橙色 (5YR6/6)	約80%残存
図38－30	写真45	円筒埴輪 C－1類	c－2	器高 57.1 口径 36.7 底径 21.8	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.4	良好	緻密	橙色 (7.5YR7/6)	約90%残存
図38－31		円筒埴輪 C－1類	c－2	残高 57.7 底径 21.0	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。下段部指ナデ残す。	1.1	良好	緻密	橙色 (5YR6/8)	約60%残存
図38－32	写真45	円筒埴輪 C－1類	c－2	残高 54.3 口径 33.5 (復原) 底径 23.9	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面粗いナナメハケ。	1.2	良好	緻密	にぶい橙色 (5YR6/4)	約60%残存
図39－33	写真45	円筒埴輪 C－2類	c－2	器高 61.7 口径 29.0 底径 21.2	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.1	良好	緻密	にぶい橙色 (5YR7/4)	約70%残存
図39－34	写真45	円筒埴輪 C－2類	d－2	器高 62.0 口径 24.4 底径 20.9	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ。内面ナナメハケ。	2.4	良好	緻密	明赤褐色 (5YR5/6)	約90%残存 出土状況図あり (図10)
図39－35		円筒埴輪 C－2類	c－2	残高 61.8 底径 22.4 (復原)	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.4	やや軟質	緻密	黄橙色 (7.5YR7/8)	約40%残存 出土状況図あり (図10)
図39－36		円筒埴輪 C－2類	d－2	残高 38.2 口径 22.5 (復原)	突帯－台形。3条残存。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	1.0	良好	緻密	明赤褐色 (5YR5/6)	約20%残存
図40－37		円筒埴輪 C－2類	d－2	残高 35.8 底径 20.8	突帯－台形。3条残存。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面ナナメハケ。	2.2	良好	緻密	明赤褐色 (5YR5/6)	約30%残存
図40－38		円筒埴輪 C－2類	c－2	残高 40.3 底径 20.2	突帯－台形。3条残存。 透孔－2段目残存。円形。 調整－外面タテヘラナデ、内面上半ナナメヘラナデ。その他指ナデ。	－	良好	緻密	橙色 (7.5YR7/6)	約30%残存 透孔の位置が不規則
図40－39	写真45	円筒埴輪 C－2類	c－2 d－2	器高 61.4 口径 31.0 底径 23.6	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形。 調整－外面タテヘラナデ、内面上半ナナメヘラ ナデ。その他指ナデ。	－	良好	緻密	にぶい橙色 (5YR6/4)	約80%残存 出土状況図あり (図10)
図40－40	写真45	円筒埴輪 C－2類	d－2	器高 59.6 口径 30.1 底径 22.1	突帯－台形。4条。 透孔－3・4段目。円形 調整－外面タテヘラナデ、内面上半ナナメヘラナデ。その他指ナデ。	－	良好	緻密	橙色 (5YR7/6)	約70%残存 出土状況図あり (図10)
図41－41	写真45	朝顔形 円筒埴輪	d－11 前方部正面中段部	残高 50.7 口径 45.1	突帯－つぶれた台形。4条残存。 透孔－3段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面口縁部ナナメハケ、円筒部指ナデ	2.4	やや軟質	小礫多い	橙色 (7.5YR7/6)	約30%残存 出土状況図あり (図9)

図番号	写真番号	器種	出土地点	法量(cm)	特　　徴	ハケメ	焼成	胎土	色　調	備　　考
図41－42	写真45	朝顔形 円筒埴輪	e－7	残高　56.4 頸部径18.3	突帯－つぶれた台形。５条残存。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面口縁部ナナメハケ、円筒部指ナデ。	2.4	良好	緻密	橙色 (5YR6/6)	約60%残存 出土状況図あり (図11)
図41－43		朝顔形 円筒埴輪	e－7	残高　53.0 底径　27.0	突帯－つぶれた台形。３条残存。 透孔－２・３段目。円形。 調整－外面タテハケ、内面円筒部指ナデ。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (5YR6/8)	約50%残存
図41－44		朝顔形 円筒埴輪	b－6	残高　43.2 口径　42.2	突帯－台形。２条残存。 透孔－３段目残存。円形。 調整－外面タテハケ、内面口縁部ナナメハケ、その他指ナデ。	1.5	良好	緻密	橙色 (5YR6/8)	約20%残存
図41－45		朝顔形 円筒埴輪	e－8	残高　16.5 頸径　16.3	突帯－つぶれた台形。２条残存。 調整－外面タテハケ内面円筒部指ナデ。	2.5	良好	小礫多い	橙色 (5YR6/6)	約20%残存 出土状況図あり (図11)

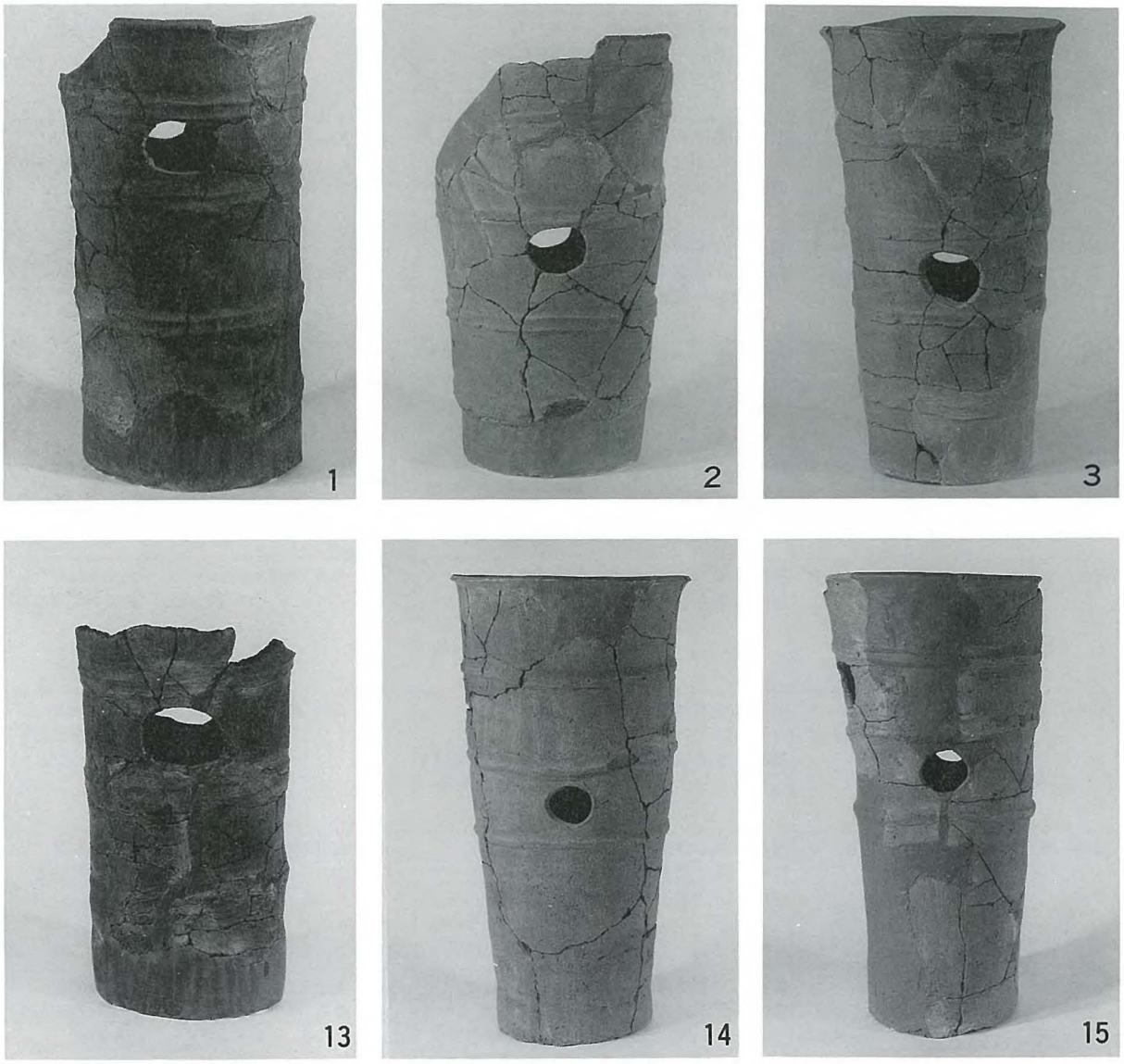


写真44　円筒埴輪（１）

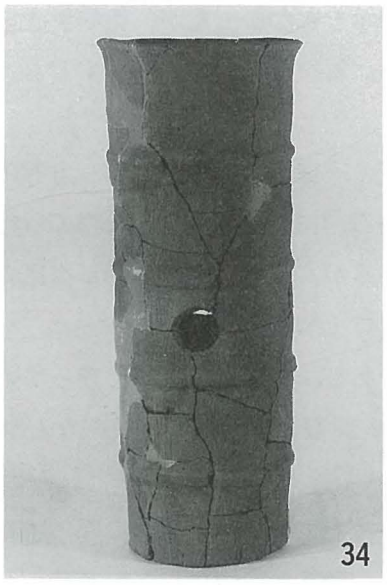


写真45　円筒埴輪（２）

⑵形象埴輪（図42～46、写真46～53）

今回の調査で確認できた形象埴輪は次の通りである。

人物埴輪－男子・女子・盾持ち人　　**器財埴輪**－靫・盾・大刀・鞆・家　　**動物埴輪**－馬

①人物埴輪（図44・45、写真46・48・49・52）

図45は盾持ち人である。頭部のほぼ全体と胴部・円筒部の約1/2が残っている。頭には２又に分かれる曲げあるいは帽子状のものを表現する。目は長方形で両目ともやや右下がりになり、鼻は剝離してしまっている。口も右下がりである。盾部は人物の両脇に鰭状に付いていて、盾表面の平面感は表現されていない。胴部の正面には戟を貼付していた痕跡があり、断面台形をした柄の一部分のみ残っている。円筒部は胴部との接合部に突帯があるが、それ以下には突帯がない。突帯の下には両側に透孔がある。

調整は頭は不定ナデ、顔面はタテハケの後ナデ消している。胴部・円筒部はタテハケで、盾の部分はナナメハケである。内面は図示できなかったが、粗いナナメハケが施されている。

高さは83.0cm、底径は17.6cmで、盾を反転させて復原すると、盾の上幅は27.5cm、下幅は31.8cmを測る。

図44－12～14は人物埴輪の顔面の一部である。鼻の作り方等に微妙な相違がある。15は女子埴輪の島田髷の部分で半分欠損している。16はみずら、17は腕の付け根に相当する。これらの他に、みずらや腕の一部が数点出土しているが、いずれも元の形が復原できるものはない。

②器財埴輪（図42・43・46、写真47・50・51・54）

図42～43の１～９は靫形埴輪である。１は最も良好に残っていたもので、鏃部先端・鰭部の右側の約半分・円筒部１段目の約1/3・鋲留めした横帯や突帯などが一部欠損している他は、ほぼ完形である。

円筒基部は下から２段目の突帯までで、２本の突帯の間に透孔が左右に穿たれている。

それより上部は矢筒部にあたり、鰭部の下端に接して２列の鋲留めを表した、幅約４cmの横帯が側面まで巡る。その下には背負い紐の結び目を表現した垂飾りが付く。しかし背負い紐は横帯よりも上に、単線の×字形で刻まれていて、結び目の機能は全く無視されている。矢筒の側面、鰭の下に垂直に２本突帯が平行して貼付されている。矢筒部は上に向かって次第にすぼまっていく。矢筒部上端部には２列の鋲留めを施した横帯が貼り付けられている。これは両端が欠けているが剝離の状態から∩形をしていたことがわかる。横帯がある部分の後側には１ヵ所小孔が穿たれている。鰭はやや上方に向かって広がっており、鰭周囲には全体に鋲留め表現がある。

矢を表した先端部は、長方形の粘土板を矢筒本体に差し込んで成形している。矢は６本を単線で表し、鏃の先端部は欠けているが、おそらく矢印状になっていたのだろう。矢の両脇に矢が脱落しないように鋲留めして施された縦突帯が表現される。

調整は円筒部・矢筒部は外面タテハケ、鰭部は右下がりの指ナデを施し、内面は一部粗いナナメハケがみられる。現高は89.4cm、底径15.8cmを測り、鰭上幅は反転復原で約46cmと推定される。

２～６は鏃部のみで、いずれも矢は線刻で表し、矢の両脇に縦突帯を貼付している。鏃先端部は

３・４は矢印、５は２本の単線間に山形の線刻で表現している。７～９は鰭部の破片であり、周囲に鋲留めを表している。図46－10は靫の矢筒部下半と円筒部のみ残存しているが、その形態は１とほぼ同じである。

図46－32～40は盾形埴輪である。盾表面に連続鋸歯文を線刻するもの（32～35・38・39）と、無文のもの（36･37･40）がある。鋸歯文はまず横方向の直線を引いた後、ギザギザに線を入れていくものだが、盾表面の全面に施されていたのかどうかは不明である。37は盾の下端に横方向の突帯を貼りつけている。40も盾の下端の一部と考えられ、縦方向の突帯上に斜めの線刻がある。

41・42は玉纒大刀の勾金の部分で、42では三輪玉が剝離した痕跡がある。いすれも柄に接する部分が残っている。

43は鞆と考えられる。屈曲した部分の最も先端部にあたり、先端近くに円形の孔が穿たれている。残存部の下半にはタテハケの調整が見られ、円筒基部との接合部に近い部分と推定される。

図44－24は家形埴輪の堅魚木の部分である。

③動物埴輪（図44、写真53）

馬以外の動物は確認できていない。図44－18は馬の耳、19は鞍、20は馬の脚部にあたる。21～23は馬に付ける鈴の部分である。21は大型で３ヵ所に粘土粒の貼りつけによって突起を表現している。鈴の隙間は横方向を意識している。22は小型のもので、山形の粘土を本体に貼りつけて、縦方向に線刻を入れている。23は球状にした粘土を本体に貼ったもので、横方向の線刻を入れる。

④不明埴輪（図44）

出土した多くの形象埴輪は、ほとんど破片のため何を象ったものか確認できなかった。ここではある程度破片が大きく、特徴的な形をしたものに限り掲載した。

図44－11は円筒基部であるが、何の基部であるかは全くわからない。調整は外面がタテハケ、内面は粗いナナメハケで、靫形埴輪の円筒基部と共通する。

25は刀子の革製鞘の先端部を模したと考えられる。革の縫い目が破線で、革の質感が格子文様で表されているが、何に伴っていたのかはわからない。

27は曲面の一部分であり、中央に細い垂線が付着していて、その両側に線刻が綾杉文状に施されている。

26は靫形埴輪に貼付されていた横帯と類似するものであるが、鋲が３列に貼り付けられている。何かの器財に付けられたものであろう。

30は俵状の粘土の塊であるが、図の左端が鈎形に大きく屈曲しており、その先は欠損している。下面は何かに貼り付けられていた痕跡がある。右端には薄い粘土紐が巻き付けられている。さらに右は欠損しているが、次第に開いていくようである。

以上の形象埴輪の色調は、橙色系が１～20・23・24・26・28・33・34・41～43、赤褐色系が21・22・25・27・29～32・35～40である。靫や人物埴輪・大刀等には橙色系が多く、盾や盾持ち人物には赤褐色系が多い傾向がみられる。埴輪の器種によって産地が異なっていた可能性がある。

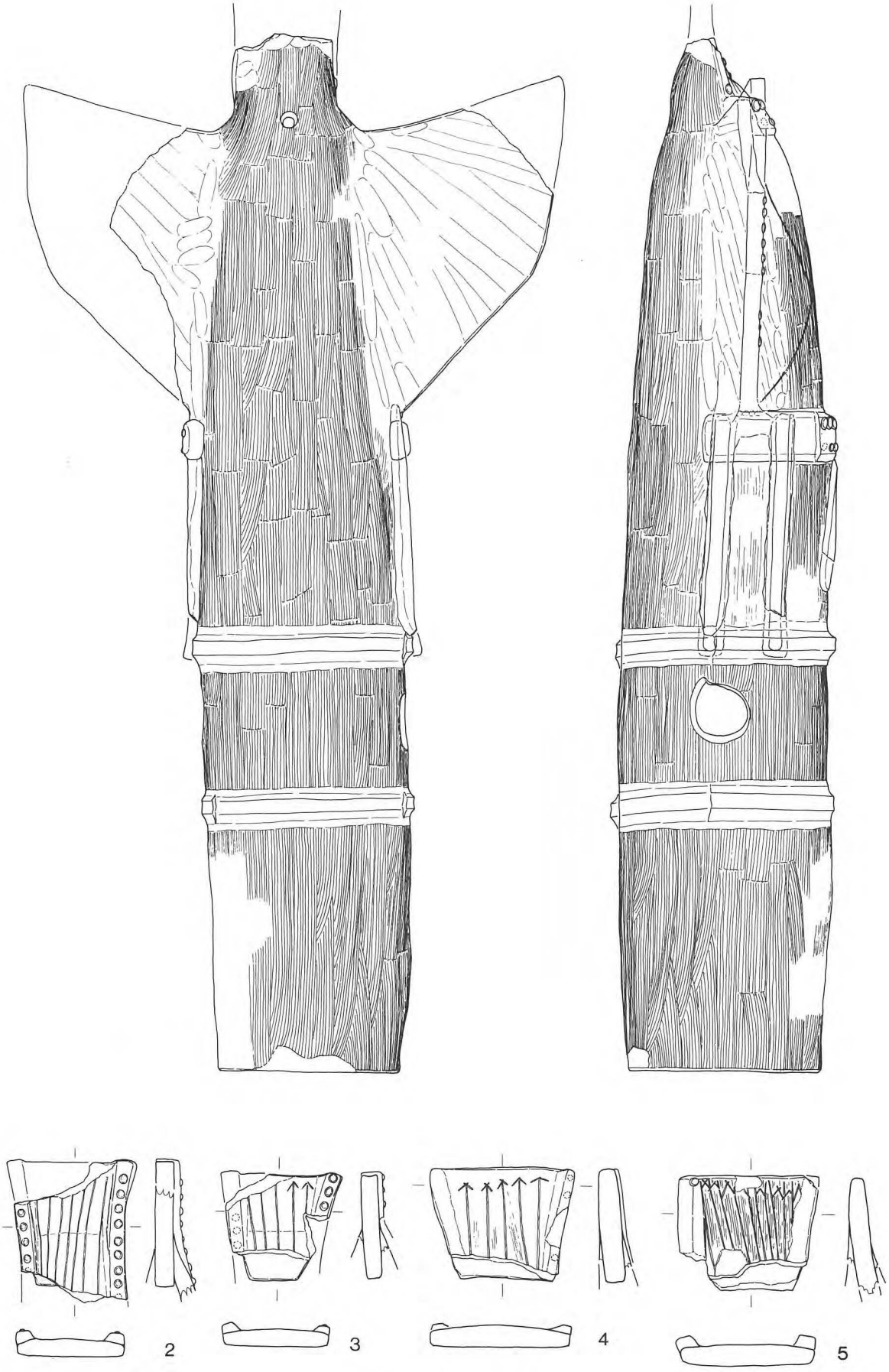


図42　形象埴輪（1）

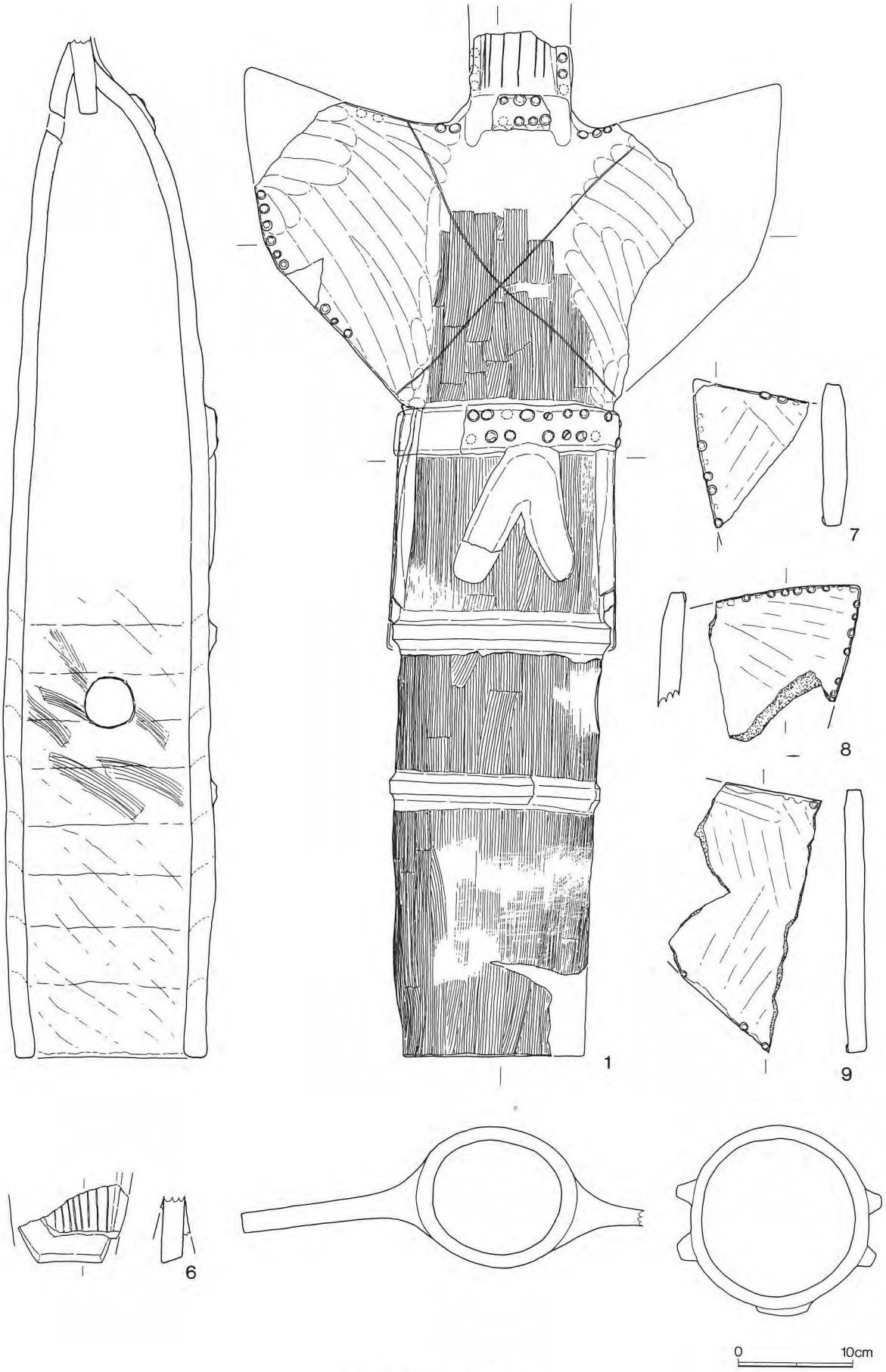


図43　形象埴輪（２）

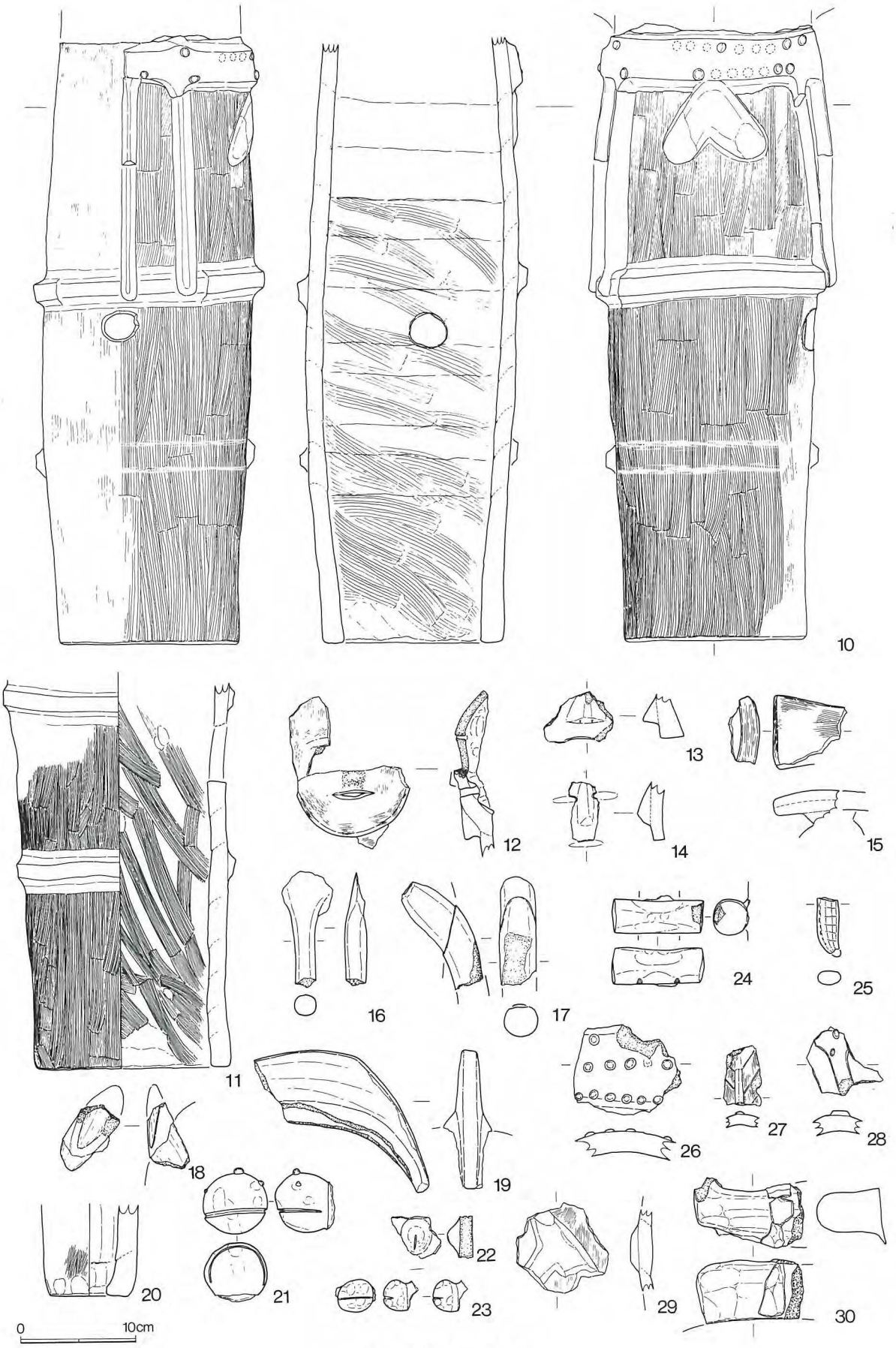


図44　形象埴輪（3）

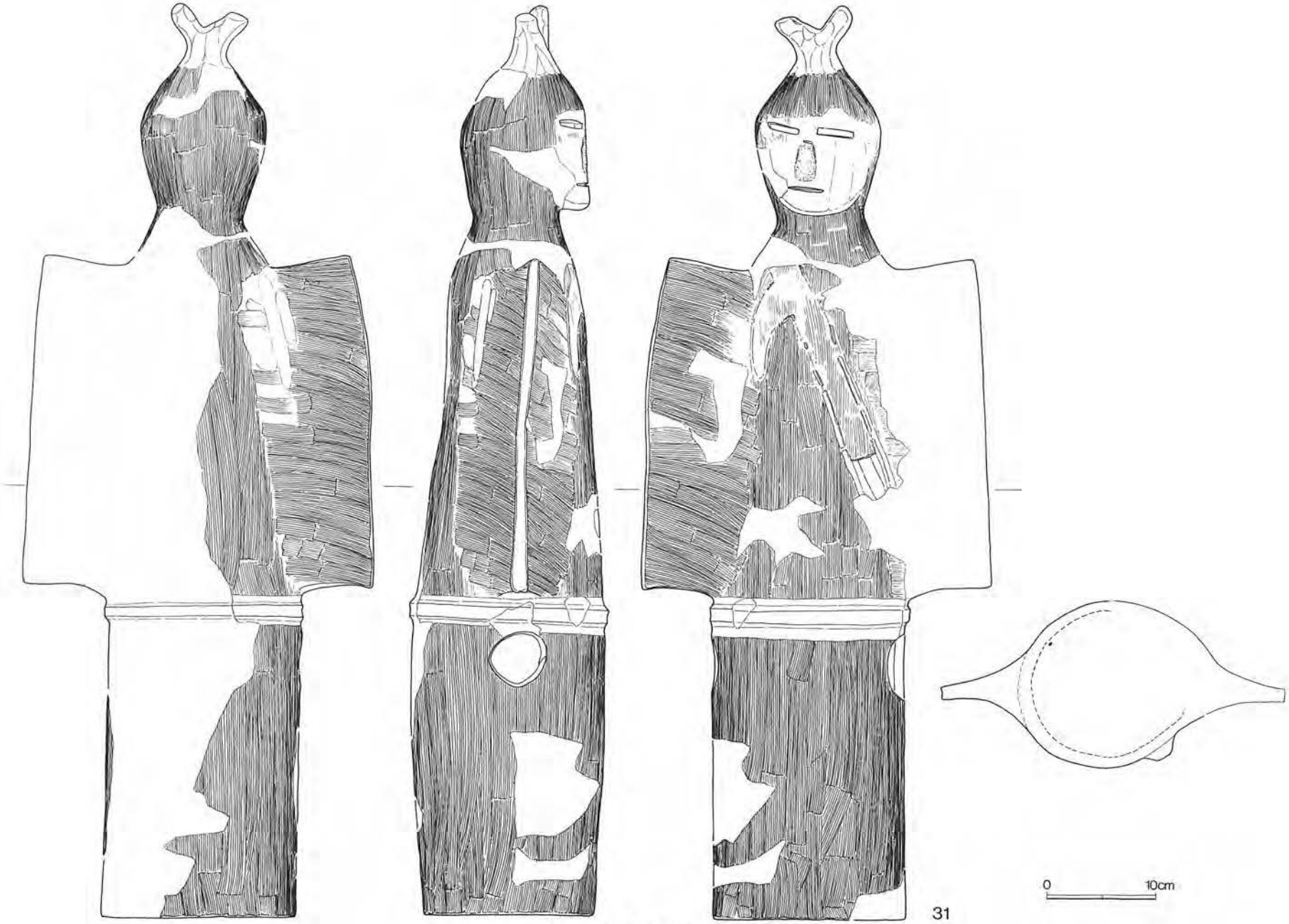


図45　形象埴輪（4）

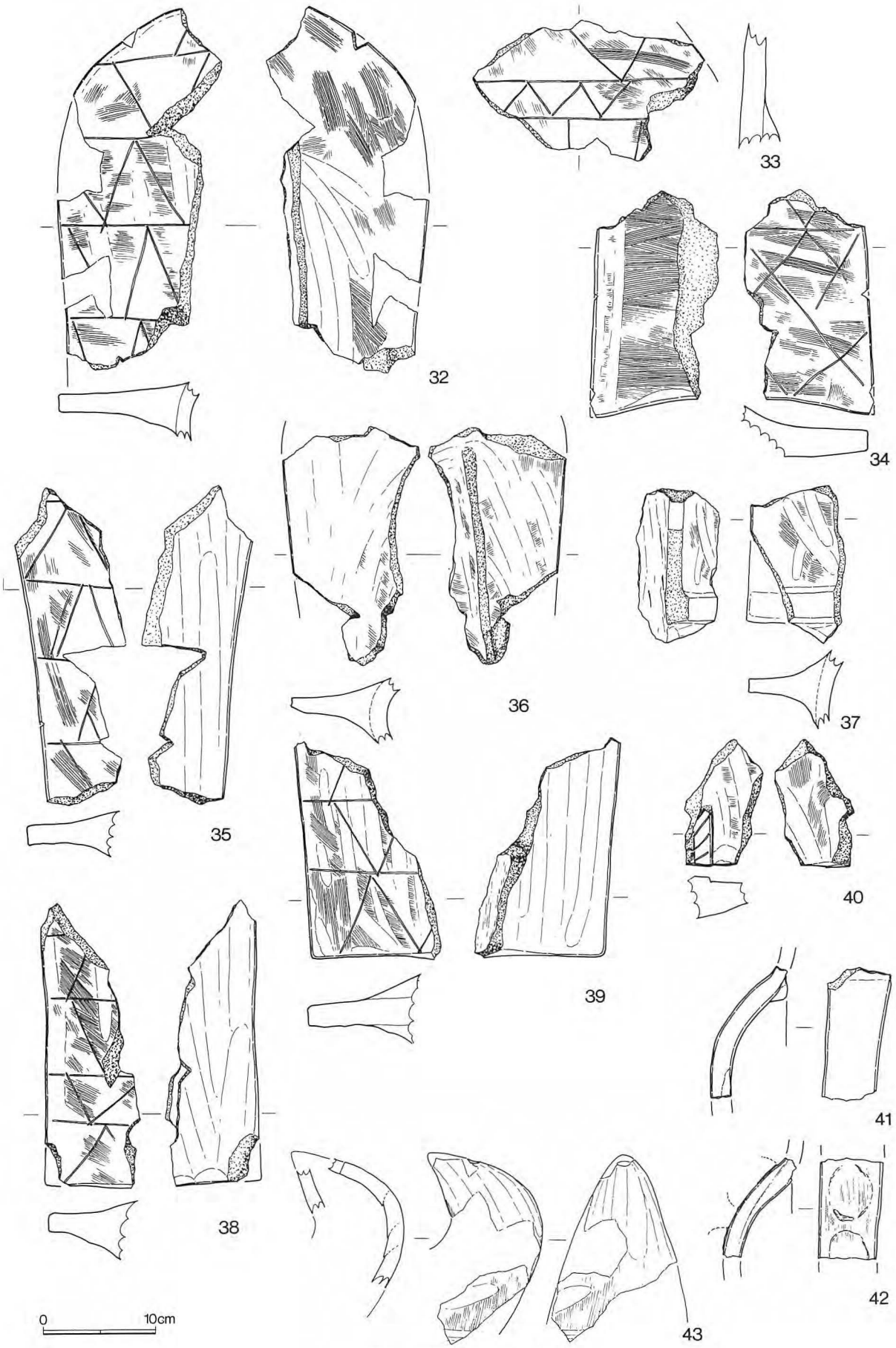


図46　形象埴輪（5）

写真46　盾持ち人物埴輪

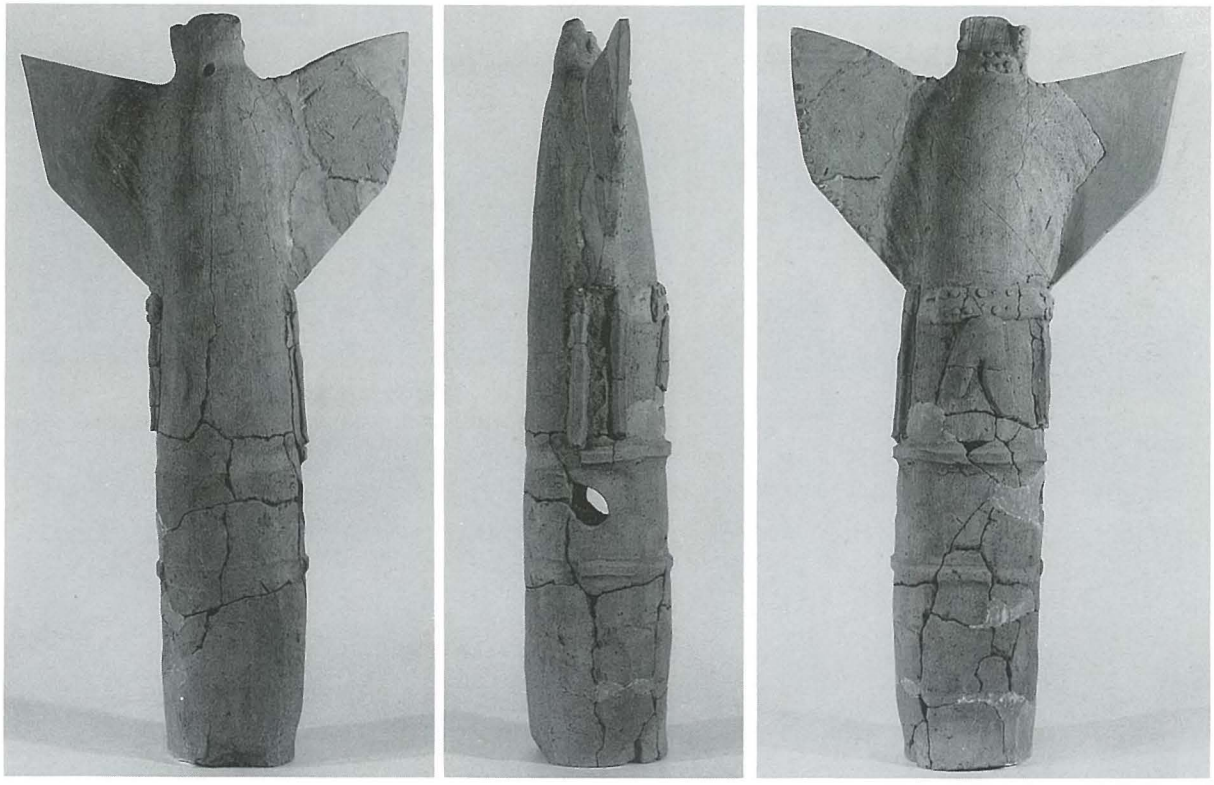


写真47　靫形埴輪

写真48　盾持ち人物埴輪顔面

写真50　靫形埴輪細部

写真49　盾持ち人物埴輪胸部

写真51　靫形埴輪片

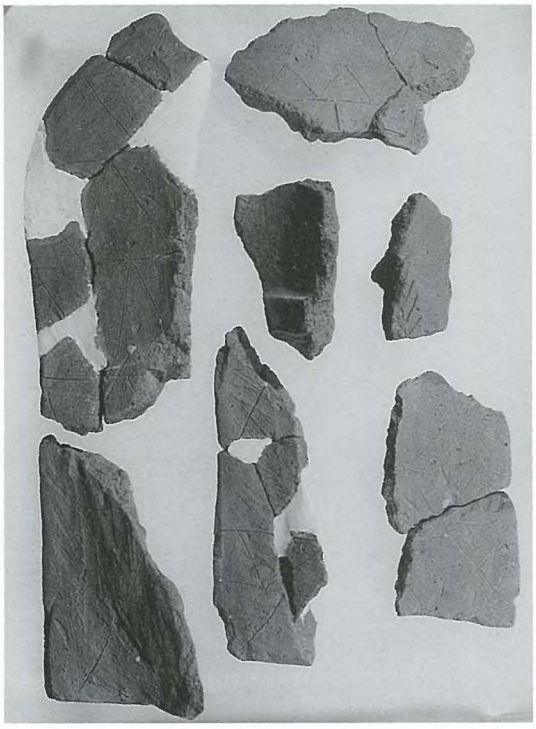


写真54　盾形埴輪片

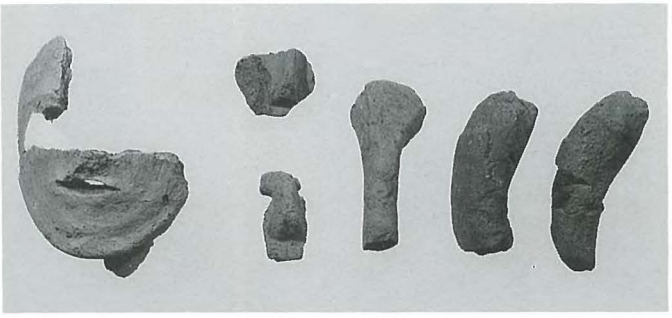


写真52　人物埴輪片

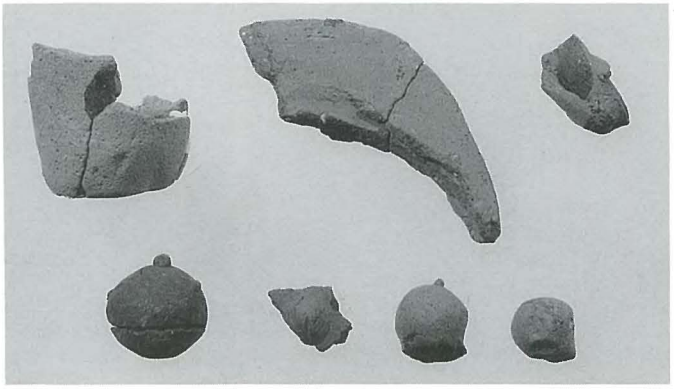


写真53　馬形埴輪片

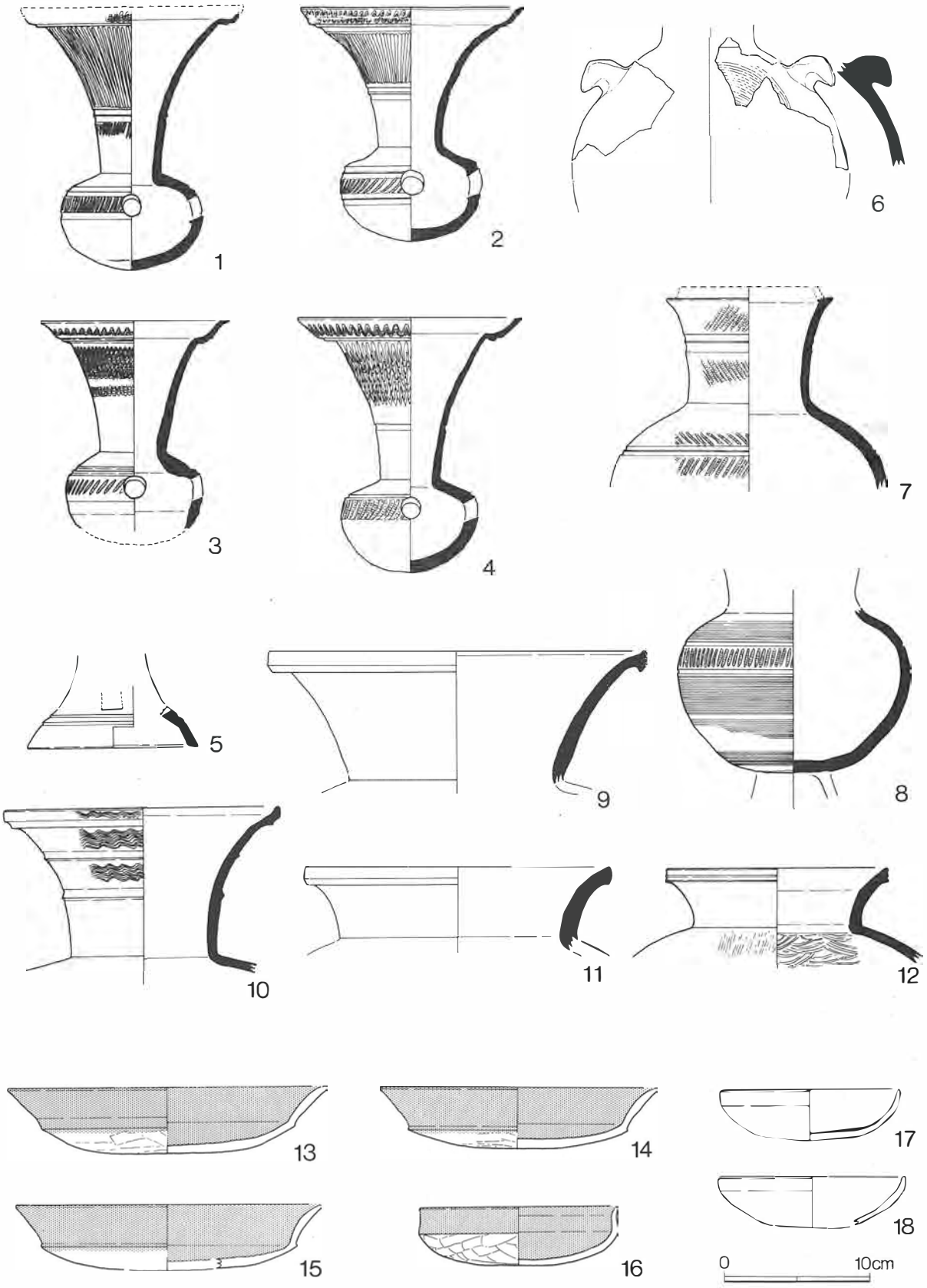


図47　土器（１）（アミかけは赤彩を示す）

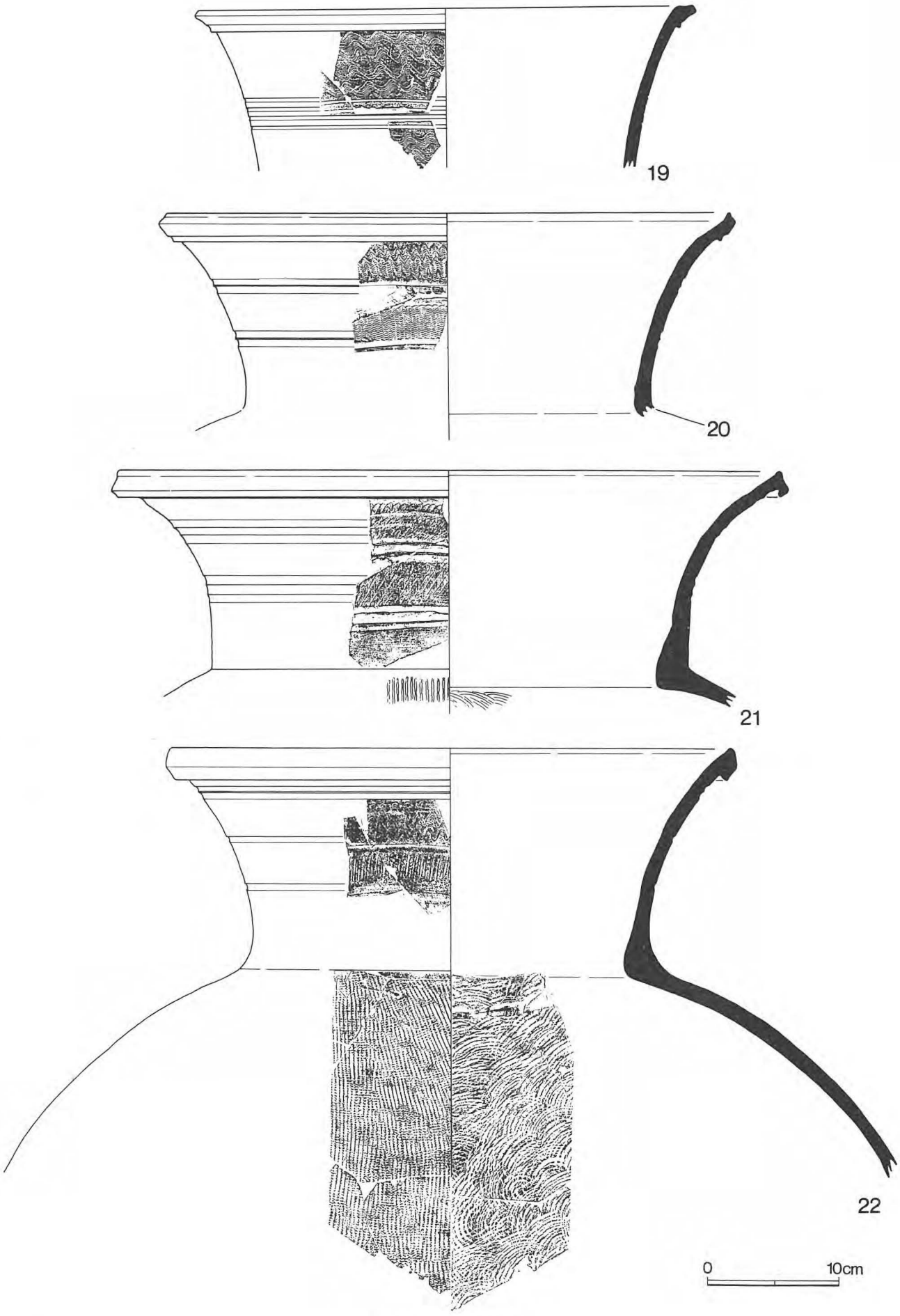


図48　土器（2）

⑶土器（図47・48・表２・写真55）

須恵器と土師器があるが、出土点数は須恵器の方が多い。また出土地点はほとんどが墳丘造出し周辺であり、その他の地点から出土したものは、図示したものでは16の土師器杯が中堤造出しの南側から、17・18の土師器杯が中堤造出しの北側から、９の須恵器広口壺が外堀の前方正面から出土しているのみである。これらの土器は古墳築造時よりも新しい時期のもので、後に堀の中に混入したものである。

造出し周辺から出土した須恵器は、古墳の墓前祭祀で一括して使用されたものと考えられる。確認できた器種は次の通りである。

須恵器：𤮈４以上・高杯３以上・提瓶１・有蓋長頸壺１・台付長頸壺１・広口壺３・甕４

土師器：杯３以上

これらの土器には大きな形式差は見られず、陶邑編年のＴＫ43型式を中心とする時期のものである。石室から出土した高坏（図77参照）も同時期に比定される。

表２　将軍山古墳出土　須恵器・土師器観察表

・色調は『新版標準土色帖』1970年、によった。

図番号	器　種	出土地点	法量(cm)	特　徴	焼成	胎土	色　調	備　考
図47－１	須恵器𤮈	e－６	残高　17.7 口径(復原) 15.3 9.8	口縁部に波状文を巡らす。頸部は中央に２条の凹線を巡らせて上段にヘラ描文、下段に列点文を配す。体部には２条と１条の凹線の間に列点文を施す。	良好	緻密	灰色 (10Y6/1)	底部に置き台の痕跡あり。頸部に自然釉。 写真55
図47－２	須恵器𤮈	e－６	器高　16.0 口径　15.2 体部径　9.6	口縁部に波状文を巡らす。頸部は中央に２条の凹線を巡らし、上段にヘラ描文を配する。体部は２条と２条の凹線間に列点文を施す。	良好	緻密	灰色 (10Y6/1)	頸部の内面と外面に自然釉かかる。 写真55
図47－３	須恵器𤮈	e－６	残高　14.5 口径　15.2 体部径　9.5	口縁端部には段を有する。口縁部及び頸部に波状文を巡らす。体部には２条の凹線の下に列点文を施す。	良好	緻密	灰色 (N6/0)	底部は器壁が薄く欠損。 写真55
図47－４	須恵器𤮈	e－６	器高　17.4 口径　15.3 体部径　9.4	口縁端部は平らに内傾させる。口縁部及び頸部上段に波状文を施し、頸部中央に１条の凹線を巡らす。体部は１条の凹線下に列点文を施す。	やや軟質	緻密	灰色 (N6/0)	体部は器壁の剝離が激しい。 写真55
図47－５	須恵器高坏	e－７ f－５	残高　2.8 脚部径 (復原) 11.6	長方形の透かしがあり、その下に２条の凹線を巡らせる。脚部端部は平らに内傾させる。	良好	緻密	灰色 (N6/0)	
図47－６	須恵器提瓶	e－６	残高　9.3	体部肩部に鈎状把手を付ける。体部前面はカキ目調整を行う。	良好	緻密	灰白色 (N7/0)	片側の肩部のみ残存
図47－７	須恵器 (台付)長頸壺	e－５ e－６	残高　13.4	口縁部には立ち上がりが付く。頸部中央に２状の凹線を巡らし上下段に列点文を施す。体部肩部には２条の凹線を挟んで、列点文を施す。	良好	緻密	灰色 (7.5Y6/1)	
図47－８	須恵器 台付長頸壺	e－４ e－６	残高　11.4 体部径 15.9	体部中央よりも上に、１条と１条の凹線間に列点文を巡らす。体部は全体にカキ目調整。	良好	緻密	灰色 (7.5Y5/1)	
図47－９	須恵器壺	i－15	残高　5.7 口径　20.8	口縁端部を下方に屈曲させ、端部を大きくみせる。	良好	緻密	灰色 (7.5Y4/1)	
図47－10	須恵器壺	f－６ f－７	残高　11.4 口径　19.1	口縁端部外側に断面三角形の突帯を付け、波状文を巡らす。頸部に断面三角形の突帯を２条巡らし、上２段に波状文を施す。	良好	緻密	灰色 (N5/0)	
図47－11	須恵器壺	e－６	残高　9.2 口径　25.9	口縁端部を下方にわずかに屈曲させる。	良好	砂粒多い	灰色 (7.5Y5/1)	

図番号	器　種	出土地点	法量(cm)	特　徴	焼成	胎土	色　調	備　考
図47－12	須恵器壺	e－4 f－5	残高　9.2 口径　15.2	口唇部には２条の凹線を巡らせる。体部は外面に平行タタキ、内面に同心円のタタキを施す。	良好	砂粒多い	灰色 (N6/0)	外面に自然釉かかる。
図47－13	土師器坏	e－6	器高　4.5 口径　22.0	口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。底部はケズリ調整。	良好	緻密	橙色 (7.5YR6/6)	内面と口縁部外面に赤彩。針状物質含む。
図47－14	土師器坏	e－6	器高　4.2 口径　19.0	口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。底部はケズリ調整。13よりもやや小さい。	良好	緻密	橙色 (7.5YR7/6)	内面と口縁部外面に赤彩。針状物質含む。
図47－15	土師器坏	e－6	器高(復原) 4.1 口径　20.9	口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。	良好	緻密	橙色 (7.5YR7/6)	内面と口縁部外面に赤彩。針状物質含む。
図47－16	土師器坏	k－7	器高　3.9 口径　13.5	口縁部は直立し、端部のみわずかに外反する。底部はケズリ調整。	良好	緻密	橙色 (7.5YR6/6) 底部は黒色	内面と口縁部外面に赤彩。７世紀のもの。
図47－17	土師器坏	i－4	器高　3.4 口径　12.4	口縁部は丸みを帯びて立ち上がる。	軟質	緻密	橙色 (7.5YR7/6)	８世紀のもの。
図47－18	土師器坏	i－4	器高（復原） 3.6 口径　12.6	口縁部は丸みを帯びて立ち上がる。	軟質	緻密	橙色 (5YR6/6)	８世紀のもの。
図48－19	須恵器甕	f－6・7 g－4	残高　12.2 口径　37.8	口縁端部を肥厚させ、外面には断面三角形の突帯を巡らせる。頸部には４条の凹線を巡らせてその上下に波状文を施す。	やや軟質	緻密	灰白色 (5Y7/1)	
図48－20	須恵器甕	e－6 f－6 g－6	残高　15.5 口径　43.4	口縁端部を肥厚させ、外面には断面三角形の突帯を巡らせる。頸部には２条の凹線を２単位巡らせ、上２段に波状文を施す。	良好	緻密	灰色 (N5/0)	頸部外面に自然釉かかる。
図49－21	須恵器甕	f－5～8 g－7・8	残高　15.5 口径　50.7	口縁端部は斜め下方に屈曲させる。頸部には上から２条・３条・３条の凹線を巡らせそれらの間に波状文を施す。体部は外面に平行タタキ、内面に同心円文のタタキを施す。	良好	緻密	灰色 (N6/0)	
図49－22	須恵器甕	e－7 f－5・7 g－5・6 i－6	残高　33.1 口径　43.0	口縁端部を下方に屈曲させる。頸部には上から２条・１条・１条の凹線を巡らせ波状文とヘラ描きの櫛目文を施す。体部には外面に平行タタキ、内面に同心円文タタキを施す。	良好	緻密	灰色 (N6/0)	

写真55　須恵器瓶

V　確認調査のまとめ

平成３年度から７年度にかけて行った将軍山古墳の確認調査では、遺構の範囲の確認という当初の目的を果たしたばかりではなく、埼玉古墳群の研究においても画期的な成果をもたらした。この項では、今回の調査で明らかになった古墳の形態や規模・主体部・埴輪・土器についてまとめ、今後将軍山古墳の性格を考えていく上での基礎資料としておきたい。

１　墳丘

⑴墳丘の規模

墳丘はすでに南東側片面と後円部の上半部がほとんど失われ、現状からは墳丘のもとの姿はうかがうことが困難であった。航空測量等から墳丘の規模については、全長102m・後円部直径57m・前方部幅50mと推定されていた。しかし、調査の結果、全長90m・後円部直径39m・前方部幅68mとなることが判明した。このように従来の推定が大きくずれていたのは、後円部北側に削平された墳丘の土が多く堆積していたり、前方部が予想以上に広がっていたりしたためである。前方部の高さは古墳時代の旧地表面から約８mで、後円部の高さは約３mの部分まで残存していた。二段築成で、中段部は後円部で標高約20.4m前後のところで巡るが、前方部の正面では標高20.8～21.6mとなり、平坦面は水平ではなく、後円部から前方部の正面に向かって徐々に上がっている。墳頂部の平坦面は封土の流失のため明確にはわからないが、現墳丘の傾斜のようすから推定して、前方部正面で幅約20mくらいであっただろう。

将軍山古墳は埼玉古墳群内では全長が４番目に大きい前方後円墳であり、県内でも９番目を誇っている。しかし６世紀後半という時期を限定すれば、同じ行田市内の同等の古墳として挙げられるものに、真名板高山古墳（全長104m）、天王山塚古墳（全長107m）がある。いずれも将軍山よりも大きいもので、それまで埼玉古墳群が武蔵国の中で最も優位を誇っていたことからみると、埼玉古墳群の被葬者集団の権威が、次第に衰退してきたことを物語っているのだろうか。

⑵墳丘造出し

将軍山古墳の墳丘造出しは、後円部北西側の最もくびれ部寄りに付いている。群内の他の古墳は、稲荷山・奥の山は将軍山と同様に後円部に、二子山・瓦塚は前方部くびれ部寄りに付き、鉄砲山・愛宕山・中の山は不明であるが、鉄砲山は現地形では前方部くびれ部寄りに付く可能性が高い。中の山は調査位置に造出しが検出されなかったことから、少なくとも前方部に付くことはないようである。造出しの位置の相違がなぜ生じるのかは不明であるが、築造時期の違いではないようである。いずれの古墳でも造出しが墳丘の北西側にのみ付き、南東側には見られない事実は重要である。後に述べるように、中堤造出しがやはり墳丘の北西側にあり、その周辺から多くの形象埴輪が出土することから、従来から墳丘北西側に正面としての意識があったのではないかと言われてきた。今回の調査によって将軍山古墳も他の古墳と同様に、墳丘北西側を重要視していたことが明らかとなっ

た。これは榛名山や赤城山を指向しており、あたかも上毛野地域に対して威厳を示しているようでもある。埼玉古墳群の前方後円墳の中軸がすべて同じ方向なのも、このような理由からかもしれない。

また、土器の項でも述べるとおり、埼玉古墳群の古墳で最も土器が集中して出土するのは、墳丘造出し周辺であり、その器種を見ると供献的・祭祀的色彩が強いものである。将軍山古墳では靫形や盾形の埴輪が立てられていたと推定され、防御的な武具に囲まれた空間での、祭祀行為が想定されるのである。

⑶築造規格

埼玉古墳群の前方後円墳の築造規格については、二子山古墳が大阪府大山古墳（伝仁徳天皇陵）と同じ規格であることは、これまで指摘されていたが、その他の古墳についてはあまり触れられていなかった。本稿ではこの古墳群の規格性について考えるが、以下は塚田良道氏の御教示に基づく点が多く含まれており、氏の快諾を得て記述した。

岸本直文氏はすでに畿内を中心として、前方後円墳についての築造規格を墳丘の実測図を比較することによって、視覚的に説得力のある論考を展開しているが［文献２］、同様な方法で埼玉古墳群の古墳を比較してみた（図49）。

まず、墳丘全長をすべて統一してコピーし、それぞれ墳丘の中軸線で折り曲げ、接合させて比較した。その結果、稲荷山・二子山・愛宕山・鉄砲山・瓦塚・奥の山の６古墳は、全く同じ規格となり、すべて相似形であることがわかった（ただし、愛宕山・鉄砲山・奥の山は墳丘形態が発掘調査で確認されていないので、今後変更する可能性もある）。後円部の径が墳丘全長の約1/2となるもので、これを仮に「稲荷山型」と呼ぶ。

図49のＡによると、「稲荷山型」は大山古墳とも同じ規格であり、さらに稲荷山古墳は大山古墳のちょうど1/4の大きさになる（ただし、大山古墳の下段は水没していて、実際にはさらに大きいともいわれる）。内堀の規模も大山古墳と相似形となり、稲荷山古墳が大山古墳の築造規格に合わせて造られたことは明らかであろう。これはＢの二子山古墳と大山古墳の比較においては、造出しの位置や等高線の疎密に至るまで、さらに顕著に規格の同一性が認められる。

Ｃは瓦塚古墳と二子山古墳を比較したもので、瓦塚は二子山のほぼ1/2の大きさであり（瓦塚の後円部の頂部はくびれ部側がやや変形しているので、やや等高線にズレがある）、堀の形態や規模についても相似形である。またＤは奥の山と二子山を比較したもので、やはり奥の山は二子山の1/2で、墳丘の等高線も一致している（奥の山は周堀復原前の実測図で比較した）。したがってＥのように、瓦塚と奥の山は同規模墳であり、瓦塚の内堀と奥の山の周堀（奥の山には一重の堀しか確認されていない）の幅も一致するようである。

Ｆは二子山と鉄砲山を比較したもので、図には現れていないが、やはり周堀も相似形となる。Ｇは鉄砲山と愛宕山を比較している。愛宕山は墳形が明確ではないが、発掘された部分からみて、鉄砲山の1/2の相似形になると考えられる。

さてＨは将軍山と二子山を比較したものであるが、後円部の径や前方部の幅等のバランスが全く

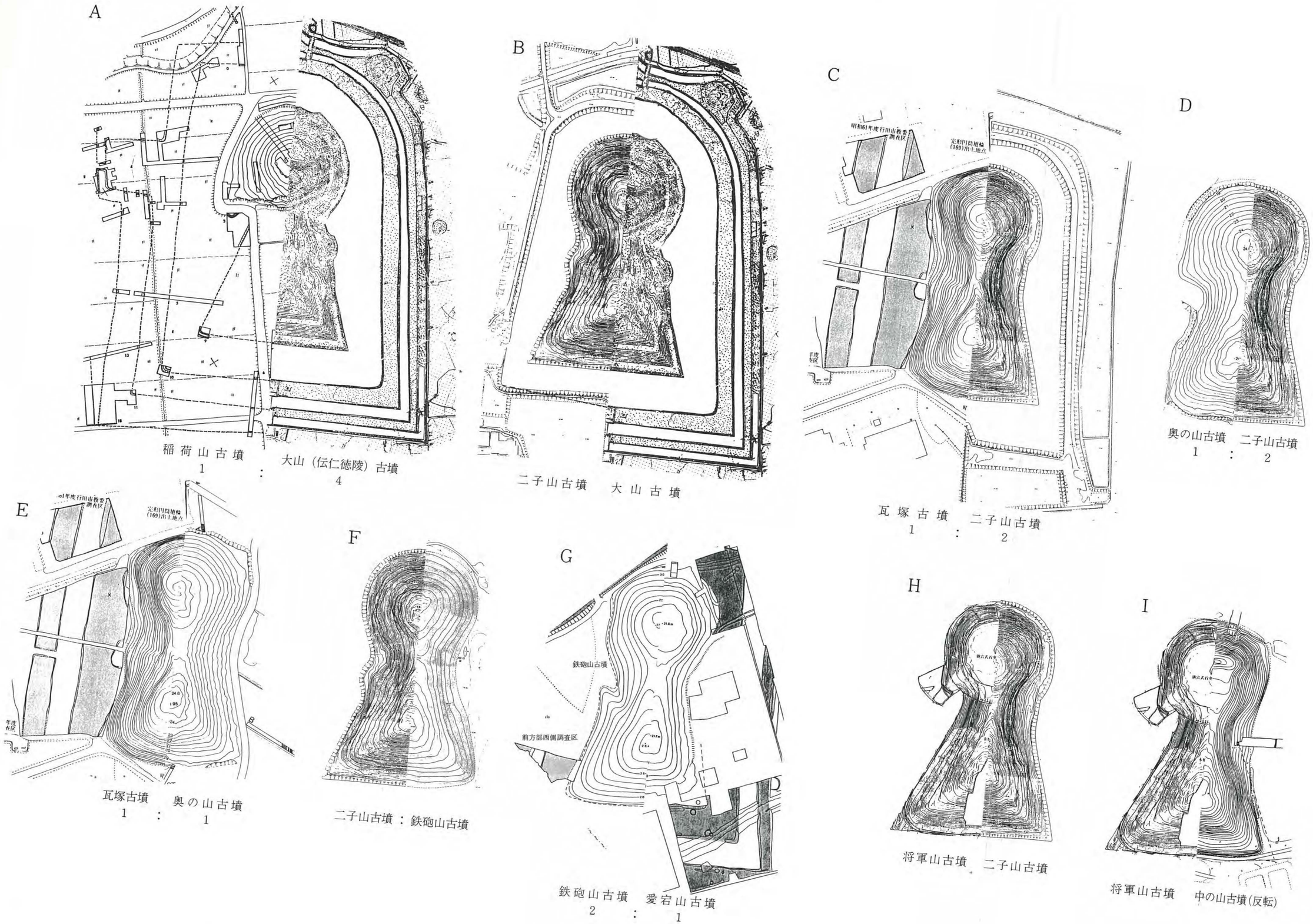
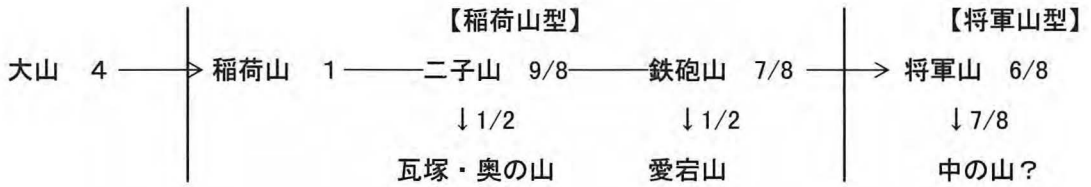


図49　埼玉古墳群前方後円墳の比較

異なっているのが明らかであろう。将軍山は後円部径が全長の4/9となり、後円部が相対的に小さくなっている。この形態を仮に「将軍山型」と呼ぶ。なおＩのように中の山古墳は現状の測量図を見ると「稲荷山型」と一致するようであるが、昭和62年の発掘調査で、現状よりもくびれ部墳丘の幅が狭かったことが判明しており、その結果を尊重すると「将軍山型」に近い可能性がある。今後の調査に期待したい。

ここで、稲荷山の全長を１とすると、二子山は9/8、鉄砲山は7/8、将軍山は6/8となり、これらの首長墓系の古墳は、稲荷山の1/8が単位となって、墳丘の大きさが決定されているようである。ちなみに、中の山が「将軍山型」とするならば、将軍山の7/8の大きさとなり、ここでも1/8が一つの単位となっている。以下で各古墳の規模をまとめておく。



このように、埼玉古墳群の前方後円墳は、極めて規格的に造営されていることがわかった。

さて、「稲荷山型」は大山古墳と相似形を成していたが、「将軍山型」にはモデルがあったのだろうか。６世紀になると、全体的に畿内の前方後円墳は、後円部の径が小さくなり、前方部幅が広がる傾向にあるが、「将軍山型」と相似形となる古墳は畿内では今のところ見いだしていない。しかし目を房総に転じると、富津市内裏塚古墳群の中で、古塚・三条塚・稲荷山の３古墳が「将軍山型」と同類である（図50）（原図は［文献３］）。この古墳群では内裏塚や九条塚などの６世紀前半までの古墳は「稲荷山型」と類似しているが、６世紀中頃以降に造られた上の３古墳は「将軍山型」に変化している。このような変化は埼玉古墳群と一致した現象であり、この地域に隣接する海岸で採取される房州石が、将軍山古墳の石室の石材に使用されていることと考えあわせ、房総の豪

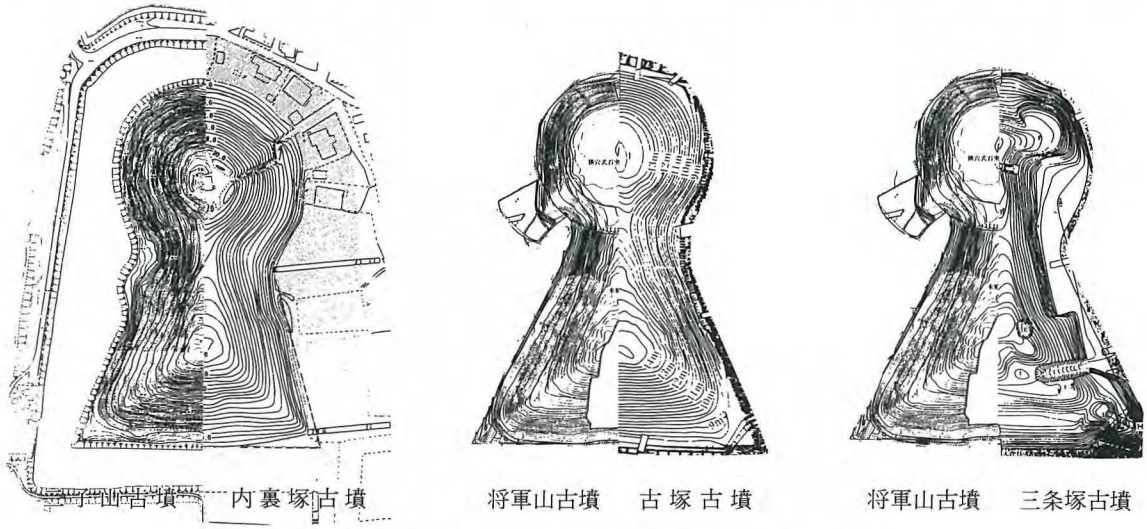


図50　埼玉古墳群と内裏塚古墳群の前方後円墳の比較

族との関連が想定される。

なお「稲荷山型」に比べて、この「将軍山型」は周囲の古墳にあまり影響を与えなかったようである。さきたま周辺の大型前方後円墳としては、６世紀前半の永明寺古墳、６世紀後半の真名板高山古墳・天王山塚古墳、６世紀末ころの小見真観寺古墳があり、いずれも墳丘の変形が激しいため明確ではないが、「稲荷山型」に属する可能性が高い。横穴式石室の項で述べるように、将軍山と類似する片袖式の横穴式石室をもつ古墳が、「将軍山型」である可能性もあるが、いずれも墳形の変形が著しく現状では確認できない。

毛野地域の古墳との比較は十分に行ったわけではないが、今のところ「将軍山型」の古墳は管見に触れていない。

以上のことから、少なくとも次のようなことが考えられるだろう。５世紀後半に北武蔵地域に突然現れた稲荷山古墳の被葬者は、金錯銘鉄剣にみられるように、大和の肝煎りで武蔵国で最も大きな権力をもった豪族になった。墳墓も畿内で最大の大山古墳をモデルに1/4の大きさで築造し、その後も稲荷山の形態を基本に次々と築造していった。しかし６世紀後半に将軍山古墳に横穴式石室を導入することになり、新たに設計方針を変換したのが「将軍山型」であったのだろう。この変化が何を意味するのかはわからないが、房総の古墳と期を一にして墳形を変化させていることから、第三者すなわち大和の管理のもとで行われたものと考える。おそらく埼玉古墳群の被葬者は、常に房総を通して東海道経由で大和とつながっていたのであろう。これは上毛野の古墳と全く築造規格を異にしているのとは対照的な現象であり、大和の東国経営のようすの一端をここから読み取ることができるかもしれない。

しかし、この「将軍山型」は周囲の古墳にあまり普及しないまま消滅しているのは、この時期になると、さきたまの豪族の権威が次第に衰弱してくることと関連するのではないか。官僚的な国家組織が編成されるにつれて、かつて上毛野に対抗する形で登場したさきたま政権も、その役目が終わりつつあったのだろう。

２　周堀

(1)周堀の形態

埼玉古墳群の古墳は二重の長方形の堀が巡ることが知られている。国内を見回してもほとんど例を見ない特異な形態である。後円部側の堀のコーナーを検出したのは、稲荷山・愛宕山・中の山のみであるが、二子山や瓦塚・鉄砲山も検出した堀のラインから、長方形であると推定して間違いなさそうである。長方形といっても検出された後円部側の堀のコーナーの角度はいずれも鈍角であり、後円部に沿って曲線にあるいは直線的に広がっているようである。奥の山はトレンチ調査の結果馬蹄形の一重堀とされているが、わずか３本のトレンチを調査しただけなので、今後変更の余地があろう。

将軍山古墳にも二重の堀が巡ることは従来から知られていたが、今回の調査区の範囲では堀が長方形かあるいはその他の形態を示すのかは、残念ながら確認することができなかった。おそらくは埼玉古墳群で伝統的な長方形堀がめぐらされていただろう。ただ、後円部周辺の堀が一段深くなっ

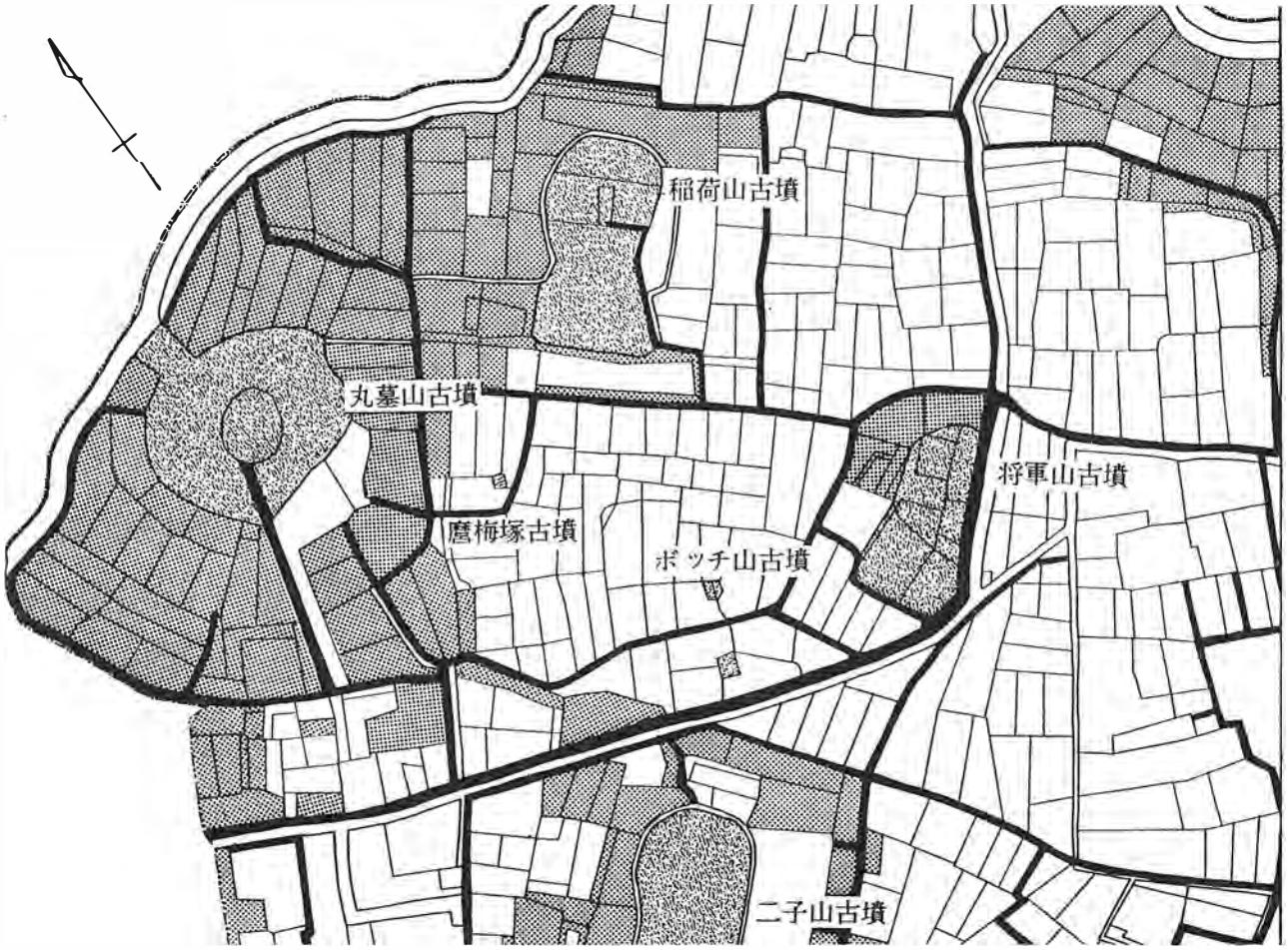


図51　地籍図に表された将軍山古墳（[文献１] から転載）

ている部分は、後円部の墳丘ラインに沿って曲線を描いており、史跡指定当時の地籍図では、将軍山古墳の周辺の田畑が曲線を描いて後円部墳丘を巡っている（図51）。これらのことから、この古墳の周堀が長方形ではなく、馬蹄形を示すのではないかとの推測も成立する。事実の解明は今後の調査に委ねたい。

⑵中堤造出し

中堤には外堀に向って造出しが存在していた。墳丘の造出しと並ぶ位置にあり、外堀は中堤造出しを巡らず、２ｍほど入り込んだ部分で断絶しているので、広いブリッジ状になっている。中堤造出しは、稲荷山と二子山ですでに検出しており、瓦塚には存在していなかった。他の古墳ではこの部分が未調査なので、その有無は不明である。

中堤造出しの形態変化を追ってみる(図52)。稲荷山では長方形を呈し、外堀も造出しを囲むように外側に突出しており、１ヵ所ブリッジとして掘り残されている部分があった。二子山では台形となって、外に向かって大きく広がっている。調査報告書では明らかにされていないが、外堀は稲荷山と同様に造出しを囲むように、外側に突出していたと想定されよう。やはり１ヵ所ブリッジがあり、造出しと外界とを結んでいる。将軍山では、二子山よりもさらに大きく広がる傾向を示し、外堀が造出しを巡っておらず、わずかに痕跡として残っているのみである。これは稲荷山→二子山→将軍山の形態変化を示しているが、二子山から将軍山への変化には相当大きな隔たりがある。

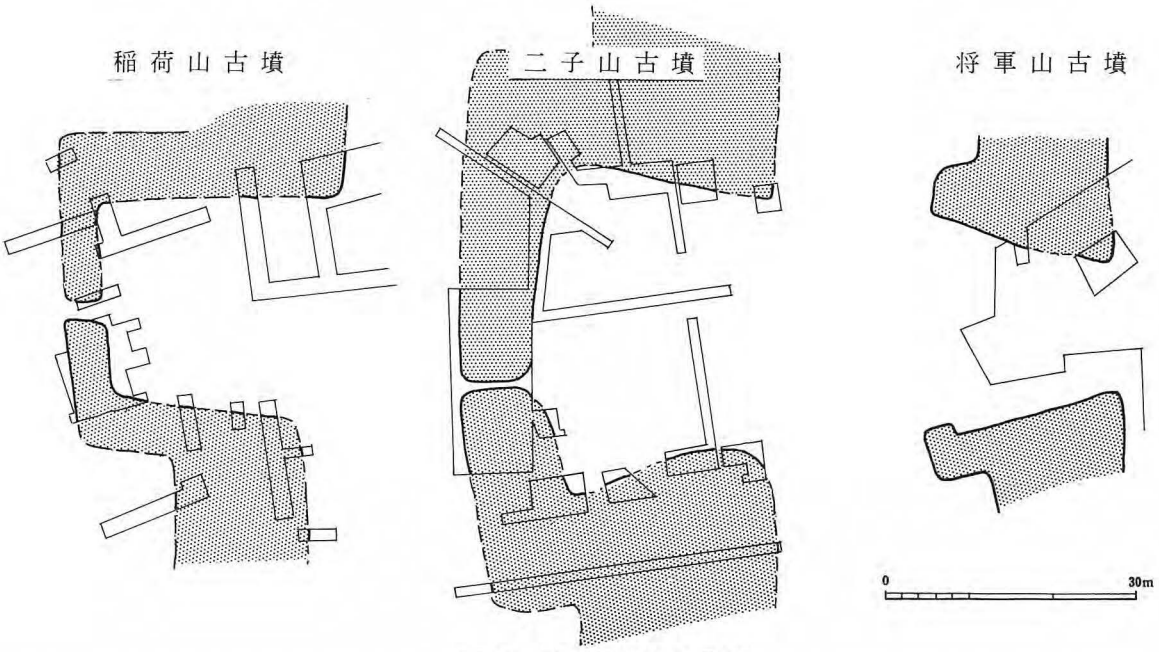


図52　中堤造出しの形態

さて、未調査の古墳が多いものの、中堤造出しがある古墳とない古墳が併存している事実は重要である。稲荷山・二子山・将軍山という大型の古墳にあって、やや規模の小さい瓦塚に無いことから、おそらくは埼玉古墳群を築いた集団の中でも、首長級の人物が葬られる際に必要とされた施設なのであろう。稲荷山ではこの中堤造出しの周囲から多くの形象埴輪が出土し、今回の将軍山でも形象埴輪が比較的多く出土していることから、何かしらの儀式等が行われた神聖な領域ではないかと考えられる。しかし土器がほとんど出土しないことから、墳丘造出しで行われる祭祀とは異質のものであっただろう。

なお首長墓にのみ中堤造出しがあるとするならば、古墳の規模からみて鉄砲山にも存在したと推定される。時期的には二子山と将軍山の間に位置するもので、稲荷山→二子山→鉄砲山→将軍山という首長の系譜が想定される。

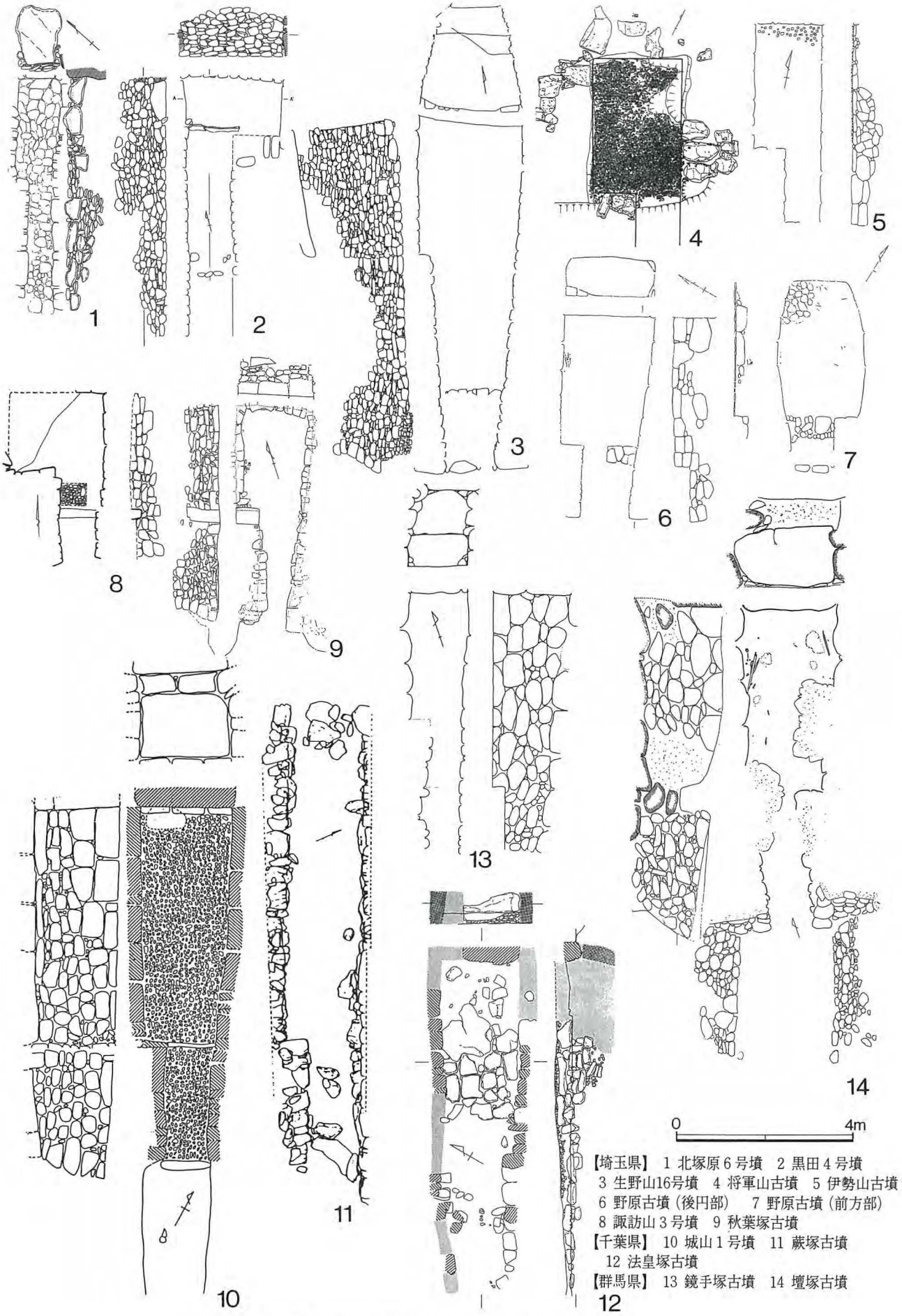
3　主体部

主体部は後円部から横穴式石室、前方部から木棺直葬の土壙を検出した。

(1)横穴式石室

本文で記したように、1894年の発掘で多くの副葬品が出土した横穴式石室であるが破壊が激しく、玄室は床面と根石の一部分しか残存せず、羨道は土取りによってほとんど失われていた。わずかに残った石の位置や、石の抜き取り穴の痕跡から、玄室幅2.0m・長さ3.2m、羨道幅1.0mの右片袖式の石室であることが判明した。

周辺の民家の庭に置かれている、将軍山の天井石といわれる緑泥片岩の大きさからみて、天井幅を約1.2mくらいと推定し、玄室高は大人が立って歩けるくらいの約1.8～2.0mと想定した［文献5］。また羨道長は、羨道入り口が後円部の中段部の平坦面に接しているとすると、約７mの長さが必要であるが、玄室長が3.2mであるのに比べ、かなり長くなってしまう。しかし、片袖式の石



【埼玉県】 1 北塚原6号墳　2 黒田4号墳
3 生野山16号墳　4 将軍山古墳　5 伊勢山古墳
6 野原古墳（後円部）　7 野原古墳（前方部）
8 諏訪山3号墳　9 秋葉塚古墳
【千葉県】 10 城山1号墳　11 蕨塚古墳
12 法皇塚古墳
【群馬県】 13 鏡手塚古墳　14 壇塚古墳

図53　関東における主な片袖式横穴式石室

室でこれほどの長い羨道は他に例がない。また中段部まで墳丘を盛った後に石室床面を築いているので、羨道が傾斜しているとすると、墳丘の積み方が困難である。したがって、羨道の長さは玄室と同じくらいの約３ｍで、前庭部が広く設けられていたと考えた。

次に関東地域における、片袖式の石室を概観しておきたい(図53)。

武蔵では比企郡や児玉郡に集中し、６世紀前半から７世紀初頭にかけての時期に継続的に造られた。現在のところ将軍山を含めて８基の古墳を確認している。神川町北塚原６号墳・花園町黒田４号墳は円墳であるが、他は前方後円墳である。中でも踊る埴輪が出土したことで有名な江南町野原古墳には２基の片袖式石室があった。

石室の形態や規模からみて、最も類似するのは熊谷市伊勢山古墳である。野原古墳後円部の石室は羨道が一段高くなる点が将軍山とは異なるが、玄室だけをみると類似している。東松山市秋葉塚古墳では石室袖部に大きめの石を立てているが、この手法は後出的な要素で、胴張り形態の出現と前後して、６世紀末頃から現れるのではないか。黒田４号墳や東松山市諏訪山３号墳は横長の形態を示し、また框石の施設があって、将軍山の石室とは大きく異なっている。

以上から、片袖式石室の中でも、将軍山と共通する形態を示すのは、伊勢山古墳・野原古墳（後円部）・秋葉塚古墳であり、いずれも埼玉古墳群の近隣に位置し、６世紀後半から末ころに築かれたと推定され、時期的にも大きな差はない。墳丘形態をみると、野原古墳は変形が激しいため比較することはできないが、伊勢山古墳と秋葉塚古墳は後円部径が前方部の長さに比べて小さい点で、将軍山と類似するようである。ただし実測図が粗く、墳丘の変形もあって、今後調査されることを期待したい。これらの古墳の横穴式石室は、それぞれの地域では最も古いものであり、埼玉古墳群で将軍山古墳に初めて横穴式石室が導入されたのを契機にして、同じ形態の石室を築いたのではなかろうか。

また児玉郡周辺の横穴式石室は上毛野地域からの影響が強いようである。上毛野では６世紀初頭には横穴式石室が造られ始めており、児玉郡でも６世紀前半代には小型の古墳に採用されている。上毛野では無袖式や両袖式の長大な石室が主流であり、児玉郡域の群集墳でも主流は無袖式である。片袖式の石室は無袖式から派生したもので、決して主流とはなっていない。生野山16号墳では、袖幅が狭く、羨道入り口に向かって羨道幅が狭くなっていくのは、その影響と考えられる。

房総では城山１号墳や法皇塚古墳、蕨塚古墳などの導入期の石室に片袖式の例が見られる。城山１号墳や法皇塚は６世紀中葉～後半に築かれたとされ、将軍山とは近い時期にあたる。しかし形態的には玄室幅に比べて長さが長いもので、その後の袖の明確でない金鈴塚古墳等につながっていく形態である。蕨塚は房州石を利用した石室であるが、より一層長い玄室をもっている。

下毛野は上毛野とのつながりでとらえられ、縦長の無袖式や両袖式の石室が主流となっているが、初期の段階では、片袖式の石室が数基みられるが、将軍山の石室とは形態が異なる。

以上のように、将軍山に類似する横穴式石室は、その類例が少なく、天井形態まで明らかな古墳がない。しかし、平面形態や規模・框石が無いこと・壁面の石材を小口積することなどから、畿内の古式横穴式石室と類似する傾向を指摘することができよう。埼玉古墳群で横穴式石室を導入する際に、畿内の石室形態をそのまま取り入れたことも考えられるが、この時期の畿内では、大型古墳

の石室は両袖式が主流であり、羨道幅が玄室幅の1/2の片袖式はすっかり時代遅れとなっていた。したがって現状では、将軍山の石室の源流を直接畿内に求めるのは難しい。とりあえずは、将軍山の石室の関東における特異性と、畿内の初期横穴式石室との類似性を指摘することに留めておく。

⑵木棺直葬

前方部の墳頂付近から木棺を直葬した土壙を検出した。木棺の両小口にあたる部分に緑泥片岩の板石を置き、その上に長さ約180㎝、幅約50㎝の木棺を東枕にして東西方向に安置し、両小口は粘土でしっかりと固定させ、さらに木棺側板にも緑泥片岩を立てて安定させていた、と推定した。副葬品はガラス小玉が168点出土したのみである。

木棺は大人１人がやっと入るくらいの小さなもので、馬具や武器類が多く出土した横穴式石室と比べ、副葬品の貧弱さは著しい。また横穴式石室は追葬が可能でありながら、石室内には葬られず、わざわざ前方部に埋葬されている。このことから、石室に葬られた人物との身分的な格差が顕著である。ただし、木棺直葬施設から出土したガラス玉は、横穴式石室から出土したものと全く同じ種類のものであり、石室の被葬者と同じガラス玉を共有しうる間柄でもあった。

後円部に横穴式石室があって、その他に竪穴系埋葬施設をもつ古墳を、管見に触れた限りで集成したものが表３である。なお、前方部やくびれ部にも横穴式石室をもつ例は全国的に40例ほどある。

この表から、①副葬品が後円部横穴式石室に比べて非常に貧弱であること、②それぞれの地域の横穴式石室導入期の古墳が多いこと、③必ずしも大型の前方後円墳に限らないこと、などが指摘できる。ただし、これらの竪穴系の埋葬施設は、墳丘の発掘調査を経て初めて認識できるものであるから、今後の調査によっては次々と発見される可能性もある。

表３　後円部に横穴式石室をもち、その他に竪穴系埋葬施設をもつ前方後円墳

所在地	古墳名	全長m	埋葬施設	位置	出土遺物	後円部主体部の主な遺物	築造時期
埼玉県行田市	将軍山古墳	90	木棺直葬	前方部	ガラス玉	装身具　武器　馬具　銅鋺	６世紀後半
埼玉県東松山市	秋葉塚古墳	38	竪穴式石槨	前方部	不明	直刀　鉄鏃	６世紀末～７世紀初
埼玉県東松山市	長塚古墳	41	竪穴式石槨	前方部	不明	直刀　鉄鏃　銀環	６世紀後半
群馬県前橋市	正円寺古墳	73	竪穴式石槨	くびれ部	なし	大刀　鉄鏃	６世紀前半～中葉
大阪府高石市	富木車塚古墳	45	木棺直葬	後円部２ 前方部３	土器　装身具	装身具　武具　馬具　土器	６世紀前半～中葉
大阪府能勢町	弥五郎谷古墳	18	竪穴式石槨	造出し部	不明	不明	
和歌山県和歌山市	大谷山28号墳	25	箱式石棺		不明	金製耳飾垂飾　土器	
和歌山県和歌山市	大谷山６号墳	25	竪穴式石槨	くびれ部	土器	帯金具　鉄刀　土器	６世紀前半
福井県上中町	向山１号墳	48.6	土壙	前方部	武具（武器埋納施設）	鏡　装身具　武具　工具	５世紀後半
岡山県津山市	中宮１号墳	23	竪穴式石槨	前方部	土器	装身具　武具　馬具　土器	６世紀中葉
広島県東城町	牛川古墳	20	箱式石棺	前方部	不明	不明	
愛媛県伊予三島市	経ケ塚古墳	20	箱式石棺	前方部	剣	装身具　武具　馬具　土器	６世紀中葉
福岡県福岡市	鋤崎古墳	62	埴輪棺・小石棺	くびれ２ 前方部２	なし	鏡　装身具　武具　工具	４世紀末 ～５世紀前半

４　埴輪

⑴将軍山古墳の埴輪の特徴

今回の将軍山古墳の調査では、大きく分けて３種類の円筒埴輪（朝顔形を含めると４種類）と形象埴輪が出土した。各種類の円筒埴輪は出土状況から見て、墳丘あるいは中堤の場所によって構成が異なっていたのではないかと考えた（Ⅳ参照）。従来の埼玉古墳群の調査ではトレンチ調査が

多ったため、埴輪の種類による樹立位置の違いにはあまり注意が向けられなかったが、愛宕山古墳の場合は、高さ40cm前後の小型のＡ類は前方部南側調査区で、高さ63cmのやや大型のＢ類が後円部東側調査区で多く出土する傾向にあることが指摘されていた。

このように、古墳の場所によって埴輪の構成が異なるのは、すなわち異なる生産地の埴輪を同時に大量に必要とした結果に他ならない。それぞれの生産地の埴輪がまとまって並べられるのは最も合理的であるとともに、逆に埴輪の細かな相違は問題ではなく、とにかく埴輪が並ぶという事実が重要であったようである。それで愛宕山では、高さが約２倍も違うような埴輪が同時に並べられたり、将軍山でも３段突帯のものと４段突帯のものが混同していたりするのである。

また、円筒埴輪の突帯の数は古墳の規模によっても異なることは、従来から指摘されている。将軍山古墳の埴輪は、Ａ類とＣ類が４段突帯で、Ｂ類が３段突帯であった。しかし器高はＢ類の１段目が他の埴輪の２段分以上の高さがあって、かえってＢ類の方が高くなっている。

他の古墳と突帯数を比較してみると、稲荷山・二子山・鉄砲山は６段突帯（鉄砲山は不明であるがおそらくは６段突帯）で、瓦塚・将軍山ＡＣ類は４段突帯、愛宕山（６段突帯のものも含まれる可能性もある）・天祥寺裏古墳・将軍山Ｂ類は３段突帯、小円墳群は２段突帯となっており（丸墓山・奥の山は不明)、将軍山以外はほとんど墳丘規模にしたがって、突帯の数も決まっていたようである。とくに中堤造出しがある首長墓系列の古墳は、将軍山以外はすべて６段突帯を有している。このように将軍山では墳丘の大きさの割に、埴輪の規模が縮小化する傾向があり、前方部正面の中段部で埴輪の樹立間隔が約1.7mで、瓦塚古墳の38cmであったのと比べてはるかに大きくなるのも、埴輪 を樹立させることの重要性が薄れてきたためなのかもしれない。将軍山を最後に、埼玉古墳群で埴輪を使用することはなくなり、次の中の山の須恵質埴輪壺に移行するのであろう。

⑵埼玉古墳群の円筒埴輪編年の一試案

埼玉古墳群では主体部から出土した遺物としては、稲荷山と将軍山のものしか知られておらず、後述するように土器の資料も少ない。このため築造年代を知る手がかりとして従来から利用されていきたのは埴輪、とくに普遍的に存在する円筒埴輪であった。

それでは編年の基準はどこに置いたら良いのだろうか。主に畿内の埴輪を多く扱った川西宏幸氏の編年では、稲荷山の一部の埴輪にＢ種ヨコハケという技法がみられること以外は、すべての埴輪が２次調整を省略したタテハケのみの調整をもつ埴輪であることから、埴輪最終末のＶ期に比定されてしまい、古墳群内の各古墳の編年は不可能である。

従来、埼玉古墳群の発掘報告書内でそれぞれの古墳から出土した埴輪については、ある程度の考察がなされ、古墳の築造年代などに言及されてきた。しかし、古墳群全体の埴輪の分類や変遷などについては、ほとんど触れられたことはない。墳丘の項でも述べたとおり、埼玉古墳群は極めて計画的に築造されたもので、埴輪の供給についても規格性があったものと予想される。現在さきたま資料館には膨大な量の円筒埴輪片が収蔵されており、今回の将軍山古墳の調査でほぼ一通り、各古墳の円筒埴輪が明らかになったことから、今後詳しい分析を進めていく必要性があるだろう。

将軍山古墳の円筒埴輪は、形態や調整、色調等によって大きく３種類に分けることができた。同

様に他の古墳でも異なる種類の埴輪が混在して使用されている。本稿では各古墳の埴輪を色調によって分けた後、それぞれの埴輪の突帯の形態を比較してみた。各種類の埴輪片を10点前後無作為抽出し、突帯の高さ÷先端幅の数値を仮に「突帯の扁平率」として計算して、種類毎に平均値を求めて比較した。なお、色調による分類が絶対的なものではなく、「突帯の扁平率」の比較にどれほどの有効性があるかはわからないが、ここでは埼玉古墳群の埴輪比較においての一試論として、とらえていただきたい。

埼玉古墳群の埴輪の色調は、大きく赤系・橙系・黄白色系に分けられる。しかしこれらは明確に分けることが難しいものもあって、埴輪の形態等の要素も考慮に入れて分類せざるをえない場合もある。この中でも最も特徴的で比較的分類が容易なのは、将軍山古墳のA類とした、鮮やかな赤色を帯び、突帯の形状はつぶれたM字形を呈しているものである。これは鴻巣市の生出塚埴輪窯跡から出土するものと類似しており、ここから供給されたと考えられている。ここではまずこの種類の埴輪を比べてみたい（表４）。

稲荷山や丸墓山、小円墳群でも５号墳以外では、現在のところこの種類の埴輪を確認していない。扁平率の数値が大きいものから並べると、二子山→愛宕山→埼玉５号墳→瓦塚→奥の山→将軍山→鉄砲山となる。しかし、鉄砲山と将軍山を比較すると、扁平率の数値は将軍山の方が高いが、突帯の先端幅の長さは、将軍山が他の古墳に比べてもはるかに大きくなる傾向がある。

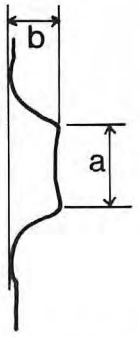
橙色系のものはすべての古墳から出土しているが、将軍山でもＢ類とＣ類が含まれるように、色調だけで形態分類ができない。したがって、同じ古墳でも突帯の形状に大きな差異があって、平均値を比較することは、適当ではないかもしれないが、本稿ではとりあえず参考までに比べておく。扁平率の数値が大きい順に並べると、稲荷山→二子山→瓦塚→丸墓山→小円墳群→将軍山→奥の山→愛宕山→鉄砲山となる。ただし、赤系に比べると数値の幅が小さく、顕著な相違がみられない。

稲荷山や二子山では器壁が厚く、表面が黄白色のものがある。これらは突帯の突出が大きく他の埴輪とは区別されるものである。丸墓山では黄白色ではないが、これに類する突帯のものがある。この３古墳の数値を比べると、稲荷山→丸墓山→二子山となる。

このように突帯の形状だけで、埴輪の編年を行うことには危険が伴うが、Ⅰ群－稲荷山・二子山・丸墓山・小円墳群、Ⅱ群－愛宕山・瓦塚・奥の山、Ⅲ群－鉄砲山・将軍山に分けられ、これはそ

表４　埼玉古墳群出土埴輪の突帯扁平率

古墳名	赤 系	橙 系	黄白色系	古墳名	赤 系	橙 系	黄白色系
稲荷山	－	0.66	1.12	奥の山	0.30	0.47	－
丸墓山	－	0.54	0.95	将軍山	0.21	0.48	－
二子山	0.67	0.64	0.78	鉄砲山	0.18	0.32	－
愛宕山	0.58	0.33	－	小円墳	－0.52	0.50	－
瓦　塚	0.48	0.55	－	5号墳のみ		－	



b/a＝突帯扁平率

のまま年代的な差異を示す可能性があると判断しておきたい。

今後、古墳群全体の円筒埴輪を明確に分類し、多くの資料を分析していくことによって、より客観的な結果を得るように努力していかねばならないだろう。

5　土器

今回の将軍山の調査では造出し付近から土器がまとまって出土し、ある程度の器種構成が明らかとなった。須恵器瓹４点以上・高坏３点以上・提瓶１点・有蓋長頸壺１点・台付長頸壺１点・広口壺３点・甕４点、土師器坏３点以上を確認することができた。これらは造出しにおける墓前祭祀に使用されたと考えられる。

須恵器の形態からみると、おおよそ陶邑編年のＴＫ43型式を中心としているが、図47－３の瓹のように、やや遡る形態のものが含まれている。しかしこの瓹は他の瓹に比べ作り等の点で異なっていることから、製作地の違いによる形態の相違とも考えられる。いずれにしても出土状況からみて、同時に使用されていたものである。なお石室出土の須恵器高坏はＴＫ43型式の範疇に属しており、造出しの須恵器群とは時期的な差はみられない。

本稿では埼玉古墳群における土器の出土状況について、報告書に掲載されているものを中心にしてまとめ、将軍山古墳の年代的な位置付けを行ってみたい。なお最近、坂本和俊氏が埼玉古墳群の年代についてまとめており［文献６］、本稿でもそれを参考にしながら、出土地点について重点を置いて記した。

・稲荷山古墳

「⑴周濠発掘調査の際に周濠覆土中の埴輪片に混入して検出された土器と、⑵昭和13年の前方部削平の際にくびれ部付近から発見されたと伝えられ」［文献１］る土器の２種類がある。

⑴の土器には、土師器坏２点・甕２点、須恵器甕（口縁部のみ）１点がある。土師器は鬼高式の最も古い段階のものである。これらの土器は、いずれも墳丘の造出しから中堤造出しにかけて設定したトレンチ内から出土している。

⑵の土器には、須恵器坏蓋１点・高坏蓋７点・有蓋高坏10点・瓹１点、土師器壺１点であり、いずれも残存状況が良好である。須恵器は陶邑編年のＴＫ23型式に比定されており、辛亥年に記された金錯銘鉄剣とともに、稲荷山古墳の年代を決定する上での重要な土器群として知られている。また土師器壺も同時期と考えられる。これらはくびれ部から出土しているということから、墳丘造出しに置かれていたものと考えて良いだろう。

なお、畿内ではこの時期すでに、主体部内に須恵器を供献する方法が行われているが、稲荷山古墳では主体部からは土器が全く出土していない。

・二子山古墳

確認されている器種には、須恵器高坏・瓹・提瓶・壺・甕・器台、土師器壺があるが、いずれも細片であるため、もとの形態を復原できるものはない。従って時期の判断も困難であるが、高坏の脚部片をみると、稲荷山の土器群よりは時期が下がるのは確かであろう。出土地点は稲荷山古墳と同様に、墳丘造出しの周辺が大部分を占めている。

・丸墓山古墳

報告書には須恵器甕の胴部が２片掲載されており、その他にも「若干の土師器・須恵器片」があったようであるが図示されていない。堀の覆土から出土しているが、特に集中する場所はこれまでに検出されていない。古墳の西北側に正面観のある他の前方後円墳の例から考えると、あるいは未調査の部分に土器が集中する何かしらの施設が検出される可能性もある。

・愛宕山古墳

確認されているのは、わずかな須恵器甕片のみであるが、他に土師器の小片もあったようである。これらは後円部の東側調査区から主に出土している。墳丘西側は全く未調査であり、造出しは現在のところ確認されていない。

・瓦塚古墳

須恵器高坏・提瓶・横瓶？・器台・甕、土師器坏・壺・鉢が確認されている。この古墳では墳丘の周囲をかなり広範囲で調査を行っているが、甕や器台の破片を除くと大部分は墳丘造出し周辺に集中している。出土状況をみると、造出しの北側には大型の甕が集中し、南側には比較的小型の土器が集まる傾向にある。これは将軍山でも見られた現象で、すでに本文中に記した通りである。

これらの土器の中で形態変化を追いやすいのは、須恵器高坏であろう。長脚１段透かしの無蓋高坏で、成形は丁寧であるが焼成はやや軟質のものである。脚の形態からみて、陶邑編年のＭＴ15～ＴＫ10型式くらいであろう。桜山８号窯からは類似する長脚１段高坏が出土しており、報告書では６世紀中葉に比定されている。また提瓶は、胴部前面に剝離痕跡が見られることから、把手が肩ではなく胴部前面に付き、環状ではなく鈎形の把手であったと考えられる。土師器坏もこの時期のものとして矛盾はない。

以上のように土器から見るかぎり、瓦塚古墳の年代は６世紀前半～中葉頃と考えてよいだろう。

・鉄砲山古墳

いずれも細片であるが、須恵器坏（または高坏）・甕、土師器坏が出土している。調査は前方部西南隅付近及び後円部東側で行っており、前者では甕の破片のみで、須恵器坏や土師器坏は後者から出土している。須恵器の坏は小片であるが、立ち上がりのようすから陶邑編年ＭＴ85～ＴＫ43型式に相当すると考えられる。この土器からは、将軍山との時間的な隔たりをほとんど感じない。

・奥の山古墳

調査範囲が狭いので、土器の出土量もわずかである。須恵器の壺・甕の細片があるが、どこから出土したのかは記述がない。いずれも、もとの形態は不明である。

・中の山古墳

須恵器坏（または高坏）・高坏・壺（フラスコ形？）・甕が出土している。後円部北側内堀から坏と甕がわずかに出土し、墳丘の東側を行田市教育委員会が調査を行った際、須恵器の甕が出土しているが、大部分はくびれ部付近の内堀から出土している。造出しは検出されていないものの、くびれ部付近から多くの須恵器が出土したことから、後円部側に造出しがあると推定することができる。

坏は立ち上がりが短く、内傾が強いことからＴＫ209型式に相当すると考える。中の山古墳から

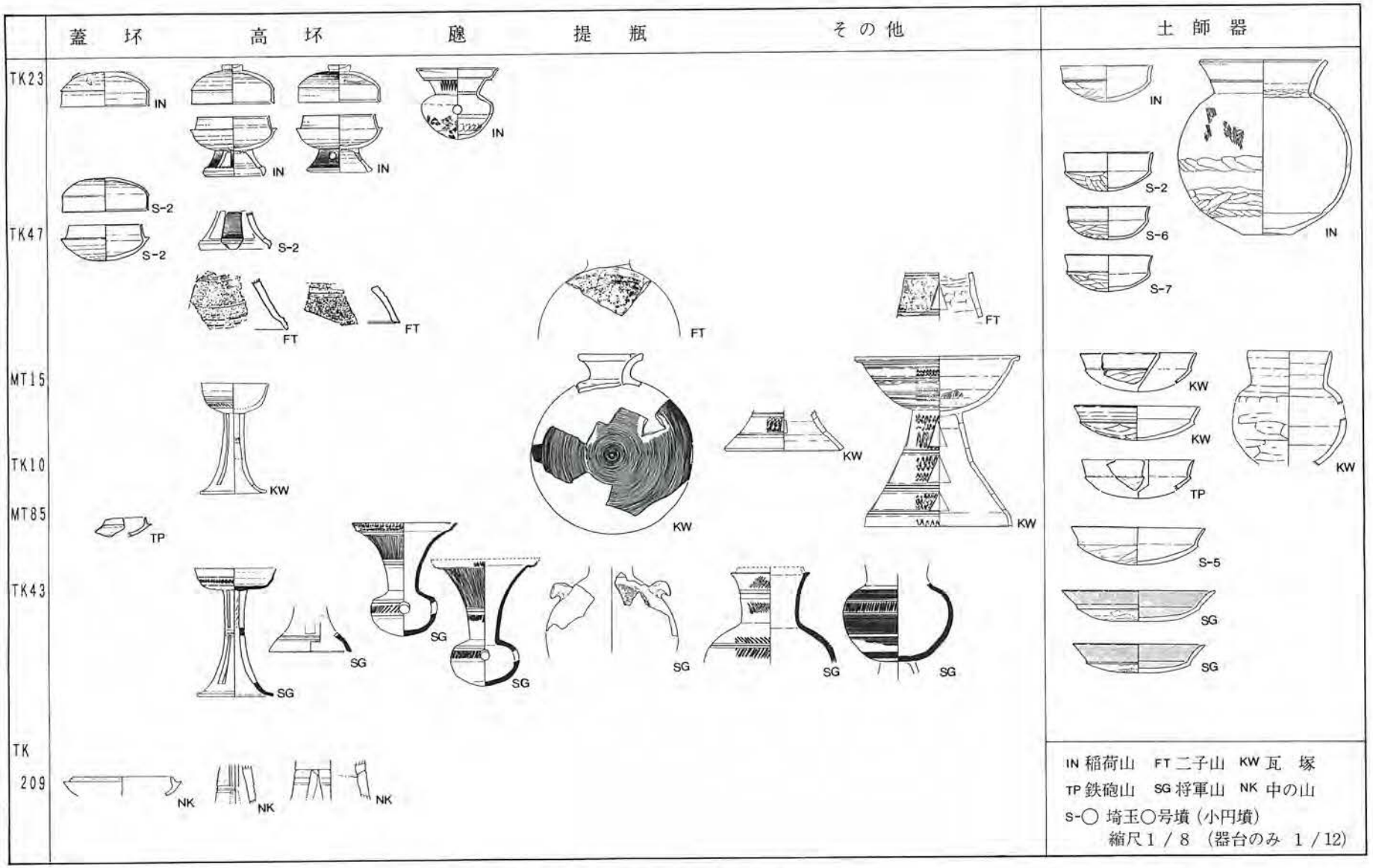


図54 埼玉古墳群から出土した土器

は円筒埴輪の代わりに「須恵質埴輪壺」が出土したが、最近埋蔵文化財調査事業団による調査で、これらが寄居町末野遺跡で須恵器とともに焼成されていたことがわかった。末野遺跡で共伴する須恵器から、この窯の創業は６世紀末と発表されている［文献７］。中の山から出土した須恵器もまた、同じような時期に想定できよう。

・小円墳群

梅塚古墳からは須恵器蓋坏が３セット・高坏・甕、土師器坏２点・壺１点が出土した。このうち高坏と甕以外は堀底面で集中して出土しており、同時に使用されたと考えられる。埼玉３号墳では土師器坏１点、埼玉４号墳では土師器坏６点、埼玉５号墳では土師器坏１点、埼玉６号墳では土師器坏３点、埼玉７号墳では土師器坏１点が出土している。

埼玉５号墳の土師器坏のみ、やや時期が下るものと思われるが、他の須恵器や土師器は稲荷山とほぼ同時期か、若干下がるくらいの時期に想定されている。この中でも比較的直径の大きい梅塚古墳では器種にバラエティーがみられるが、その他の古墳では土師器坏しか出土しないのが特徴的である。古墳祭祀における須恵器の使用には、身分的な規制があったものと解釈できよう。

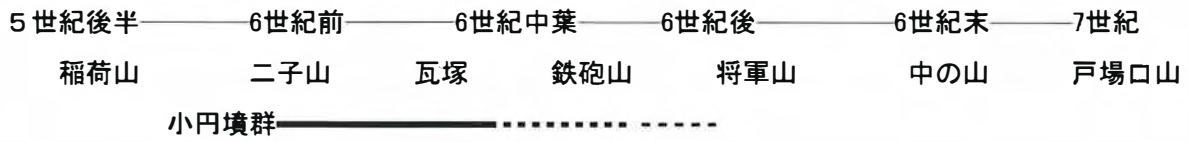
また中の山に隣接する方墳の戸場口山古墳では、全く埴輪が出土せず、堀の覆土中から須恵器の壺が出土した。類例に乏しいものであるが、７世紀前半ころに比定されている［文献４］。

以上から、埼玉古墳群における土器の出土状況の特徴をまとめてみたい。

土器が多く出土している稲荷山・瓦塚・将軍山では、墳丘造出し周辺に集中しており、それ以外では散発的に出土するだけである。古墳群内の他の古墳においても、造出しあるいは墳丘西側くびれ部から遠ざかるほど、土器の出土数が減少する傾向が見られる。いずれも造出しで行われた祭祀で使用されたものが、そのまま放置あるいは廃棄されたものであろう。器種構成のうち、須恵器高坏や瓶・甕、土師器坏は連綿と受け継がれており、器台は瓦塚ころまで使用され、かわって提瓶や台付長頸壺等の新しい器種が参入する。

また稲荷山の主体部からは土器が全く出土せず、将軍山でも主体部からはＴＫ43相当の須恵器高坏が１点出土したのみであり、おそらくその間に築かれた古墳の主体部にも、ほとんど土器は埋納されていないだろう。これは被葬者とともに土器を埋納する習慣が、ついに埼玉古墳群では根付かなかったといってよい。

各古墳から出土した土器によって古墳の変遷を追うと、おおよそ次のようになる。なお、現在のところ土器の資料は非常に少ないので、今後の調査の成果によっては大きく変更されることがありうる。



なお、丸墓山に関しては、墳丘に残っている旧地表面下に榛名山二ツ岳の爆発にともなう火山灰（ＦＡ）が検出された。二子山の堀の覆土にＦＡ層がある可能性が指摘されており、その点で丸墓

山より二子山の方が先に築造されたことになる（なお、将軍山古墳はＦＡ降下以降の古墳と考えられるが、墳丘内の旧地表面下には明確にＦＡと思われる火山灰層は検出されなかった）。しかし、埴輪の様相をみると逆に丸墓山の方が稲荷山に近いようである。それは突帯の形態や、二子山以降普遍的に現れる赤褐色系の埴輪が含まれていないことなどが理由として挙げられる。二子山の堀覆土内の火山灰がＦＡかどうか、早急に追究する必要があろう。

愛宕山や奥の山ではほとんど土器が出土していないが、埴輪の「突帯扁平率」等からみて、いずれも瓦塚と相前後する時期に築造されたものと考えておきたい。

以上、今回の調査で明らかとなった、将軍山古墳の墳丘や周堀・主体部・埴輪・土器について、若干の考察を加えながらまとめてみた。なお、将軍山古墳の被葬者像を探る上で、豊富な副葬品群についての分析が不可欠ではあるが、あまりに多岐に及んでいるため本稿で扱うことはできなかった。今後の研究の深化に期待したい。

《参考文献》

［文献１］『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会、1980年
［文献２］岸本直文「前方後円墳の築造規格の系列」『考古学研究』39－２、1992年
［文献３］近藤義郎編『前方後円墳集成　東北・関東編』山川出版社、1994年
［文献４］「県内主要古墳の調査（Ⅲ）－戸場口山古墳・中の山古墳範囲確認調査－」『調査研究報告』第７号、埼玉県立さきたま資料館、1994年
［文献５］岡本健一「将軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告』第７号、埼玉県立さきたま資料館、1994年
［文献６］坂本和俊「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』６、群馬県土器観会、1996年
［文献７］埼玉新聞　1996年７月13日記事

《付　編》

〈第１部〉

1894年の出土遺物

Ⅰ　出土遺物の所在

1894（明治27）年に地元の人々によって発掘された資料は、現在６箇所に分散して所蔵されている。その経緯を簡略に表すと図55のようになる［文献11］。

発掘を行ったのは当時下忍村の村長であった増田氏と、医師の山下氏の２氏である。石室の様子は確認調査編－Ⅲで記した通りであった。発掘した遺物は２氏によってほぼ等質に分配されたが、山下氏の所蔵資料のうち、一部は翌年に県を通して当時の東京帝室博物館に渡り、その他の大部分の資料も1905年に東京帝国大学人類学教室に寄贈された［文献１］。山下氏がその後所蔵していた資料はごくわずかであったが、現在では行方がわからなくなっている。

増田氏所蔵資料は、大部分が1936年に『史蹟埼玉』［文献２］という小冊子が書かれた当時には、まだ氏の手元にあったようだが、その後少なくとも３氏の手に渡っている。そのうち、奈良の尼氏に渡った資料は一括して1950年に東京国立博物館に納められており、内容的に最も豊富な一群である。増田氏資料のうち、本庄市教育委員会に現存する諸井家コレクションのように、発掘の翌年にすでに地元の名士達に渡っているものもある［文献３］。

増田氏から渡辺氏に渡った資料は蛇行状鉄器のみ埼玉県立博物館に、その他は埼玉県立さきたま資料館に収蔵された。さきたま資料館には他に新井氏旧蔵の資料もあり、その出所はわからないが、恐らく諸井家コレクションと同じような経緯があったと思われる。また増田氏から田島氏の手に移った資料は、現在も埼玉神社の宮司である田島氏のもとにあり、さきたま資料館に寄託されている。

以上のような複雑な経緯から資料が分散している。今回遺構復原模型を製作するにあたって（整備工事編参照）これらの資料の実測を行った。将軍山古墳は従来からこれらの優れた副葬品が出土したことで有名であったが、実測図等はすべて発表されていたわけではなかった。本報告書を刊行するに当り、それぞれの所蔵機関の御厚意によって掲載することが可能になった。

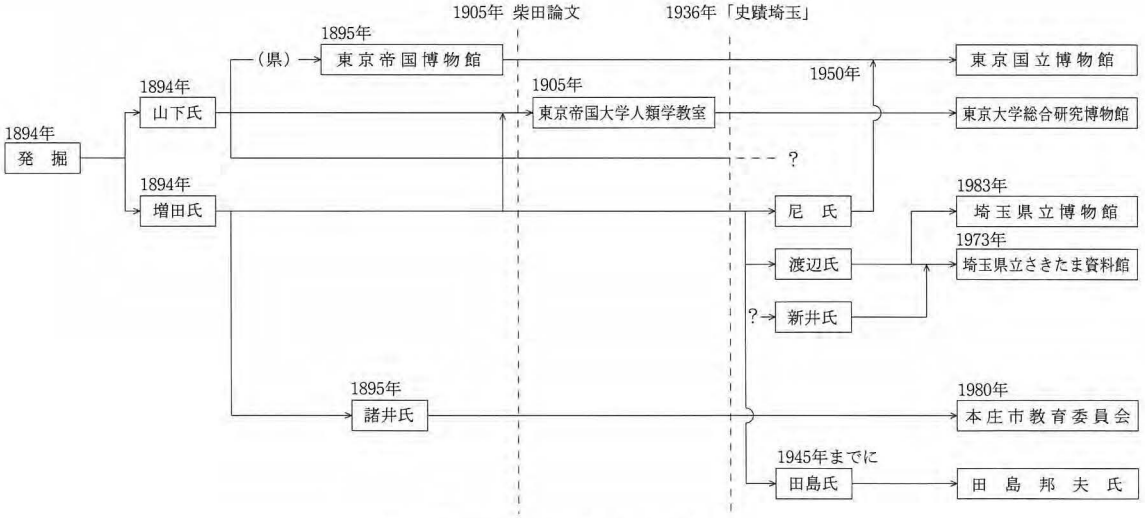


図55　1984年出土遺物の所在

Ⅱ　出土遺物の概要

1894年に出土した資料点数と、その所在は次のとおりである。なお参考に、発掘から11年を経て書かれた柴田常恵の論文［文献１］による点数を併記する。

表　１８９４年出土遺物一覧

出土遺物名	所蔵者	現在点数	柴田論文点数
装身具			
①金製耳環？	行方不明	－	2
②金製勾玉	行方不明	－	1
③金製平玉	行方不明	－	35
④ガラス小玉	ＢＥ	199	多数
⑤乳文鏡	Ａ	1	1
武器・武具			
①環頭大刀	Ａ	1	1
②銀装大刀	ＡＢ	4	刀柄４
③直刀片	ＡＤ	2	数本
④三輪玉	ＡＤＥＦ	水晶３ 金銅２	5
⑤象嵌刀柄装飾金具	行方不明	－	②に含む
⑥鉄矛	ＡＤ	４以上	2
⑦鉄鏃	ＢＤ	11以上	多数
⑧衝角付冑	ＡＤ	1	1
⑨挂甲小札	ＡＢＤ	多数	多数
馬具			
①金銅製鏡板付轡	Ｂ	1	轡２
②素環鏡板付轡	Ａ	1	①に含む
③金銅製棘葉形杏葉	ＡＥＦ	5	4
④銅製八角稜鈴	ＡＢＦ	3	大鈴５？
⑤銅製鈴	Ａ	3	舌鈴４？
⑥金銅製鈴	ＡＢＦ	５以上	小鈴６？
⑦金銅製雲珠	Ｂ	1	雲珠10
⑧金銅製辻金具	ＡＦ	13以上	⑦に含む
⑨金銅製帯金具	Ｆ	2	－
⑩鉄製輪鐙	Ａ	２組	2
⑪鉄地銀張飾金具	ＡＤ	2	－
⑫鞍金具	ＡＢＤ	１組	其他泥障等類
⑬鉸具	ＢＤ	2	－
⑭蛇行状鉄器	ＡＣ	2	－
⑮馬冑	ＡＤ	1	
工具類			
①鉄斧	Ｄ	1	－
用途不明飾金具・鉄器			
①金銅製筒状飾金具	Ｆ	1	－
②金銅製袋状飾金具	ＢＦ	4	十字形銅器３
③不明鉄器	Ｄ	数点	－
容器類			
①高台付蓋付銅鋺	Ｂ	1	銅椀１
②銅鋺	ＢＦ	2	銅鉢２
③石製盤	Ａ	1	－
④須恵器高坏	Ａ	1	祝部高杯１

１　装身具

①金製耳環？（図56－１）

現在行方がわからない。『史蹟埼玉』にはスケッチが掲載され、次のような説明が付けられている。「環径約4.6cm、輪径約0.8cm、薄き金板を合わせて造り内部空虚、断面六角形、楕円環形をなす」この数字が確かなものとするならば、耳環としては異例の大きさである。また内部が「空虚」になっている耳環は他にあまり例がみられない。従ってこれを耳環と断定するのは現状では難しい。

②金製勾玉（図56－２）

これも現在行方がわからない。柴田論文には「金製曲玉は長さ八分、形状は上方式、菓子の最中に於ける如く、金の薄板をあわせたるものに、内部は空虚なり」とあるが、『史蹟

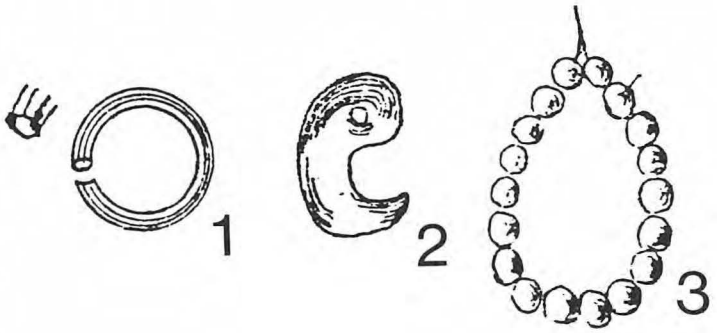


図56『史蹟埼玉』に掲載された金製耳環、金製勾玉、金製平玉

埼玉』では「長約３㎝（１寸)」とあって大きさに差がある。

③金製平玉（図56－３）

これも現在行方がわからない。『史蹟埼玉』には「球の両極を削ったやうな平たき玉で削られざる部分に孔あり、絲を通し得るやうになって居る、球径約1.5㎝、厚さ約１㎝」とある。これは内部が「空虚」であるかどうかについては、柴田論文にも説明がない。

④ガラス小玉

東京大学総合研究博物館蔵が143個、本庄市教育委員会蔵が56個である。本庄市にコバルトブルーのものが１点あるが、それ以外はいずれも透明なスカイブルーのもので、平成３年度に出土したものと大きさ色調などの点で同一である。

⑤乳文鏡（写真56）

東京国立博物館蔵。青銅製で径7.6㎝、厚さは縁で0.3㎝、内区付近では0.1㎝で非常に薄い作りである。文様の鋳上がりは粗雑である。

径1.6㎝の鈕があり、内区には主文様帯である乳文と斜めの櫛目文帯、外区には鋸歯文帯と無文の素縁が巡る。乳をやや不均衡に９個配置し、それぞれの乳から５～６本のヒゲ状の曲線が派生して乳同志を連結している。

２　武器・武具

①環頭大刀（図57－１、写真59～61）

東京国立博物館蔵。環頭柄頭・鞘口金具・鞘尻金具・刀身の一部が残存する。

環頭柄頭(1-1)は柄部を含めて長さ14.8㎝が残り、環体の幅は7.6㎝である。環内には三葉環頭大刀にみられるパルメット文を３単位配した形の金銅製金具を差し込んでいる。環体は銅地金張で２頭の竜が中央頂部で首を突き合わせている文様が打ち出されている。環体に装着された銅地金張の柄縁金具には、竜が２頭首を絡めている様子が表されている。首は列点で、胴体は円環を並べた帯で表現されており、簡略化が著しい。柄との境には中央に円環、両端に楕円を並べて打ち出している責金具がある。

鞘口金具(1-2)は刀身を含め20.4㎝残存。銅地金張の金具には、環頭部の柄縁金具と同じように２頭の竜が首を絡めている文様が打ち出されるが、首や胴体の表現に若干の違いがある。遺存する刀身は幅2.6㎝で銅地銀張の鍔がある。刀身の一部には木質が残る。なお、遊離する責金具(1-4)は、鞘口金具と鞘の境に施されたものである。

鞘尻金具(1-3)は長さ5.3㎝残る。鞘の木質の上に幅4.2㎝の銅板を巻き、その上半分のみにさらに幅1.8㎝の銀板を巻いている。銅地金張の責金具で鞘に固定させている。また底部には丸く面取りをした鹿角をあてて、２本の蟹目釘で留めている。

②銀装大刀（図57－２～５、写真62・63）

いずれも柄の部分。２と３は東京国立博物館蔵、４と５は東京大学総合研究博物館蔵。

２は長さ10.7㎝残存。櫛歯状の刻みを施した銀線を隙間なく巻き付けている。銀線の表面には、幅1.0～1.5㎝の布を斜めに巻き上げていた痕跡がある。端には８字を横に並べたような文様が施さ

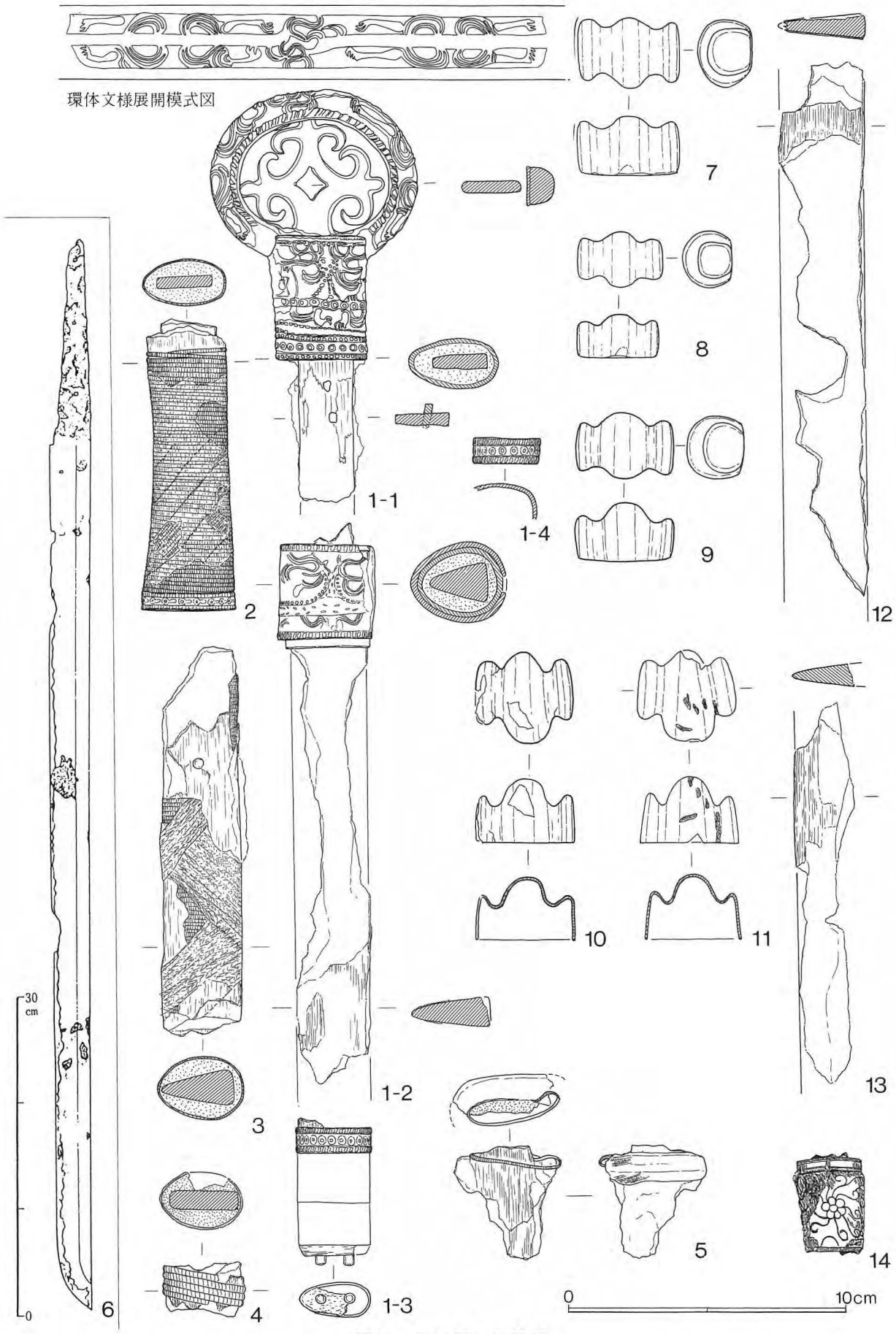


図57　大刀類、三輪玉

れた、銅地金張の責金具を付ける。刀身の断面の厚みから、責金具の方が鞘に近いようである。

３も同じく銀線を巻き付けた柄の表面に、幅約1.5cmの布を斜格子状に巻き上げている。

４は銀線を巻いた柄の断片である。２・３よりも銀線の櫛目文様が粗い。東京大学総合研究博物館に残されている古い写真（写真63）に写っている銀装大刀よりもやや小さいが、あるいは長い年月の間に風化して現在のようになったのかもしれない。

５は錆による変形が激しく原形は不明である。銀線の最先端があり、木質のまわりに鉄が遺存することから、柄と鞘口の境にあたる部分で、鉄は鋺ではないかと考えられる。

③直刀片（図57－６・12・13）

12は東京国立博物館蔵。13はさきたま資料館蔵。その他に細片となったものが、さきたま資料館に収蔵されている。鉄製。12は刀身の幅は3.0cmで、長さは19.2cmが残存している。13は刀身幅不明で、長さは14.0 cmが残存している。いずれも一部に木質が遺存している。

なお［文献10］には個人蔵として将軍山古墳出土の大刀が掲載されている（６）。全長99.8cm、刃長80.7cmで、切先から茎の先端までほぼ完全に残っている。また錆を落として研いているようで、非常に光沢を帯びている。石井昌國はこの大刀を「鎬造りの始まり」とし、「関東に鎬造り大刀が発見されるのは、鍛冶団が活動を始めたことを示すのかもしれない」と推定している。

④三輪玉（図57－７～11、写真57・58）

水晶製と金銅製がある。７・８は東京国立博物館蔵、９・10は本庄市教育委員会蔵、11はさきたま資料館蔵である。この他に田島氏蔵品には、金銅製三輪玉とみられる小片もあるが、原型を復原することはできない。

水晶製のものは、７は長さ3.6cm・高さ2.1cm、８は長さ3.0cm・高さ1.7cm、９は長さ3.6cm・高さ2.2cmで、おおよそ大小２種類に分けられる。表面は丹念に磨かれているが、底部は粗く磨かれたままである。いずれも、くびれ部には大刀勾金に留めるための紐の痕跡がみられる。

金銅製のものはどちらも長さ3.6cm・高さ2.4cmである。11にはくびれ部に繊維紐の残片が付着しており、実際に使用した痕跡がある。

⑤象嵌刀柄装飾金具（図57－14、写真63）

柴田常恵の報告中に図面入りで掲載されている（14）が、現在行方不明である。ただし東京大学総合研究博物館に遺物の写真が残されていた（写真63）。鞘口金具または鋺と推定され、鉄地に銀象嵌を施しているようである。中央に６葉の花弁を置き、その周囲に放射状の唐草文を配置した簡単な図柄である。

⑥鉄矛（図58、写真64・65）

１～５は東京国立博物館蔵。６～９はさきたま資料館蔵である。

１・２は鉄製の矛身である。袋部の基部が残っているが、錆化が激しいため刃部の形態は不明である。１は先端付近が折れ曲がっており、長さ25.6cm残存する。基部の断面は円形で、径3.0cmである。２は長さ24.4cm残存し、基部の断面は八角形に近い形態で、基部幅は2.8cmである。３は破損が激しく原形は不明である。先端はかなり鋭利な状態である。４は矛の袋部に銀板を覆ってソケット状にしたものである。断面は九角形を呈し、矛側の幅は2.7cm、柄側の幅は2.3cmであった。

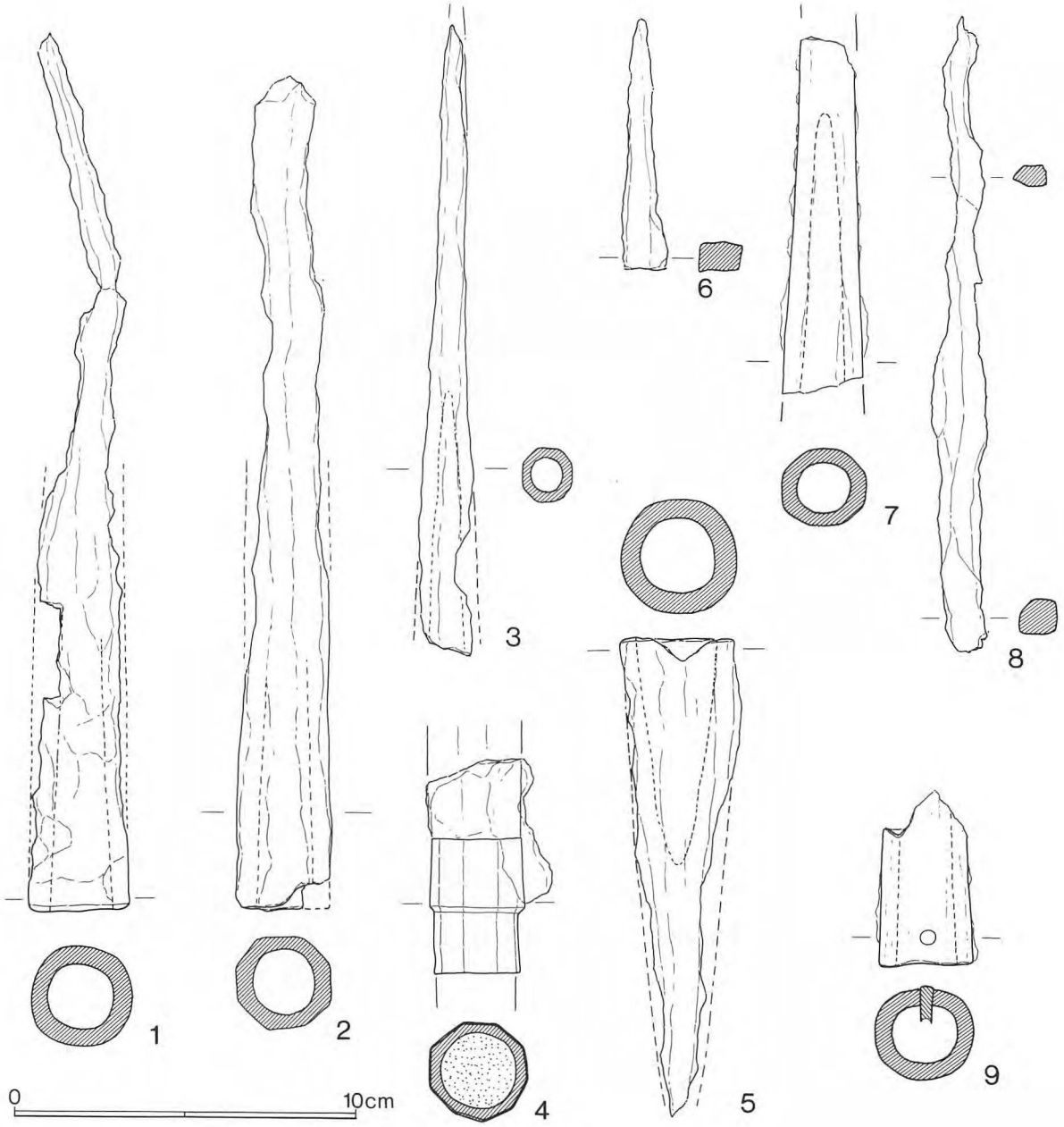


図58　鉄矛

５は鉄製の石突で袋部から先端までほぼ全体が残っている。長さ14.0cm基部断面は円形で径3.4cmである。

６～９はいずれも鉄製だが、錆化が激しく原形を留めない。６は先端が鋭利な鉄片。７は矛身の袋部付近で断面八角形を呈す。８は矛身の一部であるが、形態は不明である。９は矛身袋部基部で、断面円形、径は2.8cmである。柄に固定するための目釘が１本残っている。

以上のように鉄矛は遺存状態が悪いため、その形態や数量は不明であるが、矛身袋部基部が４点あることから、鉄矛は４点以上あったことは明らかである。

⑦鉄鏃（図59、写真66）

２・12は東京大学総合研究博物館蔵で、それ以外はさきたま資料館蔵である。この他にもさきた

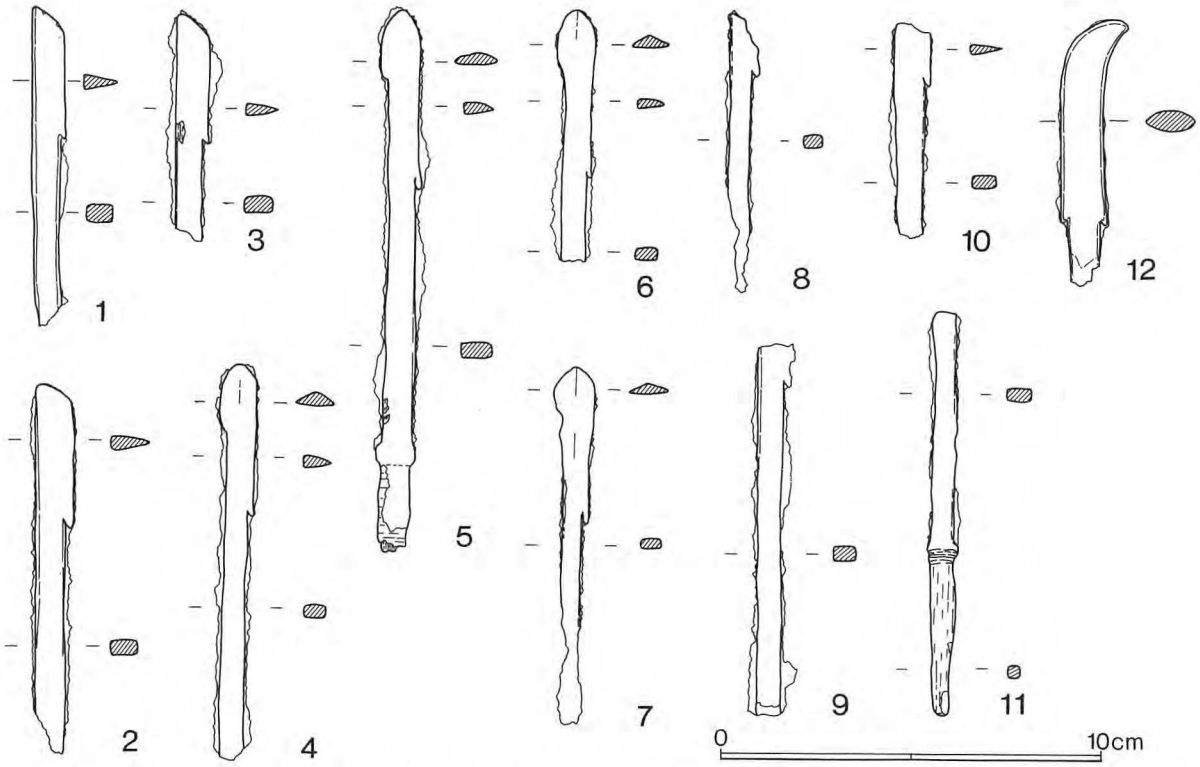


図59　鉄鏃（一部〔文献５〕による）

ま資料館には鏃の頸や茎の部分の小片が25片以上ある。平成３年度の調査結果と同様に、Ａ類：片刃で刀身形を呈し逆刺をもつもの（１～３）、Ｂ類：左右の関が段違いになっているもの（４～７）の２種類に分けられる。

Ａ類は箆被まで残るものはない。１が最も良く残っており、長さ10.0cmである。鏃身部は断面が二等辺三角形で、長さが3.4～3.8cm、幅は0.8～1.0cmである。Ｂ類は鏃身部上半部は両刃、下半部は片刃になっている。２ヵ所の関にはいずれも逆刺がつくが、上半部の逆刺は下半部のものよりも鈍い。５が最も残存状態が良好で、鏃先端から箆被までの長さが12.0cmである。鏃身部の長さは4.0～4.6cmで、上半部幅は1.0～1.1cm、下半部幅は0.7～0.8cmである。

８～11は先端が欠けているので、どの種類なのかは不明であるが、関の部分の幅をみると、８・９はＢ類、10はＡ類である可能性が高い。

12は先端が大きく屈曲するもので、断面がレンズ形を呈し、鈍い両刃がついている。関には両側に逆刺がつく。先端から逆刺までは長さが5.5cmである。平成３年度の調査でも同様のものが出土しているが、その用途は不明である。

⑧衝角付冑（図60、写真67・68）

東京国立博物館蔵の破片２点と、さきたま資料館蔵の破片７点が接合し、ほぼ冑の片面を復原することができた。いわゆる横矧板鋲留衝角付冑で、前後の長さが25cm・幅20cm・高さ15cmと推定される。

冑本体は、全部で５枚の鉄板からできている。地板第１段は幅が約5.5cm、胴巻板は幅約4.2cm、地板第２段は幅約4.5cm、腰巻板は幅約4.8cmの鉄板を加工し、しゃもじ形の伏板とともに、それぞ

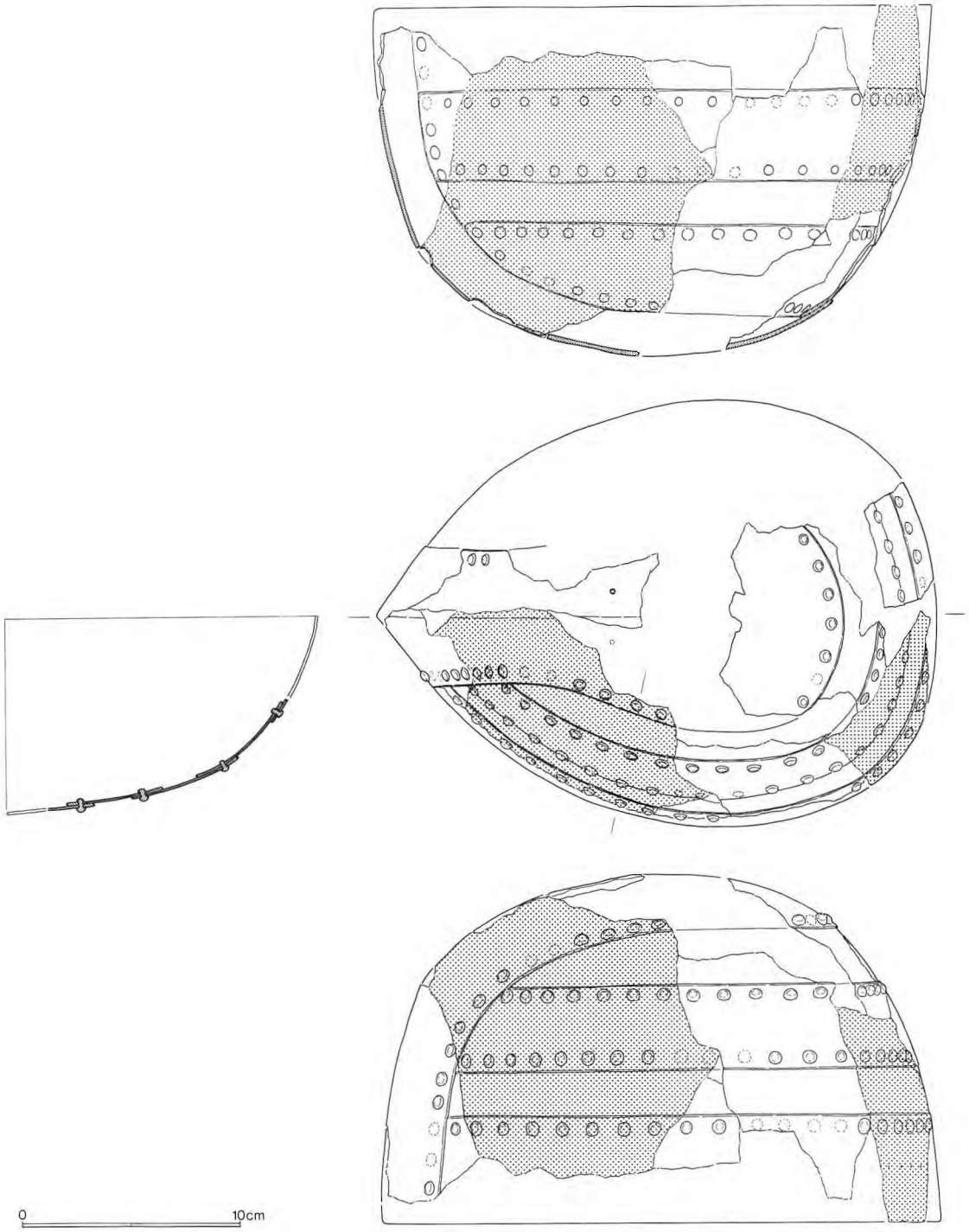


図60　衝角付冑

れ鋲で留めている。頂部には三尾鉄を取り付けるための孔が１つ確認され、革紐の痕跡が残っている。また腰巻板の中位には鋲孔と同じ位置にあわせて、鐙を付けるための孔が連続して開けられている。衝角底板付近は残っていないので形態は不明である。

⑨挂甲小札（図61～65、写真69・70）

１・２・９・11～22・28は東京国立博物館蔵、26は東京大学総合研究博物館蔵、その他はさきたま資料館蔵である。図示したものの他、さきたま資料館には小破片が多数収蔵されている。なお、

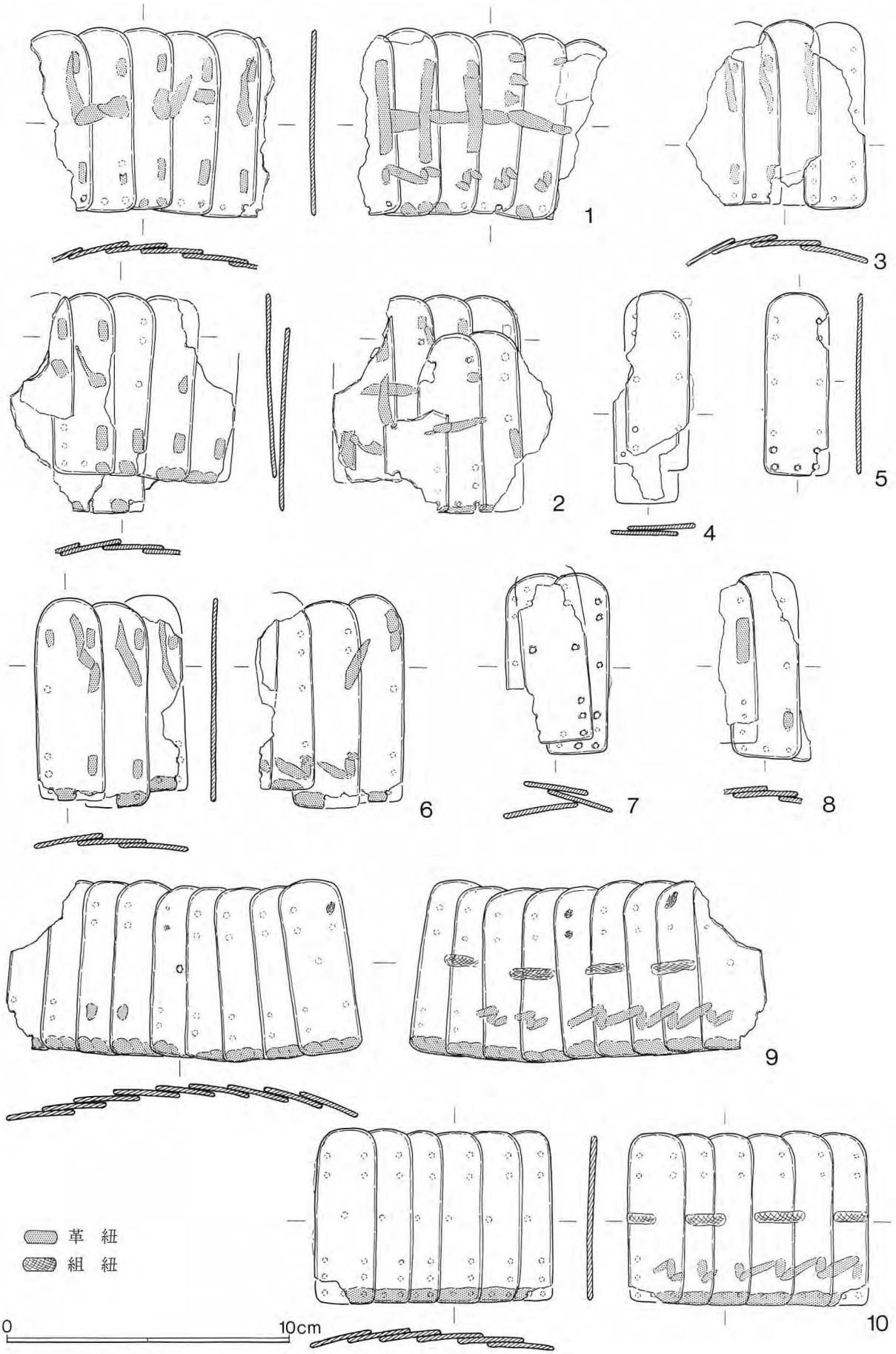


図61　小札（1）

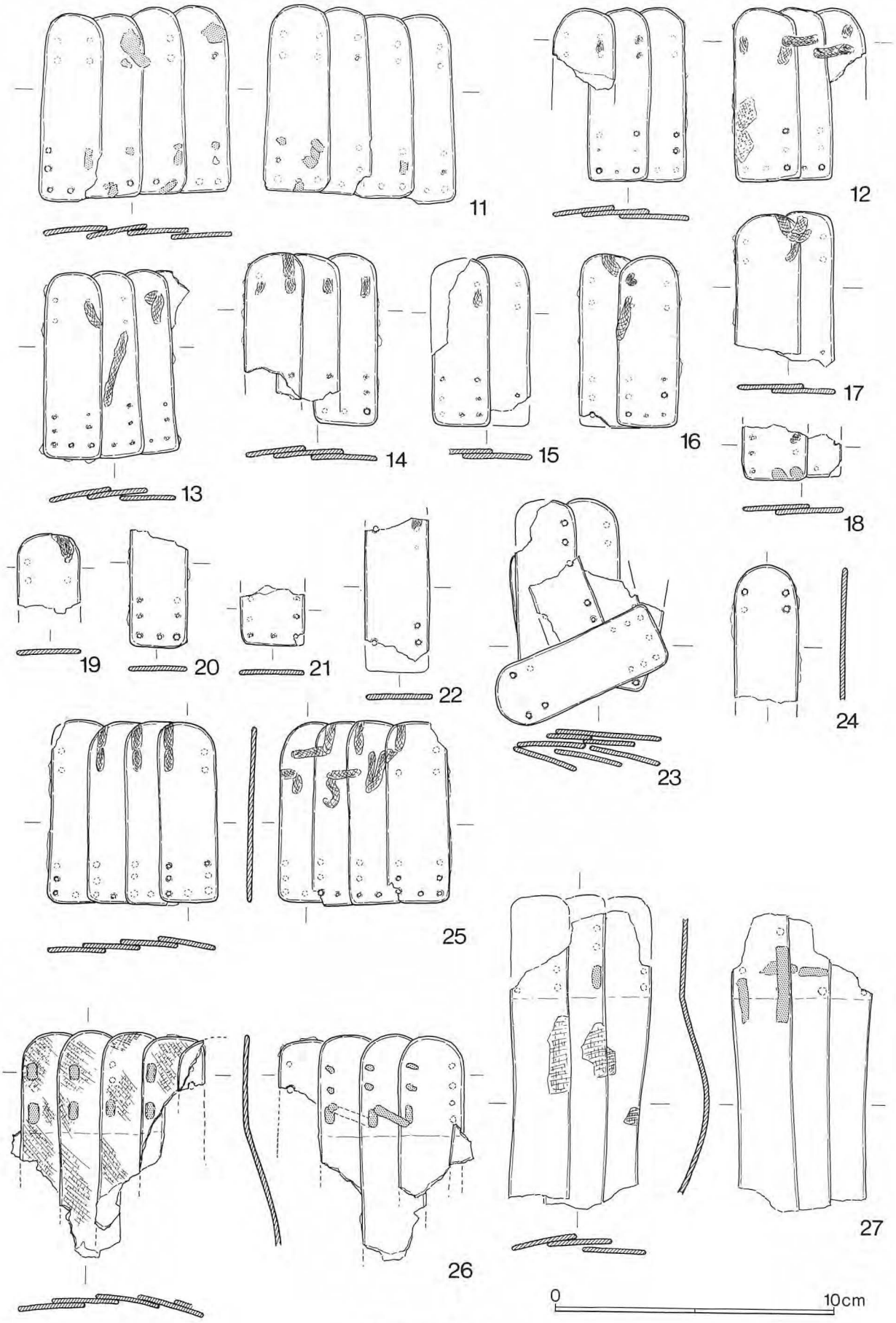


図62　小札（2）

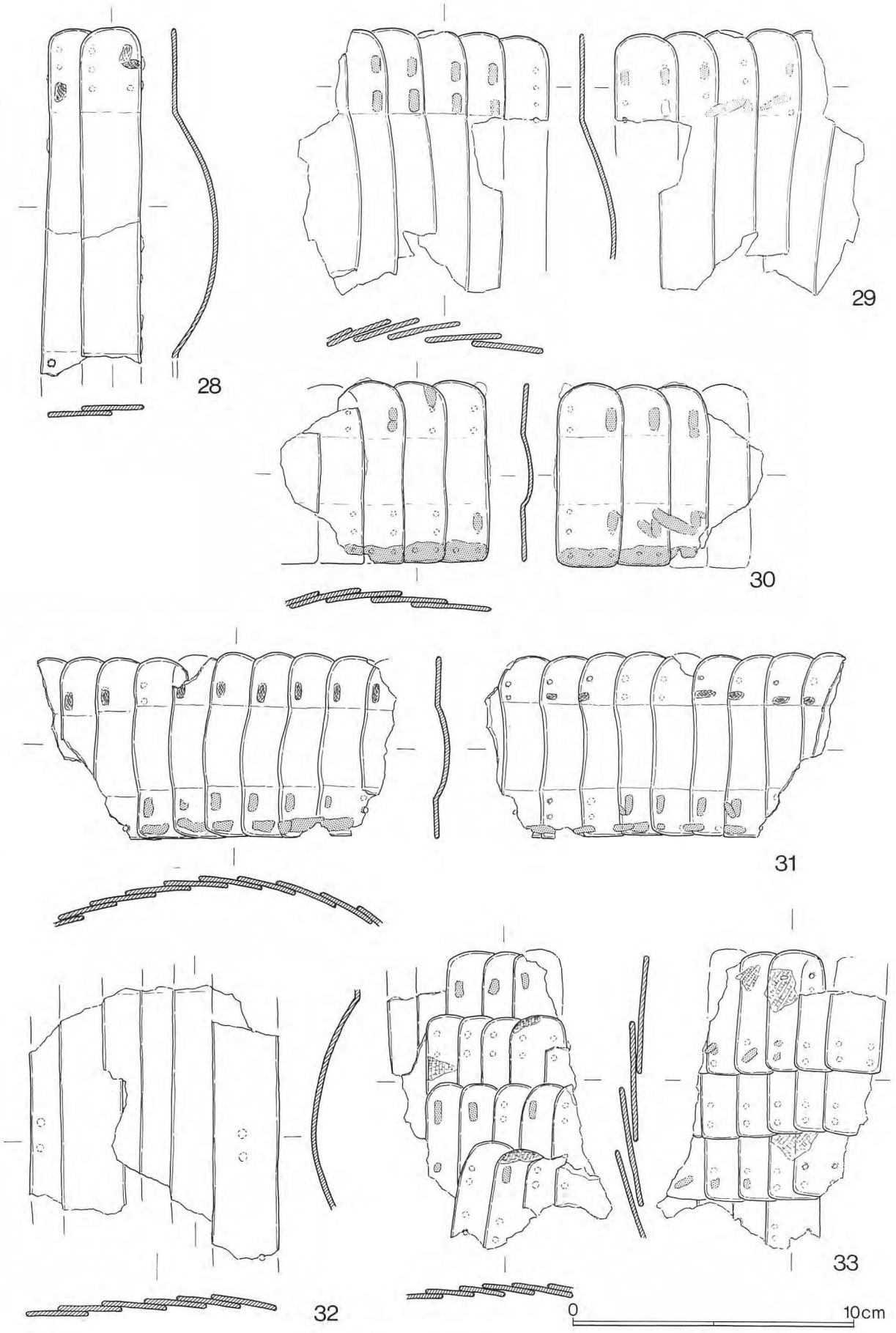


図63　小札（3）

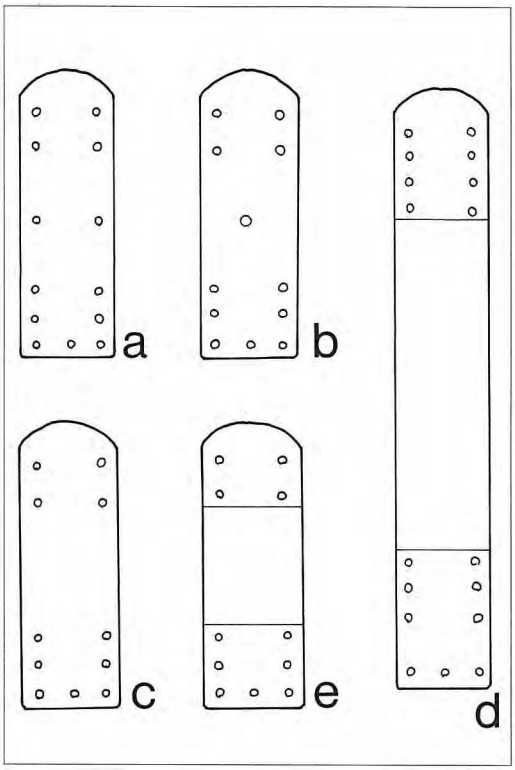


図64　小札の種類（模式図）

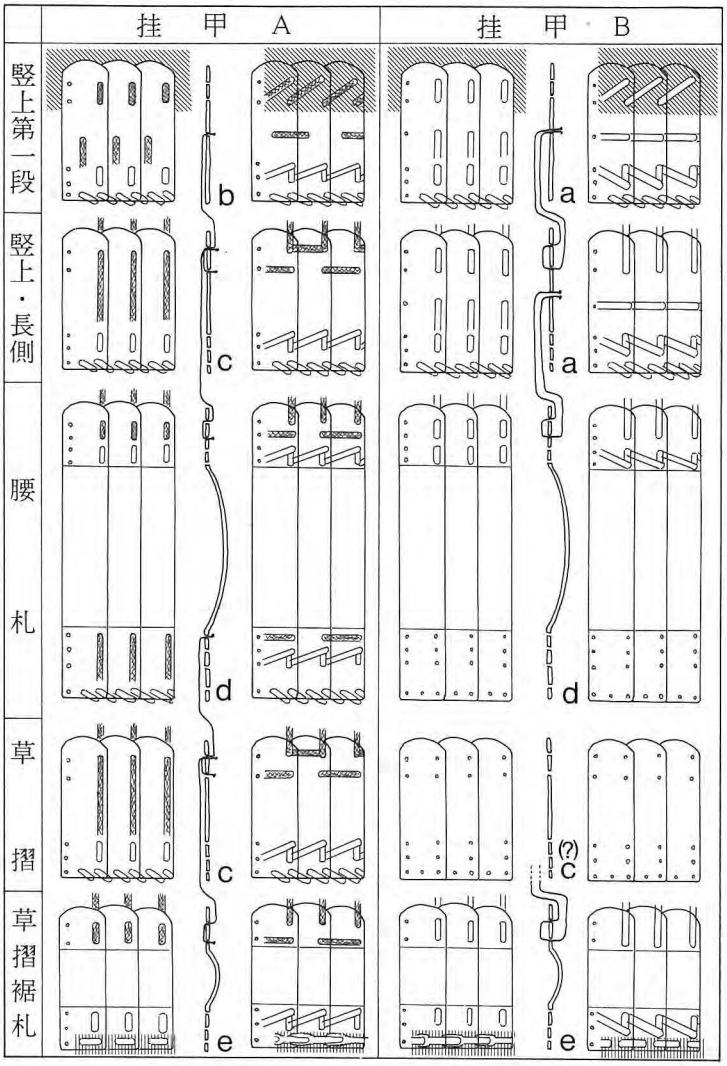


図65　挂甲小札の構成の推定

ほとんどが胴丸式挂甲の小札であるが、27や28のように挂甲に付属する武具の小札も含まれている。なお以下は、塚田良道氏の御教示をもとに［文献７］を参考にして記述した。

小札に付着した縅紐の痕跡から、組紐と革紐の２種類あったことが明らかである。同一の挂甲では、縅紐は１種類のみを使用することが普通であることから、将軍山古墳には２領の挂甲が副葬されていたと考えざるを得ない

小札は、いずれも頭部円頭形で縅孔二列であるが、ａ－第三縅孔が２個のもの、ｂ－１個のもの、ｃ－無いもの、そしてｄ－腰札、ｅ－草摺裾札の５種類に分けられる（図64）。現状で小札と縅紐の関係をみると、小札ａには革紐が付着したものしかなく、逆に小札ｂ・ｃには組紐のものしかない。しかし、腰札や草摺裾札の形態は共通している。また、小札の規格は縅紐の種類による違いはほとんどないが、ｂが長さ６cm前後と他に比べてやや小さい傾向を示す。

組紐で縅すものを挂甲Ａ、革紐で縅すものを挂甲Ｂとすると、図65のように挂甲Ａの竪上第一段には小札ｂ、竪上・長側には小札ｃ、草摺には小札ｃが使用され、挂甲Ｂの竪上・長側には小札ａが使用されたと考えられる。ただし、挂甲Ｂの草摺には小札ｃが使用されたと推定されるが、現在のところ小札ｃに革紐が付着しているものがない。縅技法はいずれも「各段縅」の手法をとっており、稲荷山古墳の「通段縅」技法とは異にしている。

28は長さ約4.3cm、幅約2.0cmの小型の小札で、下搦孔のないものである。形状から冑の頬当部である可能性がある。27は孔の位置が不規則であり、何に使用されたのかは不明である。

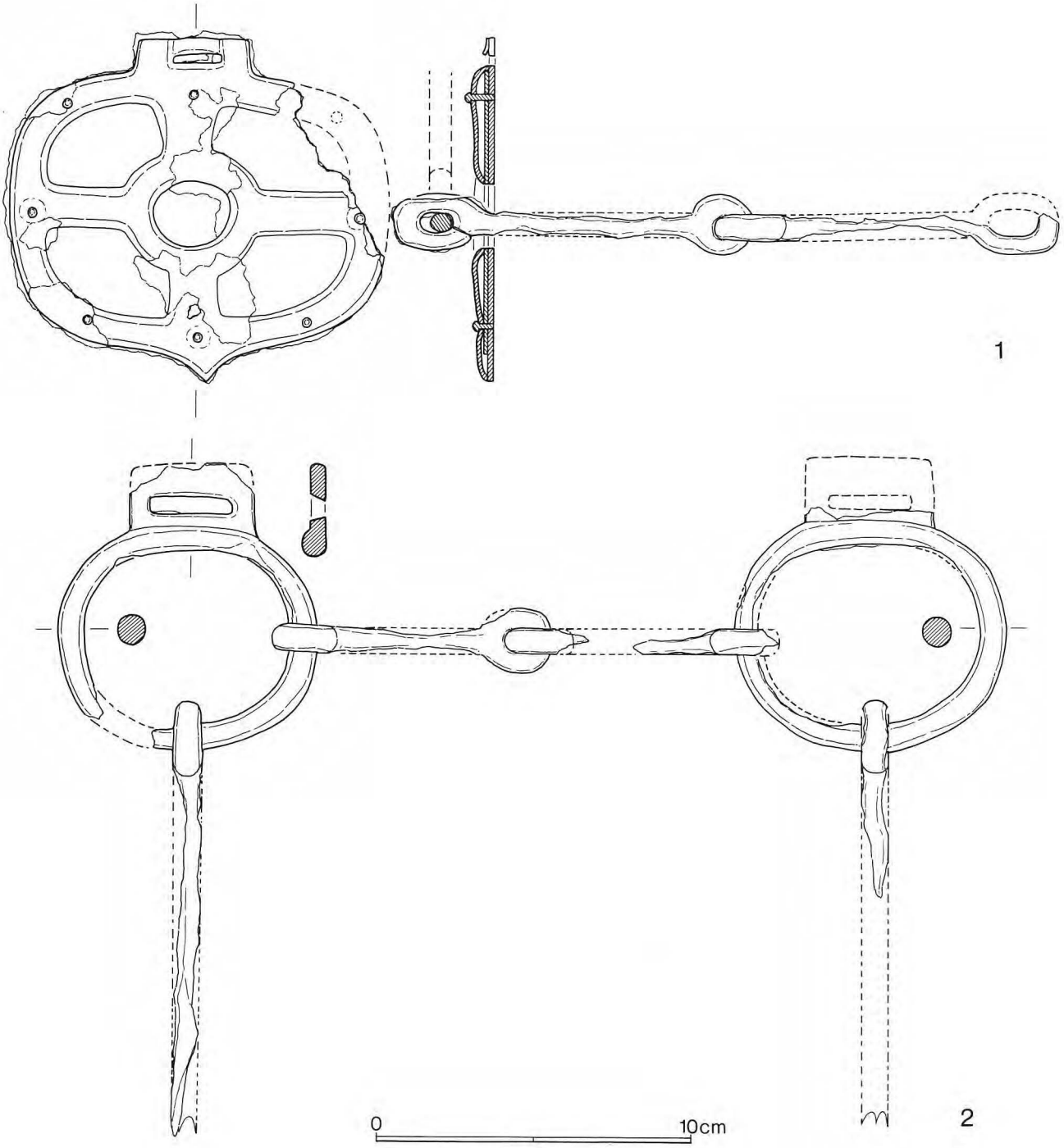


図66　轡

3　馬具

①金銅製鏡板付轡（図66－１、写真71）

鏡板１枚と銜の部分が残っており、いずれも東京大学総合研究博物館蔵。

鏡板は、まず鉄板で心葉形鏡板の輪郭をつくり、それに立聞と下端突起部を除いた楕円形の金銅板を重ねる。その上に、断面が∩形の十字文透かしをもった金銅板を、８本の鋲で留める（現存は７本）。右上方が欠け、部分的に緑青が付着している。鏡板の大きさは横約12cm、縦11.0cm。十文字の中央の孔には鉄製銜が入り、引手と連結される。

銜は鉄製で錆化が著しく、一箇所折れ曲がっている部分もある。金具２本で構成され、長さは左

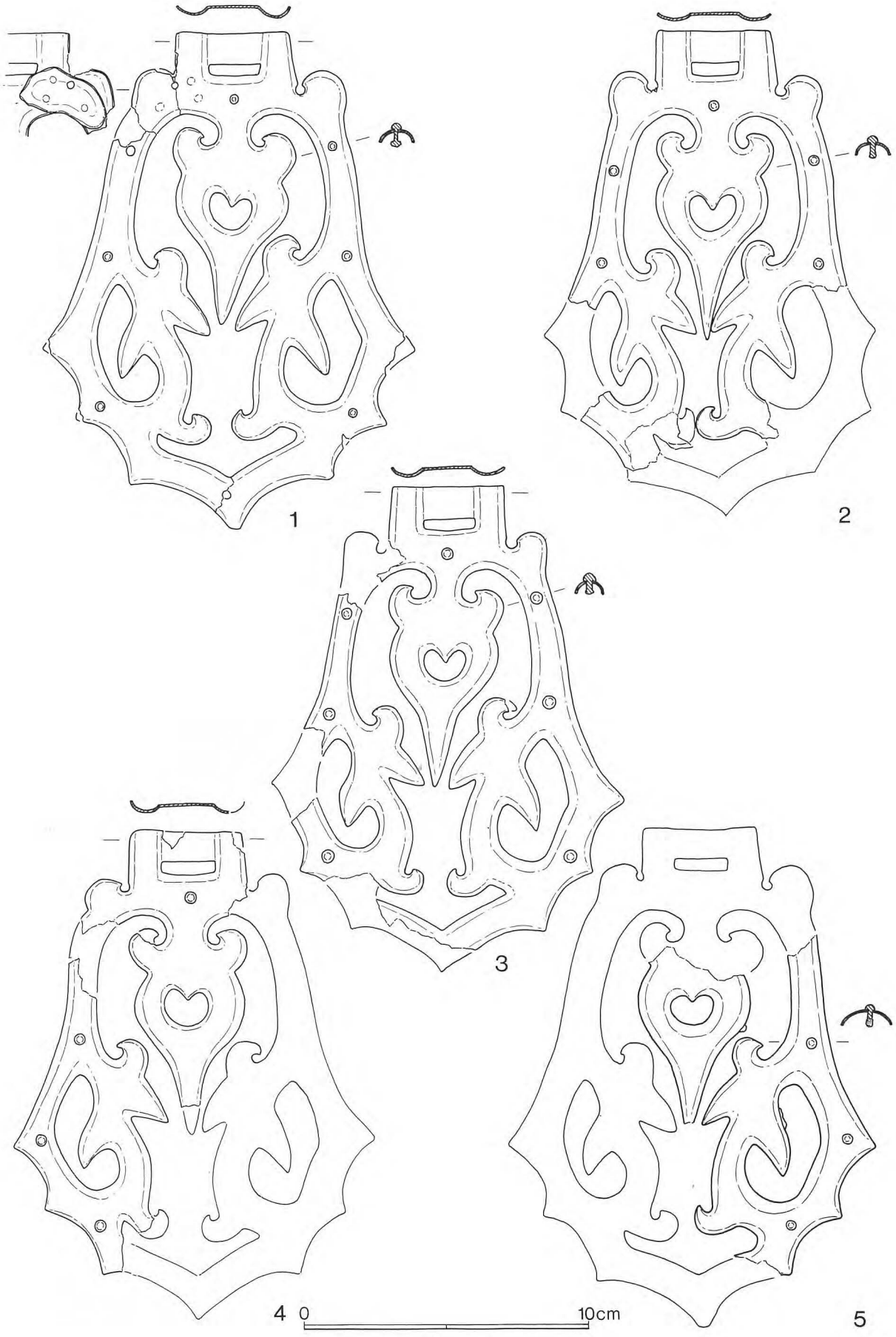


図67　金銅製棘葉形杏葉

が11.4cm、右が11.0cmで、全長は21.2cmである。中心側の円環に比べ、引手と連結する円環の方は楕円形になっていて、径も大きい。また、一方の引手の金具がわずかに残っているが、１条か２条かは不明である。

②鉄製素環鏡板付轡（図66－２、写真72）

東京国立博物館蔵。錆化による変形が激しい。

鏡板は楕円環に長方形の立聞がつくものである。図の左のものはほぼ完全に残るが、右のものは立聞の部分が欠損している。左右の楕円環の長径は4.4・4.6cm、短径は7.0・7.4cm。左の立聞は高さは2.0cm・幅4.0である。

銜は２本の金具を連結させていているが、右の金具は連結部の円環しか残っていない。左は長さ8.9cmで、右も同じ長さとすると、銜の全長は16.2cmになると推定される。引手は鏡板の楕円環に直接連結するもので、左のものが長さ14.0cm残存するが、引手壺は欠損する。右は連結部の円環のみが残っている。

③金銅製棘葉形杏葉（図67、写真73）

現在形態が確認されるのは５点。１～４は東京国立博物館蔵。５は本庄市教育委員会蔵。その他に細片になっているが田島氏蔵のものがある。

７ヵ所に突起をもつ棘葉形の縁金と、簡略化された忍冬文を同時に打ち抜き、断面が半円形となるように加工している。８点の金銅製の鋲で鉄地金銅張の台板に取り付けられていた。台板は現在すべて失われているが、鋲にわずかに痕跡がみられるものもある。１が最も残りが良く、長さ17.5cm・復原幅13.2cmである。

なお、１には立聞の左側に補修痕がみられる。製作途中で破損したらしく、裏側から別の銅板をあてて３本の鋲で留め、鋲の頭と足は丁寧に磨いた後、表面に金メッキを施している。縁金左肩の忍冬文を損ねないように、わざわざ補修板に穴をあけてバランスを保っている。

福岡県沖の島祭祀遺跡、愛知県馬越長火塚古墳等からも忍冬文を伴った棘葉形杏葉が出土しているが、文様はより精緻であり、将軍山のものよりも遡る形態を示している。

④銅製八角稜鈴（図68－１～３、写真74）

３点現存するが、柴田論文には５点あると記されている。１は東京国立博物館蔵、２は東京大学総合研究博物館蔵、３は田島氏蔵である。

鋳造品で上半部の４箇所に、型持ちのための円形あるいは方形の孔が残っている。鈴子は鉄製である。形態は茄子形の下ぶくれ状で八角稜を持ち、胴部中央に１では２条、２・３では３条の凸帯が巡る。凸帯の下には長方形の溝があり、上には頂部の半円形の鈕を中心として茄子のへたのような文様が巡る。

１は長さ13.3cm・幅9.0、２は長さ11.6cm・幅8.3cm、３は長さ12.0cm・幅8.7cmで、３点とも大きさが異なる。また胴部中央の凸帯の数や、胴部の丸みなど形態的な差もみられる。

なお、山口県スクモ塚横穴墓から、同類の鈴が出土していることが知られている。

⑤銅製鈴（図68－４～６、写真75）

３点現存し、すべて東京国立博物館に所蔵されている。なお柴田論文には４点と記されている。

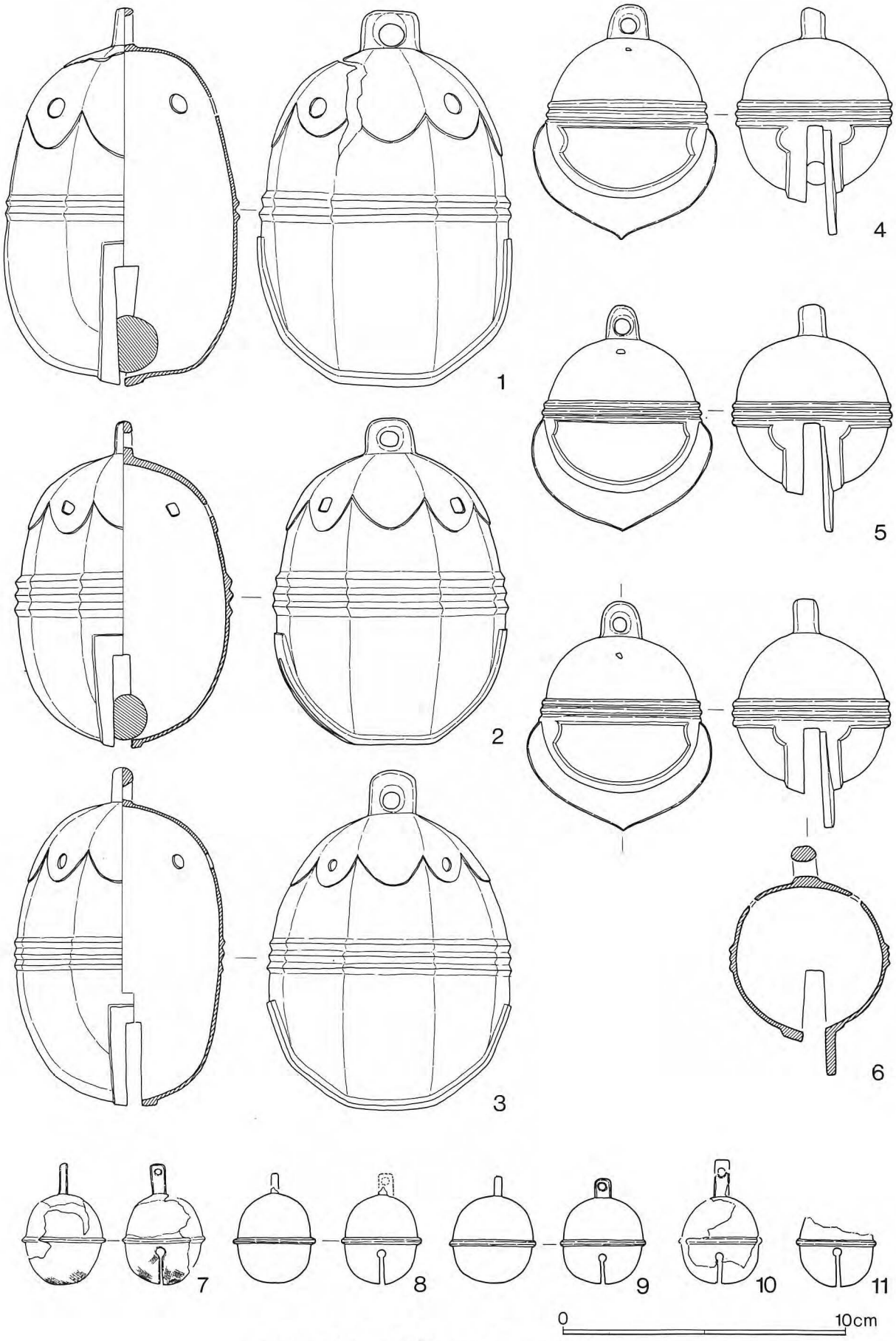


図68　銅製八角稜鈴、銅製鈴、金銅製鈴

青銅製の鋳造品。ほぼ球状の鈴本体に半円形の鈕が付くが、穴の周囲には実用による摩滅がみられる。鈴胴部中央部には３条の凸帯が巡っている。その下には長方形の溝に沿って心葉形の舌状の装飾が付けられている。鈴の頂付近には鋳造のための型持ちの孔がある。鈴子は鉄製で４は遊離し美しい音色を奏でるが、５・６は内面に付着しているため音はしない。

４は長さ8.3cm・幅6.5cm、５は長さ8.0cm・幅6.4cm、６は長さ8.2cm・幅6.5cmと、大きさにほとんど違いはない。

⑥金銅製鈴（図68－７～11、写真76）

形態を復原できるものは５点で、７は東京大学総合研究博物館蔵、８～11は東京国立博物館蔵でである。その他に細片が、上の２館と田島氏に所蔵されている。

金銅板を半球状に打ち出したものを、上下に張り合わせたものである。頂部には長方形の鈕を付けるが、鈕には長短２種類がみられる。鉄製の鈴子を入れる。

大きさは鈕の長いもので長さ4.3cm、短いもので3.8cmである。

⑦金銅製雲珠（図69－１、写真77）

東京大学総合研究博物館に１点所蔵されている。鉢部径9.4～10.0cm、脚を含めた最大長が14.0cm、高さ2.8cm。

６脚あり、そのうち５脚はほぼ等間隔に並ぶが、１脚だけが隔絶しており、対称形にはなっていない。金銅板を脚の部分も一括で打ち抜き、鉢部はなめらかな半球形に打ち出し、周縁は斜め下方に折り曲げている。頂部には装飾を取り付けるための不整形の孔がある。なお、この孔の裏側をみると、装飾を留めたと考えられる径約７㎜の金具の痕跡がある。丸形の脚には３箇所に鋲留めのための孔が開けられていて、脚の付根には責金具を固定させるための抉りがある。脚の裏側には毛彫り状の条痕がみられる。現在丸頭の金銅製鋲が４本、責金具が１本のみ残存する。

⑧金銅製辻金具（図69－２～５・図70－６～26、写真78・79）

ほぼ完存するものが７点（２～８）、鉢部が破損しているもの１点（９）、脚部のみ17点（10～26）がある。２～８・10～18が東京国立博物館蔵、９・19～26が田島氏蔵である。

脚が４本である以外は、金銅製雲珠とまったく同じ作りである。鉢部の径は7.3～8.0cm、脚まで含めた全体の長さは11.6～12.0cm、高さは2.0～2.3cmである。全体に規格は均等であるが、脚の方向が直交しないものもある。なお、雲珠と同様に頂部の不整形の穴の裏側には、径７㎜ほどの円形の金具で装飾部品を留めていた痕跡がみられる。

⑨金銅製帯金具（図70－27・28）

２点とも田島氏蔵。辻金具の脚と類似するが単独の金具である。責金具を固定する抉りがないこと、周縁を折り曲げないことに違いがみられる。平成３年度の調査でも１点出土している（図30参照）。長さ2.5 cm幅・2.2cm。

⑩鉄製輪鐙（図71、写真80・81）

形態的に２種類２対あり、いずれも東京国立博物館蔵である。

１・２は扁平な鉄板を鍛えて作ったもので、踏込部は２条になるように、別の鉄板を張り合わせている。錆化が激しく、吊手先端や踏込部の一部は欠損している。復原長は約34cm、幅は１が21.6

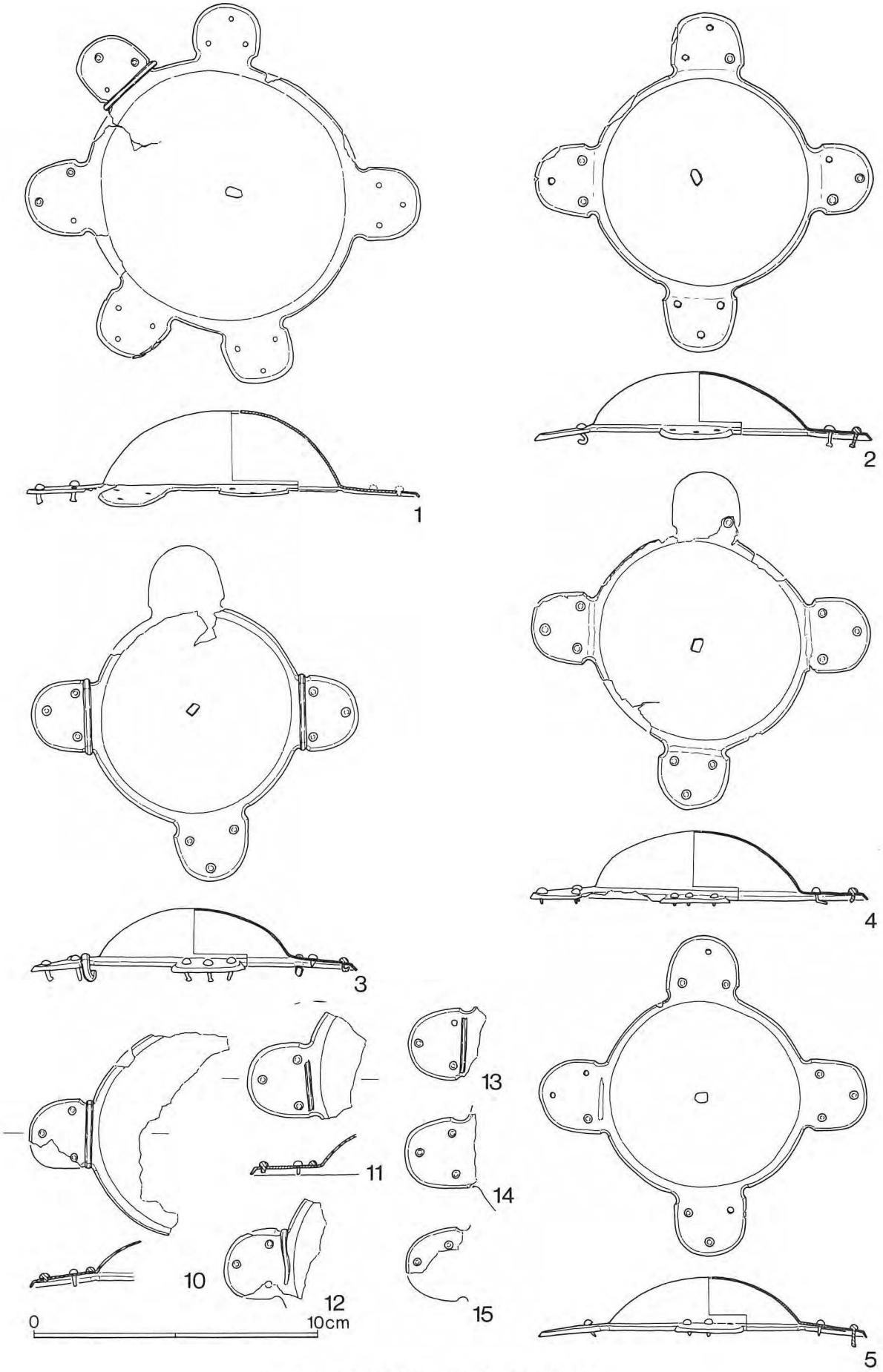


図69　金銅製雲珠、金銅製辻金具（1）

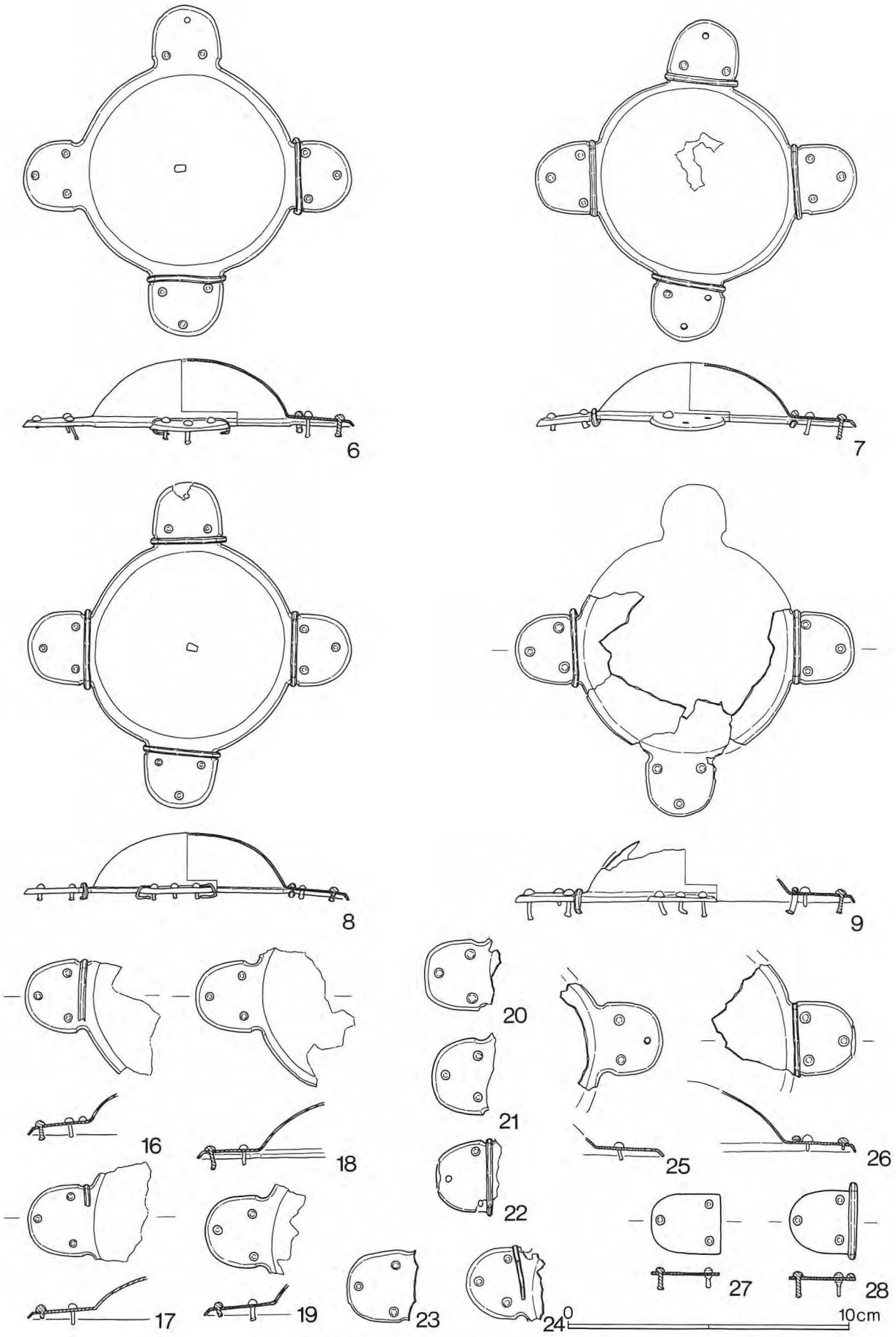


図70　金銅製辻金具（2）・金銅製帯金具

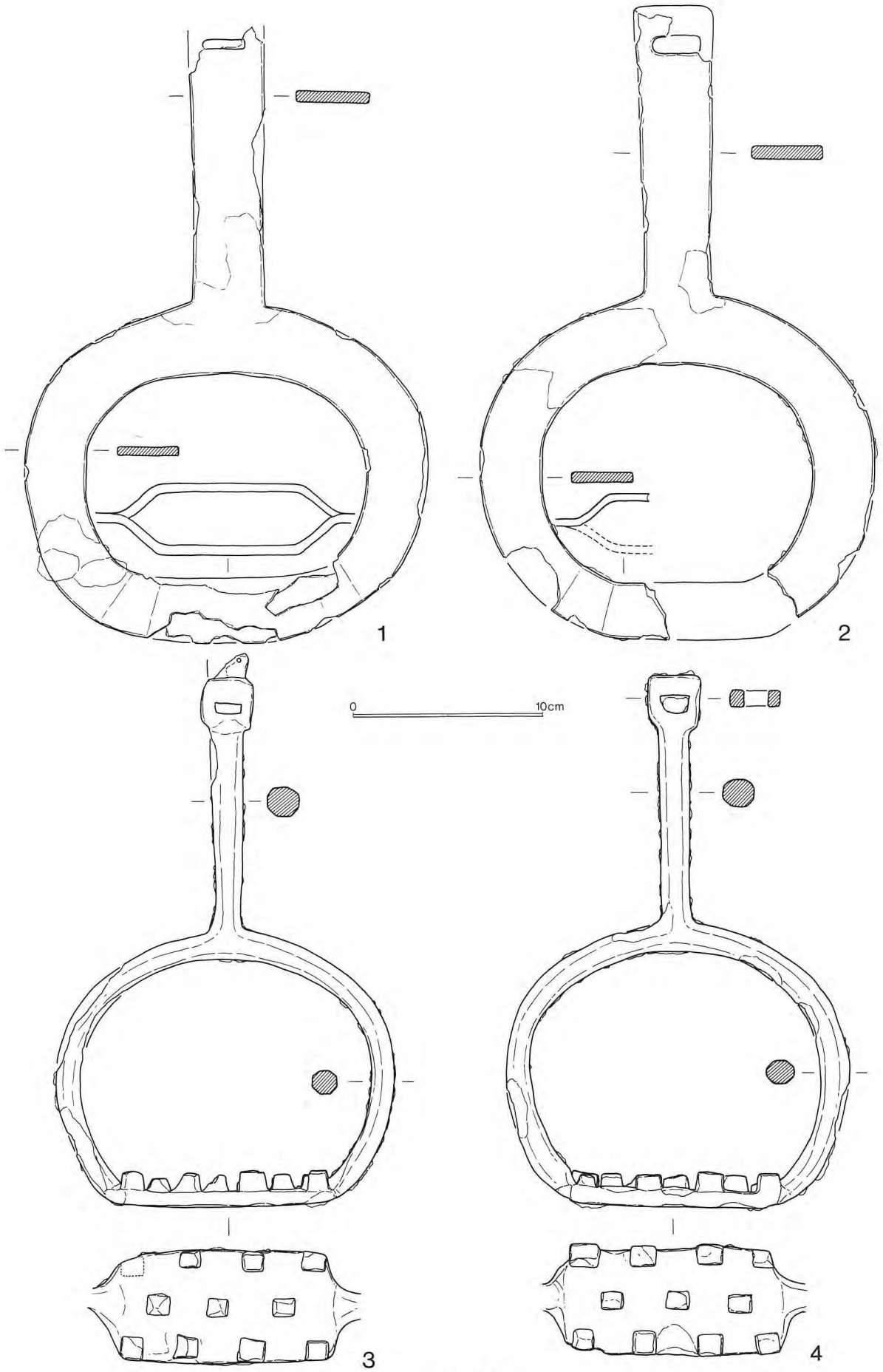


図71　鉄製輪鐙

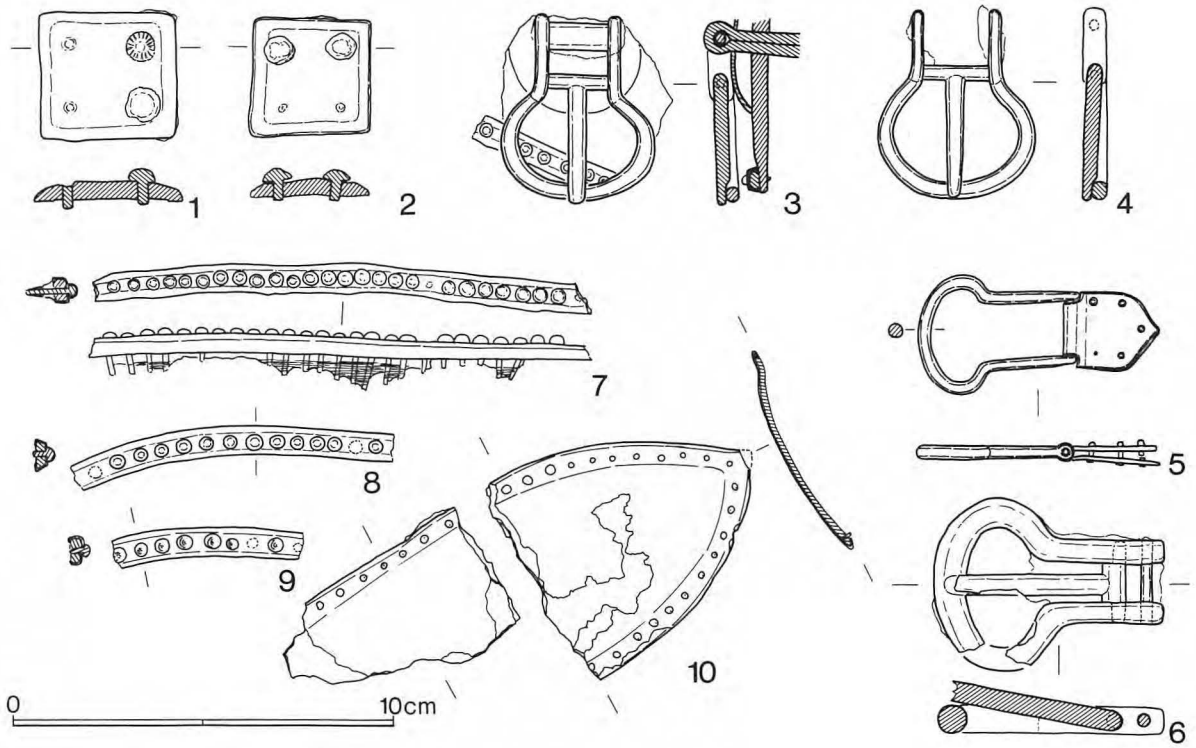


図72　鉄地銀張飾金具、鞍金具、鉸具

cm・２が21.0cmである。

３・４は断面が円形に近い八角形の鉄棒で作ったもので、踏込部には扁平な鉄板を溶接して、ほぼ立方体の突起を11個接着している。吊手部分は扁平に叩いて作っているが、３では吊手の上にさらに突起が付き、鉄製のピンを差し込んでいる。３は現存長29.4cm・幅12.0cm、４は長さ28.4cm・幅15.3cm。

⑪鉄地銀張飾金具（図71－１・２）

１は東京国立博物館蔵、２はさきたま資料館蔵である。平成３年度に出土したもの（図30参照）と一連である。断面台形の鉄板に銀板を被せ、頭部に菊花状の刻みを入れて銀を被せた鋲を４本差し込んで、帯に固定させる。１は縦3.4cm・横3.6cmで鋲は２本残存、２は縦3.0cm・横3.2cmで鋲は２本残存する。今回出土したものと合わせると、この方形の飾金具は大小２種類に分けられるようである。

⑫鞍金具（図72－３・４・７～10、写真82）

金銅製の鞍が２点と、鉄地銀張の磯金具と縁金具の破片がある。３・４・８は東京国立博物館蔵、９は東京大学総合研究博物館蔵、７・10はさきたま資料館蔵である。

３は鉄地銀張の磯金具に取り付けられた金銅製鞍である。半球形の金銅製座金具を介して、鉄製の金具によって鞍に固定されていて、金具先端には鞍の木質が残存する。断面円形の銅の棒を帆立貝形に曲げて作るが、刺金を差し込む部分から根元にかけては、叩いて断面長方形にしている。４の鞍もまったく同じで形態である。鞍の長さは4.9cm・幅4.1cm。

磯金具は台板・縁金具ともに鉄地銀張製である。平成３年度出土の鞍金具と同一個体であろう。鋲の間隔には破片によって疎密があり、前輪と後輪の違いなどが想定される。９はほとんど直線で

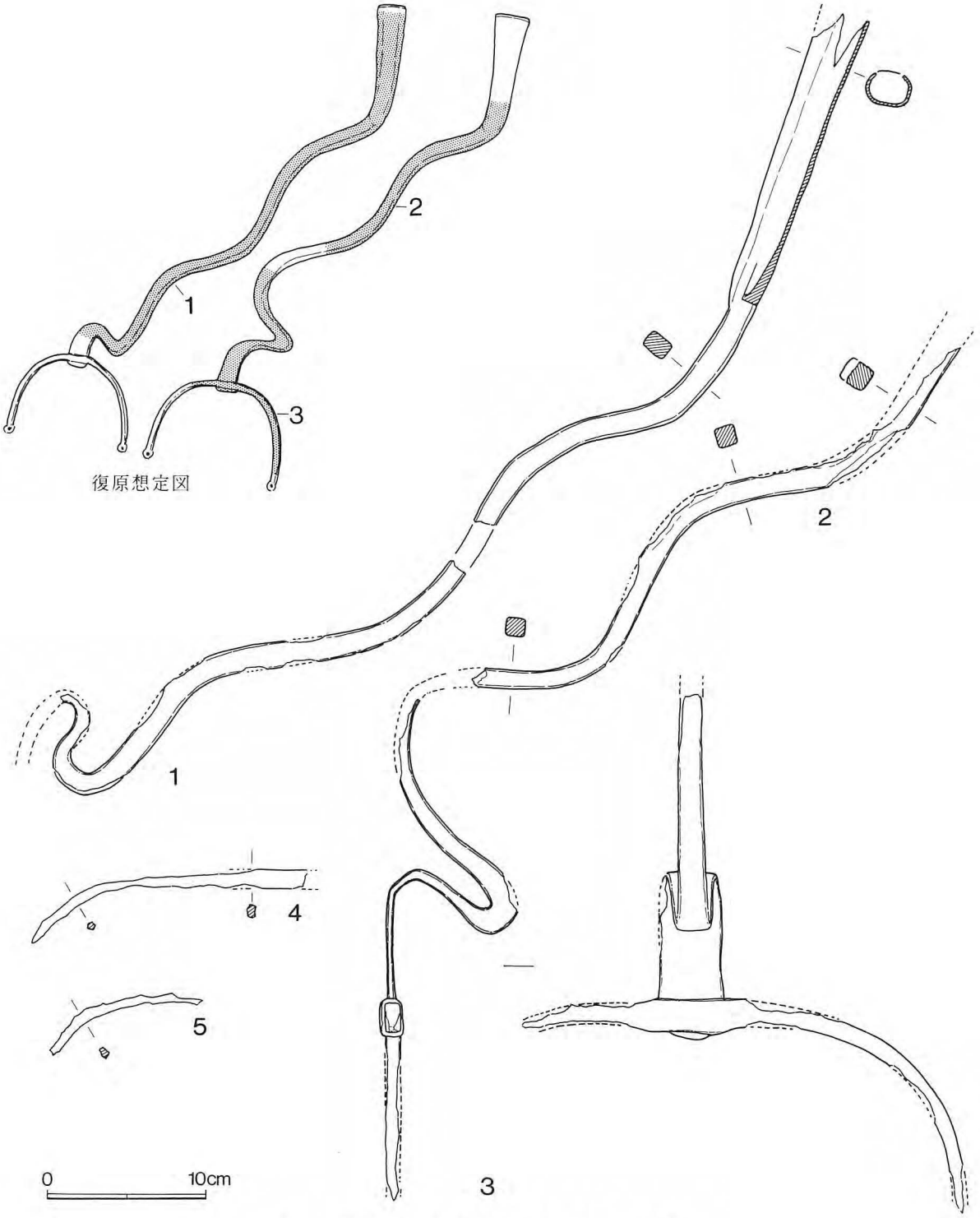


図73　蛇行状鉄器（一部〔文献６〕による）

あることから、洲浜金具の縁に付けられたようである。

⑬鉸具（図72－５・６、写真83・84）

５は金銅製鉸具で東京大学総合研究博物館蔵である。長さ6.3cm・幅3.2cm。ほぼ完存しているが、金メッキはほとんど剝がれている。刺金のない形態である。径0.4cmの断面円形の銅棒を帆立貝形に折り曲げて根元に別の細い棒を差し込み、それを花弁形の金具で挟み込んで留める。この花弁形

金具は銅鋲５本で帯に固定させている。鋲の頭部は丸頭で足部分はつぶして留める。革などの有機物は残っていない。

６は鉄製の鉸具でさきたま資料館蔵。長さ6.0cm・復原幅4.6cmである。錆化が激しい。

⑭蛇行状鉄器（図73、写真85）

現在５点の破片が認められる。３は東京国立博物館蔵で、それ以外はすべて埼玉県立博物館蔵である。馬の鞍の後に立てて、旗を差し込むための鉄器である。全体に錆による破損が激しい。すでに関義則による詳細な報告がある［文献６］ので、概略だけを記す。

１は馬に固定するためのU字形の鉄棒を欠損している。断面長方形の棒を加工して作っているが、根元に近付くほど細くなる傾向にある。ソケットの先端も欠けているが、ほぼ原形を留めている。鉄棒はソケットから４回緩やかに屈曲したのち、５回目と６回目はそれぞれほぼ180度に大きく曲げられている。現存長は約70cmである。

２は、３回屈曲した鉄棒とU字形の鉄棒との接合する部分である。U字形鉄棒の片方及び先端を欠損しているが、復原するとU字部の幅は約28cmになると推定される。接合部は差し込み式になっていて、本体の鉄棒はこの部分では扁平に鍛え伸ばされている。なお、２は曲線の形状から１とは接合せず、３と同一個体である可能性がすでに指摘されている。３は３回屈曲しており、図の左側の方が棒の断面が細くなっているので、こちらが根元の方向であると想定される。２と同一個体としても矛盾は生じない。

４・５はU字形鉄棒の破片であるが、原形をほとんど留めていない。

⑮馬冑（図74、写真87）

破片Ｄは東京国立博物館蔵で、それ以外はすべてさきたま資料館蔵である。鉄製。すでに若松良一による詳細な紹介と復原案がある［文献８］ので、ここでは概略のみを記す。なお、部分の名称は太田博之の［文献９］によっている。

破片Ａ・Ｂは面覆いの側板と眉間板が接合される部分で、それぞれ左右の対称位置の破片である。眼孔部の一部がかかり、側板には楕円形の「顔稜受」が打ち出されている。側板の下辺には５ヵ所に鋲留めのための穿孔がみられる。破片Ｃは右眼孔部の上方にあたり、破片Ａと接合する。馬顔面の中央を通る天井板が鋲留めされる。破片Ｄは面覆い部右後方で、破片Ｃと接合する。破片Ｄの後方の横向きに鋲留めされた矧板は、端部で上方に屈曲している痕跡があり、ここから直接、庇が立ち上がるものとみられる。側板は一部しか残っていないが、後辺は矧板の端部にあたる。また顔面中央の天井板は、この横方向板との重複部で終わっており、庇部までは延びていない。

５　工具類（図75－１）

鍛造製の小型鉄斧が１点出土している。さきたま資料館蔵。現存長9.5cm。

上端・下端とも欠損している。また袋部の鉄板折り返し部分も失われている。

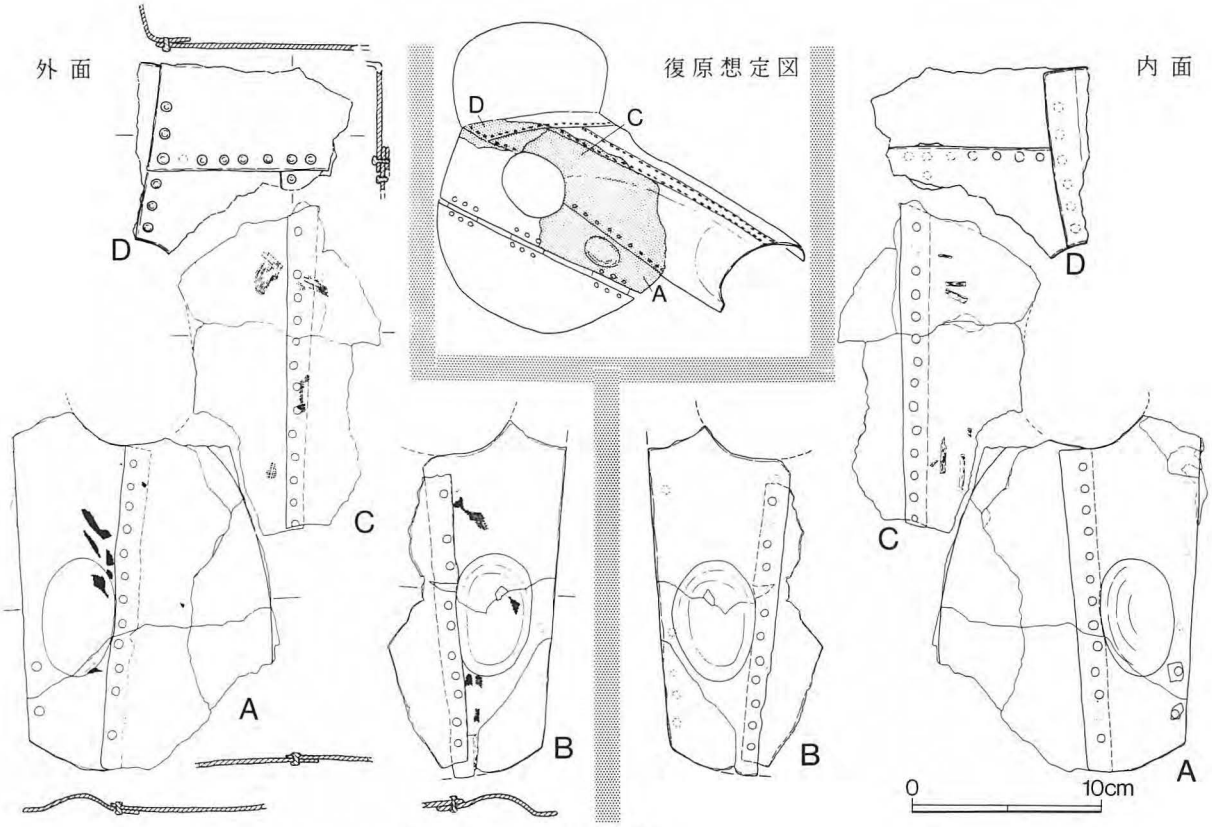


図74　馬冑

6　用途不明飾金具・鉄器

①金銅製筒状飾金具（図75－２）

さきたま資料館蔵。金銅板を筒状に巻いて接合させている。高さ2.3cm、上径1.4cm、下径1.9cmで、下に向かって緩やかに広がっている。内面には上から1.7cmのところまで繊維痕が付着している。棒状のものの先端に差し込んで使用したものと考えられるが、用途不明である。

②金銅製袋状飾金具（図75－３～６、写真86）

現在４個現存する。３は東京大学総合研究博物館蔵、４～６は田島氏蔵である。長幅2.8～3.1cm、短幅2.7～2.8cm、高さ1.3～1.5cmと、それぞれ大きさに若干の相違はあるものの、ほぼ同形である。両脇のくびれ部には固定糸を通すための孔が開けられている。銅板を型に押しつけて打ち出して金メッキを施したものであろう。何を装飾したのかは不明だが、作り方が雲珠や辻金具と類似するので、馬具であった可能性がある。

③不明鉄器（図75－７～10）

いずれもさきたま資料館蔵。７と８は鉄板の破片であるが、Ｘ線による観察の結果、縁に沿って孔が穿たれていることが判明した。それぞれ孔の配置は異なっている。何かの小札とすれば、同様のものが多く出土してもよさそうだが、この２点の破片以外には同種のものは確認していない。

９は鉄製の鉸具のようなもので、鉄板に斜めに付着させており、可動するのは刺金の部分のみである。何に伴っていたものかわからない。

10は鉄板を帽子の鍔のように加工したもので、上縁径が約15cm・下縁径が約28cmと復原される。上縁には別の鉄帯を折り曲げて縁金状に巡らせている。

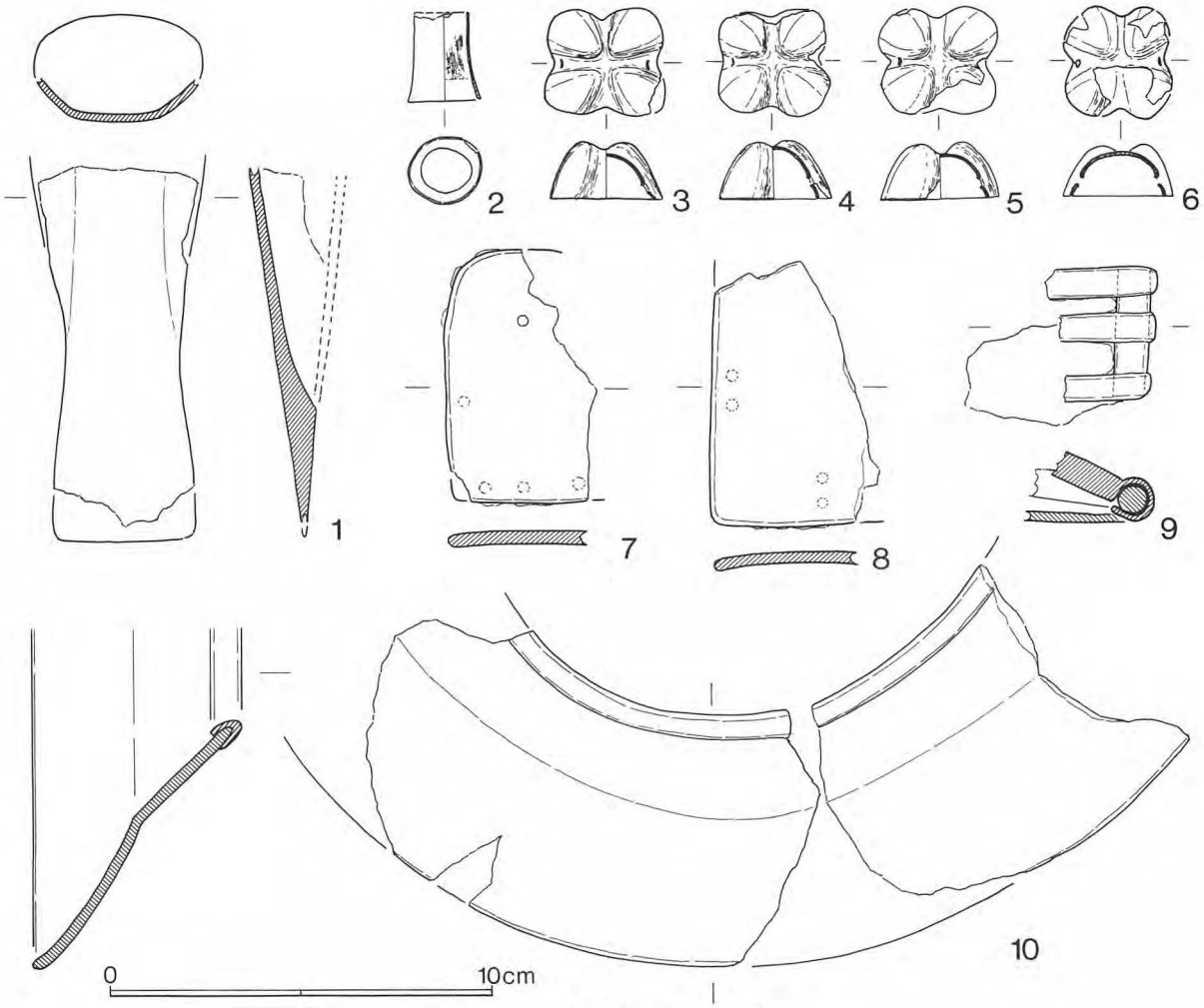


図75　鉄斧・用途不明飾金具・鉄器

7　容器類（図76－１、写真89）

①高台付蓋付銅鋺

１点、東京大学総合研究博物館蔵。全器高12.0cm、鋺部器高7.5cm、鋺部の口径10.5cm、高台径4.8cm．鋺部の口縁がわずかに欠けている他は残存状態が良好である。銅の色も半分以上残っており、全国で出土した銅鋺の中でも優品としてよく知られている。

蓋：宝珠つまみは八葉花弁の座金具を通し、頂部内面で先端をつぶして固定している。蓋の外面には２条のセットの沈線を４単位巡らす。内面の頂部付近には削りによる調整の痕跡が明瞭に見られる。内面は大きく内湾して口縁部に至り低い返りが作り出されている。

鋺：半球状を呈し、削り出した高台が付く。口唇部は上部を面取りして平坦な面を作っている。口縁部外面付近に１条の沈線を巡らせるが、他には内外面ともに沈線はない。

②銅鋺（図76－２・３、写真90・91）

２点あり、２は東京大学総合研究博物館蔵、３は田島氏蔵である。

２は口径16.4cm、器高8.4cm。口縁部が1/4ほど欠損している他は、残存状態は良好である。半球状の形態で、口唇部は肥厚させて上面を平らに削っている。外面は口唇部に１条の沈線、その下に２条セットの沈線を３単位、さらにその下に３条セット沈線を２単位を巡らす。底部には２条沈線

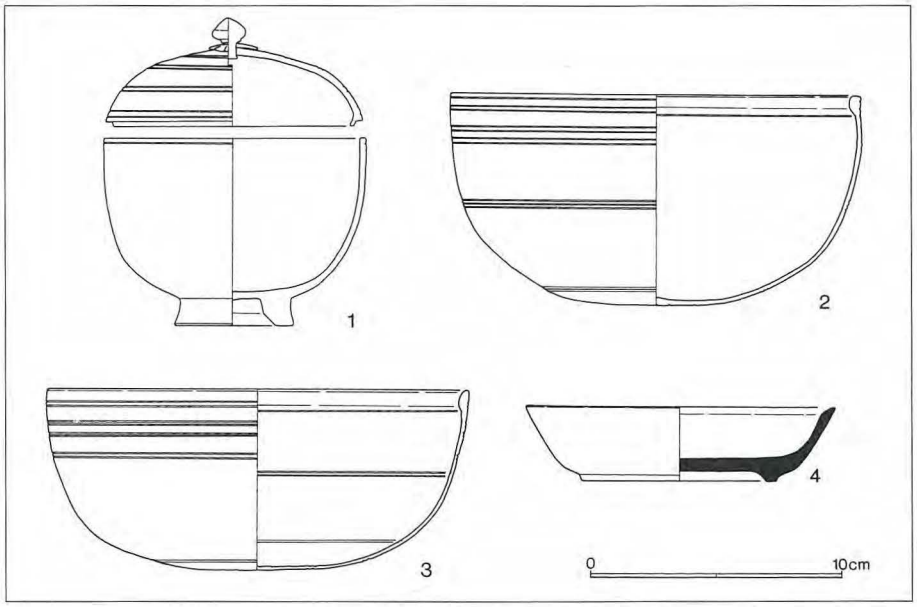


図76　高台付蓋付銅鋺、銅鋺、石製盤

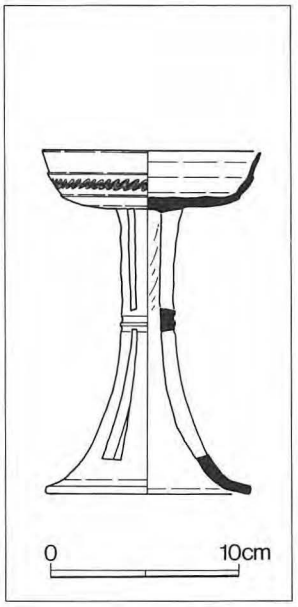


図77　須恵器高坏

と１条沈線をそれぞれ１単位巡らして、底部中央には点状に浮き出るように１条沈線が施される。内面には肥厚させた口唇部の下に１条の沈線を巡らせる。

３は口径16.8cm、器高7.4cm。口縁部は1/6ほど欠損し、銅鋺３点のうち最も残存状態が悪い。半球状の形態であるが２よりも浅い。口唇部は肥厚させて、断面は卵形を呈する。外面には２条セットの沈線を６単位巡らす。内面には肥厚した口唇部の下に１条、その下に２条セットの沈線を３単位、底部中央には１条沈線を２単位巡らせる。

③石製盤（図76－４、写真92）

東京国立博物館蔵。口径12.4cm、器高3.0cm、高台径7.8cm。

白い斑点を霜降り状に含む、黒色の蛇紋岩で作られている。高台があり、盤の底部は平らで、口縁は内湾せずに、まっすぐ斜めに立ち上がる。口唇部は内面に傾斜させておさめる。盤の底部内面は粗い磨きのままだが、その他は非常に丁寧に磨いていて光沢を帯びている。細かな削痕が観察できる。

④須恵器高坏（図77、写真88）

東京国立博物館蔵。口径11.4cm、器高18.2cm、底径11.0cm。

長脚には２段３方の長方形の透かしがある。坏部は斜め上方に広がる口縁をもち、中段には櫛描きの波状文を巡らしている。暗灰褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。なお口縁部の欠損した部分に、今回の調査で出土した破片が接合した。

陶邑編年のＴＫ43型式に相当すると考えられる。

《参考文献》

［文献１］柴田常恵「武蔵北埼玉郡埼玉村将軍塚」『東京人類学会雑誌』第231号、1905年

［文献２］高木豊三郎『史蹟埼玉』埼玉村教育会、1931年

［文献３］長谷川勇・石橋桂一「諸井家寄贈考古資料」『紀要』創刊号、本庄市立歴史民俗資料館 1986年

［文献４］『東京国立博物館図版目録　古墳時代編（関東Ⅲ）』1986年

［文献５］田中正夫「将軍山古墳出土遺物の資料調査報告(1)－鉄鏃－」『調査研究報告』第１号 、埼玉県立さきたま資料館、1988年

［文献６］関　義則「埼玉将軍山古墳出土の蛇行状鉄器」『埼玉県立博物館紀要－16』1989年

［文献７］清水和明「挂甲」『斑鳩藤ノ木古墳　第一次発掘調査報告書』1990年

［文献８］若松良一「埼玉将軍山古墳出土の馬冑」『調査研究報告』第４号、埼玉県立さきたま資料館、1991年

［文献９］太田博之「埼玉将軍山古墳出土馬冑資料の基礎研究」『日本考古学』第１号、日本考古学協会、1994年

［文献10］石井昌國・佐々木稔『古代刀と鉄の科学』考古学選書39、雄山閣出版、1995年

［文献11］岡本健一「将軍山古墳石室出土遺物の所在について」『調査研究報告』第９号、埼玉県立さきたま資料館、1996年

写真56　乳文鏡（東京国立博物館蔵）

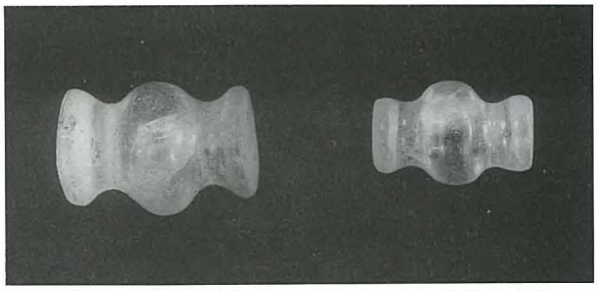


写真57　水晶製三輪玉（東京国立博物館蔵）

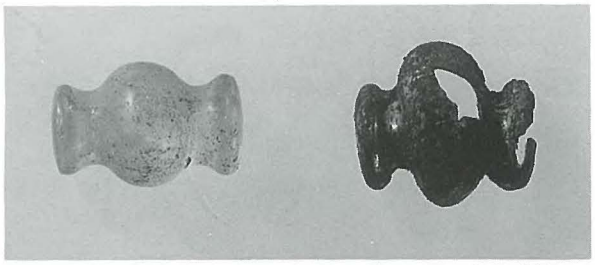


写真58　三輪玉（左・水晶製、右・金銅製）
（本庄市教育委員会蔵）

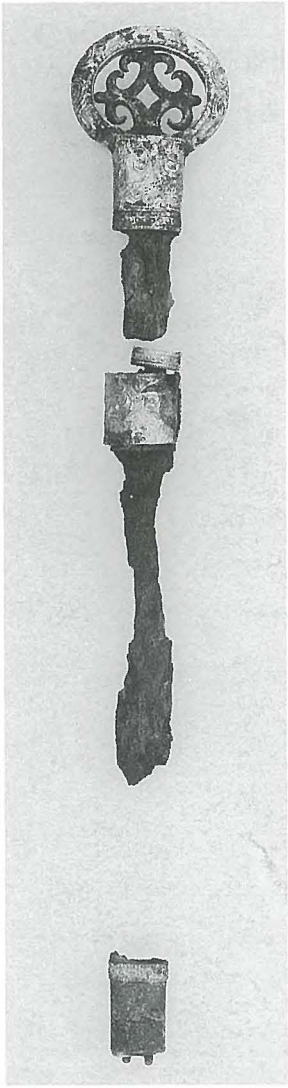


写真59　環頭大刀
（東京国立博物館蔵）

写真60　環頭大刀環頭部

写真62　銀装大刀柄部
（東京国立博物館蔵）

写真61　環頭大刀鞘口金具

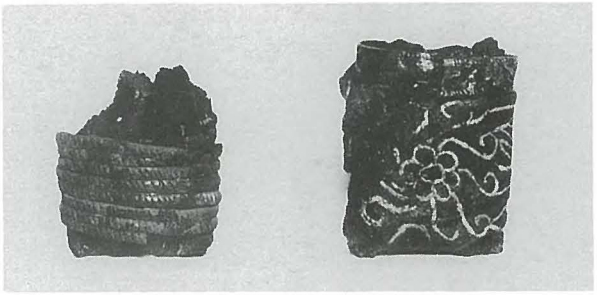


写真63　銀装大刀・象嵌刀柄装飾金具
（東京大学総合研究博物館蔵の古写真）

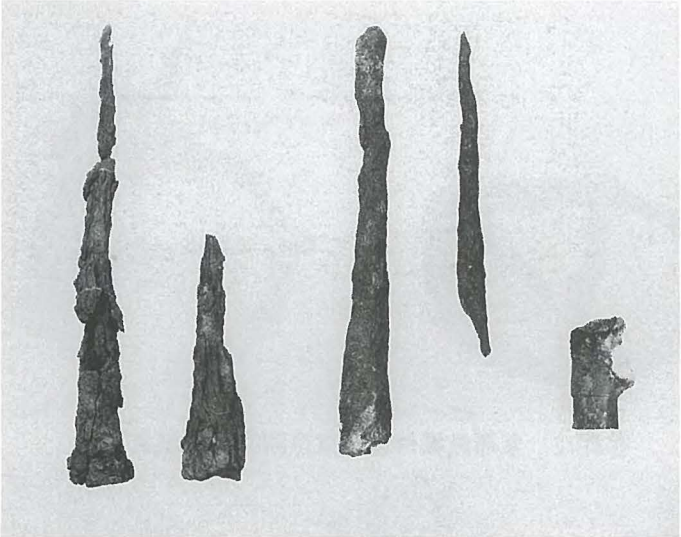


写真64　鉄矛（東京国立博物館蔵）

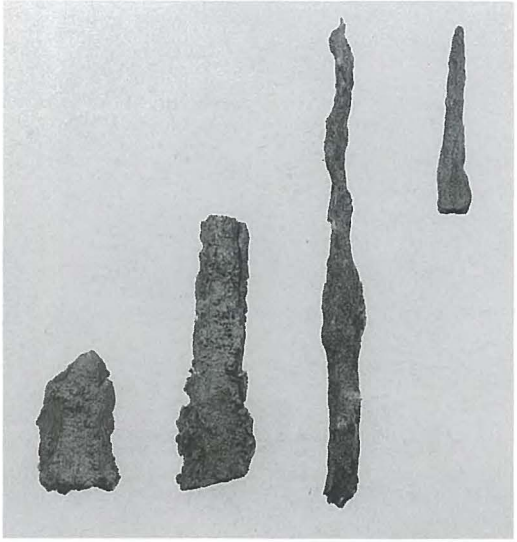


写真65　鉄矛（県立さきたま資料館蔵）

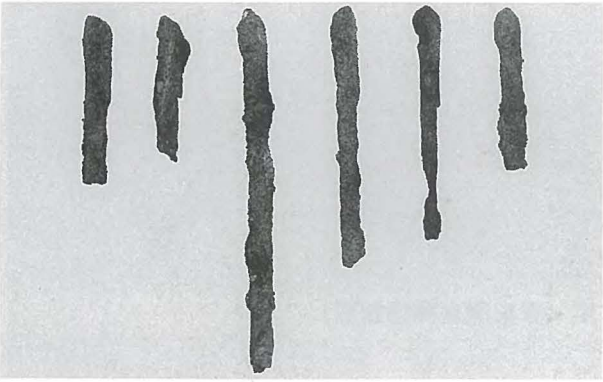


写真66　鉄鏃（県立さきたま資料館蔵）

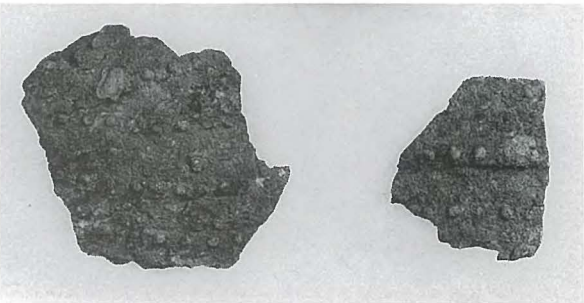


写真67　衝角付冑片（東京国立博物館蔵）

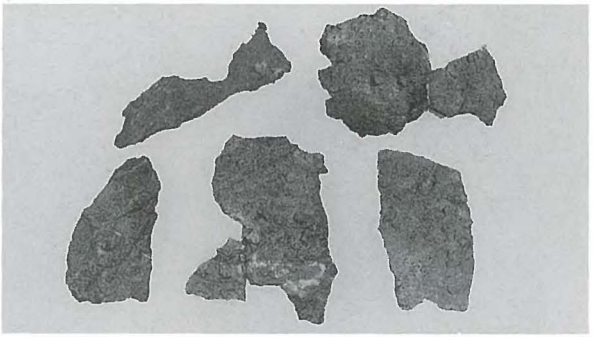


写真68　衝角付冑片（県立さきたま資料館蔵）

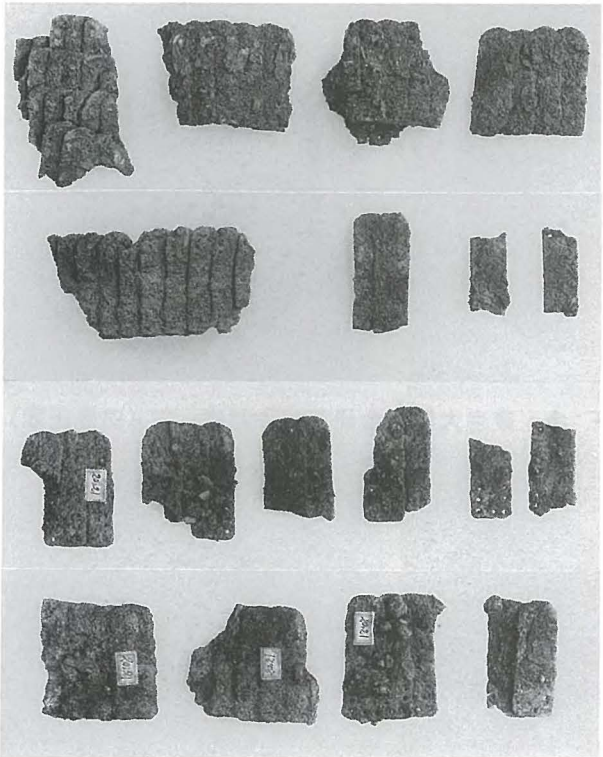


写真69　挂甲小札（東京国立博物館蔵）

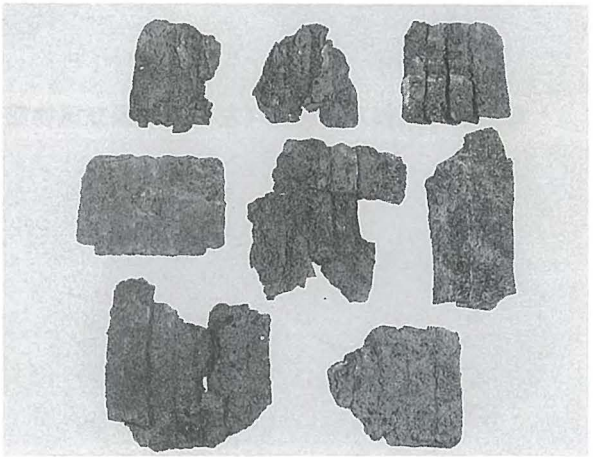


写真70　挂甲小札（県立さきたま資料館蔵）

写真71　金銅製鏡板
（東京大学総合研究博物館蔵）

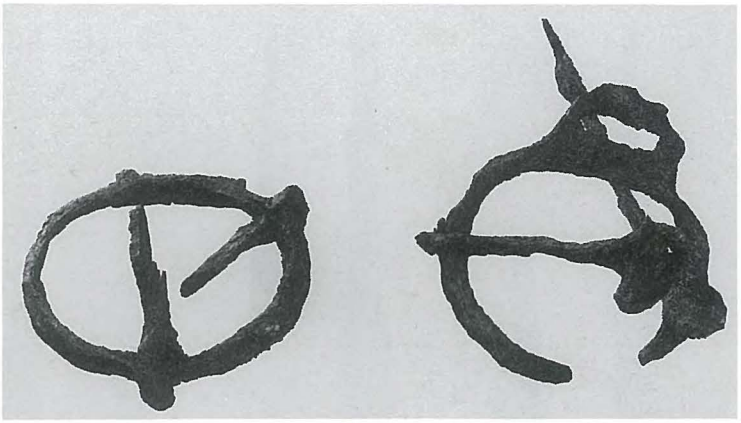


写真72　素環鏡板付轡（東京国立博物館蔵）

写真73　金銅製棘葉形杏葉（東京国立博物館蔵）

写真74　銅製八角稜鈴（左・東京国立博物館蔵、中・東京大学総合研究博物館蔵、右・田島氏蔵）

写真75　銅製鈴（東京国立博物館蔵）

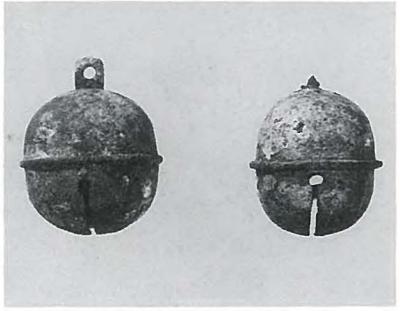


写真76　金銅製鈴
（東京国立博物館蔵）

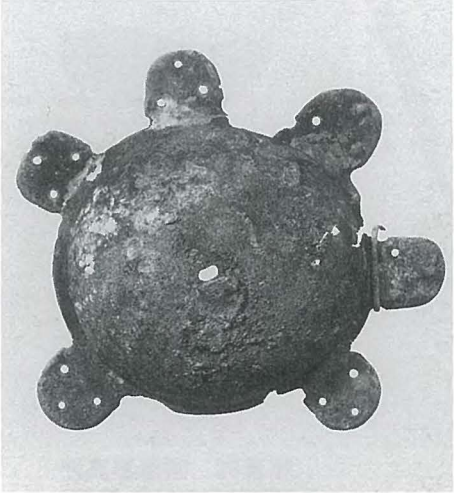


写真77　金銅製雲珠
（東京大学総合研究博物館蔵）

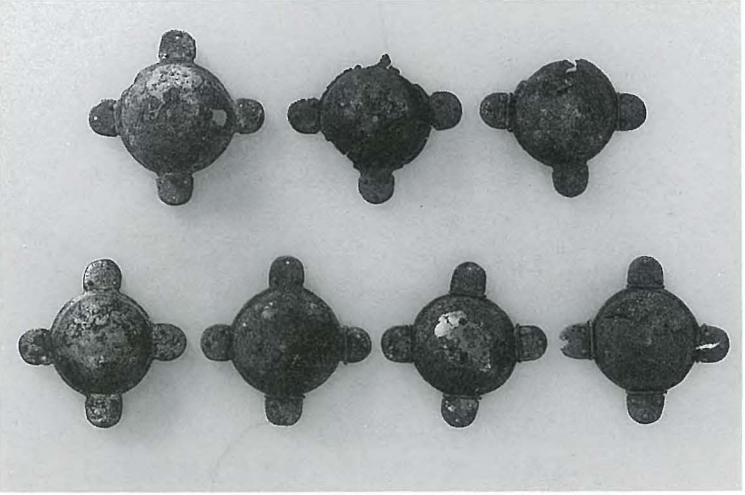


写真78　金銅製辻金具（東京国立博物館蔵）

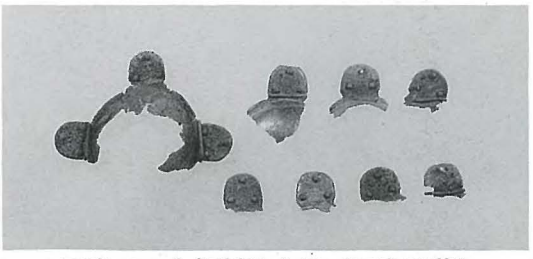


写真79　金銅製辻金具（田島氏蔵）

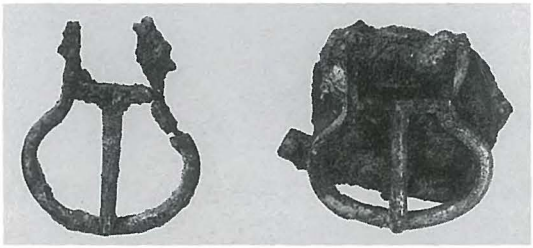


写真82　鉄地銀張鞍金具鉸具
（東京国立博物館蔵）

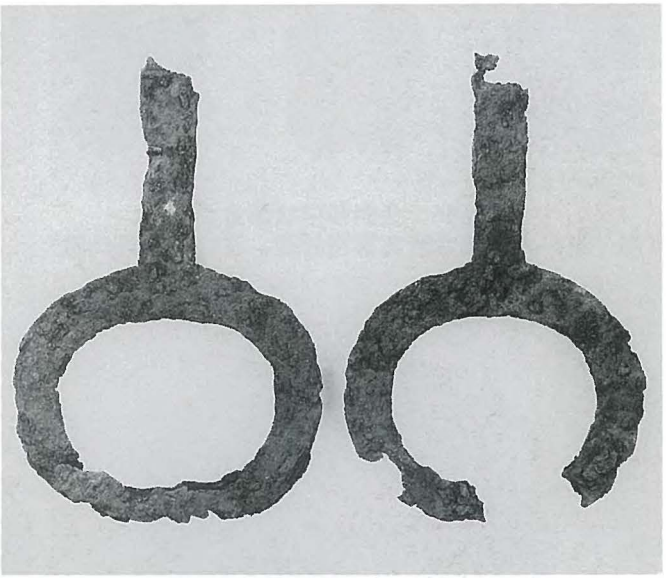


写真80　鉄製輪鐙（東京国立博物館蔵）

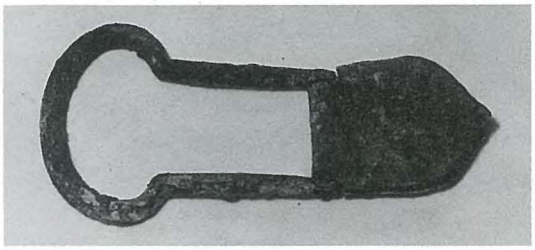


写真83　金銅製鉸具
（東京大学総合研究博物館蔵）

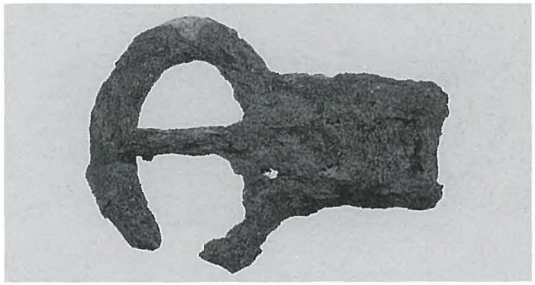


写真84　鉄製鉸具（県立さきたま資料館蔵）

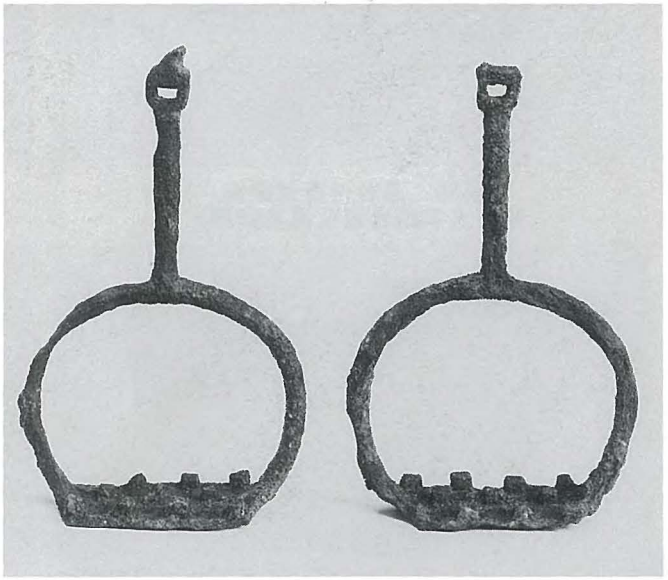


写真81　鉄製輪鐙（東京国立博物館蔵）

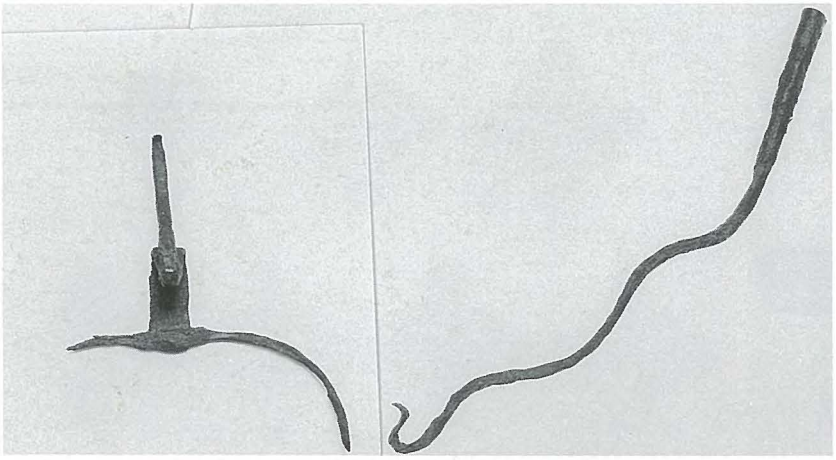


写真85　蛇行状鉄器（埼玉県立博物館蔵）

写真88　須恵器高坏
（東京国立博物館蔵）

写真86　金銅製袋状飾金具
（中・東京大学総合研究博物館蔵、左右・田島氏蔵）

写真87　復原した馬冑（県立さきたま資料館蔵）

写真89　高台付蓋付銅鋺
（東京大学総合研究博物館蔵）

写真91　銅鋺（田島氏蔵）

写真90　銅鋺（東京大学総合研究博物館蔵）

写真92　石製盤（東京国立博物館蔵）

〈第２部〉

埼玉古墳群整備の沿革

Ⅰ　埼玉古墳群整備の沿革

埼玉古墳群は昭和13年に国の史跡に指定されていたが、昭和42年度からは「さきたま風土記の丘」として整備を開始した。現在23.7haが公園として供用されており、県民の歴史教育の場であるとともに憩いの場としても、十分に活用されている（図78）。

これまでの主な古墳整備事業の経過を見ておきたい（表６）。昭和43年度に二子山古墳及び、奥の山古墳、昭和49年度に丸墓山古墳、昭和51年度に稲荷山古墳の堀を復原した。その後昭和58年度には稲荷山古墳の墳丘に階段や礫槨のレプリカを設置したり、昭和62年度に丸墓山古墳の墳丘を整備した。昭和63年度～平成３年度には瓦塚古墳の整備を行っている。そして、平成４年度より８年度にかけて、足掛け５年という期間を費やし、本書で報告する将軍山古墳の整備を行った。埼玉古墳群の整備方法に関する検討は、有識者で構成される「埼玉古墳群保存整備協議会」において毎年行っている。このように長年にわたる古墳整備の継続は、試行錯誤の連続でもあり、整備方法は古墳毎に変化し、統一されていないのが実情である。主に周堀の整備方法によって、次のように分類される。

Ａ：墳丘・周堀に手を加えず、古墳周囲の公園化のみ－愛宕山古墳・鉄砲山古墳・中の山古墳

Ｂ：周堀を水堀として復原－稲荷山古墳・丸墓山古墳・二子山古墳・奥の山古墳

Ｃ：周堀を砂利によって復原－瓦塚古墳

Ｄ：周堀は植栽によって復原し、墳丘上に埴輪を樹立させる－将軍山古墳

この他に墳丘が現存しない小円墳については、低木の植栽によって表現している。

これらの整備方法はＢ→Ｃ→Ｄの順で変化しており、日本全国の古墳整備の趨勢とほぼ一致しているといえよう。

Ａは古墳の周囲を芝張りなどで整備したり、墳丘の雑草や樹木の撤去をする程度で、堀の復原を一切行っていないもの。古墳の堀のようすは想像するしかないが、周辺の公園景観と一体となっていて、古墳が身近に感じられるという意見も聞かれる。

Ｂは古墳整備の始まった段階で行われた方法で、築造当初の形態を表現するために堀を復原しているものである。稲荷山古墳は前方部墳丘が昭和12年に削平されていたため、現在でも平らなままである。また後円部の墳頂に、金錯銘鉄剣等が出土した礫槨や粘土槨をかつては実物の遺構を覆屋を設置して公開していたが、風化による遺構の破損を防ぐため、現在ではレプリカを作製して実物遺構に土盛りをした上に設置して公開している。丸墓山古墳は古墳群の中でも最も高いので、墳頂からの眺望を楽しむことができるよう、階段を設置している。堀部には河川や未買地がかかっているので、現在約2/3ほどしか復原できていない。また墳丘の崩壊部分には土盛りをして整形している。二子山古墳も元来二重の堀をもっていたが、現在内堀を水堀として、外堀は菖蒲田として整備し、開花時期には人気を集めている。奥の山古墳は古墳群中の前方後円墳では唯一一重の堀しかもっていないもので、馬蹄形の堀を巡らせて復原している。

このように古墳の形態を示すために堀を復原しており、古墳の偉容が表現されている。しかし、

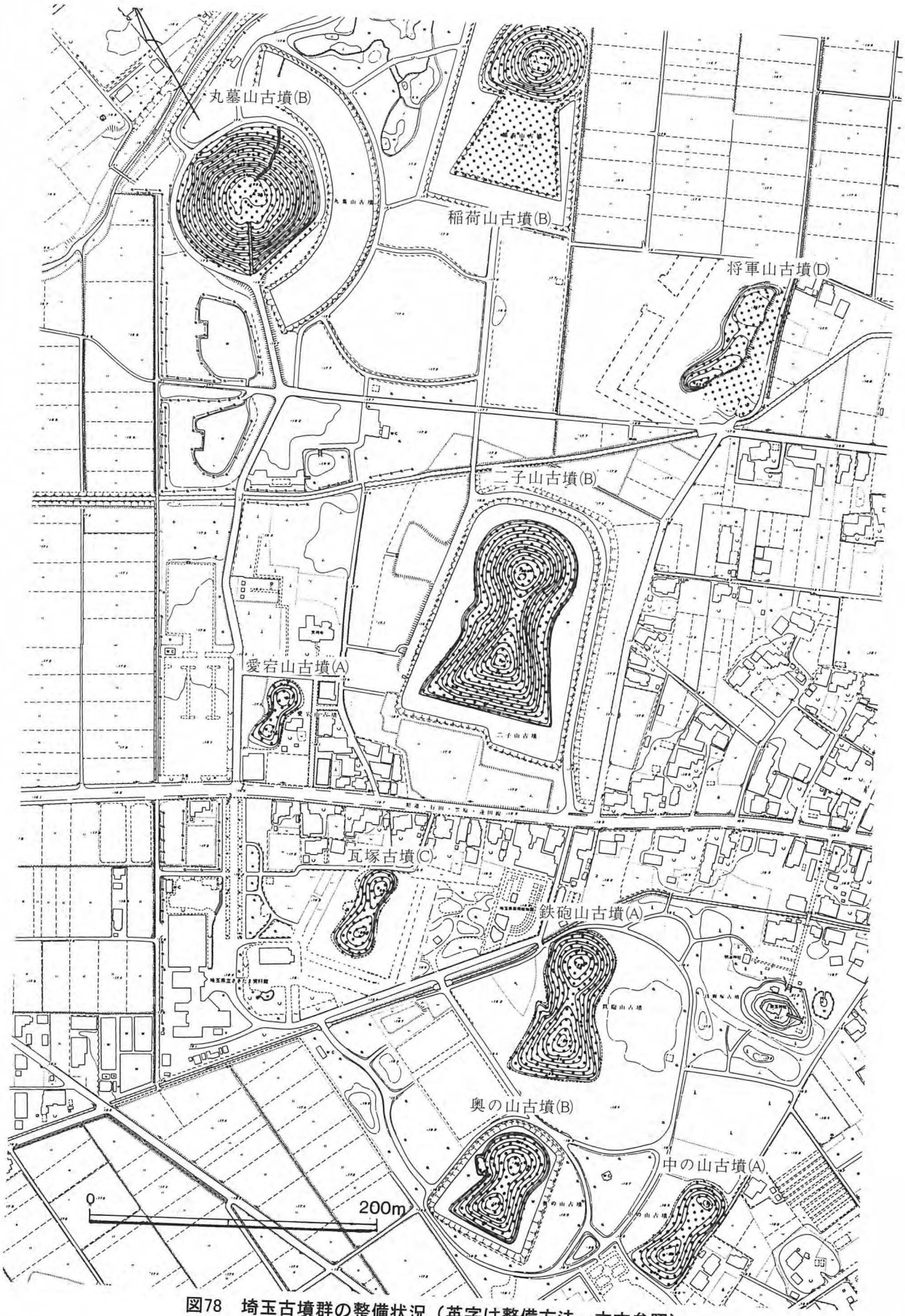


図78　埼玉古墳群の整備状況（英字は整備方法－本文参照）

に水を湛えている以上、水による墳丘の侵食が避けられない状況にある。水は自然に沁みだしてくるもので、季節によっても水位の上下が激しく、また墳丘に葺石がないので侵食が著しい。さらに古墳築造当初には堀が水がなく、空堀があったことが発掘調査でも確認されている。これらの反省点から生み出されたのがＣである。

Ｃの瓦塚古墳では堀を水ではなく砂利で表現するという、すでに群馬の綿貫観音山古墳の整備で行われた方法である。水堀の大きな問題点であった墳丘の侵食を防ぐとともに管理も容易であるという利点がある。古墳周囲に人家があって整備できない部分も多かったが、二重の堀ともに復原しており古墳群中では全体像が表された初めての古墳である。堀として実感が得られにくいが、遺跡の保護という観点では優れた手法である。

以上のような経験から、遺構の保護、公園的景観、視覚的教育効果のすべてを満たす方法を模索した結果、今回の将軍山古墳の整備が計画されたのである。これまでの四半世紀に及ぶ埼玉古墳群の整備の集大成として位置付けられる大事業である。

表６　埼玉古墳群整備の沿革

昭和41年５月	用地買収開始
昭和42年３月	都市計画事業認可
４月	さきたま風土記の丘建設事業費予算化（42～43年度継続事業）
10月	園路造成工事開始
11月	二子山古墳周堀確認調査
昭和43年８月	稲荷山古墳発掘調査
11月	**二子山古墳周堀復原**
昭和44年３月	**奥の山古墳周堀**調査・**復原**
昭和44年10月	さきたま資料館開館
昭和48年11月	丸墓山古墳・稲荷山古墳周堀確認調査
昭和49年11月	天王山・梅塚古墳他周堀、二子山古墳外堀確認調査
昭和50年４月	さきたま古墳公園第１期供用開始（県道南側9.3ha）
11月	**稲荷山古墳内堀復原**
昭和53年９月	さきたま古墳公園第２期供用開始（県道北側13.9ha）
９月	稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘発見・公表
昭和58年６月	稲荷山古墳出土品一括国宝に指定
昭和59年３月	稲荷山古墳礫槨復原
昭和60年３月	**稲荷山古墳保存整備事業終了（昭和57～59年度事業）**
昭和63年３月	**丸墓山古墳保存整備事業終了（昭和60～62年度事業）**
平成３年６月	稲荷山古墳礫槨彩色等改修工事竣工
平成４年３月	**瓦塚古墳保存整備事業終了（昭和63～平成３年度事業）**
平成９年３月	**将軍山古墳保存整備事業終了（平成４～８年度事業）**

写真93　埼玉古墳群航空写真　昭和５年

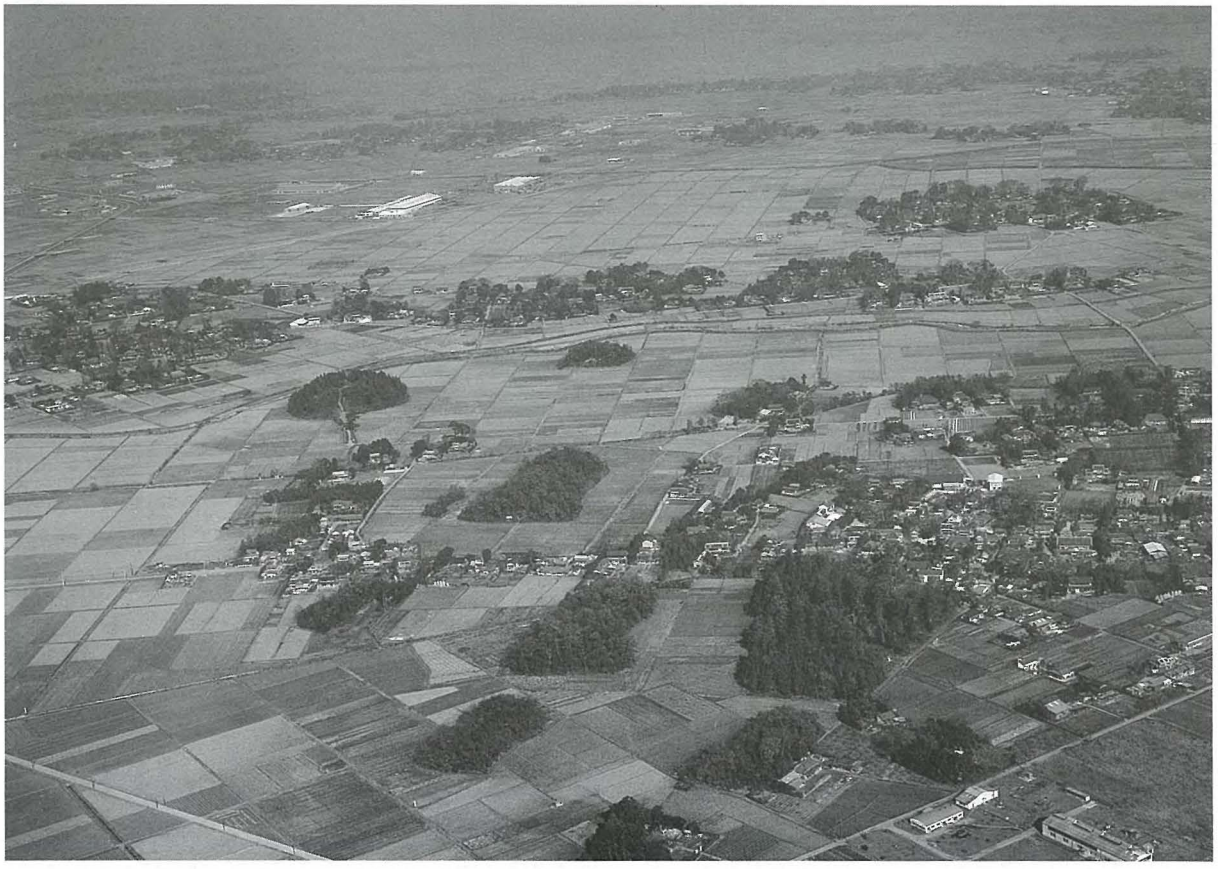


写真94　埼玉古墳群航空写真　昭和40年ころ

写真95　埼玉古墳群航空写真　昭和43年度

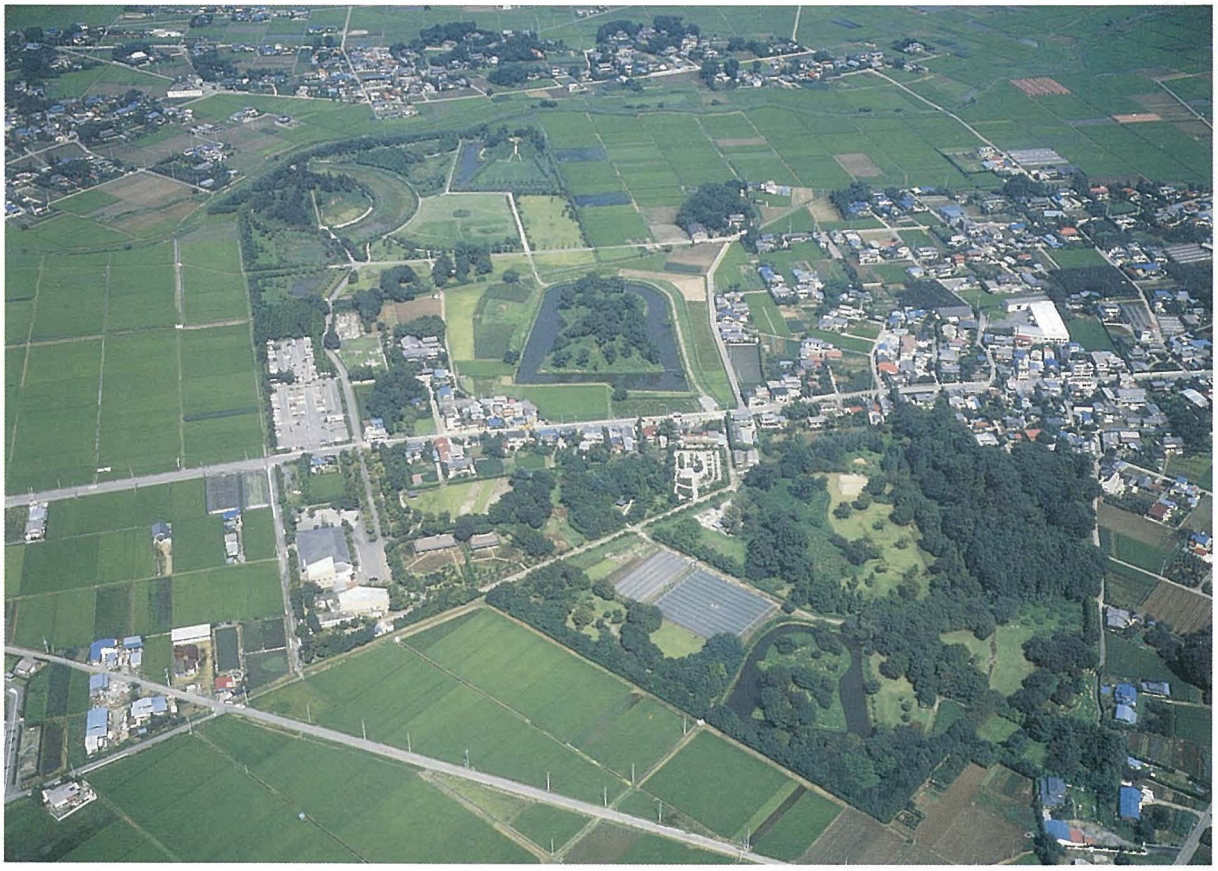


写真96　埼玉古墳群航空写真　昭和63年度

写真97　埼玉古墳群航空写真　平成５年度

表７　埼玉古墳群の各古墳の大きさ

平成９年３月現在（単位m）

古　墳　名	墳　　形	全　　長	後円部径	後円部高	前方部幅	前方部高
二子山古墳	前方後円墳	138	70	13.0	90	14.9
稲荷山古墳	前方後円墳	120	62	11.7	74	－
鉄砲山古墳	前方後円墳	109	55	9.0	69	10.1
丸墓山古墳	円　　墳	（径）105	－	18.9	－	－
将軍山古墳	前方後円墳	90	39		68	
中の山古墳	前方後円墳	79	42	5.1	44	5.4
瓦　塚古墳	前方後円墳	73	36.5	5.1	47	4.9
奥の山古墳	前方後円墳	70	43	6.8	47	7.4
愛宕山古墳	前方後円墳	53	30	3.4	30	3.3
戸場口山古墳	方　　墳	（辺）40	－	－	－	－

Ⅱ　各古墳の整備状況

1　稲荷山古墳（写真98～120）

(1)整備の概要

稲荷山古墳は昭和43年に発掘調査を行い、礫槨の中から画文帯神獣鏡や金銅製帯金具、多くの馬具や武器類等豊富な遺物が、ほぼ埋葬当時の姿で出土したことから、当時から注目を受けていた古墳であった。しかし、この古墳の名前を一躍有名にしたのは言うまでもなく、昭和53年に鉄剣の保存処理の過程で発見された、「辛亥年七月中記」で始まる115文字の金象嵌である。その後昭和58年に稲荷山古墳の出土遺物は一括して国宝に指定された。

昭和48年には周堀の調査を行い、長方形の二重の堀が初めて検出され、中堤に造出しがあることも確認された。この調査では、堀の中から多くの埴輪が出土しており、関東地方でも形象埴輪が作られた初期の例として、貴重な発見となった。この調査の結果をもとに、昭和51年には内堀の一部復原を行っている。

後円部で検出された二つの主体部は、発掘調査の後、覆屋を設置して実物の遺構をそのままの状態で見学できるようにしていた。しかし、昭和53年の金錯銘鉄剣の発見によって見学者が急増したため、墳頂や丸太階段が変形をきたし、古墳の保存上でも問題を生じてきた。そのため、昭和57年度から59年度にかけて、主体部の埋没保存や、礫槨のレプリカ表示作成、墳頂部の修景、階段の新設、後円部崖面の造成等の工事を、国庫補助金の交付を受けて実施することになった。

なお、この整備事業についてはすでに報告書が刊行されている（埼玉県教育委員会『史跡埼玉古墳群保存修理事業報告書　稲荷山古墳』1985年）が、埼玉古墳群の整備の沿革を説明するのには欠かせない事業なので、本書でも概要を記しておきたい。

表８　稲荷山古墳保存修理工事経過表

年度	事　業　内　容	事業費	年度		事業費
５７	後円部崖面の保護	500万円	５９	階段の設置 修景工事（粘土槨の表示、見学路造成、植栽、説明板作成・設置等）	1,500万円
５８	主体部の保護 保存レプリカ製作・据付	1,000万円			

(2)昭和57年度の工事（図79、写真103・104）

昭和13年の前方部の土取りによって生じた、後円部崩壊部の防護工事を実施した。

崩落堆積土を除去し、保存されている墳丘面を露出して、この上部に最大勾配角度30度を限界とする法面を新たに造成した。法面造成を行うための盛土はローム土を使用し、30cm厚を単位として敷き均し、締め固めは11ｔブルドーザーを使用した。また、重機が使えない法面上部等は人力によ

写真98　稲荷山古墳調査前風景－南から（昭和43年）

写真100　稲荷山古墳の整備前

写真101　整備前の礫槨覆屋

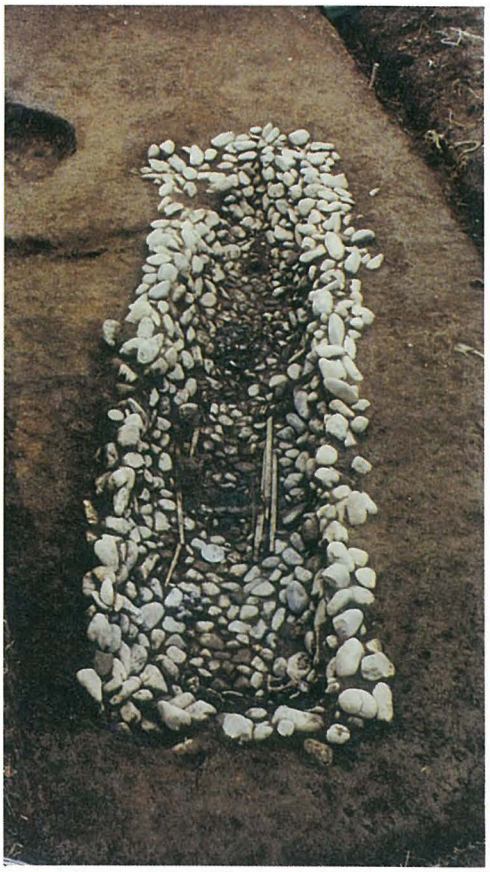


写真99　礫槨発掘状況（昭和43年）

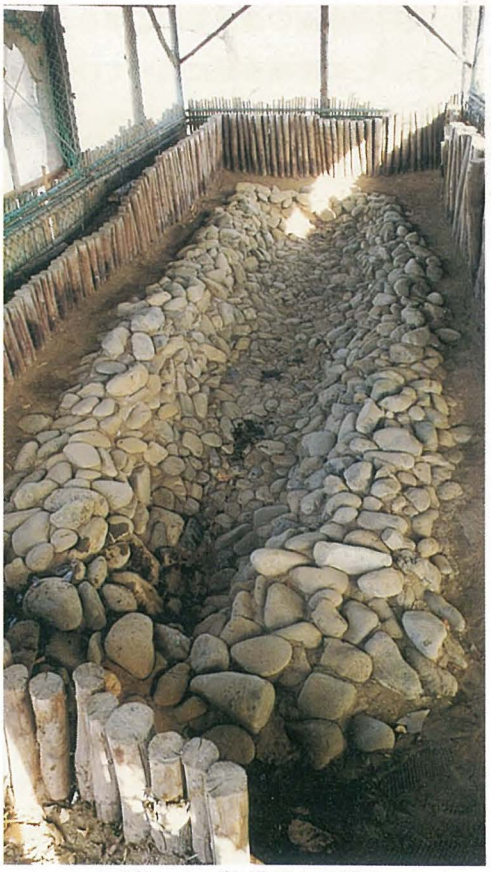


写真102　整備前の礫槨

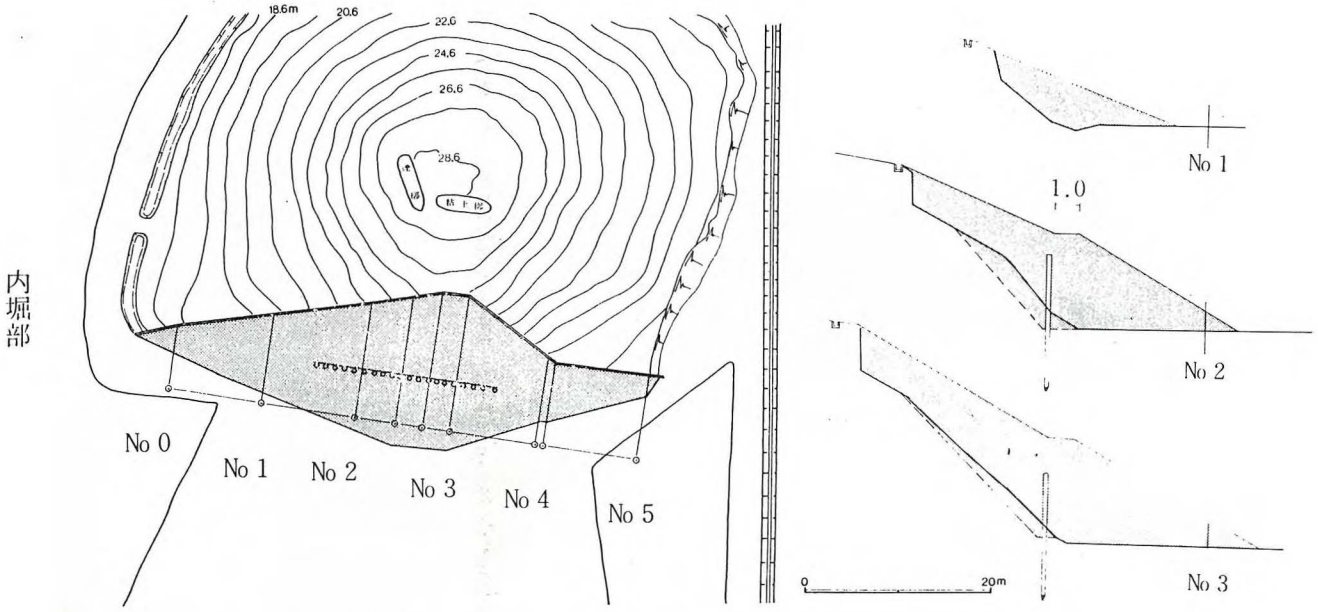


図79　稲荷山古墳　昭和57年度工事の平面及び造成法面横断面

写真103　編柵工

写真104　盛土工

って盛土を行い、ダンパによって締め固めた。

なお、盛土の滑落を防止するため、盛土に際して段築を行っているが、さらに編柵工を加えて万全を期した。松の丸太杭を１m間隔で20本打ち込み、その間に中低圧ポリエチレン製のネットを張り込んだ。

また墳丘上に降った雨水が、新規盛土と墳丘の間に浸透して、基層の滑落を助長する危険を防止するため境界部にU字溝を設置して、雨水を墳丘下へ導くこととした。

新造法面の表面を保護し、その崩壊を防止するため、野芝による芝張りを行った。

主な工事量は次の通り。

盛土　　機械－742㎥　人力－77㎥

編柵工　　約20m

排水工　　U字溝設置　60m

野芝張　　505㎡

⑶昭和58年度の工事（図80、写真105～108）

・主体部の保護、保存工

従来あった仮設の覆屋は解体撤去した。礫槨はエポキシ樹脂を混合させた土で補修し、レプリカ作成のための型取りを行った後、川砂を30～40cmの厚さに敷いて、粘土槨とともに埋没させた。

・礫槨レプリカ製作と据付

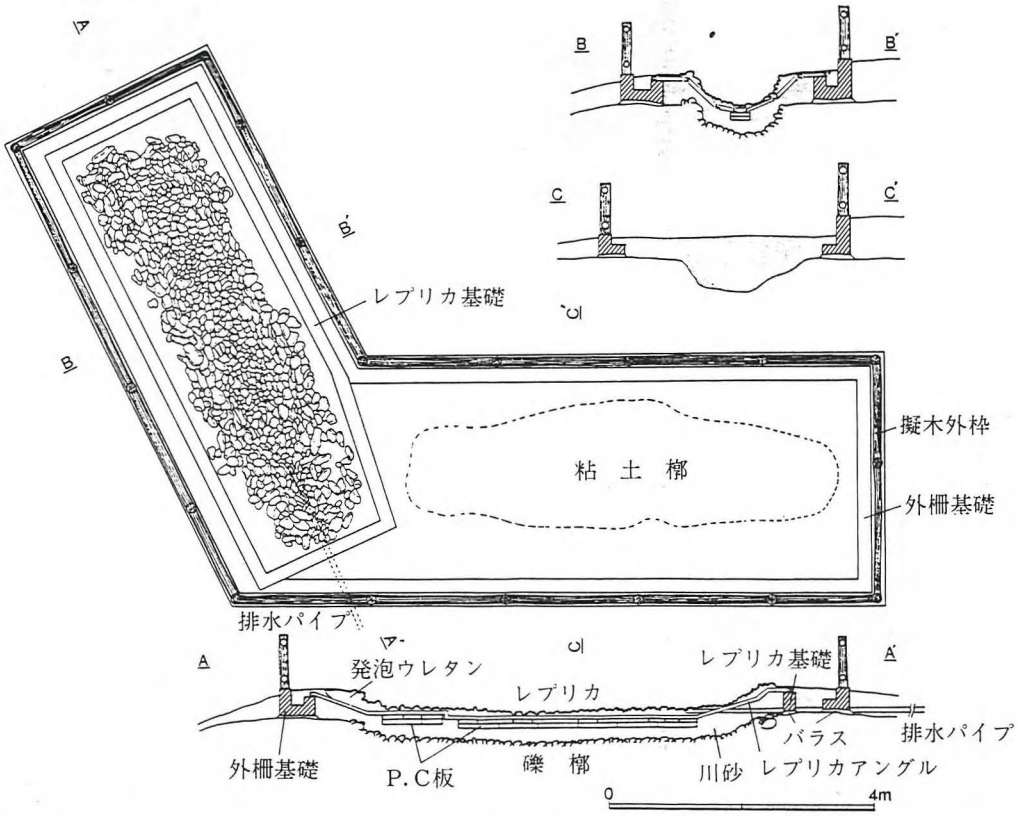


図80　稲荷山古墳　昭和58年度工事における主体部防護柵及び礫槨レプリカの設置

写真105　礫槨の埋め戻し

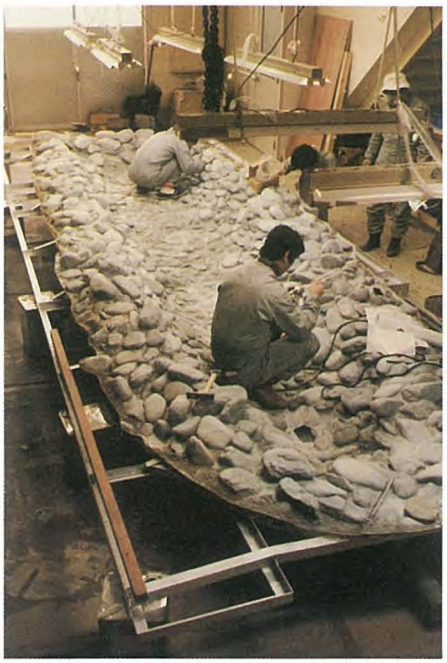


写真106　礫槨レプリカの製作

写真107　礫槨レプリカの据付

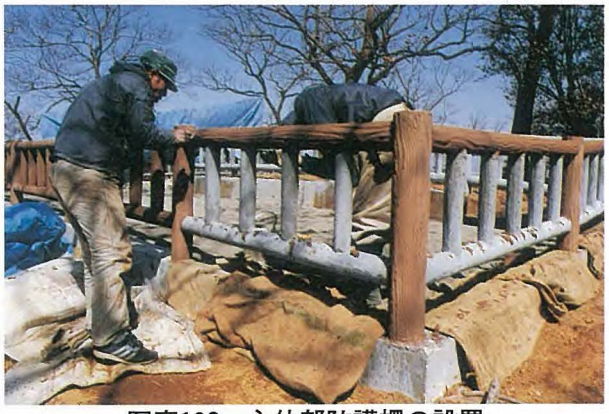


写真108　主体部防護柵の設置

シリコンゴム、ポリエステルF･R･P（繊維強化プラスチック）で型取り後、本体はポリエステルF･R･Pで成形した。本体の裏側は補強のためのＬ形鋼を溶接してF･R･Pで被覆し、さらに一部分に荷重が集中しないように、発泡ウレタンで覆った。彩色は水性アクリル塗料を刷毛塗りした。

レプリカの据付は実物と同じ平面位置に設置した。墳丘斜面は足場板を敷いて、一体物のままワイヤーロープで引き上げた。レプリカの基礎部分には本体のたわみを防ぐため、P.Cコンクリート板を敷き並べている。レプリカの底には１箇所排水孔を設け、雨水は塩化ビニル管を通して外に排出されるようにしている。

(4)昭和59年度の工事（図81、写真109～114）

・階段の設置

昭和57年度に盛土工事を行った場所に、鋼板製の階段を設置した。階段の中心軸は墳丘主軸と合わせた。階段勾配を緩やかにし、見学者の流れや景観を考慮して、階段の下段部は２方向に降り分けている。階段幅は上段部が２ｍ、下段部が１ｍで、蹴上高は上段が18cm、下段が15cmである。階段数は53段、高さは総高8.7ｍである。階段の色調は周辺の景観を考えて、やや灰色がかった茶色系統にし、擬木手すりも同系色の焼杉仕上げとした。

・修景工

昭和58年度に設置した主体部防護柵内に、表層の仕上げとしてソイルセメントを使用して路床改良を行った。また粘土槨の表示については、遺構の輪郭に沿って白色塗料を塗ったレンガ木口面を上にして並べた。

防護柵の周囲には、見学用の通路と墳頂部広場を造成した。路床は柵内と同じくソイルセメントを施した。埋葬施設を埋没させてレプリカ等を設置したため、通路の高さも盛土によって墳丘レベルから30～40cm上がっている。このため通路部の盛土が流失するのを防ぐ目的で、勾配のきつい部分にはＬ形のコンクリート基礎を設けた。コンクリート外側露出面には柵と同様に擬木を巡らせた後、ローム土を盛って段差を目立たなくした。墳頂の中央西南寄りに約45㎡の見学広場を設け、見学者が停滞しないように配慮した。見学路の周囲にはドウダンツツジを植栽し、景観を整えた。

また説明板はF･R･Pを基板として、図や文章を記したアルミ板を張りつけたもので、120cm×190cmの大きさである。これを階段下に地上140cmの高さに、スチールパイプに固定させて設置した。

写真109　粘土槨表示の設置

写真110　主体部防護柵内の表層仕上げ

写真112　完成した礫槨レプリカ

写真111　階段の設置

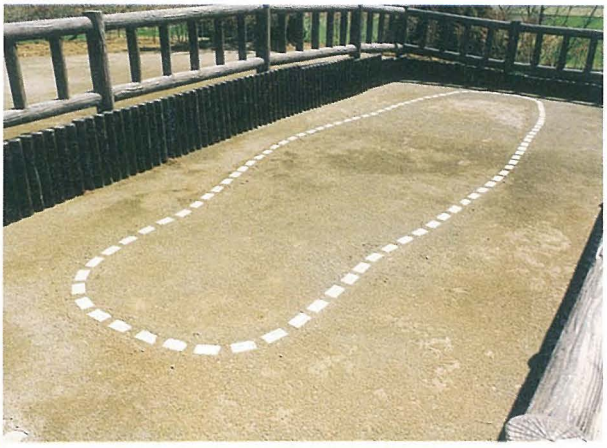
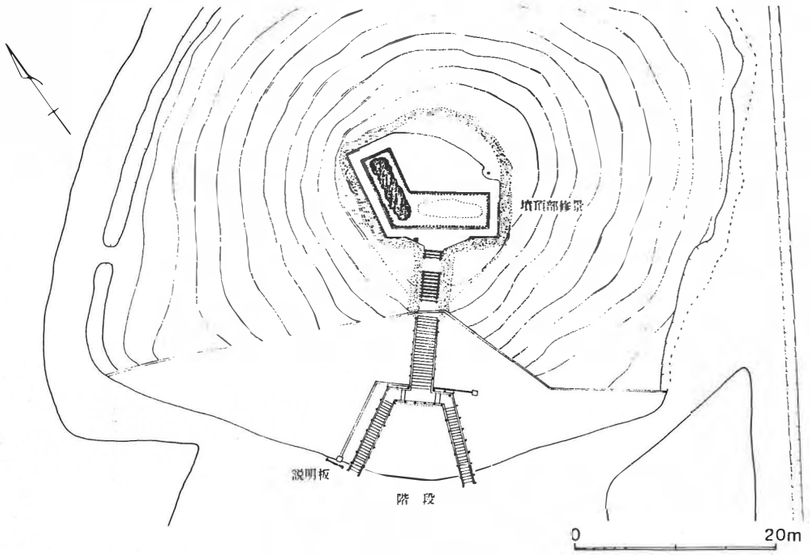
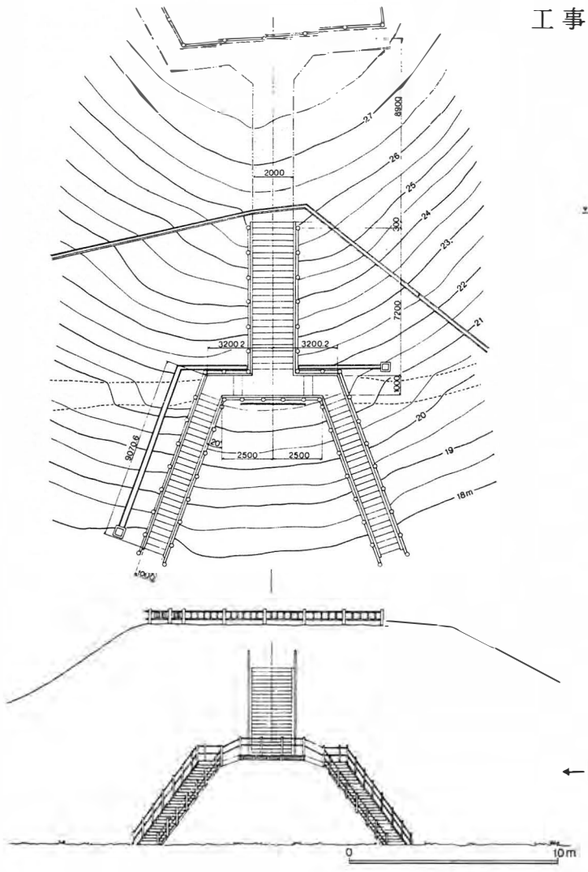


写真113　完成した粘土槨表示

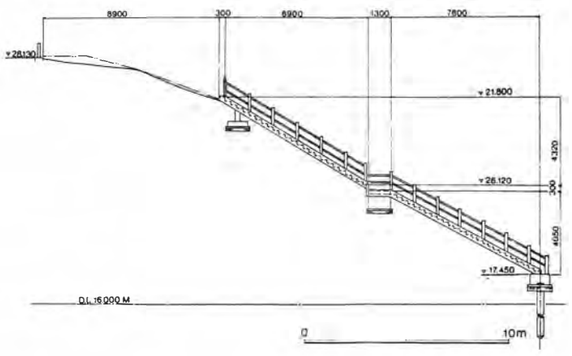
写真114　説明板



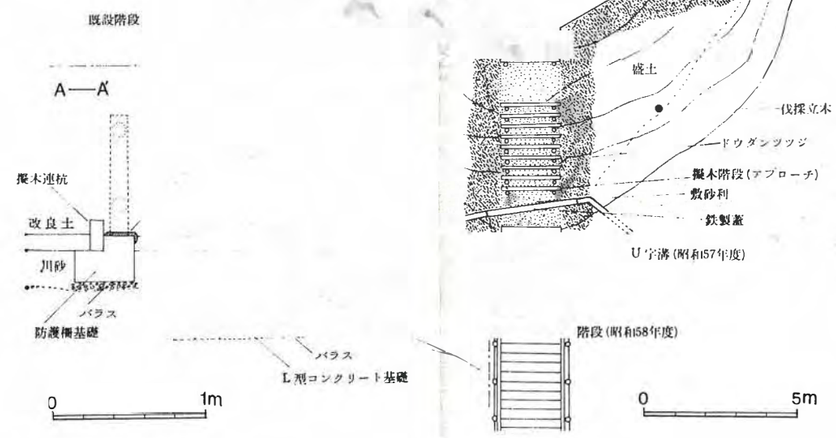
工事平面図

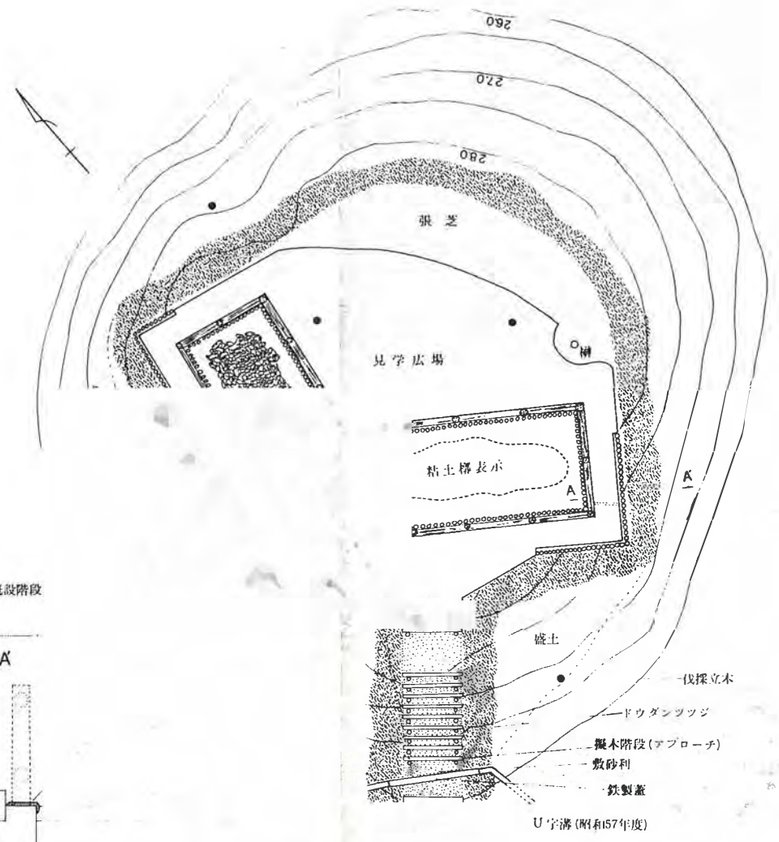


←階段の平面及び正面



階段の側面





墳頂修景工平面図

図81　稲荷山古墳　昭和59年度工事

写真115　整備完了直後の稲荷山古墳

写真116　整備完了直後の稲荷山古墳

⑸現状と課題（写真117～120）

稲荷山古墳の整備が完了してから12年が過ぎた。現在、古墳を管理していく上で、さまざまな問題も生じてきているので、次に概略を記しておきたい。

礫槨レプリカは風雨にさらされた状態であるため、設置当初から退色や劣化が心配されていた。材質の劣化は今のところ現れていないが、彩色に関しては平成３年に塗り替えを行った。また、礫槨内にはゴミや落葉等がたまるので、時々清掃する必要がある。粘土槨表示は白い塗装が剝げてきているので、レンガの赤い色が露出し、やや見苦しい状態になりつつある。路床改良のために敷いたソイルセメントは、風化によって、所々自然の土と化してしまい、凹凸になっているところもある。擬木階段の踏込み部分に詰めた土は、風雨によって徐々に流されいたので、平成７年に砂利を新たに詰めた。説明板も直射日光を受けるため、かなり退色が進んでいる。

現在堀に関しては、内堀の一部が復原されているにすぎないが、墳丘北側及び西側部分の土地の買収が進んでいることから、ほぼ堀全体の復原が可能な状況になってきている。また墳裾の水際は水の侵食によって墳丘が徐々に崩壊しはじめている。これらのことから、今後堀の整備については、前方部の盛土復原も含めて、整備事業を進めていく計画である。

写真117　新緑の稲荷山古墳

写真118　礫槨レプリカの現状

写真119　粘土槨表示の現状

写真120　説明板の現状

2　丸墓山古墳（図82、写真121～139）

(1)整備の概要

丸墓山古墳は直径102mを測り、円墳としては国内で最大規模を誇っている。昭和43年の「さきたま風土記の丘」の整備以来、墳頂部を公開している。また昭和48年度には堀の一部が復原されている。その後、金錯銘鉄剣の発見や古墳公園の拡充による見学者の増加に伴って、墳頂部等の土砂の流失が著しく、古墳本来の姿が失われつつあった。そこで文化庁の国庫補助金の交付を受けて、昭和60年度から62年度の３か年にわたり、保存修理事業を実施した。詳しい報告はすでにされているが（田中正夫「史跡埼玉古墳群保存修理事業報告書－丸墓山古墳保存修理事業の報告－」『調査研究報告』第２号、埼玉県立さきたま資料館、1989年）、稲荷山古墳の整備同様、これまでの埼玉古墳群の整備の流れを記す上で欠かせない事業なので、本書で再び紹介する。記述内容は上報告から多くを引用している。

確認調査は、昭和48・60・61・62年度の４度にわたり行われている。昭和48年度調査は、昭和43年度に撮影した航空写真に写し出された、前方部らしい痕跡の確認及び周堀の範囲・規模を確認するためのトレンチ調査であった。その結果、周堀は幅約37mと考えられ、前方部と思われたものは、新しい溝状遺構であることが判明した。昭和60年度の調査は、周堀内側立ち上がり部の確認を目的とするもので、周堀の覆土中に多量の川原石が検出され、葺石が崩落したものと想定された。また、保存修理事業に伴って昭和61・62年度には、盛土工事を行う部分の墳丘の調査を行った。

丸墓山古墳の保存修理事業は３か年で計画された。第１年次に墳頂部保護工事、第２年次に墳丘南斜面崩壊防止第１次盛土、第３年次に南斜面崩壊防止第２次盛土及び正面階段の整備を計画し、事業を実施した。

写真121　整備前の丸墓山古墳

表９　丸墓山古墳保存修理工事経過表

年度	主な事業内容	事業費	年度	主な事業内容	事業費
６０	墳頂部の盛土・修景工事	1,000万円	６２	墳丘斜面盛土工事 階段の新設	1,000万円
６１	墳丘斜面盛土工事	1,000万円			

⑵昭和60年度の工事（写真122～125）

・盛土工

盛土は流失したことが確認できる高さまで復原することとし、標高36.0mを上限とした。盛土上面は平坦面とし、中央から15%の勾配をもたせ、雨水を周囲に巡るコンクリート製U字側溝へ導くようにした。盛土平坦面の直径は24mの円形プランを設定した。盛土はローム土を使用し、機械により墳頂へ運搬し、小型機械及び人力で転圧しながら盛り上げ、＋10cmから＋110cm厚となった。

・管理施設工

墳頂部盛土平坦部周囲の、コンクリート製U字溝の内側に木柵を設置した。木柵は、防腐処理（ＣＣＡ注入材）を施し、焼き丸太仕上げしたもので、クレモナロープ二段張りとした。

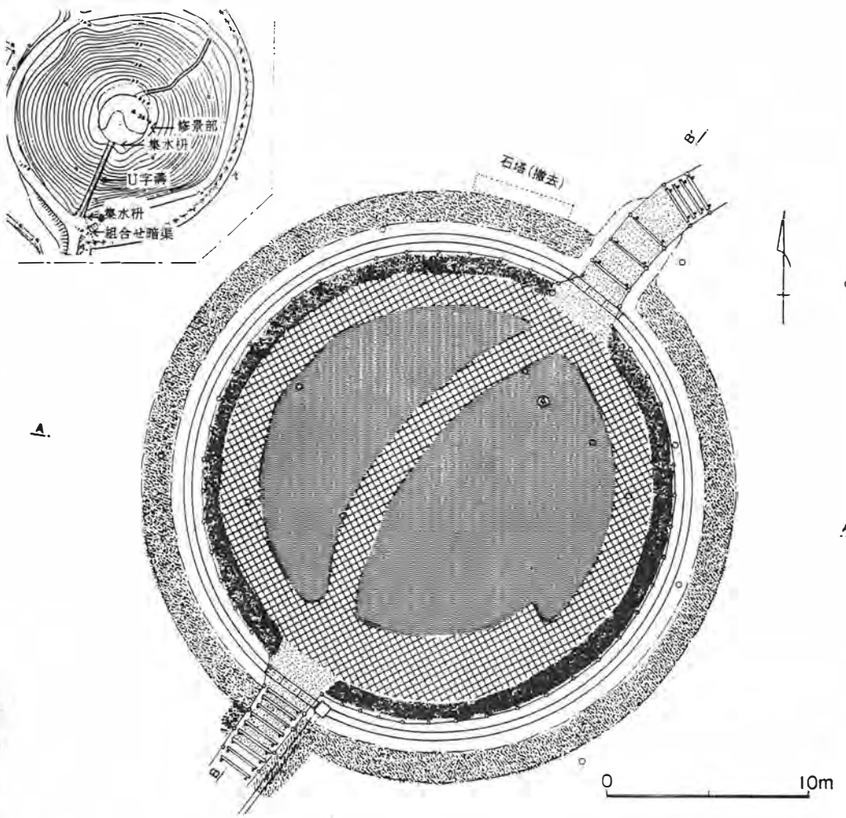
現階段からのアプローチとして丸太階段を設置した。階段は防腐処理材（ＣＣＡ注入材）を用い

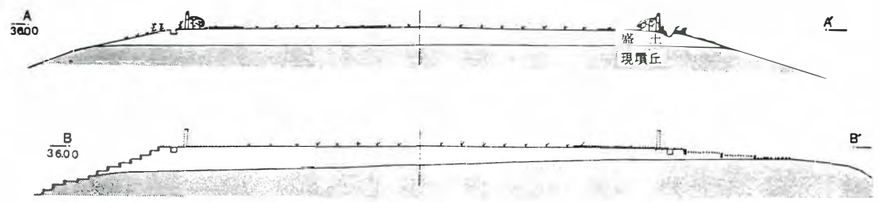
写真122　墳頂部周囲の排水用Ｕ字側溝の設置

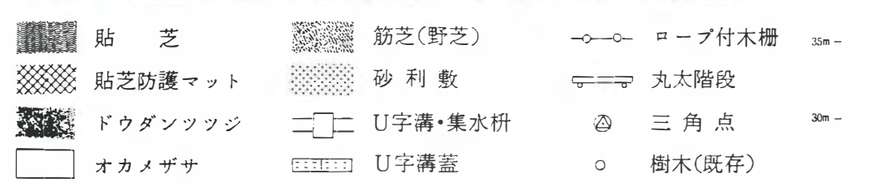
写真123　墳頂部盛土叩きしめ

写真124　見学コース用芝防護マットの設置

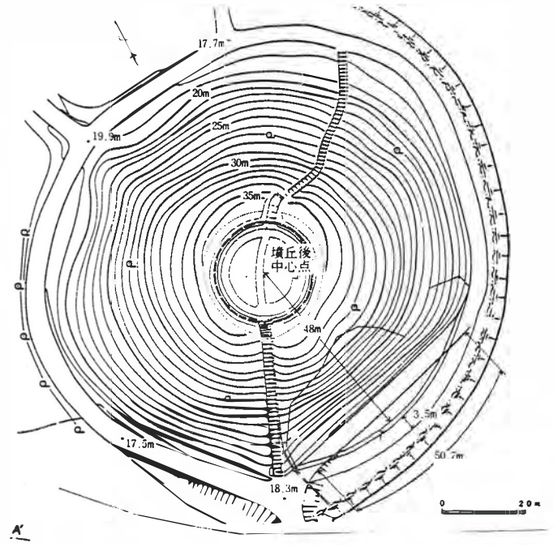
写真125　墳頂部の植栽

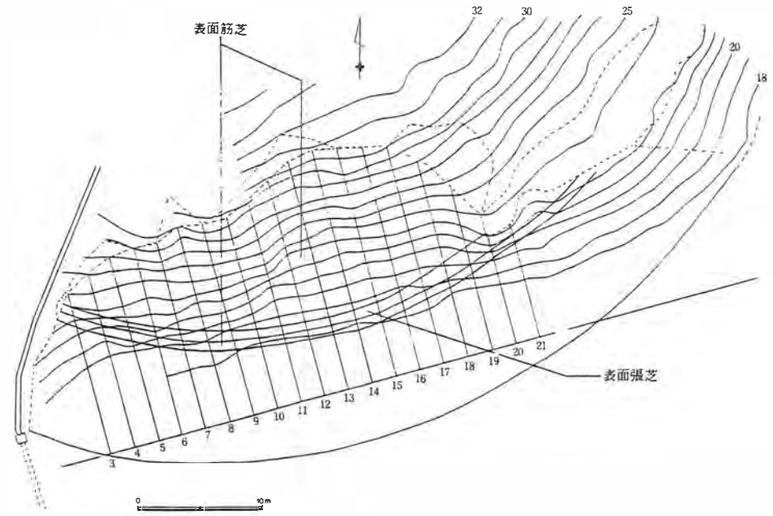




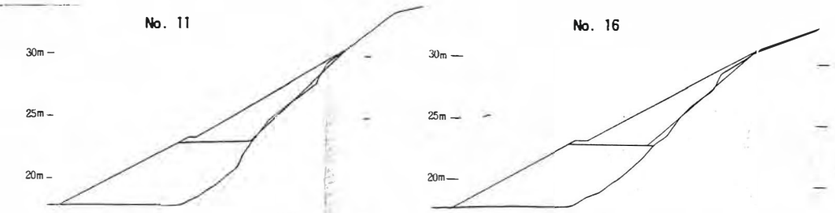


昭和60年度　墳頂部保護工事平面図



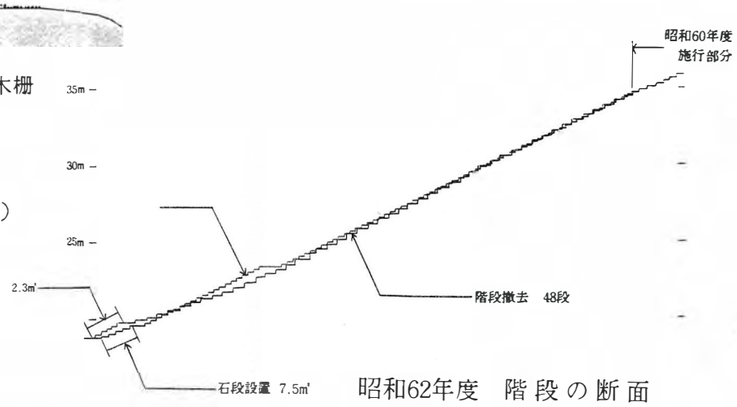


平 面 図

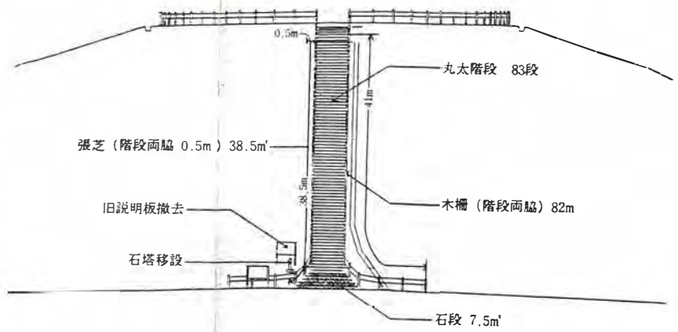


断 面 図

昭和61・62年度　墳丘南斜面崩壊防止盛土工事



昭和62年度　階段の断面



階段の正面

図82　丸墓山古墳の保存修理工事

踏面はローム土を使用し、表面は砂利を敷いた。なお、墳丘上には三角点があったため、三角点標柱を保護するため、円形コンクリート管を土中に埋設して蓋をかけた。

・植栽工

平坦面には張芝を施し、見学者の踏みつけによる芝の傷みを防ぐため、平坦面の周囲と中央に見学者コースを設け、芝防護マット（プラスチック製）を敷設した。見学者コースは幅約 1.8mとしたが、一部眺望のよい南側部分は、約 3.6mとした。木柵と張芝の間はドウダンツツジを巡らせ、U字溝を隔てた木柵の外側にはオカメザサを、その周囲の盛土斜面には張芝（野芝）を植栽して、盛土を保護した。

・排水工

墳頂部の雨水による侵蝕をさけるため、平坦面周囲にコンクリート製U字側溝を設け、正面階段脇から墳丘下へ流れるように設置した。墳丘裾部の見学路を横断する部分は組合せ暗渠として、復原周堀へ流れるようにした。また墳頂部から階段脇への部分と、墳裾部に集水枡を設けた。

主な工事量は次の通り。

土　　工　堀削27㎥　埋戻し17㎥　盛土 507㎥　盛土材運搬 507㎥

管理施設工　木柵工81m　丸太階段工10段　階段部砕石工13･2㎝　三角点保護工一式

植　栽　工　ドウダンツツジ 378株　オカメザサ88㎡　張芝工 469㎡

排　水　工　U字溝115.4 m　U字側溝ふた架渡し6m　U字側溝巻き立て１箇所

　　組合せ暗渠13m　集水枡２基

雑　　工　石塔移設７基　既設枡嵩上げ１箇所　見学者用道路 157.8㎡　U字側溝覆土工4m

⑶昭和61年度の工事（写真126～129）

・盛土工

盛土は、墳丘南斜面の崩壊防止を目的としたもので、南側斜面の崖面になっていた部分に施した。盛土裾部の範囲は、確認調査で明らかになった周堀の立ち上がりから、３m程墳丘寄りになるように設置した。これは前年度に施行した墳頂部保護工事の際設定した墳丘仮中心点から半径48mである。盛土の両脇は、現墳丘にすりつけるようにし、景観上違和感のないよう配慮した。また第１次盛土の高さは標高23mまでとした。

盛土と、現墳丘面との境で滑落が生じないよう、人力により段切りを行った。盛土材は良質土を使用し、大型機械で転圧しながら盛り上げ、大型機械の使用できない部分については、小型機械並びに人力で転圧した。また、盛土の表面には保護のため筋芝を施した。

・管理施設工

丸墓山古墳の周囲には、見学者用の通路が設けられていたが、盛土範囲の通路が埋まったため、見学者通路の付け替えを行った。通路は砕石敷とした。また盛土の周囲に、新たに木柵を設置し、通路から盛土表面への見学者の立ち入りを遮断し、安全確保とともに、盛土表面の保護を図った。

主な工事量は次の通り。

土　　工　盛土工　1,356.3㎥　段切工　455.8㎡　筋芝工　606.2㎡

雑　　工　園路付替工一式　外周柵工一式

写真126　盛土工

写真127　筋芝工

写真128　園路の付け替え

写真129　昭和61年度工事の完了風景

(4)昭和62年度の工事（写真130～133）

・盛土工

盛土は、昭和61年度に施行した部分をさらに40cm盛り上げたところで１ｍ弱の平坦面を設け、そこから崩落面上端まで盛り上げた。盛土の西側及び上端は現墳丘にすりつけるようにしたが、中央部だけはそのまま現墳丘にすりつけると、小さな谷状のくぼみができるため、標高32ｍまでは周囲の傾斜に合わせて盛り上げ、そこから緩傾斜として現墳丘にすりつけた。

盛土部分は、現墳丘と盛土の境面で滑落がないよう人力により段切りを行った。段切りの高さは30cmを基本とした。盛土材には良質土を用い、クラムシェルバケットで土を運搬し小型機械及び人力で敷きならし、締め固めを行い、十分転圧した。また、盛土傾斜面の表面には、保護のため筋芝を、平坦面には野芝により張芝を施した。

・管理施設工

正面階段は、かなり破損していた上、傾斜に合わせて設けられていたため、蹴上げが40cm以上にもなる部分があるなど、登りづらい部分もあった。このため、盛土を施し階段の勾配が一定となるように設計・施行した。蹴上げは18cm、踏み面38cm（丸太直径を含めて）を基本とし、登りやすくなるように配慮した。また盛土部に設けたテラスと合うように 1.5ｍの踊り場を設け、見学者の安全を図った。階段に使用した丸太材は防腐処理（ＣＣＡ注入材）を施したものを用い、踏み面は良質土を使用した。

正面階段登り口には既設の石段があったが、階段の向きと合っていなかったため組みかえ、階段の

向きと合わせ、同時にやや広くゆるやかな扇状となるようにし景観を整えた。

階段両脇に墳頂部に巡らせたものと同じ仕様の木柵を設置した。階段登り口は、組み替えた石段にそわせて墳丘裾部に続けた。

・植栽工

正面階段両側の盛土部分及び南斜面盛土部分に設けたテラス表面の保護・修景のため、張芝を施した。

・雑工

正面階段脇にあった石塔を墳丘裾部に移設し、また、傷みの多い旧説明板を撤去した。

・説明板製作・設置

説明板は、F・R・P成形板（1,300×900×20㎜）を基板として、銘板にはアルミに文字を焼きつけたものを使用した。両脇２本のステンレス製角柱の支柱で支え、ボルトで固定した。説明板は正面階段左手の墳丘裾部に、銘板の中央が地面から約140㎝の高さになるように設置した。

主な工事量は次の通り。

土　　工　盛土工 488㎥　段切工 310.8㎡　筋芝工 410㎡

管理施設工　丸太階段工83段　木柵工86m　階段部土工18.6㎥　旧階段撤去工84m

　　石積工 7.5㎡　石積とりこわし 2.3㎥

植　栽　工　張芝工73㎡

雑　　工　石塔移設1基　旧説明板撤去工１基

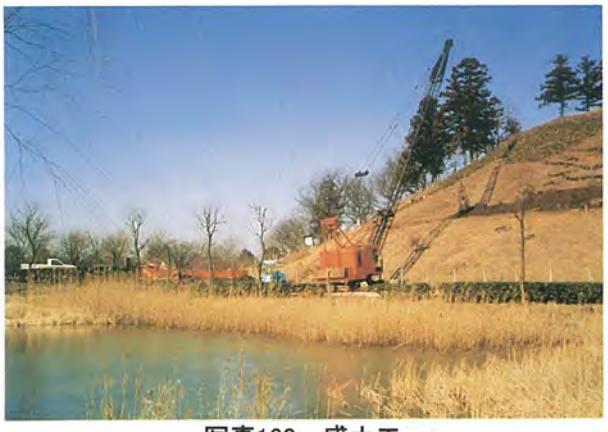


写真130　盛土工

写真131　階段の設置

写真132　階段手すりの設置

写真133　完成した正面階段

写真134　春爛漫の丸墓山古墳

⑸現状と課題（写真135～139）

墳頂部は古墳公園の中でも最も高い位置にあって、行田市内のみならず関東平野周辺の山々まで見渡すことができるため、見学者が非常に多い。そのため、階段での転倒事故がしばしば生じている。丸太階段は踏み面に詰めている土が流失して、丸太が露出することがあり、危険防止のため砂利等を補充している。また墳頂部の芝は、見学者が多いため根付かず、盛土が露出してしまった。見学者用の張り芝防護マットが、周囲の土の浸食によって浮いてしまい、つまずきの原因ともなっている。

また周堀には水が湛えられており、水棲のヨシが繁茂している。通常冬期にヨシ刈りを行っているが、水の中の作業なので費用もかかる。なお、ここも水鳥にとっては絶好の餌場となっているので、簡単に埋め立ててしまうこともできない。

なお周堀の復原工事を行ったころに、丸墓山古墳へ至る道の両側に桜を植樹しているが、現在４月になると見事な花を咲かせて、多くの見学者でにぎわっている。二子山古墳の花菖蒲とともに、「花が人を呼ぶ」一例となっている。

写真135　丸墓山古墳の現状－南西から

写真136　芝防護マットの現状

写真137　周堀内のヨシの繁茂状態

写真138　説明板

写真139　草刈りの状況

3　瓦塚古墳（写真140～166）

⑴整備の概要

瓦塚古墳は全長73mと、埼玉古墳群の中では比較的小型の古墳である。この古墳は墳丘の東側がすでに土取りされており、原形を大きく損なっていた。また、土取り箇所は崖面となって、崩落する危険性があった。このため、これ以上の墳丘の崩壊を防ぐために、保存修理を行うとともに、さきたま資料館に最も近くに位置する古墳であることから、教育的な面でも効果のある方法で整備を行うこととなった。周堀の復原については、従来他の古墳の復原で行ってきた水堀方式から、砂利による表示方式に変更し、墳丘が水によって浸食されるのを防ぐことができた。

保存修理工事は昭和63年度から平成３年度にかけて、国庫補助を受けて実施した。

各年度における事業内容は次の通りである。

表10　瓦塚古墳保存修理工事経過表

年度	事　業　内　容	事業費(円)	年度	事　業　内　容	事業費(円)
６３	確認調査 墳丘東側復原・修景工事	1,000万円	2	確認調査 周堀立体表示工事	1,000万円
元	確認調査 墳丘西側復原・修景工事 東側内堀立体表示工事	1,000万円	3	確認調査 山崎家曳家工事 周堀立体表示工事 囲柵・案内板設置等工事	1,500万円

⑵確認調査

工事に先立ち、図83のように各年度毎に確認調査を行った。それまでの確認調査では、トレンチ調査が主であったが、この古墳では面的に広範囲に調査を行っており、成果も大きかった。

墳丘はトレンチ調査であったが、墳丘中段部で円筒埴輪が隣接して並べられていた痕跡がみられ

写真140　瓦塚古墳の整備前（南東から）

た。また造出し部分を完掘し、古墳祭祀に伴うものと想定される須恵器等が多数出土した。

周堀は二重に巡り、平面が長方形になっていることがわかった。これは、埼玉古墳群の他の古墳でも多く見られ、この古墳群の大きな特色である。内堀と外堀を隔てる中堤の、墳丘の造出しに対応するところに１箇所、外界と中堤をつなぐようにブリッジがあった。その南側の中堤の周辺からは多数の形象埴輪が出土し、埴輪祭祀の一端を垣間見られるような貴重な資料を得た。

第83図　瓦塚古墳年度別確認調査範囲

⑶昭和63年度の工事（図84、写真141～144）

・墳丘東側復原盛土・修景工事

瓦塚古墳では、墳丘の東側が土取りのため大きく損なわれていた。まず墳丘の崩落を防止し、旧状に復原するための盛土工事を行った。なお、最も損壊の激しいところには、杉丸太と松板を使用した土留板を設置した上で、盛土を行っている。

また、盛土表面の保護ならびに景観を整えるため、表面に植栽を施した。墳丘上は野芝、墳裾部にはこうらい芝を張り、墳丘と周堀との境界にはドウダンツツジの植栽を行った。

工事の主な数量は次の通り。

盛土　479.9㎥
土留工　40.0m
野芝張　724.5㎡
こうらい芝張　114.0㎡
ドウダンツツジ植栽　230株

写真141　杉丸太と松板による土留工

写真142　墳丘東側の盛土工

写真143　墳丘上の芝張工事

写真144　昭和63年度工事の完成

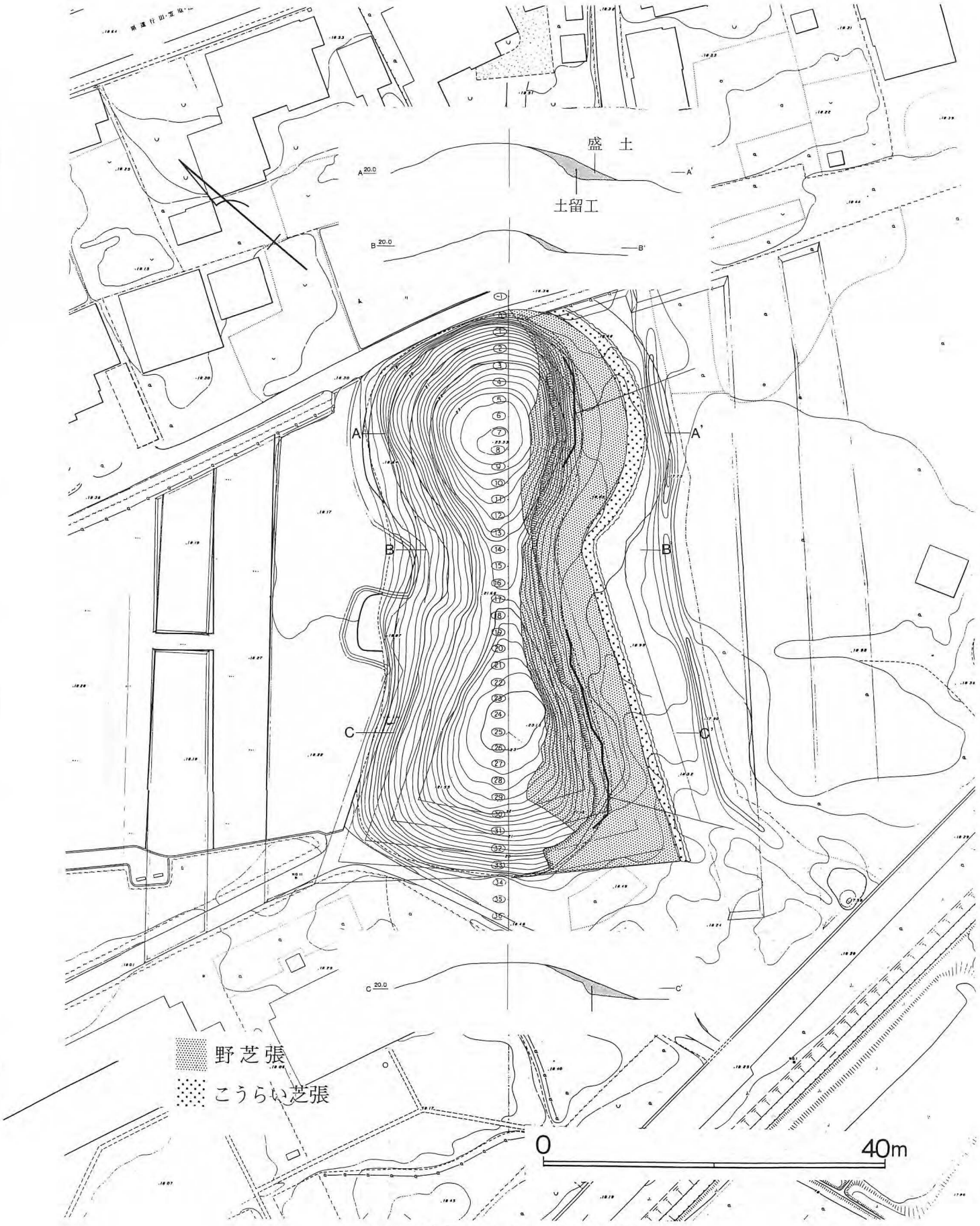


図84　瓦塚古墳　昭和63年度工事

(4)平成元年度の工事（図85、写真145～148）

・墳丘西側復原及び修景工事

墳丘上には樹木や雑草類が繁茂していたので、遺構保護の観点から伐採を行い、可能なかぎり除根を行った。

墳丘西側部分の復原工事を行った。前方部隅角や後円部斜面、造出し部は、封土が流失して変形していることから、確認調査で得られたデータをもとに盛土を実施した。また墳丘くびれ部付近には流れた落ちた土が堆積していたので、すき取り工事を行って、墳丘の形態を整えた。

盛土表面の保護並びに景観を整えるため、墳丘西側全面に野芝を張り、後円部北側の道路との境には、イヌツゲを植栽した。

・東側内堀立体表示工事

東側内堀については、掘削の後に栗石を入れ、小砂利で仕上げて、排水を考慮した立体表示を行った。

工事の主な数量は次の通り。

掘削　495.6㎥、盛土　190.8㎥

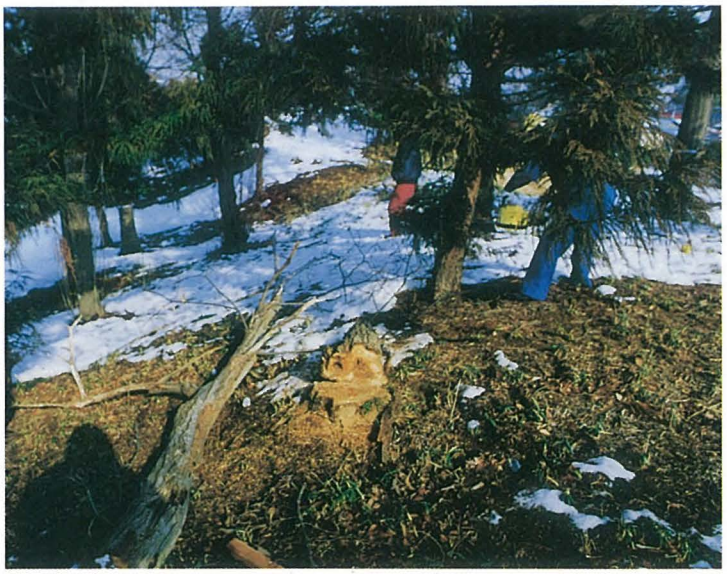


写真145　伐木工事

写真146　墳丘西側の盛土工

写真147　墳丘東側内堀の立体表示工事

写真148　墳丘西側の芝張工事

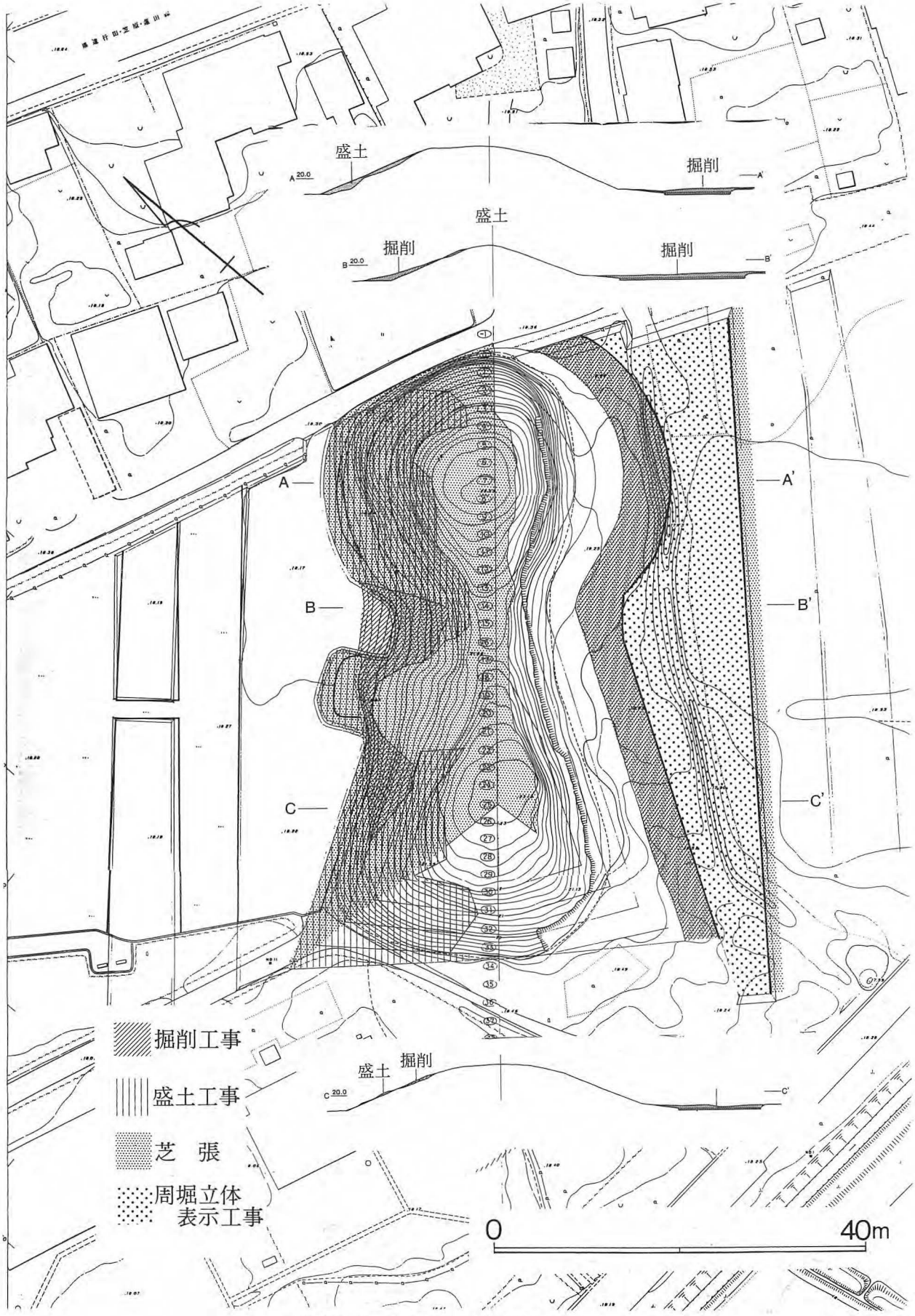


図85　瓦塚古墳　平成元年度工事

周堀立体表示工事　694.0㎡

配石工　147.0m

野芝張　1,516.6㎡

イヌツゲ植栽　20株

⑸平成２年度の工事（図86、写真149～152）

・周堀立体表示工事

墳丘東側の外堀と墳丘西側の内・外堀の一部について、50cmの掘削の後、栗石を入れ、小砂利で仕上げて、排水を考慮した立体表示を行った。これは、平成元年度に実施した東側内堀の表示方式を踏襲している。堀の復原では、確認調査によって判明した中堤のブリッジを、意識的に表示した。

また、中堤及び墳丘と外堤の法面には、崩落防止と修景を目的として野芝による張り芝を行った。なお、墳丘・中堤・外堤の輪郭部分には、管理用の自然石の配石を行った。

工事の主な数量は次の通り。

周堀の掘削　705.0㎥

写真149　墳丘西側周堀部分の掘削

写真150　周堀床面栗石の転圧

写真151　墳裾部芝張工事

写真152　平成２年度工事の完成－西から

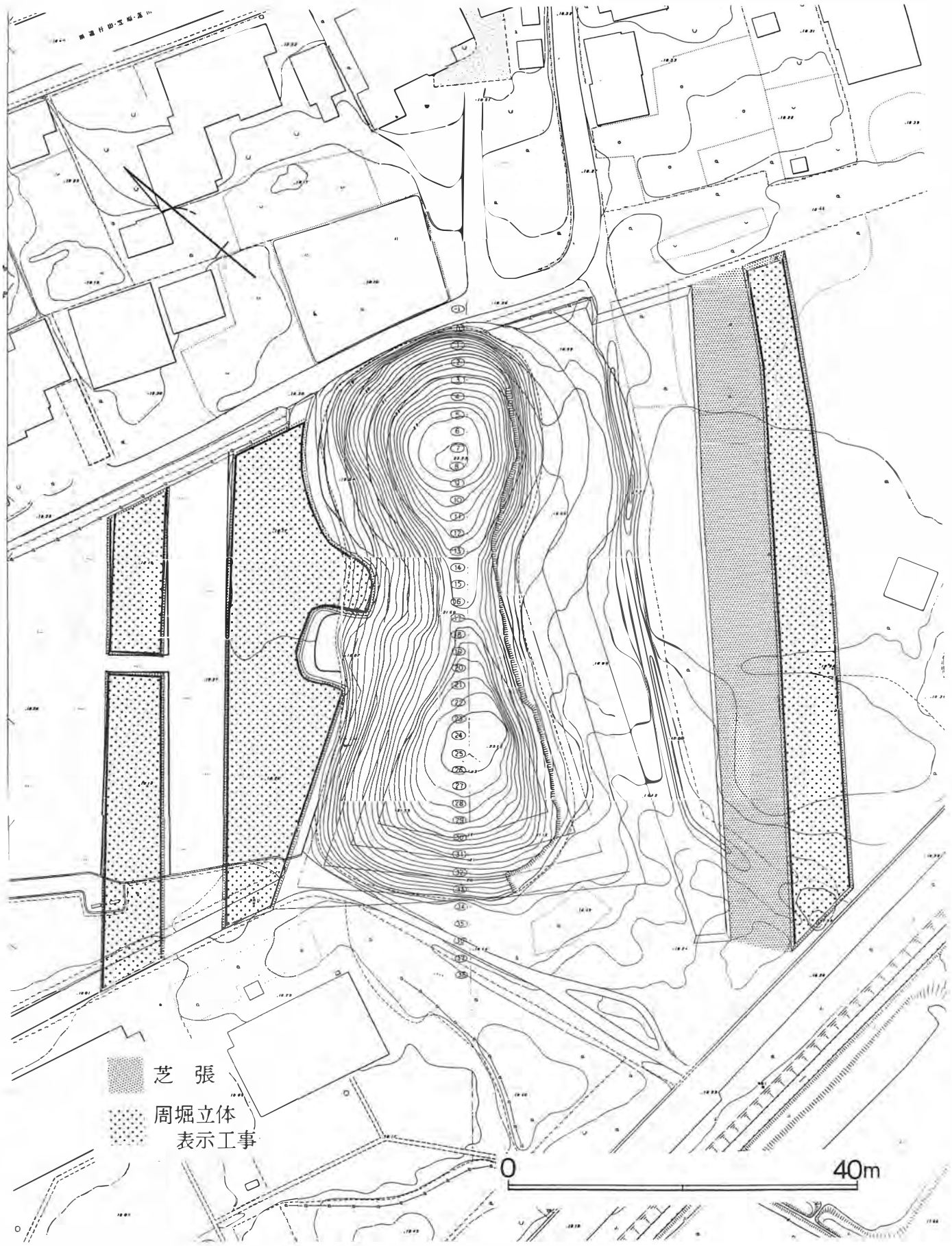


図86　瓦塚古墳　平成２年度工事

周堀立体表示工事　　1270.0㎡

野芝張　　786.0㎡

管理用自然石配石　　392.0m

⑹平成３年度の工事（図87、写真153～160）

・山崎家曳家工事

瓦塚古墳の南西側に隣接して、旧遠藤家と旧山崎家の２棟の民家が移築されていたが、旧山崎家の方が、瓦塚古墳の周堀上に建てられていたことから、南へ約20m移動させた。建物を解体することなく、床下にレールを配して、その上をスライドさせる方式を採った。

・墳丘前方部前面復原・修景工事

未整備であった墳丘の前方部前面については、盛土によって復原を行った。また、盛土表面を保護し景観を整えるため、野芝による張り芝を行った。

・周堀立体表示工事

墳丘南側の内・外堀は、50cm掘削の後、栗石を入れて小砂利で仕上げた。また排水を強化するため、堀の床面には排水のための暗渠を設置して、雨水

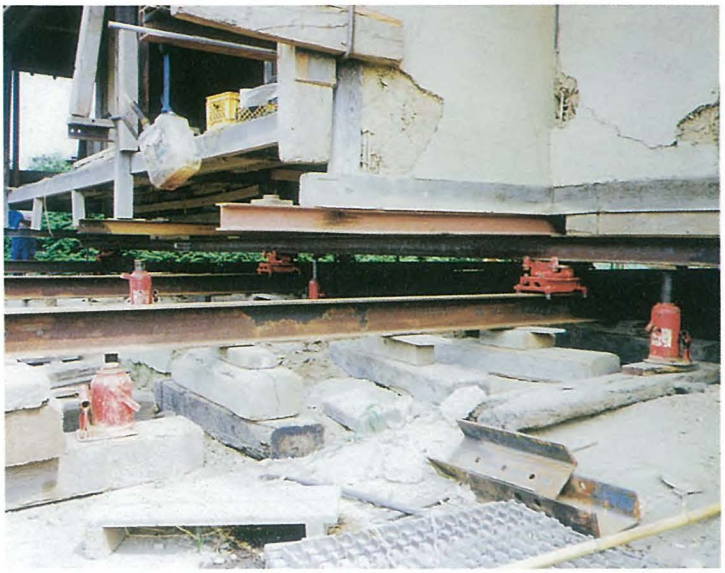


写真153　山崎家曳家工事（ジャッキによる持ち上げ）

写真154　山崎家曳家工事（レール上を移動）

写真155　前方部正面部分の暗渠排水溝

写真156　周堀床面栗石の転圧

等が水路に流れ出るようにした。

・その他工事

遺構の保護と安全管理のため、墳丘の周りには柵を設けた。柵は木柱に繊維製の２本のロープを通したものである。

中堤ブリッジの外側に、瓦塚古墳の調査成果についての案内板を１基設置した。

自然石を加工した、遺構の案内板を、それぞれの遺構に直置きで11基設置した。

工事の主な数量は次の通り。

周堀の掘削　400.0㎥

周堀立体表示工事　800.0㎡

墳丘・中堤等の張り芝　1,485.0㎡

管理用自然石配石　233.7m

前方部の盛土叩き締め　179.9㎥

囲柵　226.0m

写真157　墳丘周囲の木柵設置

写真158　前方部正面芝張工事

写真159　説明板

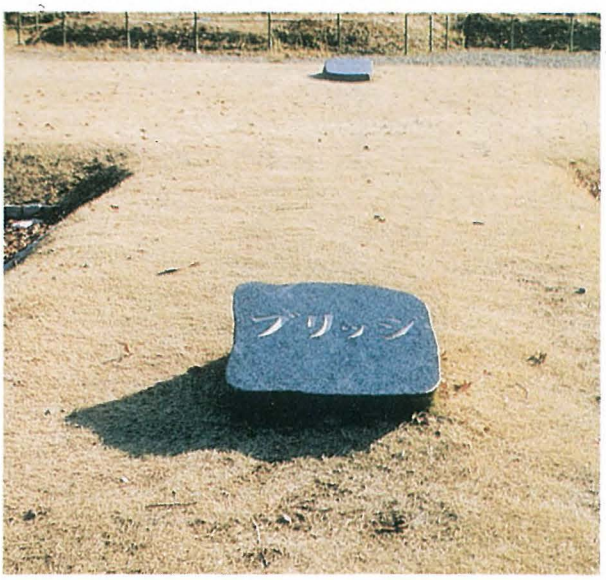


写真160　自然石による遺構案内板

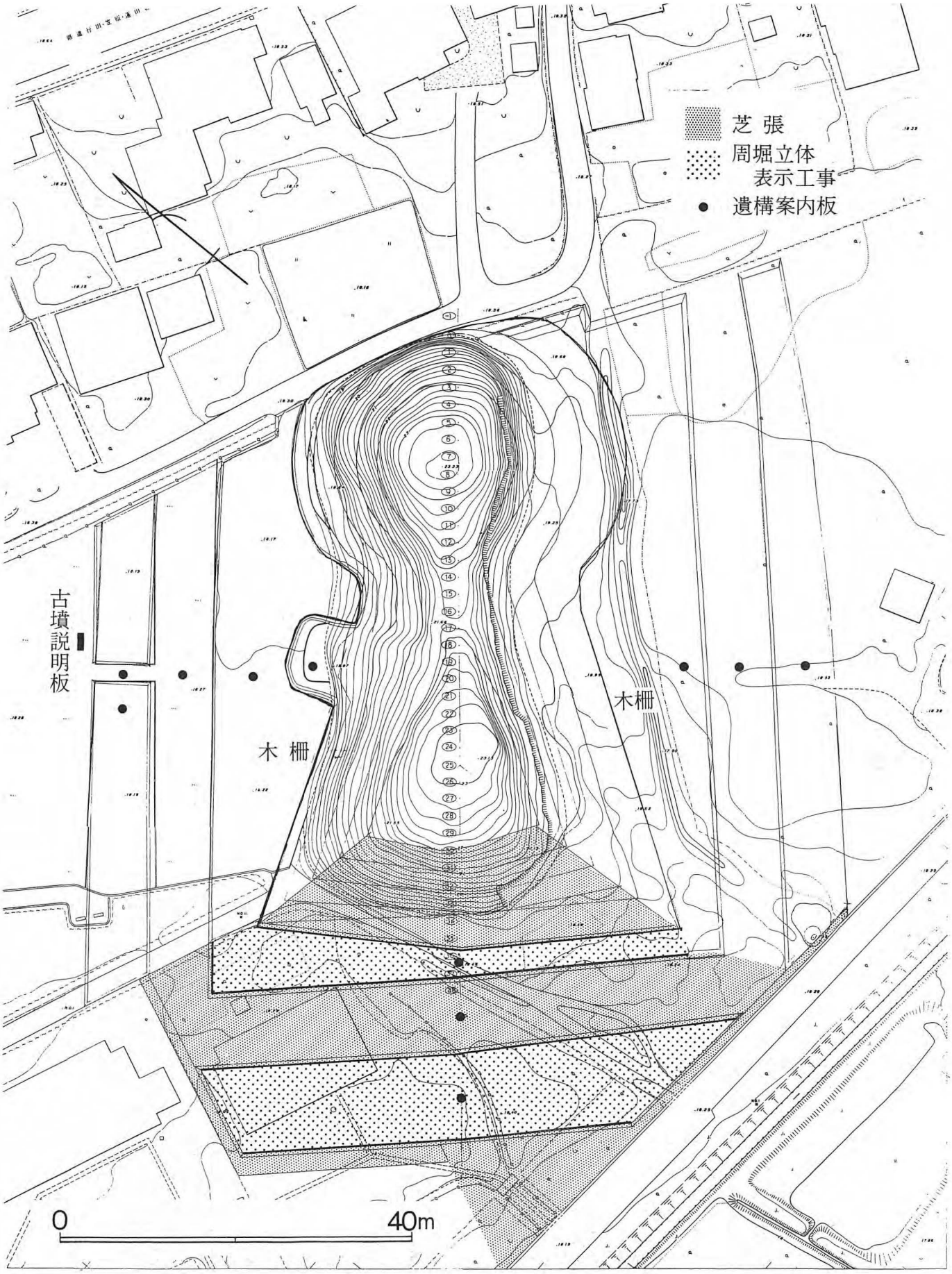


図87　瓦塚古墳　平成３年度工事

(7)現状と課題（写真165・166）

瓦塚古墳の保存整備工事が完了してから、すでに５年の歳月が過ぎている。この間、管理上において、いくつかの問題点も生じているので、今後の整備の参考として、ここに記しておきたい。

・雑草の繁茂

他の古墳でも同様であるが、夏になると墳丘上に繁茂する雑草の除去が大変である。資料館に最も近い上、墳丘の築造時の姿を表現する目的で整備されたものなので、墳丘上の雑草は除去しなければならない。当初墳丘上には芝を張ったが、雑草の生命力には負けてしまった。また砂利を敷いた堀の部分からも、草は生えてきている。

墳丘の草刈りは、予算も限られていることから、最近では職員が総出で行っているのが現状である。なお中堤と古墳周囲の芝に関しては、埼玉県北部公園建設事務所に手入れをお願いしている。

・石の移動

堀内には自由に出入りできる上、敷き詰めた石は簡単に移動ができるので、中堤や墳丘上に石が散乱していることがある。また砂利下に敷いた栗石を掘り起こし、賽の河原状に積み上げたりする人もあり、景観上悪い影響を与えている。

・柵の損壊

墳丘周囲に設置した柵は、柱が自然の木を利用して作成したものなので、一部腐食するものが出てきている。また遺構を保護するため、柱根を浅く埋め込んでいるので、一定の方向にある程度の力が懸かると、容易に倒れてしまう。このため数本の柱はすでに取り替えている。

・砂利による堀の復原の是非

瓦塚古墳では堀の復原を、これまでの水堀による方法から、砂利による表示によって行う方法を採った。これは、堀内の水によって墳丘が侵食されるのを防ぐためであった。この方法はすでに群馬県の綿貫観音山古墳で採用されており、それなりの評価を得ているものであった。しかし、見学者にとっては説明がないと、始めから古墳の周りには砂利が敷いてあったと誤解する場合があり、水堀のような威容が表現されないという欠点も指摘されている。

写真161　墳丘西側の整備状況－南西から

写真162　瓦塚古墳航空写真（平成５年度）

写真163　墳丘東側の整備状況
（写真140と同じアングル）

写真164　墳丘正面部の整備状況（右が墳丘）

写真165　堀の栗石が散乱するようす

写真166　柵の現状（角の擬木は新設のもの）

4　二子山古墳（写真167～176）

(1)整備の概要

二子山古墳は墳丘の全長が138mを測り、埼玉県では最も大きな前方後円墳である。二子山古墳の名称は、文字通り前方後円墳が２つの山に見えることから付けられたものであるが、かつて観音寺という寺があったため、観音寺山とも呼んでいたらしい。

遺構の確認調査は稲荷山古墳よりも早く昭和42年から実施し、その後昭和49・55・59・平成２年度に行って、長方形の二重堀や、中堤の造出しの存在等を検出し、直径が50cmにも及ぶ、古墳群内でも最も大きな円筒埴輪が出土している。

墳丘は下草の除去や樹木の伐採等の手を加えているだけで、封土の整形等は行っていない。内掘は昭和43年に、他の古墳に先駆けて復原を行っている。また平成２年度には公有地の拡張にしたがって、前方部正面の内堀の整備を行っている。現在では、堀の中には水が満々とたたえられているが、築造当初は空堀であったと考えられている。中堤は遊歩道にし、中堤造出し部分は土壇状に復原している。外堀は土地の買収に従って整備を行っているが、内堀のように掘削するのではなく、ほぼ旧水田面の高さに押さえて、花菖蒲を植栽した。毎年５～６月には美しい花を咲かせており、古墳公園の最大の呼び物となっている。

(2)現状と課題

稲荷山古墳と同じように、この古墳でも堀に水を湛えているので、水位の上下や凍結によって墳丘の侵食が進んでいる。最も墳丘の崩壊が深刻な古墳であり、早急に処置を講じる必要があろう。ただし、ここでも冬期になると水鳥が多く渡ってきて、羽を休める姿が見られ、堀の埋め立てによって遺構を保護する方法をとると、水鳥の楽園が失われることになる。

外堀の部分には現在花菖蒲を植栽しており、管理は埼玉県北部公園事務所が行っている。古墳の堀に花を植えている例は全国的にも珍しく、この花を目的に公園に訪れる人も多い。遺構を損なう

写真167　二子山古墳整備工事直後のようす－南西から（昭和43年度）

写真168　二子山古墳航空写真（平成５年度）

写真169　前方部周堀整備工事（平成２年度）

写真170　前方部周堀整備工事（平成２年度）

写真171　丸墓山古墳からみた二子山古墳の現状

こともなく、公園的な景観も保たれることから、堀の整備方法として一つの模範例といえようか。

水の事故を防止し、史跡としての景観を守るために、内堀の周りには現在生垣を巡らせている。しかし、堀の中の魚を目当てに魚釣りをする人が後を絶たず、生垣を破損して中に入る人も多い。そのため、頻繁に修理を行う必要があり、管理上のネックになっている。

写真172　西からみた二子山古墳の現状

写真173　二子山古墳の現状－南西から
（写真167と同じアングル）

写真174　墳裾の浸食状況

写真175　咲き乱れる花菖蒲

写真176　花菖蒲の管理状況

5　愛宕山古墳（写真177）

⑴整備の概要

全長53mで埼玉古墳群内では最も小さい前方後円墳である。かつて愛宕山神社が後円部に祀られていたことから、この名称がある。

埼玉県では確認調査を昭和56年に行ったが、行田市でも同年に古墳に隣接する市道の改修工事に伴う発掘調査を行っている。この調査によって、小さな古墳ながらも長方形の二重堀であることが判明した。遺物は円筒埴輪の他に、人物や大刀・盾・家・動物・蓋等の形象埴輪も出土している。円筒埴輪は高さが約40cmの小型のものが主流を占めており、古墳の大きさに比例して埴輪の大きさも異なる傾向にあることが指摘されている。

墳丘は現在でも樹木やササが茂っているままで、ほとんど手をつけていない。古墳群内で唯一昔のままの姿を留めている古墳である。前方部頂に今も残る石仏が愛らしい。墳丘西側の内堀部分に花菖蒲を植栽して見学者の目を楽しませている。その他の堀部分はほとんどが未買収地であるため、全くの手付かずである。

⑵現状と課題

二子山古墳と同様、堀部分には花菖蒲を植栽しており、管理は同じく埼玉県北部公園事務所で行っている。連作障害や日当たりの悪さなどの諸問題もあるが、駐車場に最も近い古墳であることから、花菖蒲が満開の時は見学者を古墳群に導くアプローチ的な役割を果たしている。

古墳の整備としては、未買収地が多く残されていることから、古墳群内では最も遅れている。しかし、他の古墳で整備が着々と進んでいく傍ら、埼玉古墳群の原点のまま変わらぬ姿の古墳を保存しておくのも、新たな整備の方針を考える上で重要なことではなかろうか。

写真177　愛宕山古墳現状－南西から

6　鉄砲山古墳（写真178～183）

⑴整備の概要

全長109mで、古墳群内では３番目に大きな前方後円墳である。古墳一帯が江戸時代に地元忍藩の砲術練習所があったことから、この名称が付いているが、御風呂山という別名もある。

確認調査は昭和54年度には前方部西側について、58年度には後円部東側について実施し、二重の堀をもつことや、堀の幅などが確認された。しかし、調査区が狭いため、堀のコーナーは検出できず、平面形態が長方形かどうかは判明していない。また稲荷山古墳や二子山古墳で検出されたような、中堤の造出しの有無も、未買収地がかかっているために明らかにすることができなかった。出土した遺物から、６世紀後半頃に築造されたと推定されているが、今後の調査によっては変動する可能性もある。

墳丘は樹木の伐採や下草の除去以外には整備を行っていない。堀の部分はかつて水田だったところはすべて公園化し、東屋や松の植栽、円路の設置等を行って、市民の憩いの場として活用されているが、堀の表示等は全くない。

⑵現状と課題

他の古墳と同じく、史跡公園としての景観を確保するために雑草の処分が必要であるが、平成６年の冬、見学者の火の不始末から、枯れた雑草に火が付いて「山火事」になってしまったことがある。人家が近くになかったため、他に被害は広がらなかったが、逆に発見が遅れてしまったようである。

また、これまで安定した囲柵を設置していなかったため、墳丘上に登る見学者が多かったが、最近墳丘にバイクで登る者が現れたため、遺構保護の観点から平成８年度に急遽柵を設けることになった。

今後確認調査範囲を広げ、堀の形態を明らかにしていく必要がある。さらに堀の復原も含めた整備方法を考えていく時期に来ているといえよう。

写真178　鉄砲山古墳整備前－西から（昭和42年ころ）

写真179　鉄砲山・奥の山・中の山
（平成５年度）

写真180　鉄砲山古墳の調査（昭和58年度）

写真181　雪の鉄砲山古墳

写真182　前方部墳丘上からみた堀部分の現状

写真183　鉄砲山古墳の現状－北東から

7　奥の山古墳（写真184～186）

⑴整備の概要

この古墳がある地域を大字渡柳というが、かつて「渡柳三大墳」として、３基の古墳を「戸場口山」「中の山」「奥の山」と呼称していた。この古墳は、渡柳の集落から最も奥にあることから「奥の山古墳」と呼ばれている。

確認調査は昭和42年度に行われ、周堀は一重の盾形平面のものであることが推定された。しかし、わずか３本のトレンチによる調査のため、今後の調査の余地を残している。出土した遺物から６世紀の中頃に築造されたと考えられる。

昭和44年度には、調査の成果をもとに、掘削によって盾形の堀を一重に巡らせた。堀内には自然にしみ出してくる水が溜まっている。墳丘については整備を行っていない。

⑵現状と課題

堀には水を湛えているが、この古墳でも水による墳丘の浸食が著しい。堀の周囲には生垣を巡らすが、水の事故を防ぐため、破損した部分がないか常に管理しておく必要がある。また稲荷山と同

写真184　奥の山古墳整備前（昭和42年ころ）

写真185　奥の山古墳整備工事直後のようす

写真186　奥の山古墳の現状（写真185と同じアングル）

じく、冬になると水位が下がるため、魚が陸に上がってしまうことがあり、職員が総出で魚を安全な場所に避難させることもある。

さらに調査を行って、堀の形態がどのようになっているかを確認し、水堀の処理等も考慮に入れた整備を行っていかねばならない。

8　中の山古墳（写真187～192）

⑴整備の概要

「渡柳三大墳」のうち、真ん中にある古墳なので「中の山古墳」と呼ばれている。かつて石棺が出土したことから「唐櫃（かろうと）山」と呼ばれたこともあったという。

確認調査は昭和62年度に実施され、古墳群内の多くの前方後円墳と同じく、二重の堀をもつことが判明した。この古墳もわずかなトレンチによる調査しか行っていないので、平面形態は未だ明らかとはなっていない。堀の中からは、一般的にみられる埴輪は出土せず、須恵質埴輪壺と呼んでいる底に穴の開いた須恵質の壺が出土している。これらは墳丘に並べられたもので、埴輪の役割を果たしている須恵器と考えられる。埋蔵文化財調査事業団が調査した、寄居町の末野遺跡で検出された須恵器窯の灰原から、中の山古墳に並べられた須恵質埴輪壺と同形のものが出土し、大きな話題を呼んだ。埼玉古墳群に埴輪が使用されなくなった時期の古墳であることや、末野遺跡で伴出した須恵器の年代観から、中の山古墳は６世紀末～７世紀初頭に築かれたと推定される。

整備に関しては、墳丘は樹木の伐採や下草の除去を行い、堀部分は水田を埋め立てて公園化しているのみである。

⑵現状と課題

古墳公園の中でも、さきたま資料館の南側にあたる部分は人通りが少ない。中の山古墳はその中

写真187　中の山古墳整備前（昭和42年ころ）

でも最も端に位置するため、休日の昼間でも人通りは稀なほどである。そのため、火事や事故の心配があるが、なかなか管理が行き届かないのが現状である。とくに古墳のすぐ東側には隣接して人家があるので、火災の場合は被害が大きくなる可能性もある。雑草や燃えやすいものの処分については常に心がけておかねばならない。

またこの古墳は、古墳群中最も新しい前方後円墳として位置付けられるが、堀の形態等も含め最も実態の不明な古墳の一つである。今後の調査の進展が期待されるところである。

写真188　中の山古墳の調査（昭和62年度）

写真189　須恵質埴輪壺

写真190　前方部墳丘上からみた堀部分の現状

写真191　墳丘東側の現状

写真192　中の山古墳の現状

9　その他の小型古墳（写真193～198）

⑴整備の概要

以上の大型古墳の他にも、かつて古墳群内には全体で40基近くの小型円墳があったと推定されている。昭和43年度に撮影した航空写真には、ソイルマークが明確に写しだされている。

昭和49年度に確認調査を行い、直径が12～27mの円墳７基の堀跡を検出した。それぞれ天王山古墳（埼玉１号墳）・梅塚古墳（埼玉２号墳）・埼玉３～７号墳と呼称している。天王山古墳はわずかに墳丘が残っているが、その他は全く墳丘が残っていない。出土した須恵器や埴輪からいずれも６世紀の前半に次々と造られたと考えられている。

天王山古墳には、かつて民家が建てられていて方形に変形しているが、現在もその方形のまま土壇状に保存している。梅塚古墳・埼玉３・４号墳は芝生広場内に位置することから、周辺の景観とも調和させるために、ドウダンツツジを円形に植栽して、古墳跡であることを表示している。埼玉５・６号墳はゴルフ場のグリーン状にわずかな高まりを築いている。７号墳については、何の表示も行っていない。

これらの小円墳は芝生広場内であり、公園の景観上からも、激突などから危険を防止するためにも、なるべく説明的な案内板は立てていない。現在「梅塚古墳跡」と「水鳥埴輪出土地」の２箇所のみ、その名称だけを記したものを立てている。

⑵現状と課題

小円墳についての案内板が少ないことから、古墳跡の表示が見学者に理解されにくい。現在では資料館内の展示や解説によって、理解を促しているところである。

写真193　小古墳群の調査状況－丸墓山古墳上から

写真194　小古墳群の現状（写真193と同じアングル）

写真195　小古墳群の現状ー南西から

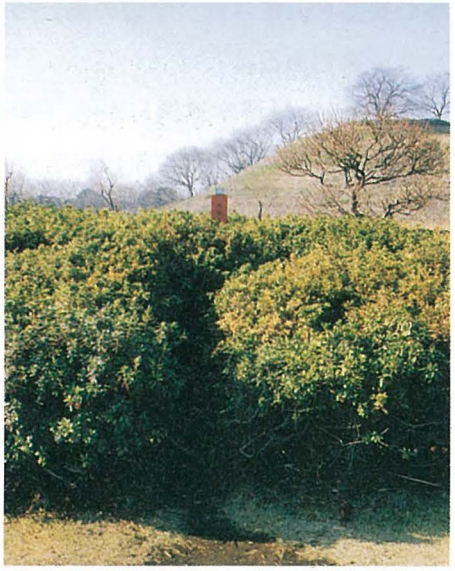


写真196　「梅塚古墳跡」の標識

写真197「水鳥埴輪出土地」の標識

写真198　天王山古墳の現状

Ⅲ　よりよい古墳整備をめざして

1　古墳群の教育的活用方法

生涯学習時代を迎え、第15期中央教育審議会第一次答申は、子どもたちに「ゆとり」を確保し、「生きる力」をはぐくむことを基本とする教育の改革方向を提唱している。とりわけ、博物館等の社会教育・文化施設にあっては、特に利用者の視点に立った整備・充実の重要性を指摘している。博物館施設は、子どもたちのそれぞれの興味や関心に応じた主体的な学習の場とならなければならない。運営面においては、参加型・体験型の事業を行っていくことが重要であり、それを可能にし、より一層の効果を上げることのできる施設・設備等の整備も、まさに「学習の場」づくりとして極めて重要である。

ここでは、「博学連携」から「学社（博学）融合」（生涯学習審議会答申）が叫ばれる今日、学校教育との連携・融合を図った事業をとおして、

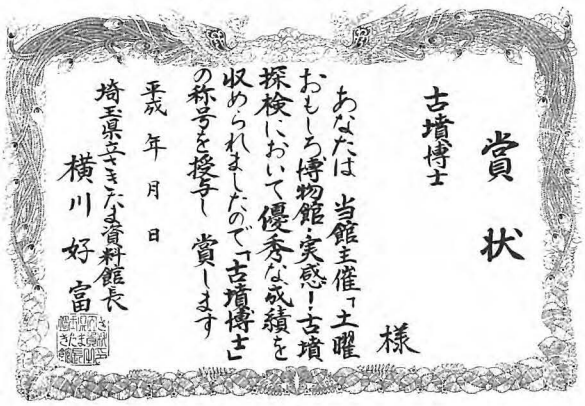


図88　「古墳博士」の賞状

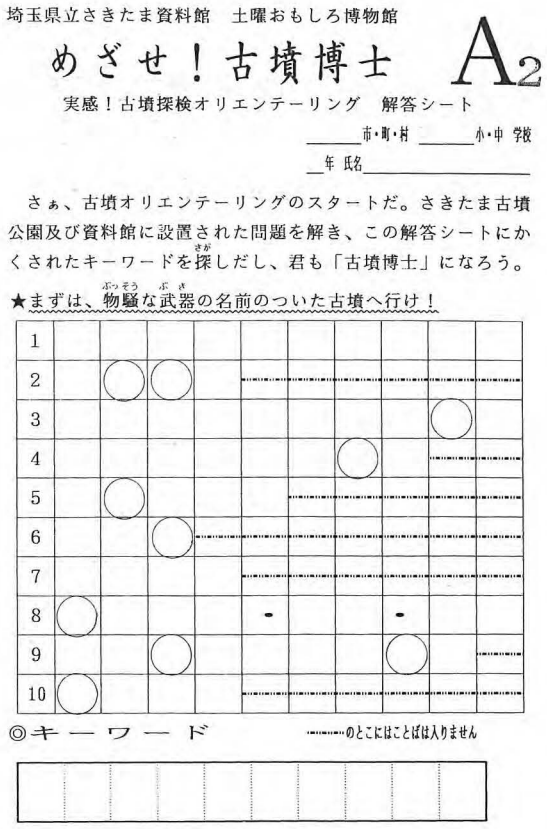


図89　解答シート

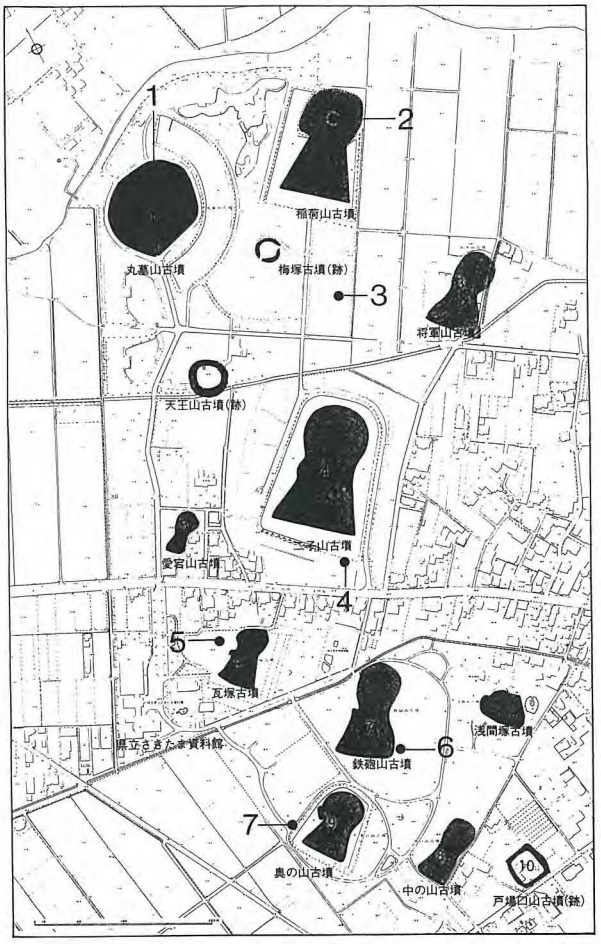


図90　問題看板設置場所

古墳群の整備と教育的活用について考えてみたい。

写真199　問題看板

写真200　オリエンテーリングをする生徒

(1)土曜おもしろ博物館（「実感！古墳探検オリエンテーリング」）

「土曜おもしろ博物館」は、学校週５日制の施行に伴い、県立博物館等７館が、平成４年９月より実施している事業である。

当館においては、「土曜おもしろ博物館」を貴重な体験学習の場としてとらえ、ワークシート及び埼玉古墳群のオリエンテーリング、民俗体験学習等を実施している。それらの中から古墳群を活用した「実感！古墳探検オリエンテーリング」について述べる。

「実感！古墳探検オリエンテーリング」は、豊かな自然に包まれたさきたま風土記の丘を、解答シート（図89）や各地点での指示（図90、写真199）にしたがってオリエンテーリングをし、埼玉古墳群や当館の展示物に関する問題を解き、解答シートをうめ、隠されたキーワードを当てるという形で行っている。キーワードを当てた子どもたちには、「古墳博士」（図88）の称号と鉄剣鉛筆を授与している。

この古墳探検オリエンテーリングに参加した子どもたちは、「古墳の大きさに驚いた」「実際に歩いてみて、古墳の形などがよく分かった」「学校でやっているところなので、勉強になった」などの感想を述べていた。「古墳博士」として賞状を受け取る子どもたちの表情は嬉しさでいっぱいである。

この古墳探検オリエンテーリングは、「土曜おもしろ博物館」のみならず、社会科（選択社会）の授業、学校行事（遠足や郷土学習）、地域の公民館活動等においても活用していただいている。また、ワークシートの問題にも、瓦塚古墳の周囲を歩測する問題を加えている。

実際に自分の足で歩くことによって、古墳の形、大きさ、埼玉古墳群の広さ等を身をもって実感することができる。復原整備された古墳は、古墳の姿が明瞭であり、貴重な教材となっている。特に復原整備によって、模型ではあるが埴輪を墳頂・中段・造出しに設置された将軍山古墳、古墳の中に入り石室の内部を実物大で見学できる将軍山古墳展示館は、古墳時代に身を置くことも可能であり、その教育的効果は大きい。こうした意味からも古墳群の整備は極めて重要である。

(2)「さきたま風土記の丘教室」

「さきたま風土記の丘教室」は、昭和59年10月に県民一般を対象とし、埼玉古墳群を中心とした古墳文化と、北武蔵地域を中心とした民俗に関する基礎的な知識と理解を深めることを目的として

写真201　ヲワケが大和から帰る

写真202　戦うヲワケ、不覚にも殺される

写真203　ヲワケの死を嘆き悲しむ家族

写真204　武蔵国最大の古墳が造られる

写真205　ヲワケの息子が権力を継承する

始められた。２年目より開催時期を夏休みとし、親子で参加できる教室として定着してきている。内容としては、当初から組み入れられた埴輪作りをはじめ、発掘体験や古墳の歩測、埼玉古墳群の見学など体験的な学習に重点をおいて実施してきている。

埼玉古墳群の整備に伴い、平成７年度より、古墳群についての理解をより深めていただこうと、整備された瓦塚古墳の中堤を舞台として、古代劇の上演を加えている。金錯銘鉄剣の作者ヲワケの臣をさきたまの豪族と設定し、ヲワケの臣が大和から帰還し、戦争で死んで古墳が造られるまでを創作し演じた。その概要は写真201～205のとおりである。

映像社会に生きる子どもたちが、実際に動きのある劇を目にすることは、当時の社会に身を置くことにもなり、より直接的に歴史を学べるものと考える。特に当時の古墳に復原された瓦塚古墳をバックに実施したことは、臨場感がありより効果的であったことは言うまでもない。参加した子どもたちの多くが、アンケートに「楽しかった」「わかりやすく、勉強になった」と答えていることからもうかがえる。

また、今日小・中学校の社会科の授業において、体験的な学習の一手法としてロール・プレイング的手法を取り入れた授業が行われていることから、当館で実施した古代劇を、近隣の小学校の協力を得て、６年生の「古墳文化」の学習のまとめとして位置付け、子どもたちに演じてもらった。子どもたちは、シナリオを自分たちなりにアレンジし、ダンボールで古墳や埴輪等の小道具を作り、当館で貸し出した古代服を身につけ、古墳時代の人物を熱演した。演じる側はもちろんのこと、見る側も「古墳文化」についてスムーズに理解していったようである。このことは、新聞でも次のように報じられた（平成８年５月24日付「埼玉新聞」）。

川里 屈巣小

古代劇上演などで成果発表

さきたま資料館と連携授業

古墳テーマに聞き取り調査

県立さきたま資料館と連携した社会科の特別授業が二十二日、川里村の屈巣小学校（高橋豊三校長）で行われ、子どもたちが同館学芸員から聞き取り調査などでまとめた研究の成果を発表した。

古墳時代の学習に当たって同館を積極的に活用し、より充実した内容の授業を目指すもの。文部省の学習指導要領も地域の博物館、郷土資料館と学校との「博学連携」の方針を打ち出している。

この日の授業に臨んだのは六年一、二組の児童五十人。両クラスは八日に同館を見学、学芸課の渡辺勤主査から古墳や出土品について説明を受けた。その後、それぞれのテーマに基づいて、土、日曜日や放課後に同館を訪問し、学芸員から話を聞くなどの学習を進めてきた。

授業内容は調査の発表と古代劇の上演の二本立て。発表組は「古墳とは何か」「古墳、はにわはなぜ作られたのか」といったテーマごとにグループで発表。それぞれ仮説を立てたうえで調べた成果を模造紙にまとめて披露した。

古代劇の上演は歴史上の人物を演じることで理解を深めてもらう体験学習。昨年七月に同館職員らが上演したシナリオを子ども向けにアレンジ、衣装も貸し出した。

子どもたちは土器やはにわなどの小道具を約一週間かけて準備。金錯銘鉄剣が出土した稲荷山古墳ができるまでをつづった「さきたま物語」を、十八人が熱演した。

資料館側で指導にあたった渡辺主査は「まず歴史に興味を持ってもらうことが大切。自分たちで調べたり劇をやったことが、次へのステップになれば」と話していた。

古代装束に身を包んだ子どもたちが上演した「さきたま物語―稲荷山古墳ができるまで」＝屈巣小学校体育館

図91　平成８年５月24日付「埼玉新聞」

古墳の草刈り

行田　忍中生徒が美化活動

貴重な文化財である古墳を自分たちの手で守ろうと、行田市忍中学校（佐藤武司校長、生徒数五百八十八人）の生徒がこのほど、さきたま古墳公園で除草作業を行った。

今年は地域の美化活動に取り組もうと、ＪＲＣ（青少年赤十字）委員会がポスターなどで全校生徒に呼びかけたところ、予想を大きく上回る二百二十一人が参加。「五十人も集まれば来年につなげられるか」と思っていた先生たちを驚かせた。

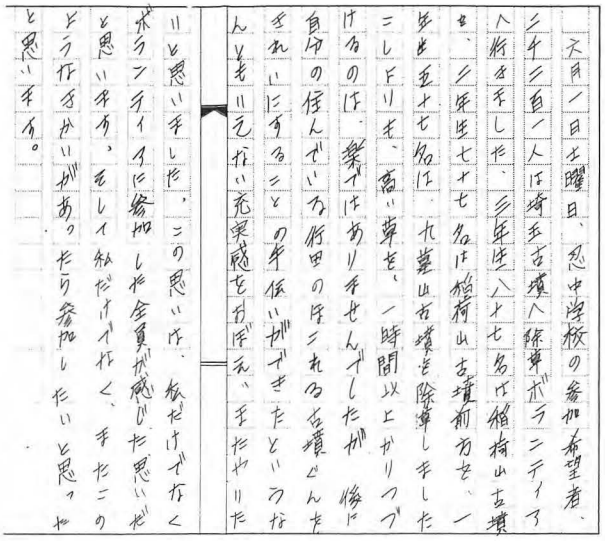
県立さきたま資料館では、この機会を古墳についての学習の場にもしてもらおうとパンフレットを配布し、作業前に横川好富館長が古墳全般について説明。その最中にも、部活を終えた生徒たちが次々と駆け付けた。

生徒たちは丸墓山古墳、二子山古墳、稲荷山古墳に分かれて作業を開始。稲荷山古墳で腰の高さまで茂った雑草を刈り込んでいた女子生徒は「ストレス解消になる」。丸墓山古墳では階段部分にいっぱいに生えたササのような雑草を一つひとつ丁寧に抜いていた。

ＪＲＣ担当の小野田誠教諭は「大勢が参加してくれて、生徒たちのボランティア意識が意外に高いのに驚いた。この分なら学校の恒例行事にできます」と話していた。

稲荷山古墳では中学２年生が、腰のあたりまである雑草を刈り込んだ

図93　平成８年６月５日付「埼玉新聞」



六月一日土曜日、忍中学校の参加希望者、二年二百一人は埼玉古墳へ除草ボランティアに行きました。三年生八十七名は稲荷山古墳を、二年生七十七名は稲荷山古墳前方を、一年生五十七名は、丸墓山古墳を除草しました。ニしドりも、高い草を、一時間以上かりつづけるのは、楽ではありませんでしたが、後に自分の住んでいる行田のほこれる古墳がきれいになることの手伝いができたというなんとも言えない充実感をおぼえ、手たやりたいと思いました。この思いは、私だけでなく、ボランティアに参加した全員が感じた思いだと思います。もしい私だけでなく、手たこのどうせなかいがあったり参加したいと思った。

図92　ボランティア活動に参加した生徒の感想（一部）

⑶ボランティア活動（古墳群の除草）

生涯学習時代を迎えた今日、ボランティア活動は社会の要請でもある。そこで平成８年度には、学校との連携を図り、埼玉古墳群を整備するボランティア活動に取り組んでみた。具体的には行田市の中学校のボランティア活動の申し入れを受け、埼玉古墳群の除草を実施した（図93）。このボランティア活動を当館としては古墳に関する学習の場としてとらえ、資料を作成し、活動前に館長より簡単な説明をした。ただボランティア活動を受け入れるだけでなく、その機会を学習の場としてとらえることは、博学融合時代には重要なことではないだろうか。

土曜日の午後、ＪＲＣ委員会を中心とした221名の生徒たちが、稲荷山古墳と丸墓山古墳周辺の除草に取り組んだ。約１時間の除草は、生徒たちのボランティア意識を高揚させるだけでなく、自分たちで地域の史跡を保護していこうとする心をも培ってくれたようである。このことは、参加した生徒の感想文からも十分にうかがうことができる（図92）。

以上、３つの事業から古墳群の整備と教育的活動について述べてみた。教育的効果の面からも古墳群の整備の重要性は言うまでもない。今後も計画的な整備事業の実施はもとより、復原された古墳（特に今年度完了した将軍山古墳）を通して、1400～1500年もの歴史の流れを踏まえつつ、埼玉古墳群の全体像をつかむことができるような活動を展開していくことも重要な課題である。

（渡辺　勤）

報告書抄録

フリガナ	ショウグンヤマコフン		
書　名	将軍山古墳		
副書名	史跡埼玉古墳群整備事業報告書－史跡等活用特別事業－		
シリーズ	――	巻次	――
編著者	岡本　健一		
編集機関	埼玉県立さきたま資料館		
所在地	〒361　埼玉県行田市大字埼玉4834　TEL 0485-59-1111		
発行日	１９９７（平成９）年３月31日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	遺跡	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ショウグンヤマコフン 将軍山古墳	ギョウダシサキタマ 行田市埼玉	11206	0057	36°7′33″	139°29′5″	19910726 ～19951219	8000	遺跡整備

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
将軍山古墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室・木棺直葬 周堀・中堤	耳環・装身具・馬具 鉄鏃・挂甲小札・土器 埴輪等	

将軍山古墳

《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》

—史跡等活用特別事業—

確認調査編・付編

平成９年３月15日　印刷

平成９年３月31日　発行

発行　埼玉県教育委員会

編集　埼玉県立さきたま資料館

〒361 行田市埼玉4834

TEL 0485-59-1111

印刷　関印刷株式会社